笹沢左保
新大岡政談

新潮文庫

新潮日本文学アルバム 全20巻

1 森鷗外
2 夏目漱石
3 樋口一葉
4 島崎藤村
5 柳田国男
6 石川啄木
7 谷崎潤一郎
8 高村光太郎
9 有島武郎
10 武者小路実篤
11 志賀直哉
12 宮沢賢治
13 芥川龍之介
14 斎藤茂吉
15 萩原朔太郎
16 川端康成
17 堀辰雄
18 山本周五郎
19 太宰治
20 三島由紀夫

四六判／モノクロ96頁 カラー16頁 折込カラー口絵一点／毎月一巻20日発売

笹沢左保
新大岡政談

新大岡政談

笹沢左保

さ 12 2
新潮文庫 329 -2- 480

悪のはびこる現代さながらの江戸社会、頻発する難事件に挑み、名裁きで鳴らす南町奉行大岡越前守には人知れぬ持病があった。数日に一度、発作を伴う猛烈な頭痛に襲われる。幕閣に知られれば罷免は確実。そんな〝爆弾〟を抱えての多忙な公務を助けて、〝町人侍〟こと水木新八郎の二ヒノ 剣が舞う。「新さん」「何かご用でござんすかい」。名コンビが活躍する時代短編10作。

ISBN4-10-132902-8 C0193 ¥480E 定価480円

〜〜新潮文庫〜〜
笹沢左保の作品

剣士燃え尽きて死す
新 大 岡 政 談

カバー印刷 錦明印刷

新潮文庫

新大岡政談

笹沢左保著

新潮社

新大岡政談

笹沢左保著

新潮文庫

新大岡政談

笹沢左保著

新潮社版

3270

目次

嗤った御落胤……七
消えた生き証人……六〇
病める人質……一〇七
怪談行人坂……一四九
巾着切の爪……一九六
鬼と仏の吟味……二四四
石地蔵御用……二八四
お裁き剣法……三三一
お白洲の貴公子……三七一
二人の天一坊……四一七
解説　藤田昌司

新大岡政談

嗤った御落胤

1

火がついたように泣き続ける赤ン坊、水の流れが滞っているドブの饐えた臭気、井戸端でこぼれた米や麦を拾い集める子どもたち、仏頂面でボロを引きずりながら怒鳴り散らしてばかりいる女房たち、破れ障子を繕っている職のない男——。

そうしたことが特徴の極貧の長屋よりは、いささか救いのある松の木長屋であった。松の木長屋と呼ばれてはいるが、何も長屋の真中に松の大木が枝を広げているというわけではない。

待つ気がないと、大家は勤まらない。つまり、家賃を催促しても無意味であり、店子のほうから払いに来るのを待つほかはない。待つ気十分でいるからと、大家が店子たちに申し渡した。

その「待つ気」をもじって、「松の木」長屋だと誰からともなく言い出した。以来、この四ツ谷御簞笥町の棟割り長屋を、松の木長屋と呼ぶようになったと伝えられている。大家も店子たちも、洒落っ気のある連中だったということになる。

洒落っ気があるのは、それだけ気持に余裕があるという証拠だった。店賃は幾つか溜まっていても、その日の暮しに不自由はないというわけである。それぞれ行商とか職人とか、定まった稼業を持っていて、一家のあるじという顔をしている。

一般に夫婦の平均年齢が若いので、子どももあまり多くはなかった。まだ子ができないという若夫婦から、精々三人の子持ちで四十代初めの夫婦までといったところである。それだけに女房たちも、小綺麗にしているし、長屋全体が何となく若やいだ雰囲気なのであった。

井戸端に集まったら最後、女房たちは容易に腰を上げようとしなかった。まるで小娘みたいに喋りまくり、声を合わせて陽気に笑うのである。江戸の空にも届きそうな賑やかさであり、沈んでいるのは忘れられたままになっている洗いかけの食器や濯ぎ物だけであった。

そんなときの話題は、まず猥談と決っている。女ばかりが集まっての猥談だから、姦しいことこの上もない。そのうちに引き合いに出された新妻が、全員の視線を浴びて頬を染め、ついには逃げ出して家の中へ駆け込むという図が見られるのだった。

日暮れ前に、殆どの亭主が帰って来る。一斉に晩飯をすませて、寝る前のひとときをまた世間の噂話で過すのであった。どこかの戸口の前に縁台が置かれると、何となくそこへ顔馴染みの連中が集まって来る。

同じ長屋の住人だから、身内と変らなかった。誰かが冷えた麦茶を運んで来れば、ほかの者が茹で栗をザルに盛って差し入れるという工合である。大家も顔を見せたりすれば、和気藹々の夕涼みになるのだった。

夕涼みと言っても陰暦の八月末だから、もう暑くはなかった。昼間のうち、たまに残暑を思わせるような陽気になる、という程度であった。蚊はもう出ないし、宵のひとときの閑つぶしが最も楽しい時期だった。

「ところで、お前さんたち……」

縁台の真中に腰を据えている大家の仁兵衛が、集まっている連中をぐるりと見渡した。大家の左右に四人、背中合せに六人と、縁台はもう満員であった。ほかに五、六人が、縁台を取り巻いていた。

一様に栗を齧っていた男と女が、仁兵衛へ視線を走らせた。大家の仁兵衛が、妙に改まった言い方をしたからである。冗談半分に口にしていたこれまでの話とは、少しばかり違うらしいと誰もが思ったのだ。

「紫頭巾の御落胤の噂は、もちろん耳にしているだろうな」

仁兵衛はそう言って、麦茶を口に含んだ。誰も返事をする者はなく、黙々と栗を齧っている。興味がないのではなく、下手に口はきけないと何となく用心しているのだった。それだけ、「御落胤」という言葉には重みがあるのであった。

「ここは、長屋内だ。何も遠慮することはないし、構わないから好きなように喋りなさいよ」

と、仁兵衛だけが、澄ました顔でいる。そこで初めて二人、三人と口を開き、たちまち饒舌が交わされることになるのだった。口火を切ったらもう、留まるところを知らない連中なのである。

「紫頭巾をかぶって、同じ紫の絹の羽織は三ツ紋付き、白絹の袴に白足袋をはき、腰には脇差し、年の頃なら三十三、四、色白く鼻筋通り、人品賤しからぬ面体にて、いざわれこそは……」

「やめなよ、馬鹿らしい。だが、紫頭巾の御落胤ってのは、確かにそんな野郎なんだよな」

「おい、気をつけろ。御落胤のことを、そんな野郎なんて呼び方をしやがって……」

「だって、大家さんが構わねえから好きなように喋っちまえって、言っているんじゃあねえかい」

「でもさ、御落胤だって言ってもさ、物もらいと、変りないんだろ」

「物もらいと、一緒にしちまいやがら。おい、おめえ少しは嬶に、口のきき方を仕込んでおきなよ」

「物もらいじゃあねえ。ありゃあな、金を出せって命じているのさ」

「近々、身共は御父上さまとの対面の儀を許されるはずじゃ。晴れて父子対面のときを迎えたら、十分な礼を尽し、今後何かにつけて便宜を取り計らって遣わそう。それ故にいま、金子十両を用立ててはくれぬか」

「気味の悪い声を、出すんじゃあねえ」

「そう言われて、いやだよと首を横に振れるかい」

「振れねえな」

「そうだろう」

「下手に、断わってみろい。晴れて父子対面の儀がすんでから、どんな仕打ちをされるかわからねえもの」

「家財没収ですむならまだいいが、何もしねえのに罪に問われてあの世行きってことになるかもしんねえぞ」

「紫頭巾の御落胤が、この松の木長屋にお立ち寄りになったら、えれえことになるじゃあねえかい」

「馬鹿野郎、長生きするぜ」

「金十両也を差し上げられるような、変った野郎がこの長屋にいるのかい」

「ドブ掃除しても、そんな野郎は見つからねえだろう」

「紫頭巾の御落胤がお立ち寄りになる先は、大店の商家、分限者の屋敷、大金持ちの先代の隠居所と決っているんだよ」

「つまり、十両や二十両なら大掃除のあとのゴミみてえに、いつでも御用立てができるところしか、紫頭巾の御落胤はお立ち寄りにならねえのさ」

「だがよ、そいつは本物の御落胤なのかねえ」

「やっと、そのことに気づきやがったな」

「じゃあ、やっぱり偽者かい」

「そうは、言ってねえよ」

「だって、おめえ……」

「本物とも、偽者とも、判断がつかねえんだよ」
「何しろ、御落胤たる証拠の品ってのを、見せるんだからなあ」
「それで偽者みてえな気もするが、万が一、本物だったら大変なことになるってんで、望まれた者の全員が十両、二十両と御用立てするってわけだ」
「御用立てって言っても、返してくれるんじゃあねえんだろう」
「いやだねえ、そういうみみっちいことを気にするやつは……。おめえみてえのは、長屋をおん出て金貸しになりゃあいいんだ」
「なれるものなら、なってみてえよ。金貸しが客にもしてくんねえこのおれが、金貸しになれるはずもねえだろう」
「あれあれ、つまらねえことで威張ってやがる」
「用立てってのは貸せじゃあなくて、くれってことなんだよ」
「だったら、まる儲けじゃあねえかい」
「その証拠の品ってのは、どんなもんなんだい」
「まずは、羽織の紋どころを見よ、とこう来るんだ」
「何の紋だい」
「裏梅鉢よ」
「梅鉢なら、加賀百万石前田さまの紋どころだろう」
「ただの梅鉢じゃあなくて、裏梅鉢なんだ。そして差し出すのが、金蒔絵の印籠だ。安物じゃねえ、どう見たって大名の持ちものよ。その印籠もまた、金の裏梅鉢の紋どころ入りって寸法だ」
「ほかには……？」
「それでも信用されねえとなると、印籠の中から古い書き付けを引っ張り出す」
「何の書き付けだい」
「御落胤のおふくろさんに遣わされた御墨付きってやつで、つまりわが子に相違ないと認めてあるのよ」
「その紫頭巾は、いってえどなたさまの御落胤なんだい」
「あれまあ、起きているうちから寝呆けていやがる。おめえは、肝心なそのことまで、まだ耳にしちゃあいねえのかい」
「すまねえ」
「何も、謝ることはねえやな。裏梅鉢は、下野宇都宮九万石戸田さまの御紋どころだ」
「下野宇都宮は九万石戸田さまとなると、御老中の戸田山城守さまってことじゃあねえのかい」
「大したもんだ。そこまでわかっていりゃあ、上出来だぜ」
「すると、御老中の戸田山城守さまの、御落胤ってわけなのかい」
「そうよ。いまをときめく御老中さまの御落胤と聞いちゃあ、疑わしかろうとなかろうと十両や二十両を、惜しんじゃあいられねえってことさ」

「御老中の御落胤ねえ」

長屋の連中のやりとりは、掛け合いよろしく際限もなく続けられるのであった。ザルにはもう、一粒の栗も残っていなかった。喋りながらよく食べるというのが、長屋の男女の特技でもあったのだ。

「さて、その紫頭巾の御落胤だがな。今朝方には、表の井筒屋さんにお立ち寄りになって、金二十両なりの御用立てを仰せつけられたそうだ」

話に結びをつけるように、大家の仁兵衛が言った。

「いよいよ、四ツ谷にまで、おいでなすったかね」

「井筒屋の旦那、どんな面をして二十両を差し出したことか」

「これでもう、紫頭巾の御落胤に金を用立てた者は何人になるだろう」

「二十人は、下らねえぜ」

「用立てさせた金が、ざっと三百両ってところかな」

「三百両ありゃあ、栗が何俵ぐらい買えるかねえ」

「この野郎、張り倒すぞ」

「夢の中で三百両を朝、目が覚めるまでに数えきれるかい」

勝手なことを言っているのも、長屋の住人にとっては所詮、違う世界の出来事だという気持があるからだった。少なくとも、いま太平楽を並べている連中の中には、不幸な人間や悪党はいないはずであった。

だが、同じ松の木長屋の住人でも、すでに床の中にはいっている者もいた。半年ほど前から、この長屋に住みつくようになった夫婦者であった。亭主を次郎吉、女房をお久という。

亭主の次郎吉は薬売りだそうで、毎日必ず大きな薬箱を背負って出かけて行く。付き合いの悪い男で、長屋の住人たちとは挨拶を交わすのが精々であった。一旦家にはいったら、外へはもう出て来なかった。

女房のお久も同様で、買物に出かけるほかはひっそりと家の中で鳴りをひそめている。井戸端での女ばかりの談笑にも、決して仲間入りしなかった。大年増のくせに、愛想の一つもないのである。

長屋の連中もいつの間にか、次郎吉夫婦を相手にしなくなっていた。孤立したがる変り者は珍しくもないし、古くから松の木長屋に住んでいる者にとっては、どうでもいい存在だったのである。

次郎吉とお久は並んで床の上に腹這いになって、差しつ差されつの盃のやりとりをしていた。戸締りも、早くからすませてあった。土間のほかに、四畳半と六畳の部屋がある。二組の夜具は、奥の六畳間にのべてあった。

外で縁台を囲んでいる男女の声が、笑いとともに聞えて来る。だが、次郎吉もお久も、知らん顔で酒を飲んでいる。こうなると、どっちが無視されているのかわからない。夫婦は極めて日常的なやりとりしかしなかったし、まったく静かな酒であった。

やがて、外の声がぴたりと途絶えた。長屋の住人たちは解散して、それぞれ家の中へ引っ

込んだようである。そうなればもう、あとは火を消して寝るだけだった。五ツ、午後八時になると、長屋全体が闇の中で静まり返る。

五ツ半、午後九時にはすでに、完全な眠りの世界である。仲秋の名月も、いまでは下弦の月と半分になってしまっていた。その月の光が、松の木長屋にも降り注ぎ、闇を青くしたり地上に影を落したりしている。

人気のない路地を、猫がゆっくりと横切る。松の木長屋の住人にとっては、平和な夜であった。ぐっすり眠って目を覚ませば、明日になっている。それまでは、自由に遊べる夢の世界だった。

四ツ、午後十時——。

小型の角行燈の燈心を一本だけにして、部屋の中が薄暗くしてあったが、次郎吉とお久はまだ眠っていなかった。半裸になったお久の上に、次郎吉が身体を重ねていた。その次郎吉の動きに煽られて、お久は苦悶するようにのた打ち回っている。

お久の口から、呻きが洩れる。しかし、深く押し込んだ手拭を嚙みしめているので、声にはならなかった。やがて夫婦の動きが一段と激しくなって、全身を突っ張らせたまま静止する。お久が、手拭を吐き出した。酔ってもいるし、疲れきったというように夫婦は動かなくなっていた。

その瞬間に、激しい物音とともに入口の板戸と腰高障子が押し倒された。三つの影が次々に躍り込んで来て、奥の六畳へと突進する。神経も肉体も弛緩しきっている次郎吉は、顔を

上げただけでまだお久の上に重なったままでいた。

二つの人影が、重なっている男女の両側に立った。二人の刺客の手には、白刃が握られていた。同時に二本の白刃が、垂直に走った。刀はともに、次郎吉の背中に深々と埋まった。次郎吉とお久と蒲団を貫き、切先が畳にまで至るほどの激しさであった。

二振の刀によって、次郎吉とお久は完全な串刺しとなっていた。多量の血が、天井まで噴き上げた。もう一つの人影が、次郎吉とお久の喉を突いて止めを刺した。次郎吉とお久は、まったく声を立てなかった。

2

木犀の花が、満開である。

いや、もう散り始めている。白い花の散るのが、小雪を連想させた。水木新八郎は、ぼんやりと庭を眺めやっていた。植込みの多い庭で、秋の日射しを受けとめる地面の範囲が狭かった。

背後で、人声がしている。奥座敷には、三人の男しかいなかった。大岡越前守忠相と、定回り同心が二人であった。

「次郎吉とは、偽りの名か」

大岡忠相の声が、やや震えを帯びている。さっきは声がふと出なくなったようで、苦しそうに咳払いをしていた。

「いかにも。まことの名は安吉、だんまりの安吉と呼ばれておりました」
同心のひとり、浅香伝兵衛が答えている。
「だんまりの安吉……」
大岡忠相が、短く息を吐いた。溜め息ではない。苦痛を堪えるために、息を吐いたのに違いない。
「はい」
浅香伝兵衛は、奉行の身体に異変が起りつつあることに、まったく気づいていないのであった。
「異名か。すると、無宿者だな」
「江戸無宿でございます」
「盗人か」
「はい。但し、仲間うちでの噂にすぎませぬ。ただの一度も、盗人としてお縄を受けたことがない上に、入墨者でもございません」
「仲間うちでも、盗人に相違ないとは言いきれぬのか」
「はい」
「だんまりという異名は、口数が少ないことから呼び名とされたのだな」
「はい」
「女は、どうじゃ」

「お久なる名も、生国も、確かめようがございませぬ。しかし、安吉とお久が夫婦同様にこの数年間を、ともに過しておりましたことには間違いございませぬ」
「では、夫婦であろう」
「殺害されましたときも、安吉とお久は睦み合う男と女の姿のままでおりました」
「両名を刺したるは、大刀じゃな」
「はい」
「それも、二人がかりでか」
「その上、作法通りに止めを刺しております。尋常な腕前ではないものと、見受けられました」
「武士……」
「それも近頃の脆弱な武士の手並とは、とても思えませぬ」
「次郎吉こと安吉は、薬売りを稼業としておったそうだが……」
「薬箱の中にあったは、それらの衣裳にございます」
「紫頭巾の御落胤か」
「ほかに見つかったのは、金子のみだったのか」
「小判にて、二百六十両。壺に詰めて、床下に埋めてございました」
「安吉及びお久を殺害致したる者、床下などには目もくれなかったと見える。すると、狙いは小判でもない。目的の一つは、安吉及びお久を殺害すること。更に目的の第二は、御墨付

きが納めてある裏梅鉢の御定紋入りの印籠を奪い取ることであった」

「はい」

「しかも、安吉及びお久を殺害致したは、腕の立つ武士。これでどうやら、下手人の見当がつくというもの」

「はい」

「また、紫頭巾の御落胤も、もうこの世にはおらぬ。まあ、このあたりで町奉行所としても、目をつぶろうではないか」

「しかし……」

町方定回り同心の浅香伝兵衛が、不満そうな声を絞り出した。

水木新八郎は、背後を振り返った。大岡忠相の顔を、新八郎は見やった。大岡忠相は、笑っていた。作り笑いである。苦痛を隠そうとして、無理に笑っているのであった。顔は青白くなっていたし、それでいて額のあたりが光っている。

《まずい……》

水木新八郎は、眉をひそめた。大岡忠相は、汗をかいている。脂汗だった。例の頭痛が、始まっているのに違いない。大岡忠相の訴えによると、その頭痛は無数の針を打ち込まれた上に、大槌で叩かれるようだという。それに耐えているうちに、呼吸困難に陥るのである。

大岡忠相は、脇に置かれている証拠品に目を移した。頭巾に使った紫色の絹の布、同じく裏梅鉢の三ツ紋付きの羽織、白絹の小袖と袴、それに脇差しが置いてある。紫頭巾の御落胤が、身につけていたものだった。

「安吉とお久を殺害せし下手人は、武士に相違ない。下手人が武士とあっては、町奉行所の手の及ぶところではない」

大岡忠相は、目を閉じた。眉根を、寄せている。いよいよ、苦痛に耐えきれなくなったのである。言葉が出なくなり、呼吸が困難になる。それくらい頭痛が激しくなるというのが最初の前兆、つまり発作が起るときの兆候であった。

「御奉行……」

浅香伝兵衛が、なおも膝を進めようとしている。何と気の利かない男だろうと、水木新八郎は小さく舌打ちをしていた。

「疲れた。休みたい」

さすがにこれ以上は相手をしていられないという気持になったらしく、大岡忠相は目を閉じたままでそう言った。

「はっ」

浅香伝兵衛もようやく、この場での進言を断念したようである。一礼すると浅香伝兵衛は、若い同心を促して座敷を退出した。それを待っていたように立ち上がって、水木新八郎は大岡忠相のところへ駆け寄った。

「始まりましたね」

水木新八郎はそう声をかけて、大岡忠相の背中を支えた。

「いかんわい」

大岡忠相は歯を食いしばり、水木新八郎に凭れかかった。もう人目を憚る必要はないと思ったとたんに、気が緩んだのであった。虚勢を張ることもなく、大岡忠相は生身の人間に戻ったのだ。

だが、そうなると苦痛のほうも、俄かに激しくなる。大岡忠相は肩で喘ぎ、息を乱していた。蒼白な顔を脂汗が流れ、激痛に苛まれて凄まじい形相になっていた。息とともに、呻き声が洩れる。

「奥方を、お呼びして参りやすよ」

水木新八郎は、大岡忠相を横にして脇息を、枕代りに宛がった。

「参りやすか」

大岡忠相は、苦笑した。およそ武士らしくない新八郎の言葉遣いを、大岡忠相はからかったのである。こんな状態にあっても、忠相は必死になって余裕のあるところを示そうとしているのだ。

水木新八郎は、構わずに座敷を出た。奉行所の建物は、広大である。南町奉行所は数寄屋橋御門内にあったが、その建物は平家建てで屋根は瓦葺きであり、一千人の人間を収容できる規模だったと言われている。

同じ町奉行所の建物でも、公務に関わる部分を番所と称していた。番所以外の邸宅内、つまり番所の奥の部分は奉行の役宅であった。公務を執行する番所と、奉行の私邸である役宅

とが一つになっていて、町奉行所を形成しているのだった。

番所と役宅は広大な一棟のうちに納まっていて、いわゆる母屋というわけである。このほかに表、中、裏の長屋が三棟あり、土蔵、厩、物置、馬場、剣術稽古場などの各棟があった。

大岡忠相、水木新八郎、浅香伝兵衛たちがいままでいた座敷は丁度、番所と役宅の境に位置していた。土蔵や植込みが見える役宅の庭に面し、離れのように突き出している座敷なのである。

裏居間、と称されている座敷であった。忠相はこの裏居間を、密談や内々の話の場としてよく使っていた。公務執行のためでもなく、私邸における雑談でもない。と、そういう場合に、この裏居間を利用する。

裏居間を出て渡り廊下をすぎると、左側がお広敷になる。武家屋敷の奥向きであり、奥方の支配地域であった。長局、台所まで通じていて、そこは女ばかりの世界であった。だが、男子禁制というわけではない。

水木新八郎は、大岡忠相の妻の部屋まで行き、千代を連れて慌しく裏居間へと取って返した。誰にも、気づかれてはならないのである。大岡忠相の病気は、極秘にされているのだった。

南町奉行大岡越前守に、発作を伴う急性の持病があることを知る者は、当人を除いてこの世に二人しかいないのであった。その二人とは忠相の妻の千代と、水木新八郎だったのである。

奉行人支配組頭をはじめ二十五人の与力、百二十人の同心、それ以外の南町奉行所の関係

者全員がまったく、忠相の持病に気づいていないのだ。忠相直属の家臣、近習、側近にしても同様であった。

その秘密保持は今後も厳重に続けて行かなければならないのであった。ひとりにでも洩れたら、秘密はもう秘密でなくなるのである。

裏居間へ戻って来たときには、忠相はもう完全に錯乱状態に陥っていた。忠相は頭をかかえ畳を叩いて、七転八倒の苦しみようであった。呻き声が絶叫になり、狂ったように転げ回る。

それが頂点に達すると、忠相は気を失ってしまう。約一時間は昏睡状態が続き、忠相は身動きもしない。一時間後に忠相は、むっくりと起き上がる。悪夢から醒めたような顔つきであり、発作がひどくなった以後のことはまったく記憶していないのである。

それだけの症状であって、後遺するものは何もない。正常な人間、いつもの大岡忠相に立ち還るのであった。発作がひどくなって失神しての一時間、大岡越前守忠相ではなくなるというだけのことだったのだ。

しかし、それでもこの事実は、絶対に隠し通さなければならない。この秘密が洩れたら、幕閣もそれを見過さないだろうし、世間は大変な騒ぎになる。そうした結果は、わかりきっているのである。

「町奉行が一時であろうと、錯乱して乱心者と同様の病状を呈するとあっては、その重要な職務を任せてはおけぬ」

幕閣は、そのように断を下すだろう。

「御奉行さまはテンカン持ちで、気が触れたみたいになるそうだ」

江戸の市民たちは、そう取り沙汰をするに違いなかった。幕府の威信にも影響することだし、厳正な法律による公平な裁判に対する信頼度もゼロになる。大岡越前守の失脚は当然のことであり、その手腕を信じきっている将軍吉宗にしても異論を唱えるわけにはいかないのである。

忠相としては、何としてでもそうした事態に陥ることを、防ぎ避けたいのであった。もちろん、みずからの失脚を望む者はいない。しかし、ただ栄誉のため利益のために、町奉行の地位を失いたくないというのではないのである。

忠相には町奉行として、やりたいことが多くあるのだ。法律の改正、裁判の改革、民政一般の是正に対して、意欲と情熱を燃やしているのであった。せめてあと五年は、町奉行の職に留まっていたいという執念すら持っている。

山田奉行、普請奉行と転じ、忠相が南町奉行に昇進したのは享保二年であった。そのとき大岡能登守が、大岡越前守に改められた。それからまだ、まる二年しかたっていないのである。

四十一歳の若さで町奉行の要職についた忠相は、この享保四年には四十三歳であり、男として脂の乗りきった働き盛りでもあったのだ。せめてあと五年は町奉行のポストに留まって、やるべきことをやり終えたいという意欲を捨てきれないのは無理もない話なのである。

それには、まず秘密厳守であった。この秘密が洩れたときは死んだも同然と、常々、忠相は千代と水木新八郎に言って聞かせていた。千代も水木新八郎も、その辺のところは十分に心得ていたのだった。

千代はまず、紺色の手拭を畳んで、忠相の口の中へ差し入れた。忠相は、それを嚙みしめる。舌を嚙んだり歯を痛めたりするのを防ぐと同時に、それで絶叫を呻き声に戻すことができるのであった。

その間に水木新八郎が、人目につかないようにして、水を入れた手桶を運び込む。千代が水に浸けた手拭で、忠相の頭を冷やす。それから千代は、用意の薄荷の草を取り出して、忠相の鼻に宛がう。

医者の指示に、よるものではなかった。忠相自身が、薄荷の匂いを嗅ぐと楽になるような気がすると、言い出したのである。以来、この湿地に生える香の強い食用、薬用の多年草を千代は用意しておくようになったのだ。忠相は苦悶しながら、薄荷の匂いを鼻から吸い込む。

手拭を口の中に押し込み、頭を冷やし、薄荷の匂いを嗅がせる。すべてが応急処置であり、しかもほかに即効の治療法がないというわけなのである。秘密厳守のために、医者を呼ぶことも忠相は禁じている。従って、三つの応急処置しか、手の施しようがないのであった。

忠相はすでに、頭を叩き割られるような激痛の頂点に達していた。忠相は大きく唸ると同時に、全身を硬直させた。千代が抱きかかえるようにして、夫の惨憺たる姿を見守る。忠相の口から、手拭がはらりと落ちる。気を失ったのだった。

千代が、ほっとした顔つきになる。あとは一時間ほど、このままにしておけばよかった。その間、頭を冷やす濡れ手拭を交換し、たまに薄荷の匂いを嗅がせるだけでいいのである。

この裏居間は離れと変りないので、忠相の声は誰の耳にもはいらなかっただろう。それに用もないのに、裏居間へ近づく者はいなかった。もちろん呼ばれもしないのに、裏居間に出入りすることは堅く禁じられている。今日もまた秘密は守れたと、綱渡りを終えたように千代は安堵したのである。

水木新八郎も、死んだようになっている忠相を眺めやった。こうした忠相の姿を知る者は、自分と千代を除いては天下広しといえども、ひとりとしていないのだ。そう思いながら新八郎は、彼にとって最も辛いときを迎えていたのである。

このような大岡越前守忠相にしてしまったのは、いったいどこの何者だったのだろうか。今年の春までは、健康そのものの忠相であった。発作を伴う持病などには、縁もなかったのである。

すべての責任は、おれにある——。そう思わずにはいられないだけに、水木新八郎は忠相や千代に対して、針の蓆にすわらされているような辛さを覚えるのであった。

3

水木新八郎の南町奉行所における立場は、甚だ微妙なものであった。南町奉行所のうちの番所のほうには、まったく無関係だと言えた。即ち水木新八郎は、南町奉行所の役宅の住人

なのである。

大岡忠相の臣でもないし、町奉行に使われる者でもない。もちろん、家族の一員でもなかった。それでいて、南町奉行所の役宅を住まいとしているのだった。まずは、家族同様の扱いを受けている。

水木新八郎は、二十七歳。

大男に属する長身で、色浅黒く、見るからに気の強そうな顔をしている。顔立ちは悪くないし、見ようによっては男前である。だが、武士らしい厳しさを加味した気品というものに、いささか欠けているようだった。

笑った顔には愛嬌があるし、印象として粋な感じというものが強いのだ。同じ気が強いのでも頑固一徹という野暮ったさはなく、啖呵の一つも切るというイナセなやり方が似合いそうなのである。

町人侍――。

一部の者に、新八郎はそう呼ばれていた。最初そのように言い出したのは大岡忠相だったし、新八郎のほうは別に気にもとめていなかった。もともと、他人のことには無関心な男なのである。

大岡忠相はなぜ、新八郎に「町人侍」といった通称を押しつけたりしたのか。それはまず第一に、新八郎の言葉遣いなのである。新八郎も出るところへ出れば、武士らしい言葉を用いる。

しかし、普段の日常的な用語は、完全な町人言葉だったのだ。町人も職人や遊び人が口にするような、荒っぽくて下品な言葉遣いであった。八丁堀の同心たちが用いる町人言葉と、まったく同じなのである。

次に、形式とか体裁とかを無視したがる新八郎の性格を、大岡忠相は「町人侍」という揶揄で表現したのであった。そして第三は、新八郎の粋でイナセな外見の印象を捉えての、「町人侍」だったのである。

そういう大岡忠相の揶揄を、新八郎はまるで問題にしていなかった。気にもしないし、鼻も引っかけないというふうに無視している。そんな調子だから、もちろん改めようともしない。

「新さん」

大岡忠相も普段は、新八郎のことをそう呼んでいる。

「何か、ご用でござんすかい」

新八郎も、そのような言葉で応ずる。物蔭で聞いていたら、町人同士のやりとりだと判断せずにはいられない。では、どうして水木新八郎には言葉遣い、性格、見た感じと三拍子揃って、町人的傾向が強いのだろうか。

その答えは非常に、単純明快であった。水木新八郎は町人の出、江戸は浅草森田町の常磐津の師匠の子として生れたのである。正式な夫婦の間に生れたのではなく、新八郎は父親が誰であるかを知らなかった。

新八郎は七歳のときから、剣術を習い始めた。生家の隣が、剣術道場だったせいである。道場主は、心形刀流の祖として知られる伊庭是水軒秀明の高弟であった間野権兵衛忠清という達人だった。

心形刀流の祖、伊庭是水軒も江戸の町人の子として生れた。そうしたこともあって間野権兵衛も、素質さえあれば町人だろうと入門を許したのであった。新八郎は十歳で、間野権兵衛から正式の門弟として認められた。それだけの天分と素質を、新八郎は具えていたのである。

十六歳で免許皆伝となり、二十歳のときにはすでに心形刀流の達人と言われた新八郎であった。その年に母親が病死し、同時に新八郎は養子縁組を結ぶことになった。仮親を立てて、武家の養子となることになったのだ。心形刀流の達人という腕を見込んでというのが、養子に迎えられる表向きの理由になっている。

だが、ほかにも理由があるらしいことを、新八郎は薄々感づいていた。どうやら新八郎の母親と、子を作るほどの仲になったのは、さる大名の家臣だった武士のようだと噂に聞いていたからである。

その武士の本家へ養子として迎えられるらしいと、新八郎にも察しがついていたのだった。しかし、そんなことはどうでもよかったし、新八郎はまったくの知らん顔で養子に迎えられたのであった。

養父は、武蔵忍十二万四千石阿部豊後守正喬の臣で、二百石取りの水木庄左衛門正武という老人であった。その養子となって三年目に、新八郎は二つの不幸にぶつかった。養父母が三カ月のうちに、相次いで病死したのである。

新八郎は水木家を継いで、二百石取りの武士になった。しかし、二年後にはすべてを、棒に振ることになるのである。水木新八郎正俊は、同役の武芸師範のひとりだった向山右近と果し合いを演じたのであった。

争いの原因は、妙なことにあった。

家中の者に、三人目の男児ができた。父親は、四十一歳であった。四十一歳に三男という数を引っかけると、四十二の二の子になる。これは忌むべきことなので、捨て子しなければならない。

捨て子したあと、すぐにその父親の家来が拾って、わが子として育てることにする。まったく四十一歳で三人目の子どもを生むとなると、厄介なことになって困るという話が争いの因になったのだ。

「実に愚かなことだ。何も無理に、四十一に三を加えて、四十二の二に見立てることもないのに……」

新八郎がそう批判すると、向山右近がひどく腹を立てたのであった。もともと新八郎に好感を持てずにいた向山右近だったので、自分が批判されたような気がして感情的になったのである。

「それが、武家の慣例というものだ！」

向山右近は、いきなり新八郎を怒鳴りつけた。
「愚かな慣例を守る者は、より愚かということになりましょう」
新八郎は、笑いながら言い返した。
「己れ！　この拙者を愚か者と、嘲るつもりか！」
と、向山右近は、激怒してしまった。
「いや……」
「武家の慣例に対し、町人がケチをつけるとは何事ぞ！」
「拙者が町人と、申されるのか」
「棒振り剣法にいささか長じておるからと、養子に迎えられた町人ではないか。見た目は武士でも、そのほうの体内を流れるは町人の血だ！」
「拙者が町人であろうとなかろうと、そのようなことは一向に構わぬ。しかし、棒振り剣法とか血筋が悪いとか申されては、聞き捨てなりませんな」
「不服なら、証しを立ててみるがよい。棒振り剣法でもなければ、血筋に非の打ちようもない武士であることをな！」
「どのようにして、証しを立てたらよいのです」
「拙者に勝てれば、証しは立ったことになる」
向山右近は、すでに血相を変えていた。
そうした経緯があって、新八郎と向山右近は果し合いを行うことになったのである。結果は、問題ではなかった。大人と子どもの喧嘩にも等しく、新八郎のただの一撃によって向山右近は絶命したのであった。

果し合いに、遺恨は許されない。遺恨は持たないという前提で、果し合いは行われるのである。従って、果し合いの場合は敗者の肉親が、勝者に対する敵討ちを志すことも禁じられている。主君からも、敵討ちの許可が下されないのであった。
しかし、この場合に限っては、そうした家中の統制がとれなかった。町人の出だということで、家中の者の新八郎に対する反感が、意外に強かったのである。それに加えて、向山右近をあまりにも簡単に敗ったということが、家中の若い武士の怒りを煽り立てたのだった。
向山右近には、子どもも弟もいなかった。二十歳で未亡人になった妻の綾だけが、新八郎に復讐できる立場にあるのだった。家中の若い武士たちは、綾を名目人にして新八郎を討ち果すことを決意したのである。
誰よりも困惑したのは、主君の阿部豊後守正喬であった。新八郎を、見殺しにするわけにはいかない。そうかと言って、家中の大勢を占める仇討ち強行論を無理に圧すれば、あまりいい結果は生れない。
そこで阿部豊後守正喬は、苦肉の策をとったのである。この騒ぎが起った享保二年に、阿部豊後守正喬は老中職を退くことになった。同時に大岡越前守忠相が、南町奉行に就任したのであった。
阿部豊後守正喬は新八郎を江戸へ招き、まず主家を去ることをすすめた。新八郎にも、そ

のことについては異存がなかった。二百石取りの大名の家臣というものに、嫌気がさしていたのである。

そこで新八郎は改めて、阿部豊後守から長の暇をもらったのだった。その日から、新八郎は浪人となったのである。阿部豊後守は浪人となった新八郎を、大岡越前守忠相に預けることにした。阿部豊後守にしてみれば、まさに苦肉の策であった。

大岡忠相も、いやとは言えなかった。前老中の頼みであり、事情を聞いてみて納得もいったのである。南町奉行が預かっている浪人ということであれば、綾を名目人とする阿部家家中の武士たちも、容易には手出しができないはずであった。

話に聞き、当人にも会ってみて大岡忠相は、水木新八郎という男が大いに気に入った。武士でありながら、町人の生き方、気質、心理に詳しく通じている。町奉行のよき相談相手にもなるのではないかと、大岡忠相はその辺の計算も忘れなかったのだ。

こうして二年前から、水木新八郎は南町奉行所役宅の住人となったのである。お預けの身であっても、行動に制限はない。気楽な居候、あるいは食客ということになるのかもしれなかった。

だが、その水木新八郎が大岡忠相にとって、思わぬ災禍の因となったのである。忠相や千代は、そんなふうに匂わせたこともない。しかし、少なくとも新八郎自身は、そのように思い込んでいるのだった。

今年の春三月——。

大岡忠相は新八郎ひとりを連れて、お忍びで役宅を抜け出したのであった。新八郎の魚釣りの話に刺戟されて、忠相もその気になったのである。鉄砲洲の石垣で釣りをしようと、話がまとまったのであった。

町奉行の外出となると、その行列はかなりのものになる。長棒駕籠に乗ることになるし、先徒士、鑓同心、駕籠脇の侍、陸尺、みの箱、挟箱、乗馬、御付人、合羽籠、足軽、中間と二十五、六人を引き連れての行列であった。

だが、お忍びということで、新八郎と二人だけで、普通の宿駕籠に乗って鉄砲洲へ向ったのである。忠相は龕燈頭巾をかぶり、面体だけを隠していた。鉄砲洲についてから、舟に乗ろうということになった。

陸釣りなど、もう子どもでも満足しないと釣り具屋に言われたのである。そこで、釣り具一式とともに猪牙舟を借り受けて、忠相と新八郎はそれに乗り込んだ。三時間ほど糸を垂れてみたが、獲物は一匹もかからなかった。

持参の弁当を食べたあと、忠相は舟の中で眠ってしまった。ひとりになると獲物がかからないことが、一層つまらなくなった。それで新八郎は沖のほうへ、舟を漕ぎ出したのであった。

陸地を遠く離れると、面白いほど獲物がかかる。新八郎は釣りに夢中になっていて、猪牙舟が潮に乗って流されていくことに気がつかなかった。いつの間にか、海上はすっかり暗くなっていた。

夜になったわけではない。空が厚い黒雲によって、完全に閉ざされていたのだった。風が起り、雨が降り出した。陸地が見えるどころか、その方角すらわからなかった。目を覚ました忠相にも、こうした海上での経験は生れて初めてのことだったのだ。

やがて、凄まじい嵐となった。豪雨と強風に、海上は荒れ狂った。猪牙舟は木の葉のように翻弄され、浸水が甚だしく、いまにも転覆か沈没かという危機に直面し、その状態がいつまでも続いたのであった。

間もなく、新八郎は舟底に叩きつけられた拍子に、後頭部を強打して気を失ってしまった。新八郎が意識を恢復したのは翌日の午後であり、嘘のように静まり返っている海の上で漁師の舟の救助を受けているときだったのだ。

新八郎は、人が変ってしまったような忠相を見た。重病人のように憔悴して、放心した顔で虚ろに目が光っていた。忠相は多くを語らなかったが、心身ともに疲労の極限を越えたようだった。

生れて初めての経験で、しかも相手は大自然の猛威であった。白刃に囲まれても平然としていられる武士であろうと、大自然の猛威によって強いられる恐怖感には耐えきれないのである。

忠相は夜を徹して、闇と強風と激浪の中での恐怖感と戦ったのであった。そして夜明けとともに忠相を苦しめたのは、喉の渇きである。忠相は海水を飲みながら、漂う小舟の中で日射しを浴びていたのだ。

一昼夜を恐怖に苛まれて、しかも舟底の水を汲み出すという重労働を続けたのであった。その上、海水を飲んだということも、よくなかったのである。精神的なショック、心身の疲労、それに身体にとって有害な飲み水と、三つの原因が重なって忠相を打ちのめしたのであった。

お忍びで出かけたのだから、行方不明になったことを公表するわけにはいかなかった。千代は騒ぎ立てることもなく、事情が明らかになるのを待っていた。そうしたところへ、忠相と新八郎が密かに戻って来たのであった。

救助してくれた漁師には礼をはずんだし、忠相の身分も知られてはいない。お忍びで釣りに出かけ、遭難して二十四時間後に漁師に救助されたという行状は、すべて秘密にすることにした。

忠相は風邪を召されてご病気ということにして、それから二十日間ほど寝込んだのである。結局、医者の診察も治療も受けなかったし、そのときから事実を知る者は忠相、千代、新八郎の三人に限られていたのだった。

二十日後には床を離れて、忠相もすっかり恢復したかのように見えた。しかし、半月ほどたって忠相は、激しい頭痛に襲われたのであった。忠相は七転八倒しながら絶叫するという苦悶を続けて、錯乱状態に陥ったあと気絶した。

それが、第一回目の発作を伴う病状であった。一時間ほど気を失っていて、あとは平常に復するのである。だが、その発作がいつどこで起るかは、まったく予測できないのだ。しか

も、発作の間隔が次第に縮まって、いまでは五日に一度は確実に、その断末魔のときを迎えるようになっていた。

すべての原因は、自分にある。大岡忠相に対して、埋めようがないほど大きな借りを作ってしまった。そのように水木新八郎は、みずからを責めずにはいられないのである。

4

紫頭巾の御落胤が殺されたという噂は、三日のうちに江戸中に広まった。四ツ谷御簞笥町の松の木長屋に半年前から住みついていた薬売りの次郎吉というのが、実は紫頭巾の御落胤の正体だったと、それはもう大変な評判になったのだ。

ところが、不思議と次郎吉こと安吉を悪く言う者がいないのである。江戸市中の人々はむしろ、安吉に対して同情的であった。老中の要職にある大名の御落胤だと騙り、豪商たちから三百両に近い金を頂いたというので、その所業を痛快がって見る向きもあった。

だが、そうした観測は、間違っていたのである。江戸っ子気質として、弱い者に味方をしたがる。だから、殺されたということで、安吉に同情的なのだ。と、その分析もまた、妥当とは言えなかった。

あれは、騙りではない。事実、安吉は御老中戸田山城守さまの御落胤だったのだという声が、江戸市中の隅々にまで行き渡ったのである。そのことが江戸の町人たちを安吉に対する同情と義憤へと、駆り立てた原因であった。

「考えてみねえな。安吉とお久って女を襲って殺したのは、三人の侍だったんだぜ。それも、金をもらって人殺しをするような痩せ浪人や、食い詰めた剣術使いなんてもんじゃあねえんだ」

「れっきとしたお武家さまだったってんだろう」

「そうよ」

「松の木長屋の住人で、厠へ行った者がたまたま、逃げて行く三人の武士ってのを見たそうなんだ」

「そいつの話によると、三人の武士は黒覆面で面体を隠していたが、羽織袴という装りだったそうだぜ」

「黒紋付きの羽織に仙台平の袴、腰に黒鞘の大小を差し、ひとりが龕燈を手にしていたってんだ」

「浪人どころか、主持ちの武士。それも、どうでもいいような下級武士じゃあねえ」

「そうなりゃあ、話は決ったようなもんだ。戸田山城守さまの御家中じゃあねえかい」

「その上、三人の武士が持ち去ったものは、裏梅鉢の御定紋入りの印籠と例のお墨付きだけと来ているんだ」

「つまり、証拠の品だけを、持ち去ったわけか」

「おかしいじゃあねえかい」

「おかしいさ」

「安吉を殺し、安吉のことをよく知っているお久という女の息の根もとめた。その上、証拠の品を持ち去る」

「証拠の品が消えて、安吉とお久のほうも死人に口なしだ。これでもう二度と、戸田山城守さまの御落胤だなんて、名乗りを上げる野郎はいねえだろうよ」

「安吉ってのが実は真っ赤な偽者で、御落胤だって騙りを働いていたんだとしたら、何もそうムキになることもねえだろう」

「その通りだ」

「何も安吉やお久を殺して口を封じたり、証拠の品を持ち去ったりしなくてもいいわけだよな」

「偽者だったら安吉を捕えて、偽物の印籠やお墨付きと一緒に、町奉行所へ送り込めばいいんだ」

「それをおめえ安吉とお久を殺し、証拠の品だけを持ち去ったんだぜ。そいつは安吉って御落胤も、証拠の品も本物だったからよ」

「間違いねえや」

このような町人たちの話し合いは、江戸のどこへ行っても聞かれたのであった。町方の女たちも、もちろん黙ってはいなかった。町内雀の本領を発揮して、女はまた女らしい観点から大いに喋りまくっていた。

「安吉ってのは盗人だそうだけどさ、仲間うちでもとんと素姓が知れないんだってさ」

「そうだってねえ」

「どこで生れて、どこで育ったかもわからない。それがいかにも、御落胤らしいじゃないか」

「お久って女のほうも、素姓がまるで知れないそうだねえ」

「御落胤ってのはやっぱり、素姓のはっきりしすぎている女とは深い仲になりたがらないんじゃないのかい」

「そうだよ、お互いに素姓が知れないほうが、安心していられるもの」

「そんで安吉さんは、わたしたちには手出しをしなかったんだね」

「素姓が、はっきりしすぎているからかい」

「いい加減におしよ。安吉さんなんて、気安く呼んだりしてさ」

「だって、安吉ってのはいい男だそうだよ」

「亭主に、言いつけてやるからね」

「御家来衆が勝手にやったことだって話もあるけどさ、戸田山城守さまにだって身に覚えがあるんだろうねえ」

「そうだよ。だから御家来衆が、安吉を殺したり証拠の品を持ち去ったりして、御落胤がいたってことを隠そうとしたんだろ」

「殿さまに御落胤がいるってことを、御家来衆までが承知していたんだよ」

「戸田山城守さまがまだ部屋住みの頃、たみって百姓娘に情けをかけられたんだそうだね

え」

「それで、たみって娘が身籠ったのかい」

「そうなんだってさ。お墨付きに、たみって書いてあるそうだよ」

「紫頭巾の御落胤からお墨付きを見せつけられた旦那衆が、口を揃えてそう言っているというからねえ」

「でもさ、殿さまなんて薄情なもんだね。邪魔なわが子なら、平気で殺しちゃうんだもの」

「そういう薄情な殿さまが、御老中として天下の御政道を預かっているんだよ」

「恐ろしいねえ」

江戸市中の声は安吉への同情から、老中に対する不信感へと発展したのであった。とにかく江戸中がこの話で持ち切りなのだから、その影響というものも軽視することはできなかった。

大岡越前守忠相も、頭が痛かった。何とかしなければならないが、こうした批判的な噂というものは、江戸中に燃え広がった猛火と同じであった。自然鎮火を待つほかに、消しようがないのである。

政道への不信、老中に対する批判と、すべて民心動揺の原因になるのだった。深刻な問題であった。それにつけても、何と軽率なことをしてくれたのかと、大岡忠相は安吉とお久を殺した武士たちを責めずにはいられなかった。

江戸市中で語られていることは、実に正しい判断であった。誰が考えても、戸田山城守の家臣がやったことだと察しがついてしまう。同時に安吉が本物の御落胤だったという結論に、達することにもなるのである。

このときの老中は、次の四人であった。

常陸笠間四万三千石　井上大和守正岑。

下総関宿四万九千石　久世大和守重之。

下野宇都宮九万石　戸田山城守忠真。

三河岡崎三万五千石　水野和泉守忠之。

大老職には誰も就任していなかった時代なので、この四人の老中が幕府最高の地位にいたわけである。そのうちのひとりが、のちに十万石になる下野宇都宮九万石の戸田山城守忠真だったのだ。

戸田山城守忠真は、四人の老中のうち最も若年で、まだ四十九歳であった。そのことはつまり戸田忠真の優秀さを立証するもので、事実なかなかの実力者であった。戸田忠真の老中留任が十五年間に及んだのも、そのせいだったのである。

それだけに、惜しい話であった。このことが原因で江戸市民の信頼を失うとしたら、実に無意味ではないか。それだけではなく、御落胤が盗人に成り下がっていたということもまた、戸田山城守忠真にとって大きなマイナスになる。

「いかが致すべきか」

大岡忠相は裏居間で、そんな呟きを繰り返していた。裏居間にはほかに、水木新八郎がい

るだけであった。新八郎は今日もまた廊下にすわって、土蔵の手前で花を散らしている木犀を眺めやっていた。

「町人侍、何かよい思案はないか」

忠相は、新八郎の横顔に声をかけた。

「御老中にお会いして、真偽のほどを確かめるほかはねえんじゃあねえんですかい」

新八郎は、長さ二十センチはある大きな毛抜きを弄んでいた。

「評定所において、このような話を持ち出すわけにはいかぬ。戸田山城守さまのお屋敷に、お伺いするほかはないな」

忠相は、膝の上にある書付けに、目を落した。その書付けは、例のお墨付きを正確に、再現させたものだった。紫頭巾の御落胤に見せつけられたという豪商四人の証言が一致したお墨付きの内容を、一字一句違いのないように文章にしたのである。

其方、懐妊の由、わが血筋に相違これなし。もし男子出生においては、時節をもって呼び出すべし。女子たらば、其方の勝手に致すべし。

右をもって、たみに遣わすこと相違これなし。

正之助記す。

正之助とは紛れもなく、戸田忠真が部屋住みの頃の名前であった。戸田忠真は十九歳のときに、長兄の急死によって世嗣となったのである。仮に戸田忠真が十七、八のときに、たみなる娘に情けをかけたとすれば、この御落胤は現在三十一、二ということになる。

安吉が三十一、二という年と若干の違いがある点だけが、唯一の救いであった。もっとも、年というのはあまりアテにならないし、それに重きを置くことはできなかった。いずれにせよ、戸田山城守忠真に直接会って、過去の真相を打ち明けてもらうほかはなさそうであった。

「御奉行……！」

襖の外で、怒鳴るような声が聞えた。町方定回り同心、浅香伝兵衛の声であった。

「何用じゃ」

忠相が応じた。

「ご免下さい」

襖をあけて、浅香伝兵衛が顔を覗かせた。浅香伝兵衛は緊張の余り、表情を固くしていた。

「御奉行、一大事にござります」

平伏して、浅香伝兵衛は言った。

「申してみよ」

忠相が頷いた。

「ただいま、三拾間堀三丁目自身番より知らせが参りました」

「うむ」

「三拾間堀三丁目薪炭商中尾屋藤兵衛方を、紫頭巾の御落胤が訪れたそうにございます」

「なに……？」

「中尾屋藤兵衛に、裏梅鉢御定紋入り印籠とお墨付きを披露し、二十両の無心を申し出て、いまなお立ち去る気配も見せぬとのことにございます」

「まことか」

「いかが、取り計らいましょうや」

「委細構わず、召捕れ」

「はっ」

「急げ、取り逃がすな」

「承知仕りました」

浅香伝兵衛は、音を立てて襖を閉じた。あたふたと走り去る足音が、渡り廊下に響き渡った。浅香伝兵衛にしても、いささか面喰らっているのである。とても信じられないようなことが、起ったからだった。

安吉なる者が殺されて、証拠の品も持ち去られた。現在そのことで、江戸市中は騒然となっているのである。ところが、それからわずか四日後の今日になって、またしても紫頭巾の御落胤が出現したのであった。

第二の御落胤も同じように裕福な商家を訪れて、二十両を用立てよと迫っているらしい。裏梅鉢の定紋入りの印籠と、お墨付きも見せたという。しかも、紫頭巾の御落胤は、三拾間堀三丁目に姿を現わしたのであった。大胆というか間抜けというか、数寄屋橋御門内の南町奉行所と三拾間堀三丁目とはつい目と鼻の先だったのである。

「町人侍……」

忠相は、新八郎を呼んだ。

「へい」

新八郎は廊下から座敷へはいり、忠相の正面にすわって膝を進めた。

「何かある」

「へい」

「そうは、思わぬか」

「思いやすよ」

「南町奉行所とは目と鼻の先の三拾間堀に現われて、なかなか立ち去ろうともしない。御落胤はすでに、自身番から当奉行所へ知らせが参ったことを承知の上だ」

「御落胤は、召捕られたがっているんでござんすね」

「召捕られるのを、待っておるのじゃ。そこで新さん、頼まれてくれぬか」

「へい」

「御落胤が召捕られるときの様子を、見定めてもらいたい」

「承知致しやした」

「召捕られることを望んでおったのか、それとも真から間抜けておる男なのかを、はっきり確かめるのじゃ」

「へい」

新八郎は立ち上がると、足早に裏居間を出た。用部屋の向いにある自室によると、新八郎は刀を鷲摑みにした。廊下へ出て、内玄関へ向う。内玄関をあとにして、作事小屋の角を曲る。並んでいる土蔵と御長屋の間を抜けて、右へ折れると裏門の門番所の前に出るのであった。

裏門を出ながら、新八郎は大刀を腰に差し込んだ。月代を伸ばしているし、どう見ても浪人姿であった。だが、尾羽打ち枯らした浪人にしては、感じが小綺麗にすぎた。藤色の三ツ紋付きの着流しに、雪駄ばきである。素足がまた、粋でイナセであった。右手には長さが二十センチもある大きな毛抜きを、持ったままだった。

数寄屋橋御門から真直ぐ東へ向って、新橋にぶつかるまで歩く。右に木挽橋を見て、新橋の手前を左に折れる。前方に、紀伊国橋が見える。三拾間堀に沿った左側の町人地が、三拾間堀一丁目から四丁目までである。

新八郎は、立ちどまった。三丁目の中尾屋の前であった。大きな薪炭商である。その中尾屋を半円形に押し包んで、人垣が築かれていた。新八郎は人垣の後ろに立って、中尾屋の店先の様子を眺めやった。長身の新八郎には、中尾屋の店内までが見通せた。

朱房の十手を握った同心が五人ほどで、ひとりの男を取り囲んでいた。紫頭巾の男が大声で笑いながら、店の奥から出て来るのを新八郎は見た。

5

大岡忠相は個人的に、戸田山城守忠真と面談した。

その結果、十七歳のときに屋敷へ野菜を運んで来る百姓の娘たみと肉体関係を結び、妊娠させたことは事実だとわかった。部屋住みの頃の若気の過ちではあったが、それなりに真剣で純粋な恋だったのだ。

だから妊娠したことをたみから告げられたとき、若き戸田忠真はお墨付きと定紋入りの印籠を与えたのであった。ところが、それから間もなくたみの身に不幸が起った。江戸へ奉公に出ていた兄が、流行病に罹り重体となったのだ。

看病に呼ばれて、たみは江戸へ向った。若い女のひとり旅であり、途中で何かがあったのに違いない。たみは江戸に行きつくこともなく、消息を絶ってしまったのである。行方知れずであった。

一年がすぎて、忠真もたみのことは諦めた。更に二年たつと、もうたみのことは忘れてしまった。兄の急死によって世嗣となってからは、そのことはもう青春の思い出として、完全に過去の闇に没し去ったのである。

それから三十年近くになるが、忠真は御落胤の存在について、ただの一度も思いをめぐらせたことはないという。そのために、戸田山城守の御落胤と称する者が出没しているという話を小耳にはさんだが、気にもしなかったのである。

現在、戸田忠真には多くの子どもがいる。そんなところへ、長男面をした御落胤が出現したりしたら、面倒なことになるだけであった。嫡出の男子も揃っていることだし、御落胤などまったく不要である。

面倒の因になるだけだし、また幾ら本物の御落胤だったとしても悪人だとか悪事を働くとかでは、戸田家を大いに傷つけることになる。百害あって一利なしということで、戸田家家中の者が忠義のために安吉とお久を殺害、証拠の品を持ち去って処分したらしいのである。

もちろん、戸田忠真はそうした事実を、知らされていないのだ。御落胤を詐称する不届者を斬って捨てたという報告を、受けているのにすぎない。つまり、偽者だから斬り捨てたというふうに、戸田忠真は思い込んでいるのである。

「仮に、その御落胤がご存命の場合は、いかが致しましょうぞ」

最後に忠相は、そのように訊いてみた。

「父子の情は歳月によって、左右されるものではない。まさしく、たみが腹を痛めたわが子ということであれば、見捨てたくはないのう」

戸田忠真は、苦笑を浮べて言った。

「しかし、この期に及んでは御落胤として、お迎え致すわけには参りますまい」

「それは、その通りじゃ。だが、預ける分には、差し支えあるまい」

「いずこに、お預けになられますか」

「同じ下野に、分家の戸田がおるではないか」

「足利の戸田忠国さまにございますか」

「忠国は、世話好きじゃ。それに足利の戸田は一万一千石、小大名には格式に捉われずにすむという気楽さがある」

「では万が一、御落胤がご存命と判明致しましたときには、足利の戸田さまにお預けということで、お骨折り頂けますな」

「越前も、何かと気苦労が多いの」

戸田忠真は、苦笑を消すことができないという面持であった。

しかし、いずれにしても、厄介なことであった。忠相が何とかしなければならないのは、まず安吉が決して本物の御落胤ではないのだという印象を江戸市民に与えることである。そうしなければ、幕府、老中、政道に対する江戸市民の不信感を拭い取ることができないのであった。

だが、安吉が偽者だという証拠は、まったくないのである。戸田家家中の者が持ち去ったお墨付きと印籠を、戸田忠真が確かめれば問題はなかったのだ。その時点で、真偽の区別がはっきりしたはずだった。

ところが、そのお墨付きと印籠を早々に、処分してしまったというのである。焼却という処分だったので、残骸を調べることさえ不可能であった。その結果、安吉が本物の御落胤かそれとも偽者かを、断定することもできなくなってしまった。

ただ安吉は偽者だったと町奉行が決めつけても、江戸市民は納得しないだろうし、信じな

いのに違いない。こうなったからには、第二の紫頭巾の御落胤として召捕られた男にすべてを賭けて、何らかの知恵を得るというほかに期待できることはなかった。

江戸無宿　常太郎。
異名、銀常なる盗人。
年齢　三十一歳。
お墨付き　偽物であること明らか。
印籠　安物にて偽物であること明らか。

これが新たに召捕られた紫頭巾の御落胤であった。年齢だけが御落胤と一致するだけで、あとは安吉よりはるかにお粗末だった。ただ忠相や新八郎が気がかりだったのは、この常太郎の不可解な行動であった。

常太郎は南町奉行所に極めて近い場所を、わざわざ選んで紫頭巾の御落胤の出現を企図した。更に、常太郎は待ち受けていて、召捕られたのだ。その点については、新八郎が現場に赴いて、はっきり確認している。

常太郎は最初から、召捕られるつもりだったのである。いや、紫頭巾の御落胤として、南町奉行所に召捕られようとしたのであった。いったい何のために、そうした行動を起したのだろうか。

南町奉行所お白洲において、常太郎の裁判が開かれた。御老中の御落胤を詐称して、商人から金品を騙し取ろうとした者に対する刑事裁判である。南町奉行大岡越前守が単独で裁くのであり、これを奉行手限り裁判という。

大砂利の奥に、白洲砂利がある。この白洲砂利が、お白洲と呼ばれるところだった。杉戸を締めきった正面の座敷に、大岡越前守が着座する。その手前の右側に与力、左側に目安方がすわる。奉行の斜め後方に隠れて、当番与力が控えている。

白洲の上には、左右に同心が居並ぶ。中央の莚の上に、犯罪者がすわる。裁判のすべてが、奉行の意志によって進行する。何びとも奉行の指示に逆らい、それを妨げることは許されない。

「江戸無宿、異名銀常こと常太郎、面を上げよ」

と、その言葉によって、裁判は具体的に進められることになるのだった。審問は滞りなく続けられ、常太郎は素直に白状し、一切の罪状を認めた。いよいよ大岡忠相の、最終的なまとめにはいった。

「江戸無宿、安吉なる者を存じおるか」

「面識はございませんが、名だけは聞いておりやす」

「安吉もまた紫頭巾の御落胤として罪を重ね、そのために斬殺され無残なる最期を遂げた。そのほう、安吉についてはいかが考えおるか」

「御奉行さまが、あっしの考えを知りてえとおっしゃるんですか」

「いかにも」
「安吉にしたって、あっしと似たようなもんでござんすよ。もっともらしいことを吐かしていたようですが、名もねえ盗人にすぎやせん」
「では安吉もそのほう同様に、御落胤には縁もゆかりもなき者と申すのだな」
「いやでござんすよ、御奉行さま。そんなことは、わかりきっているじゃありやせんか。安吉が本物の御落胤だってえなら、この世はもう御落胤だらけでござんしょう」
「さようか」
「ただ一つ、申し上げてえことがございやす」
「申してみよ」
「安吉が持っていたお墨付きと御定紋入りの印籠、あの証拠の品だけは間違いなく本物でござんすよ」
「ほう」
「安吉がどうやって手に入れたかは存じやせんが、証拠の品が本物だって話はあっしも聞いたことがござんすよ」
「さようか」
「これだけは一つ、信じて頂きてえんでござんすがね」
「その件については、もうよい。次にいま一つ、尋ねたいことがある」
「何なりと……」

「そのほう、御落胤を騙るに当奉行所に近き場所を選び、召捕られるのを待ち望んでおりし様子。それはまたいかなる心底か、正直に申してみよ」
「そんなことですかい」
と、常太郎は肩を揺すり、大声を上げて笑った。
「神妙に致せよ」
忠相は形だけ注意を与えて、別に怒ろうともしなかった。
「特にこれと言って、大層なことを考えていたわけではありやせん。あっしみてえにケチな盗人は、いつかは御用弁になって、御牢内で死ぬものと相場は決っておりやす」
「うむ」
「だったら一つ、でかいことをやって、派手な死に方をしてみてえと、ふとそんな気になりやしてね。ケチな盗人にも、見栄ってものがございやす。同じ悪党として死ぬんなら、御老中さまの御落胤と偽って、世間をあっと言わせてえと、そんな気にもなるもんでござんすよ」
「なるほど」
「これで常太郎って名は、江戸中に響き渡るってもんでさあ。それに、あっしが御老中さま、戸田山城守さまの御落胤騙りとしてお仕置になりゃあ、二度と戸田さまの御落胤を騙る者は現われねえでござんしょう。そこで、あっしもちっとは御老中さまのお役にも立つってわけで……。江戸中に名を轟かせた上に、御老中さまのお役に立つ。こいつは、男冥利に尽きる

ってもんでござんすよ」

そこで、常太郎は再び、呵々大笑した。今度はなかなか、笑いやまなかった。自嘲するような、何者かを嘲笑するかのような、いやすべてを嘲るような嗤いであった。忠相が黙っているので、誰も制止する者はいなかった。静かなお白洲に、いつまでも響き渡る笑い声が、何か異様な感じであった。

評定所における最終協議の結果、常太郎の死罪が決定した。老中の落胤を騙るとは言語道断であり、今後の再発を防ぐためにも見せしめの刑として死罪にすべきだという意見が強かったのである。

大岡忠相も、死罪に賛成した。だが、公言は憚ったが死罪とする理由が、まるで違っていたのである。一つには、常太郎を死罪にすることによって、安吉への同情、延いては安吉が本物の御落胤ではないかという江戸市中の声を、打ち消すためであった。そしてもう一つ、常太郎の意を汲んでのことだったのである。

改めて南町奉行所のお白洲で常太郎に死罪の判決を申し渡したその日の夜、忠相もさすがに気が重かった。忠相としては珍しく深夜に至るまで、水木新八郎を相手に盃を重ねたのであった。

「折角、足利の戸田さまにお預けになるという御老中さまの言質を捉えておきながら、死罪とは残念じゃ。また、御落胤と察しがついておりながら、常太郎どのを死なせるのも惨い話よ。しかし、常太郎どのに御落胤であることを認めよと迫っても、頑として口を開かぬだろうしな」

「どっちにしろ、御落胤の成れの果てでござんすからね。当人の望み通りに、死なせてやったほうがよろしいでしょう」

「だが、成れの果てであろうと、一命を投げ出して御父君を庇うとはさすがじゃな」

「しかし、御落胤なんてものは、こんなに惨めな生き方しかできねえんだってことを示したかったというのが、常太郎の本音だったんじゃあねえんですかい」

「いや、あるいは常太郎どのも、本物の御落胤ではないのかもしれぬ。そうだとすれば、常太郎どのという呼び方は奇妙じゃな」

「ただ常太郎が、安吉が持っていた証拠の品だけは本物だと言い張ったのは、どんな意味があってのことだったんでしょう」

「証拠の品が本物であったからこそ、安吉の騙りも通用したのだ。また証拠の品が本物だったがために、世間も安吉を本物ではないかと思ったりしたのであろう。しかし、証拠の品は本物であっても、当の安吉は自分同様に偽者なのだ、と、常太郎はそのような効果を狙っての、証言を残しておきたかったのに相違ない」

「よく、わかりやした」

「いずれにせよ、これで安吉が本物の御落胤ではないかという風評も、消えることだろう。世に金品を求める御落胤など、いようはずはない。もし、そのような悪事を働く者がおれば、それは小悪党の見栄から派手な死に様を望んでの大芝居にすぎないのだと、常太郎はみずか

らをその見本としたのだ」

「男冥利に尽きるというのも、本当かもしれやせん」

「ところで新さん、話は異なるがここ三、四日来、宵の口から当奉行所の周囲を徘徊する三人連れの武士がおるそうじゃ」

「安吉とお久を、殺した連中でござんしょう。今度は常太郎のことが気になって、うろうろしているんですよ」

「常太郎に比べると、器が小さいな。武士と盗人が、逆さまのようだ」

忠相はそう言って、苦笑したのであった。

翌晩、新八郎は数寄屋橋御門外で、それらしい三人連れの武士を見つけた。いずれも、黒覆面の武士であった。新八郎の目から見ると、睦み合っている男女を刺し殺すのが精々の腕前のようであった。

「常太郎は、町奉行所内にいるんだ。安吉を殺すみてえにはいかねえし、何もそうお家安泰のためにって張り切ることもねえだろうよ」

新八郎が聞えよがしにそう言うと、三人の武士は一斉に抜刀した。新八郎も久しぶりに接する真剣勝負に血が熱くなり、思わず刀を抜き放っていた。だが、勝負には、なりそうになかった。下段に構えて、交互に三人の刀を弾き返しているだけでいいのだし、まるで遊んでいるようなものだった。

「この心形刀流に、勝てるかねえ」

面倒になって新八郎が刀を振り回すと、ひとりが叫び声を上げて転倒した。あとの二人が慌てて助け起すと、そのまま逃げ去った。あとには、肘のところで切断された左腕が残っていた。

新八郎は視線を感じて、ふと振り返った。路上に、女の姿があった。新八郎は、はっとなった。気品があって、夜目にも匂うような美貌を、新八郎は見出したのだった。向山右近の妻である。

「綾どの……」

新八郎は忘れていたものを、はっきり思い出したという気持であった。御高祖頭巾に包まれた美貌には、表情というものがなかった。新八郎は、足を早めて歩き出していた。

消えた生き証人

1

そのあたりは武家地、寺社地、町人地が渾然と入り組んでいる一帯であった。司法と行政の点で管轄がはっきりと区別されている武家地、寺社地、町人地が掻きまぜたように一つところに集まっているのである。

麻布本村町、本村上ノ町、善福寺門前西町、善福寺元町、善福寺東町、網代町、飯倉寄りの坂下町、宮下町、それに二ノ橋と三ノ橋の間の古川町などが町人地で、同じ地域に三つの大名御上屋敷と十二の下屋敷、約四十の旗本屋敷がある。

そして同じ一帯に善福寺、光林寺、曹渓寺、天真寺、遍照寺などを中心として三十以上の寺院が存在している。ほかに、これもまた司法・行政の上で管轄を異にしている百姓地が、点在しているのであった。

麻布本村町と本村上ノ町の一部にはさまれて、妙泉寺という古い寺がある。このあたりでは、特に知られている名刹でもないし、だだっ広い境内を古木が囲んでいるというだけの寺だった。

その境内はいつも森閑としていて、檀家の人々で賑わうということは殆どなかった。広くて、樹木が多い。本堂へ向けて境内を貫いている石畳からはずれると、昼間でも薄暗いほどであった。

たまに、妙泉寺の境内を突っ切る人影がある。寺に用がある者ではなく、ただの通行人であった。麻布本村町と本村上ノ町を結ぶ道の代りとされていて、妙泉寺を迂回せずにその境内を抜ける者が多かったのだ。

享保四年の陰暦の十月、菊が満開の季節であった。妙泉寺の境内は、黄色い絨毯を敷きつめたようになっていた。妙泉寺の境内には、十数本の銀杏の木がある。いずれも、天を支えているような巨木だった。

その十数本の銀杏の巨木が、真っ黄色になった葉を散らし始めていたのである。まだ地上に積るというほどの散りようではないが、妙泉寺の境内は銀杏の黄色い葉で一面に被われていたのだった。

その見事な落葉を眺めて、これが小判であればなどと考えながら、ひとりの町人が妙泉寺の境内を歩いていた。左官職人で、境内を通り抜けるつもりだったのである。だが、ふとその職人の足が、とまったのであった。

妙なものが、目に触れたのだ。石畳から十五メートルほどはずれた境内の隅に、銀杏の巨木が三本、寄り添うようにして並んでいる。その銀杏の木の根元に、人がひとり倒れていたのである。

倒れているのは、羽織に袴をつけて、白足袋をはいた武士だった。その脇に、もうひとりの男が、ぼんやり突っ立っている。それは町人で、若旦那ふうの身装であった。町人は、刃物を手にしていた。

そうした光景に気がついた左官職人は、更に目を凝らした。乱れた着物の裾から覗いている女の臑と、白足袋をはいた足が職人の目に映じた。銀杏の木の向う側に、もうひとり女が倒れているのである。

左官職人は、愕然となった。そのまま妙泉寺の境内を駆け抜けると、左官職人は本村上ノ町の自身番へ転がり込んだ。折よく本村上ノ町の自身番には、南町奉行所の定回り同心の浅香伝兵衛が来合せていた。

浅香伝兵衛は小者とともに妙泉寺の境内に駆けつけると、とりあえず事件を確認し、白鞘の短刀を手にして立っていた若旦那ふうの町人の身柄を拘束した。浅香伝兵衛にできることは、そこまでであった。

身柄を拘束すると言っても、その場から逃げ出せないように、見張るというだけのことだった。縄をかけることも、自身番へ引っ張って行くこともできない。つまり、公務執行を許されないのであった。

そこに司法・行政の管轄の区別が、大きな壁となって立ち塞がるのだ。町奉行の支配は町人と浪人、管轄は町人地に限られている。神社仏閣に対しては、何の権限も及ばないのである。

神社や寺の境内、つまり寺社地は寺社奉行の支配管轄になっている。寺社奉行の許可なくして、町奉行所の者が寺社地での犯罪に手出しすることはできない。犯人が寺社地へ逃げ込んだ場合でも、町奉行所の者が勝手に逮捕はできないという厳しさだった。

更に厄介なのは、殺害されたのが武士だったということである。それも旗本の二男坊であり、もちろん町奉行や寺社奉行が支配する相手ではなかった。まさに渾然とした事件であった。旗本に関係することとなると、幕府の目付が乗り出して来る。

殺されたのが、旗本の二男。

殺したのが、町人。

事件発生の場所が、寺社地。

こうなっては目付も、町奉行も、寺社奉行も単独では事件を扱えない。互いに支配権を持ち、同時に関係者を管轄外に置いているのだ。三すくみである。武家地、寺社地、町人地が渾然と入り組んでいるこの土地柄を、象徴しているような事件だったのだ。

事件の関係者は、次の通りであった。

殺された武士、西尾長十郎。

二千八百石取りの旗本、西尾内匠の二男である。いわゆる部屋住みの身であって、二十三歳になる。父の西尾内匠は、御側衆の役職についている。将軍家の御座之間の近くに詰めていて、書類を扱う侍臣が御側衆であった。

将軍家近侍の御側衆で二千八百石となると、身分も中堅以上の旗本で要職についているとは言えないが、その存在価値は大いに認められる。旗本としての西尾家も、まずは名家ということになる。

西尾内匠の長男、即ち長十郎の兄は右近である。右近は長十郎と二つ違いで二十五歳、この年に妻を迎えている。当然、この右近が西尾家を相続する。旗本の相続は、将軍家の許可を必要とする。

相続者は嫡出の長男で、五体健全でなければならない。ひ弱であっても、相続権は消滅してしまう。だが、事情によっては、長男に代って二男が相続することもある。そういう場合には長男が病弱だからと届け出て廃嫡の許しを受け、二男を相続者とするのであった。

相続には、二種類ある。

父の死亡による相続を、『跡目相続』という。

父の隠居による相続を、『家督相続』という。

旗本の隠居というのは、要職につく者は別として、五十歳が常識とされていた。もちろん停年制はないので、強制するものではない。六十、七十の老幕臣もいる。特に要職についている者は、殆どが老人であった。

しかし、一般には五十歳で隠居し、長男に家督を譲ることが多かった。これは年をとって身体のあちこちに故障が出れば、勤めを休んだり、上司同輩に迷惑をかけたり、将軍家のお役に立たなかったりするという考えから、一種の慣行となったのである。

西尾内匠も五十歳になっていて、足腰の痛みに悩まされることが多かった。来年には隠居を願い出て、許されれば長男の右近に家督を譲ろうというのが、最近の西尾内匠の気持だったのだ。

西尾家の屋敷は、外桜田にあった。桜田御門の近くには、大名の上屋敷が密集している。それよりやや溜池寄り、裏霞ケ関に西尾家の屋敷はあった。この日の朝、長十郎は屋敷を密かに抜け出している。

密かにと言うのは、出かけるとも、どこへ行くとも屋敷の者に告げていないからである。供の者として、女中のお市を連れて行った。長十郎は女中ひとりを連れて、どこへ向ったのか。

推察はつく。

長十郎とお市は、麻布本村町の妙泉寺境内で殺された。麻布本村町に近い光林寺の裏手に、西尾百軒斎という者の隠居所がある。西尾百軒斎は、長十郎の祖父西尾錦太夫の弟であった。つまり百軒斎は、長十郎の大叔父に当るわけである。祖父の西尾錦太夫はすでに故人だが、長十郎は常日頃から大叔父の百軒斎を慕っていた。隠居した老人の寂しさもあってか、百軒斎のほうも長十郎を自分の孫のように可愛がっていたという。

それで長十郎の目的地は、大叔父の隠居所だったと断定できるのである。ほかに麻布近辺には知り合いがないし、百軒斎の隠居所へ向う途中、通り抜けようとした妙泉寺境内で殺されたと断定してよかった。

長十郎は背中と胸を刺されて、死んでいた。不意に背後から襲われて背中を一突きにされ、向き直ったところを胸に致命傷を受けて死亡したものと思われる。長十郎は「文」には勝れていたが、「武」のほうが苦手だったようである。

長十郎はなぜ、女中を供に連れて行ったりしたのか。女中を供として連れ歩くことは、常識的に考えられなかった。単身出向くか、許しをもらえれば若党か中間を従えて行く。この場合、長十郎は密かに屋敷を抜け出しているので、父なり兄なりの許可を得て、若党か中間を供に連れて行けなかったというのはわかる。

その点は、部屋住みの身の不自由さである。しかし、女中のお市を供として連れ出すというのは、更に難かしく非常識なことであった。旗本でも西尾家あたりになると、屋敷内は表と奥、つまり男と女の世界がはっきりと隔てられている。

たとえ若さまだろうと、許可もなく奥に属している女中を連れ出すことはできない。従って、個人的な意志によって長十郎とお市は示し合せた上で、屋敷を抜け出したということになる。

二十三歳で独身、部屋住みの気楽さから、女の奉公人と懇ろになることは別に珍しくも何ともない。部屋住みの二男や三男が、女の奉公人と深い仲になるというケースは、武家屋敷で幾らでもあることだった。

そこで、長十郎とお市はそうした主従関係にあったと、断ずるほかはなかった。肉体的に結ばれていたかどうかはともかく、長十郎とお市が互いに心を寄せあっていたということに間違いはなかった。

但し、将来も含めて長十郎がお市を、正式な妻に迎えることはできなかった。二千八百石の旗本の息子が、町方から女中奉公に上がっている町娘を、正式な妻にすることは原則として困難であった。

殺された娘、お市。

旗本屋敷などへ女中奉公に上がることは、いわば狭き門だったのである。身分の高い旗本の屋敷へは、女中奉公の希望者が殺到する。西尾家なども、そうであった。現代では女中という言葉を誤解して、下女と混同している。

だが、町方から旗本屋敷へ女中奉公に上がるには、それ相応の身分がなければならない。中流以上の商家の娘であって、その上お世話を願うツテというものが必要だった。いわゆる良家の子女が、行儀とか礼儀とかを身につけるために何年間か女中奉公に上がる。

その女中奉公を終えてから、嫁に行くのである。何々さまのお屋敷へ奉公に上がっていたということで、縁談がたくさん持ち込まれる。当人にも勲章として、箔がつくのである。旗本屋敷への女中奉公は、最高の嫁入り道具だったのだ。

お市は、日本橋北の本石町二丁目の太物商、駿河屋久兵衛の娘であった。年は十八歳で、十六のときから西尾内匠の屋敷へ奉公に上がっている。一応、奉公は二年ということになっていて、今年いっぱいで暇をもらうはずだったのである。

駿河屋は名の聞えた大店ではないが、上の部に属する商家で、奉公人も大勢使っている。久兵衛には二人の娘がいて、美人姉妹という評判が高かった。姉がお市で、妹はお糸という。お糸は姉と一つ違いの、十七歳であった。

お市は妙泉寺境内で、心の臓を一突きにされて死んでいた。下手人は長十郎を殺してから、お市に襲いかかったのである。お市は逃げずに、むしろ倒れた長十郎のところへ駆け寄ろうとしたらしい。

その証拠に、お市は背中を斬られたり刺されたりしていない。長十郎が襲われるのを見て、すぐに逃げ出すこともできたはずである。しかし、お市は逆に長十郎のほうへ、近づこうとしている。

町娘には、なかなかできないことである。それは長十郎に対する忠義から、やったことではない。女の情と、見るべきだろう。思いを寄せる男の危機に示された女心と、解釈してよかった。

二人を殺した町人、銀次郎。

銀次郎は、麻布本村町の仏具商倉田屋新助の養子である。年は二十五歳、律義な若者であった。倉田屋は大きな商家ではないが、寺の多い地域の仏具商として繁盛していた。養子ではあっても、銀次郎は倉田屋の若旦那だった。

銀次郎の生れも育ちも、悪くはなかった。銀次郎は、町年寄の喜多村彦兵衛の血縁者だっ

たのだ。町年寄というのは、江戸の町人の中での最高権力者である。町年寄は江戸に、三人しかいなかった。

樽屋、奈良屋、喜多村の三家で、世襲制である。いずれも家康に従って三河から江戸に移った由緒ある家柄で、熨斗目の着用、苗字、将軍家への拝謁を許され、一時期は帯刀を認められたこともあった。

身分は町人だが、高級武士の扱いを受けていたのだ。町年寄は月番を決めて町奉行所に出頭し、町触れの一切の指令者となるのである。町役人の段階はこの町年寄を筆頭に、地主、名主、家主の順となる。

家主を一地区の長、名主を町会長、地主を区長と看做せば、町年寄は知事ということになるだろう。そのくらいの家柄と権力を誇っていたのが、町年寄というものだったのである。

その町年寄三家の一つ喜多村家と、銀次郎は血縁関係にあった。そうした銀次郎が二千八百石の旗本の二男と、大店の娘であって屋敷奉公に上がっている女中を殺害したということになったのだから、事態はかなり深刻であった。

銀次郎と長十郎は、知り合いであった。もちろん、友人という意味ではない。銀次郎は西尾百軒斎の隠居所へ、囲碁の相手として出入りしていたのだ。その百軒斎の隠居所で長十郎と知り合い、やはり碁の相手をするようになったのである。

百軒斎の隠居所における囲碁の相手としてだけの知り合いで、それ以外の接触はまったくなかった。ただ、長十郎と銀次郎の仲は、親しい反面、険悪になる場合もあるというものだ

った。

碁敵であって、双方ともに負けず嫌いである。長十郎は銀次郎を卑怯だと罵り、銀次郎は長十郎が潔くないと憤る。何度か喧嘩となって、百軒斎が仲裁にはいっている。半月前には激しく争って、長十郎が碁石を投げつけ銀次郎の額を割るという騒ぎがあった。

たまたま妙泉寺の境内で、長十郎と銀次郎はばったり出合った。半月前の騒ぎ以来、初めて顔を合わせたのである。銀次郎の遺恨はまだ、拭い去られてはいない。そこで再び喧嘩となり、銀次郎は短刀を所持していることを思い出し、隙を見て長十郎に襲いかかった。

銀次郎は当然、その場に居合せたお市もついでに、殺さなければならなかった。以上が銀次郎の、長十郎並びにお市殺害の動機であった。

このような事件だと断定されたのが、麻布妙泉寺の旗本主従殺しの発端だったのである。下手人は町人ということで、とりあえず南町奉行の大岡越前守忠相の調べを受ける結果となった。

だが、ここで大岡忠相は、銀次郎これ下手人にあらずという結論を出した。そのために深刻なる事態は、更に重大性を帯びることとなった。問題は幕府の法の最高決定機関である評定所へ持ち込まれ、その取り扱いをめぐって、大岡忠相は町奉行就任以来、初めての難関に直面したのであった。

2

評定所へ持ち込まれることは、わかりきっていた。今回の事件のように、寺の境内で町人が旗本の息子を殺したという複雑なことになると、関係する奉行が評定所において裁判を行わなければならないのである。

しかし、その関係奉行のうちの町奉行が下手人は無実だと言い出したのだから、事態は一段とややこしくなったのだ。評定所ではまず、その取り扱いについて協議することになった。

評定所における合議の裁判には、次のような種類があった。これは事件の規模と重要性によって、裁判も大がかりなものになるわけである。

三手掛。
寺社奉行、町奉行、勘定奉行の合議。
一座掛。
寺社奉行、町奉行、勘定奉行に目付が加わる。この四人が評定所の正規のメンバーなので、『一座』と呼ばれている。
四手掛。
寺社奉行、町奉行、大目付、目付の合議。
五手掛。

寺社奉行、町奉行、勘定奉行、大目付、目付の合議。

もっとも、大目付と目付には発言権がなく、監察を役目としているのである。裁判官は純粋な意味で、寺社、町、勘定の三奉行ということになる。この享保の時代には、老中や若年寄の臨席も廃止されていた。

もし銀次郎が下手人という前提に立っての裁判であれば、評定所では一座掛による裁きが行われたはずである。だが、裁判官のひとりである町奉行が、銀次郎はシロだと言い出したのであった。

それでは、一座掛の裁判も何も、あったものではない。いったい、どうしたらいいのか。まず、それを協議して、決めなければならない。厄介な上に、重大な事件なのであった。

町年寄という有力者と血縁関係にある町人が、二千八百石の旗本の二男と、日本橋の大店の娘を殺害したのである。吹けば飛ぶような事件と違って、江戸市中に一大センセイションを巻き起している。

江戸中の町人と、全旗本が関心を向けているのだ。早々に裁判を結審とし、下手人を処刑することで、過去の事件にしてしまいたいというのが幕閣の気持であった。それに大岡忠相がひとりで、逆らったようなものであった。

十月二十日、竜の口の評定所の奥の広間で、事件の取り扱いを決める会議が開かれた。この会議には異例のこととして、老中と若年寄が加わった。会議は午前八時から開かれたが、まず最初に老中が午後の三時までに結論を出すようにと発言した。協議を今日のうちに終えて、直ちに裁判に移るようにという勧告であった。

この会議の出席者は、次の通りであった。

○老中　水野和泉守忠之（大名）
　三河国岡崎三万五千石（後に四万五千石）
○若年寄　石川近江守総茂（大名）
　常陸国下館二万石
○寺社奉行　牧野因幡守英成（大名）
　丹後国田辺三万五千石
○大目付　松平石見守乗宗（旗本）
　六千石取り、職禄三千石。
○町奉行　大岡越前守忠相（旗本）
　千九百二十石取り、職禄三千石。
○勘定奉行　伊勢伊勢守貞敕（旗本）
　三千二百石取り、職禄三千石。
○目付　木下長左衛門教清（旗本）
　二千石取り、職禄千石。

身分はともかく、役料を抜きにした禄高では大岡忠相がいちばん下であった。しかも、その大岡忠相がひとり異論を唱えたために、こうした面倒な会議を開かなければならなくなったのだ。

老中以下列席の面々の忠相を見る目は、ひどく冷やかであった。寺社奉行、大目付、勘定奉行、目付には、老中と若年寄の気持が読めている。早く銀次郎を下手人として、処刑してしまいたいのである。

特に若年寄は、裁判の結審を急いでいる。石川近江守総茂の妹の娘が今年、西尾内匠の長男右近と祝言を挙げている。情として石川近江守は、西尾家を贔屓してしまう。贔屓すれば、銀次郎の処刑を急ぎたくなる。

そうした老中と若年寄の心底がわかっているのだから、誰もが逆らいたくないのである。老中や若年寄に逆らえば、損をするだけで得はない。それで列席の全員が、老中や若年寄側に立ち、大岡越前守忠相を批判的な目で見ている。

大岡忠相は、あらゆる意味で孤立していた。もしこの会議が、ひとりの支持者も得られないままに終了したときには、大岡忠相の立場はなくなる。そのままには、すまされない。町奉行の役を辞職すると、進退伺いは出さなければならない。

それに加えて、忠相にはもう一つの不安がある。それは、例の発作であった。七転八倒しながら絶叫するという苦悶を続けて錯乱状態に陥ったあと、一時間ほどは気を失っている。

そんな奇妙な発作は、五日に一度、確実に起きるようになっていた。だが、この前の発作から、もう五日間が何事もなくすぎている。今日あたりは間違いなく、発作が始まるはずであった。

それはこの世で当人と妻の千代、それに水木新八郎しか知らない秘密なのである。もし今日の会議の席上で、その発作が起きたらどういうことになるだろうか。老中をはじめ第一線の幕府の頭脳が、顔色を失って仰天するに違いない。

一時的であるにせよ乱心する重病人に、町奉行の職務を任せてはおけない。誰もが、そう感想をのべるだろう。将軍吉宗も、病気とあらばやむを得ぬと、大岡忠相の罷免を認めるはずである。忠相は、隠居を命じられる。

そのように重大な不安を、忠相は抱えているのだった。腹の中に爆弾を入れて、猛火の中を潜り抜けるという難関を、突破するようなものであった。忠相は早くも、額に脂汗を浮べていた。

「越前、銀次郎なる者が無実とのこと、その仔細をのべてみよ」

老中・水野和泉守忠之が、厳しい表情で言った。

「申し上げます」

大岡忠相は、全員に会釈を送った。

「倉田屋新助の養子銀次郎を厳しく詮議致しましたところ、次の三つの事柄が容易ならぬこととして浮び上がって参りました。その一は、銀次郎が身に覚えのなきこととして、白状には及びませぬ」

忠相は、正面の若年寄・石川近江守総茂を見据えた。西尾家と姻戚関係にあり、この会議では反大岡忠相に徹するつもりの石川近江守と、見て取ったからである。

「素直に白状致さぬのが、科人というものではないか」

石川近江守は、静かに首を振った。

「しかし、罰を恐れて白状致さぬ者と、身に覚えがなきために白状に至らぬ者との区別は、多くの科人と接するうちにおのずとつくようになります」

忠相は、表情を変えずに言った。

「銀次郎なる者、身に覚えなきは真実と見るのじゃな」

睨みつけるように石川近江守は、忠相の顔に視線を突き刺した。

「いかにも。銀次郎の涙する面体に偽りなしと、この越前、しかと見届けました」

「その二を、聞かされよ」

「その二は、西尾長十郎並びに市を殺害に及んだ白鞘の短刀にござりまする。この白鞘の短刀を銀次郎のものとする証しが、まったくござりませぬ」

「ほう」

「銀次郎に日頃から短刀を持ち歩く習性なきことは、銀次郎を知る多くの者たちの申し立てによって明らかでござります」

「それだけか」

「銀次郎と日々の暮しをともに致しておる多くの者たちが、そのような短刀を見たことがないと一様に申し立てております」

「銀次郎なる者を、庇い立て致しておるのやもしれぬ」

「更に、この短刀は小石川の武具商神崎屋で買われたものと、判明致しました。神崎屋のあるじの申し立てによりますと、この短刀は半年ほど前に売られた品物ということでござります」

「買った者は……？」

「銀次郎では、ござりませぬ」

「断言できるのか」

「神崎屋のあるじは、浪人者に売った品物だと申しております」

「半年前のことにしては、よう記憶しておったな」

「さて、その三は……。西尾長十郎並びに市が殺害された時刻に、銀次郎は麻布の妙泉寺境内にはいなかったということにござります」

「下手人が、その場におらぬとは奇妙な話じゃな」

「その時刻に銀次郎は、芝増上寺の近くにいたと申し立てております」

「その申し立ても、また相違なきことか」

「銀次郎は朝より増上寺参詣に出向き、午の刻には片門前町の茶屋で弁当をつかっておったとのことでござります」

「茶屋の者が、それを事実と認めたのか」

「いいえ、増上寺参詣の人々で賑わう片門前町の茶屋、しかも午の刻とあっては戦場のような騒ぎ、とても客ひとりびとりの顔を覚えてはおられませぬと、茶屋の者は申しております」

「もっともなことよ」

「然しながら、銀次郎のほうで見かけたものがございます」

「何を見かけたのじゃ」

「町方の娘にございます。ただの娘でないことは言うに及びませぬ。その町方の娘は、狆を抱いていたと……」

「狆……？」

「はい」

「犬の狆か」

「いかにも」

「それで、その町方の娘が、生き証人になったのか」

「目下のところ、その狆を抱いた町方の娘というのを、探索中にございます」

ここで大岡忠相は、思わず目を閉じていた。しまった、という気持であった。頭痛を覚えたのである。頭痛は、発作の前兆だった。頭痛は、次第に激しくなる。やがて頭に無数の針を打ち込まれた上に、大槌で叩かれるようになる。その激痛に耐えているうちに、呼吸困難になるのであった。

《急げ、水木新八郎！》

《早くせい、町人侍！》

と、大岡忠相は、胸のうちで叫んでいた。町人侍こと水木新八郎がいま、狆を抱いた町方の娘を捜し出そうと奔走しているのである。午後三時までに、間に合うだろうか。その前に発作が、本物になりはしないか。と、大岡忠相の不安は、膨脹する一方だった。

西尾長十郎とお市が殺されたのは午の刻、正午と推定していいようである。銀次郎が妙泉寺の境内を通り抜けようとしたのは、午後一時半頃であった。銀次郎は小便がしたくなって、境内の隅へ向った。

そして銀杏の木の向うへ回り込んだところで、長十郎とお市の死骸に気づいたのである。死骸の一方が長十郎だとわかって、銀次郎は愕然となった。そこで銀次郎はしばらく、ぼんやりと考え込んでいた。

そのうちにわれに還り、とにかくこんなところに死骸を置いておくのは気の毒だと、碁敵としての情から思いついた。銀次郎は長十郎の死骸を、銀杏の木の蔭から引っ張り出した。

そこで銀次郎は、短刀が落ちているのに気がついた。銀次郎は短刀を拾い上げて、しみじみと眺めやった。そのとき、左官職人が通りかかり、自身番へ突っ走ったというわけである。それが、午後二時であった。

以上が銀次郎の申し立てだが、大岡忠相はそれを信憑性ありと認めたのだ。二つの死骸の血の凝固、血と肌の色、四肢の突っ張り工合から推して、殺害されたのは午の刻ぐらいだと、

浅香伝兵衛からの報告があった。

そうだとすると銀次郎は、二人を殺してから二時間も死骸のそばにいた、という計算になる。馬鹿げている。その上、凶器の短刀は浪人者に売った、という武具商の証言もあった。泣きながら訴える銀次郎の顔にも嘘はないと、大岡忠相は見て取った。

そうなると鍵は、銀次郎のアリバイであった。銀次郎はその日、芝の増上寺へ参詣に出向いた。正午には片門前町の茶屋で弁当を食べ終り、帰途につこうとしていたと銀次郎は主張している。

茶屋の人間は銀次郎にも誰にも気づかないほどの忙しさだったというので、アリバイ立証の役には立たなかった。残されたのは、銀次郎が茶屋を出たところですれ違ったという娘、狆を抱いた町方の娘だけであった。

その娘を捜し出して、当日の正午頃、片門前町を歩いていたという言葉を得られれば、銀次郎のアリバイは証明される。いまや銀次郎の無実を晴らせる生き証人は、その狆を抱いた娘のほかにいないのである。

狆は聖武天皇の天平四年に、すでに新羅から日本へはいって来ている。この江戸時代には、少しも珍しい犬ではなくなっていた。狆は誰もが知っているし、見たことがない者でもどんな犬であるかは承知していた。

だが、狆を飼っている人間となると、極く限られてしまう。愛玩用の座敷犬など、一般には縁がなかった。大名、旗本など裕福な武家の婦人たちか、商家など金持ち階級の町人の女

子が専ら狆を飼っていた。

従って、赤い涎掛けのようなものがついた丸打ちのヒモを首に巻いている狆を抱く娘となると、かなりはっきりした特徴と言えた。しかし、それにしても江戸中を歩き回って、捜し出すというのは容易なことではない。

この五日間、水木新八郎は浅香伝兵衛と連れ立って、江戸市中を歩き続けていた。だが、それらしき狆と娘を捜し出すことはできずに、ついに最後の日を迎えてしまっていたのである。

3

午前十一時——。

水木新八郎は竜閑橋の上に佇んで、ぼんやりと晩秋の青空を見上げていた。月代を伸ばしているので、どう見ても浪人である。しかし、尾羽打ち枯らした素浪人とは違って、小綺麗で粋な姿をしている。

紫紺の羽二重は三ツ紋付きだし、着流しに雪駄ばきであった。大小を腰にして、編笠を手に持っている。ほかに長さが二十センチもある毛抜きを、鉄扇のように帯に差し込んでいた。

大男に属する長身で、色が浅黒く、彫りの深い顔立であった。だが、武士らしい気品と厳しさに、欠けているようだった。どことなく顔に愛嬌があって、のんびりとした印象を与え

るせいだろう。

しかし、内心は必死の、水木新八郎だったのである。二時間ほど前に評定所からの連絡で、会議は午後三時までに終了すると知らされていた。大岡忠相には、重大な危機が迫っている。それまでに狆を抱いた娘を捜し出し、同時に事件解決の手がかりを摑まなければならない。大岡忠相への借りを返すために是非とも——と、水木新八郎は思うのである。だが、残り時間はあと、四時間しかない。

浅香伝兵衛は、鎌倉町の自身番にいる。そこで伝兵衛は、十手持ちの与吉と落ち合うことになっていたのだ。与吉は、裏霞ケ関の西尾家付近の武家屋敷の下男や下女に当って、情報を集めていたのである。

浅香伝兵衛が何か吉報を持って来るだろうと、水木新八郎は楽観していた。この際、焦っても仕方がない。それにもう一つ、水木新八郎は突破口を見出していたのだ。一時間ほど前から、三人の浪人者が新八郎と伝兵衛の尾行を続けているのである。

《手がかりに、なりそうだぜ》

水木新八郎は橋の上から、さりげなく右手の鎌倉河岸を眺めやった。竜閑橋から左手を見やると、常盤橋御門、呉服橋御門、一石橋などがある。右のほうには、鎌倉河岸が続いている。

江戸の町人地の中心部で、大変な人出が見られる。橋も道も、人で埋まっていた。それも忙しく往来しているのであって、その動きが目まぐるしいほどだった。だが、中にはじっと、

動かずにいる人間の姿もあった。

鎌倉河岸の岸辺に、三人の浪人が突っ立っている。それこそ尾羽打ち枯らし、食い詰めた素浪人たちである。新八郎たちを、芝神明のあたりから尾行して来た連中だった。新八郎たちの動きを、見張っているのだ。

それは新八郎たちの行動が、気になっているということである。なぜ、気になるのか。西尾長十郎とお市を殺した下手人こそ、新八郎の行動が最も気になるはずだった。凶器の短刀を神崎屋で買ったのも、浪人者であったという。

もしや——という気にもなるし、新八郎にとっては三人の浪人の存在が貴重に思えるのだった。その三人の浪人が、不意に歩き出した。鎌倉町の自身番から、浅香伝兵衛が出て来たのに気づいたのである。

浅香伝兵衛は竜閑橋へ、小走りに向って来た。小者がひとり、遅れてついて来る。髪を小銀杏に結い、三ツ紋付きの黒羽織、竜紋の裏付、着流しで博多帯に雪駄ばき、大小のほかに朱房の十手を腰の後ろ側に差すという回り方同心のスタイルであった。

「水木さん、吉報だぜ」

浅香伝兵衛が言った。回り方同心はおよそ武士らしくなく、遊び人みたいに伝法な口のきき方をするのが特徴であった。その点になると、水木新八郎のほうも負けてはいなかった。新八郎が町人侍と、呼ばれている所以でもある。

「やっぱり、そうでござんすかい」

新八郎は伝兵衛と肩を並べて、一石橋の方向へ歩き出した。
「やっぱり……？」
「吉報を摑んで来るんじゃあねえかと、そんな気がしておりやしてね」
「与吉が面白い話を、聞き込んで来てな。何と西尾の屋敷でも、狆を飼っていたという話よ」
「確かに、面白いですねえ」
「ところが、その狆がいなくなっちまったそうでな」
「ほう」
「西尾の屋敷の下女から聞き出した話によると、長十郎とお市が殺されるその前日に狆が消えちまったってのさ」
「浅香さん、その狆を飼っていたのは西尾の屋敷の、いってえ誰だったんでござんすかい」
「飼っていたのは奥方だが、可愛がっていたのはお市で、狆のほうもお市に飼われているつもりみてえだったそうだぜ」
「ますます、面白いじゃあねえですかい」
「水木さんは、どう読むね」
「狆が屋敷から消えたってのはつまり、お市が狆を誰かにくれてやったってことでしょうよ」
「しかし、仮にも奥方の飼い犬を、屋敷の外の者に勝手にくれてやるなんて……」

「お市には、妹がおりやしたね」
「お糸だ」
「そのお糸は西尾の屋敷へ、出入りしていなかったんですかい」
「そうだ、水木さん。お市が殺される前日、妹のお糸が姉に会いに西尾の屋敷へ来ていたって話だったぜ」
「お糸が屋敷へ来たのも、狆が消えたのも、同じくお市が殺される前日……」
「だとすると、お市は妹のお糸に狆をくれてやったってことかい」
「間違いありやせんよ」
「駿河屋に、その狆がいるはずだな」
「しかも、新しい飼い主は、お糸ってことになりやすよ。お糸がその狆を抱いていりゃあ、狆を抱いた町方の娘ってことになるじゃあござんせんか」
二人は、立ちどまった。真直ぐ行って一石橋の手前を左へ曲れば日本橋、常盤橋の前を左へ曲れば本町一丁目、更にその手前を左へ折れれば本石町一、二丁目と続く。駿河屋はつい、目と鼻の先にあるのだった。
「浅香さん、竜の口の評定所まで、突っ走っておくんなさい」
新八郎が言った。
「このことを、御奉行のお耳に入れるんだな」
浅香伝兵衛は、緊張した面持で頷いた。

「それにもう一つ、三人の痩せ浪人につけられているってことも、御奉行に伝えたほうがようござんすよ」

新八郎は、伝兵衛の耳許で囁いた。

「承知した。町人侍は、駿河屋で待っていてくれ」

伝兵衛は身を翻すと、一石橋の方向へ走り去った。本石町から竜の口、現在の日本橋本石町と丸の内一丁目との間を往復するわけで、大した時間はかからないはずだった。

新八郎は、三人の浪人たちの動きを横目で見た。すれ違った伝兵衛を見送って一瞬、浪人たちは戸惑った様子だった。だが、三人の浪人はすぐ、新八郎のほうへ視線を戻した。あくまで、新八郎を尾行する気でいるらしい。

新八郎は左へ折れて、本石町の通りへはいった。大きな商家ばかりが軒を並べていて、人通りで道は混雑していた。駿河屋は、すぐにわかった。立派な店構えで、太物問屋の店の中は客と奉公人でごった返していた。商売繁盛の大店であった。

新八郎は主人の久兵衛と娘のお糸に会いたいと告げて、南町奉行発行の身分を証明する特別の手札を示した。新八郎は、奥の座敷へ案内された。間もなく娘を連れた久兵衛が来て、まずは平身低頭した。

新八郎は、お糸へ目をやった。なるほど、美人であった。ただ器量よしというのではなく、初々しい色気が感じられる。十七の生娘とは思えないほどの艶っぽさを、雰囲気として持っているのである。

それまで脇にいた狆が、挨拶が終ったとたんにお糸の膝の上にすわった。赤い涎掛けのついた太い丸打ちのヒモを、狆は首に巻いている。その特徴が、銀次郎の言っていたこととぴったり一致する。

間違いないと、新八郎は思った。赤い涎掛けのついた丸打ちのヒモを首に巻いた狆が、江戸に何匹もいるはずはなかった。銀次郎が、増上寺の前の片門前町で見かけた狆を抱いた娘とは、この駿河屋のお糸だったのだ。

ほっと気の緩みを覚えるとともに、新八郎は人間関係の不可解さを感じていた。姉を殺した容疑者の無実を証明できる者が、その妹ということになるのである。しかも、そこで重要な役割を果しているのが、姉から妹へ贈られた狆だったのだ。

「その狆は、姉さんからもらったんだろう」

新八郎は、笑った顔をお糸へ向けた。

「はい」

お糸は、狆の頭を撫でた。

「お市が殺される前日、裏霞ケ関のお屋敷へ行って、その狆を受け取ったんだな」

「はい」

「お市は何と言って、おめえにその狆をくれたんだい」

「お屋敷の奥さまが、よく馴れているお前が飼いなさいとおっしゃって、この狆を姉さんに下さったんだそうです。でも、姉さんは御奉公に上がっている身で、とても狆などに構って

はいられないからと、わたしにくれたんです」
「なるほどねえ」
「その代り、金輪際、逃げられたり誰かに上げてしまったりは、しないようにって……」
「それで、おめえはそうやって、いつも狆を手許に置いておくんだな」
「それだけではありません。可愛くて、手放したくありません」
「出かけるときも、その狆を抱いて行くんだろう」
「はい」
「と、まあここで一つ、確かめてえことがあるんだ」
新八郎は、顔の笑いを消した。いよいよ、核心に触れるのであった。
「どんなことでしょうか」
狆のふさふさした毛の感触を楽しむように、お糸はうっとりとした目つきになっていた。
「お市が、殺された日のことだ。おめえはその狆を抱いて、芝の増上寺の近くまで出かけていたな」
新八郎は言った。
「え……！」
お糸が、顔を上げた。
「午の刻には、片門前町の通りを歩いていたはずだぜ」
新八郎は、眉根を寄せた。お糸の驚きようが、あまりにも激しすぎたからである。

「知りません、存じません」
お糸は、首を振った。
「知らねえだと……？」
「本当です」
「じゃあ、増上寺のあたりには、足を向けていねえってのかい」
「はい」
「お市が殺された日、おめえはずっと家の中にいたってことかい」
「いいえ、出かけることは出かけました。でも、行く先は芝の方角ではありませんでした」
「どこへ、行ったんだ」
「おとっつぁんに頼まれて、両国広小路の伊勢屋さんへ書付けを、届けに行きました」
「何刻に出かけて、何刻に戻ったんだ」
「巳の刻に家を出て、未の刻には帰って来ました」
「人ひとりの命がかかっていることだし、こいつは御奉行さまからのお尋ねなんだぜ。嘘偽りは、許されねえよ」
新八郎は、お糸の顔を凝視した。
「でも、正直に申し上げているんです」
お糸は、泣き出しそうな顔になっていた。目の動きに、落着きがなかった。ここでもし最後までお糸に否定されるようであれば、大岡忠相の立場を含めすべての点で絶体絶命の危機

となるのである。

新八郎は、線香の匂いを嗅いだ。隣室が、仏間になっているらしい。お市の位牌の前に、線香が立ててあるのだろう。

4

午後一時——。

控えの間で横になっていた大岡忠相は、起き上がって薄荷の匂いを嗅いだ。忠相自身が思いついたことで、医師のすすめによるものではない。薄荷の草を鼻に宛がうと、発作の苦悶が楽になるような気がするだけなのだ。実際に効き目があるのかどうかは、わからなかった。

正午から午後一時まで、昼食のために会議は中断された。しかし、忠相は何も食べずに、横になっていたのである。頭痛がとまることはないが、ひどくならずにすんだようだった。

休憩にはいる前に、忠相は駆けつけた浅香伝兵衛から報告を聞いている。西尾内匠の妻が飼っていた狆が、お市の手から妹のお糸に渡っている。三人の素浪人が、新八郎と伝兵衛のあとをつけて来ている。

この二点から、新たに論陣を張ることができると、大岡忠相は思った。休憩にはいる直前に、寺社奉行・牧野因幡守から質問があった。銀次郎が無実だとしたら、下手人は誰かという質問であった。

余程の動機がない限り、旗本の二男と供の女中を白昼、惨殺したりはしない。下手人は殺

した二人の所持品を奪っていないし、辻強盗の犯行ということにもならない。銀次郎の場合のように、動機は意趣返し、つまり怨恨としか考えられない。

牧野因幡守は、そのように主張した。正論である。旗本の息子に殺意を抱くことは、余程の理由がない限りあり得ないのだ。では誰が、どういう理由で長十郎とお市を殺したのか。

推定ではあるが、動機らしいものがある。それはいわば忠相の切り札なのだが、そのことを持ち出すのは危険でもあった。しかし、忠相は返答しなければならないのだし、あえてその線で論陣を張ることにしたのだ。

七人が、広間に集まった。午前中と同じ位置に、それぞれが着座する。老中・水野和泉守が、会議の再開を告げた。再開されても、会議は余すところ二時間であった。どの顔にも、熱っぽさは見られなかった。

「先程のお尋ねに、お答え致します」

大岡忠相は、寺社奉行の顔へ視線を走らせた。

「その前に西尾家の事情について、ご説明致さねばなりますまい」

と、忠相は一枚の紙を広げて、六人の目に順々に晒した。六人が六人、気のない顔でそれを見た。紙には西尾家の系図の写しが、記されていたのである。

「当主の西尾内匠どのには、二人のご子息がおられます。兄が右近、弟が長十郎でござりまず。この兄弟が実は赤の他人だという事実を、ご承知でございましょうか」

忠相は、厳しい口調で言った。六人が揃って、眠気から覚めたような顔になった。ひとり

もそのことについて、知っていなかったのである。

「それは、まことか」

若年寄・石川近江守が、不満そうに口を開いた。姻戚関係にある西尾家のそうした事情を知らなかったことを、石川近江守は恥じているのだろう。

「では、ご説明申し上げます。まず西尾内匠どのは二十七年前に、養子として西尾家へ迎えられました。先代の西尾錦太夫どのが四十になられても、実子に恵まれなかったためにございます」

忠相は頭痛を堪えながら、淀みなく説明を始めた。

西尾錦太夫は三十五歳のとき、子ができないままに妻を病気で亡くした。三十八歳になって、十五ほど年下の後妻をもらった。だが、それでもすぐには、若い妻が懐妊しない。西尾錦太夫は、四十になっていた。

そこでついに実子を諦めて、四十のときに養子を迎えることにした。その養子がまだ二十三歳の、西尾内匠だったのである。内匠は二十五で妻を娶り、翌年には子どもが生れた。男子であり、それが現在の長男右近である。

しかし、皮肉なことにそれから一年後に、錦太夫の若い妻が懐妊したのであった。養子をもらったあとに実子ができるというのは世間によくあることだが、この場合は養子に更に子ができてから実子が誕生したのだった。事は、複雑である。

翌年、錦太夫の妻は、無事に子を生んだ。これまた男子で、錦太夫は大喜びであった。その子どもには、錦太夫が長十郎と名付けた。このとき錦太夫は四十五歳、内匠は二十八歳、右近は三歳であった。

やがて五十になった錦太夫は隠居し、内匠が西尾家の家督を継いだ。内匠は三十三歳、右近は八歳、長十郎は六歳になっていた。形の上では、内匠が西尾家の長男だから、家督の相続権があるわけだった。

実際の嫡男は長十郎だが、形の上では兄と二十七も年の離れた二男ということになる。そして二つ年上の右近が、長十郎の甥になるわけであった。ところが、それより十五年後にまたしても、形の上での変更が行われているのだ。

西尾錦太夫から将軍家へ、長十郎を内匠の養子としたいという届けが出されて、それを認められているのである。つまり錦太夫は、実子を養子の養子にする、というややこしいことをやっているのだ。

その結果、長十郎は内匠の二男となり、右近の弟になったのであった。それから二カ月後に、西尾錦太夫は病の床にあって他界した。内匠が四十八歳、右近が二十三歳、長十郎が二十一歳のときである。

「即ち今日より、二年前のことでござる」

忠相は説明を中断して、六人の相手の反応を窺った。傍観者的立場を取っている勘定奉行の伊勢伊勢守を除いては、どの顔も厳しくなっていた。特に若年寄・石川近江守の、表情は険しかった。忠相の言わんとすることに、全員が気づいたようだった。

「長十郎は養父の内匠どのに心和まず、実父錦太夫の弟の西尾百軒斎を日頃より慕っていたという事実もございます。西尾百軒斎は長十郎の大叔父ということになっておりますが、実は血の繋がる叔父であったわけで、長十郎がその叔父だけを信頼していたのは理の当然と申せましょう」

と、大岡忠相は再び、説明を続けることにした。但し、これから先のことは事実として証明されるものではなく、あくまで忠相の想像であった。

西尾錦太夫はなぜ、実子の長十郎を内匠の養子にしたりしたのだろうか。そこにはまず、実子の長十郎に西尾家を継がせたいという大前提があったものと思われる。待ちに待った挙句に得た実子なのだから、そう願うのは父親の情として当然である。

同時にまた、家の血統を重視する武士の気持は、そういうものであった。長十郎が相続者にならなければ、錦太夫を最後に祖先の血は途絶えて、新しい西尾家の血筋となってしまうのだ。

しかし、錦太夫のあとの家督は、内匠が継ぐことになる。これは動かし難いことだし、どうにも仕方がない。ただ、長十郎をこのまま内匠の弟にしておいたのでは、いつまでたっても相続権は得られない。

それで長十郎を内匠の後継者とすることを、錦太夫は考えたのではないか。その点について、錦太夫と内匠は話し合い、二人の間で密約が交わされた。内匠のあとの西尾家の家督は、長十郎に相続させるという密約である。

内匠の長男の右近は廃嫡として、長十郎が西尾家を継ぐ。そのためには長十郎を内匠の弟としておくより、養子にしたほうが恰好がつく。長男の右近は病身のため廃嫡、二男の長十郎に家督を譲りたいという届け出をして許可をもらえばいいのだ。

こういう密約は、特に珍しいものではない。養子をもらったあとで、実子ができる。養子としては、何となく肩身が狭いものである。だが、離縁されることもなく、家督を継がせてもらった。

養子はそのことに、恩義を感じている。だから、お前のあとは実子に家督を継がせてくれと懇願されると、養子としてもそれを拒むことができない。それで、そこに密約が成り立つわけである。

内匠もそれを承知して、錦太夫に約束した。そのために錦太夫は、長十郎を内匠の養子とする届けを出した。それを許可されて気に緩みが生じたのか、錦太夫は二カ月後にこの世を去った。

それから二年がすぎて、内匠も隠居する年になった。来年あたりは隠居願を、出そうという気になっている。そうした時期に問題になるのは、家督相続の一件である。生前の錦太夫との密約はあるが、同じ親の気持として内匠は実子の右近に家督を譲りたい。

密約を守って長十郎に家督を継がせ、実の子である右近を婿か養子に出すか。それとも情を重んじて右近に家督を相続させて、錦太夫との密約を忘れきるか。いずれにしても、内匠にとって長十郎は邪魔な存在だったのである。

そんなときに何かが起って、それが長十郎とお市の殺害に結びついたのではないか――。

「越前どの、そこまで申されてよいものだろうか」

最初に、目付の木下長左衛門が、咎める口調で言った。

「まさに、暴論でござる」

大目付の松平石見守は、表情を硬ばらせていた。

「越前どの、評定の席における単なる推測とは申せ、口にしてよいことと悪いことがあろう」

寺社奉行の牧野因幡守が憐れむような目で忠相を見た。

「これ越前、西尾内匠は仮にも御側衆を相勤むる二千八百石の旗本、それを養子殺しの下手人に見立ておき、ただの推測なりで無事にすむと思うておるのか」

老中・水野和泉守が、厳しい顔つきで言った。

「言語道断、まことに許し難き心根じゃ。自説を通さんがために想像を逞しゅうして、天下の旗本を人殺しの大罪人にしてしもうた。それが、町人たちの罪を見分ける町奉行のやり方か！」

若年寄の石川近江守が顔色を変え、怒声を発した。かなり、興奮しているようだった。中立を守っている勘定奉行の伊勢伊勢守までが、まずいというように首を振っている。総攻撃を受けて、忠相は一段と孤立していた。

だが、忠相はあえて、言葉を続けることにした。すでに未の刻、午後二時になっていた。

余すところは一時間、忠相の頭は割れるように痛くなり始めている。忠相は、下腹に力をこめた。

「長十郎はただひとりの味方お市を連れ、密かに屋敷を抜け出し、信頼のおける百軒斎の隠居所へ向った。これは何か重大なことを叔父の耳に入れて、相談するのが目的だったと申せましょう」

忠相はそう言って、顔の脂汗を拭った。

「それも、ただの推測にすぎぬ」

石川近江守が、扇子を握りしめた。

「何故に、長十郎はわが屋敷を、密かに抜け出したのでございましょうか」

「あるいは市なる女中を連れ出し、出合茶屋で淫欲に耽るつもりだったのかもしれぬ」

「お待ち下され。麻布の妙泉寺の付近には、出合茶屋の類いなど一軒もござりませぬ。長十郎とお市が目ざしたのは、西尾百軒斎の隠居所としか推察しようがないのでございます。ところが、これまで百軒斎の隠居所へ出向くときの長十郎は、必ず屋敷の者にその旨を伝えております。また、お市を屋敷から連れ出したのは、今回が初めてのことでございます」

「だから、何だと申したいのじゃ」

「西尾どのの屋敷の奉公人のひとりが、このように申したそうにござります。殺害される二日前のこと、お市は殿さまのお言いつけで古い書付けの類いを燃しておったと……」

「それが、どうしたのじゃ」

「お市はその多くの書付けを燃やしているうちに、あるものを見つけ出した。そのようにも、考えられます」

「あるものとは……？」

「古い書付けの中にまぎっていた一枚、それが二年前に錦太夫どのと内匠どのとの間に交わされた密約の証文だとしたら……」

「まだ、申すのか」

「お市はそれを長十郎に見せ、二日後に両名は密かに屋敷を抜け出し、西尾百軒斎の許へ走った」

「黙れ、越前！」

「しかし、内匠どのもすでにそのことに気づいており、もはやこれまでと長十郎並びにお市の両名を追い、殺害すべく、ならず者に金子を与えて……」

「切腹の覚悟あって、申しておろうな！」

石川近江守は、扇子で激しく畳を叩いた。

「いかにも……」

忠相は、瞑目した。頭痛が、ひどくなる一方だった。もう、時間がない。いずれにしても、勝ち目はない。時間切れか、それとも発作かと、大岡忠相は胸のうちで呟いていた。

5

十二時から、二時まで——。

お糸の嘘は、簡単にバレた。新八郎は駿河屋の奉公人を集めて、現在の危機について説明して聞かせたのである。効果はあった。すぐに丁稚のひとりが、事件当日の一つの真相を語ったのだ。

その丁稚はお糸に頼まれて、両国広小路の伊勢屋へ届け物をしたという。それにお糸から、自分が伊勢屋へ行ったことにしておいてくれと頼まれたそうである。お糸は伊勢屋へ行ったはずの時間を、ほかのことに利用したのであった。

「お糸はいってえ、どこへ行ったんだろうな」

新八郎は、奉公人たちの顔を見渡した。

「多分、お嬢さまは芝の片門前町三丁目へ、いらしたんでございましょう」

いちばん年長の手代が、逡巡しながら答えた。

「片門前町三丁目に、何かあるのかい」

「惣助という植木屋がございます。その植惣が、駿河屋に出入りの植木屋でございました。ところが、その惣助さんの伜の多吉さんにお嬢さまが、思いを寄せるようになって……」

「久兵衛は慌てて、お糸の思いを断ち切ろうとして、多吉に会うことを禁じたってわけだな」

「はい。旦那さまは植惣のお出入りも、差し止められたのでございます」

「だが、それじゃあかえって、お糸の胸のうちを熱くさせるだけだ。我慢がならなくなった

お糸は、自分のほうから多吉に会いに行った」
「はい。でも先月、旦那さまがそのことにお気づきになり、そりゃあもう折檻するようにお嬢さまをひどくお叱りになりました」
「よく、わかったぜ」
新八郎は、その手代の肩を叩いた。
お糸が久兵衛の前で知らぬ存ぜぬを通したのも、お糸に妙な色気があるのも、その理由がはっきりしたのだった。新八郎は、駿河屋を出た。そこへ小者を連れた浅香伝兵衛が、息を弾ませ汗を散らして駆けつけて来た。
新八郎と伝兵衛は、芝の片門前町三丁目へ向った。その日、お糸は午前十時に出かけて、午後二時に帰って来たという。本石町と芝片門前町の間を往復し、少しの時間を多吉とともに過す。娘の足ということも考えて、四時間は妥当なところだった。
片門前町三丁目の『植惣』は、十人からの職人を抱えている植木屋であった。多吉は庭石を荷車に積み込む作業の、指揮をとっていた。堅気の職人が、町奉行所の回り方同心に嘘をつくはずはなかった。
「駿河屋さんのお嬢さんなら、確かにその日、お見えになりやしたよ」
浅香伝兵衛の質問に、多吉はあっさりとそう答えた。
「半刻ぐらいは、話し込んだのかい」
伝兵衛が訊いた。

「へい。お嬢さんはあっしに、狆を見せに来たみてえでしたね」
「無邪気なもんだな」
「まだ、ネンネでござんすからね」
「それで、お糸が帰って行ったのは、何刻だったんだ」
「午の刻限でしたね」
「手間をとらしたな」
伝兵衛は、多吉に背を向けた。
新八郎と伝兵衛は、直ちに本石町の駿河屋へ引き返すことにした。駿河屋から尾行を続けて来た三人の浪人が、同じ道を逆戻りでなおもつけてくる。まったく、ご苦労なことであった。
「間違いないな。お糸が狆を抱いて片門前町三丁目をあとにしたのが午の刻、銀次郎が片門前町一丁目で狆を抱いた娘を見かけたのが午の刻をちょっとすぎた頃合だった。ぴったり、合っている」
伝兵衛が言った。
「これで生き証人は、見つけやしたがね。あとは、間に合うかどうかでござんしょう。急ごうじゃあねえですかい」
新八郎は、足を早めた。
本石町の駿河屋についたのが未の刻、午後二時であった。何とか、間に合いそうである。

伝兵衛がお糸に、同行を命じた。もちろん、父親の久兵衛も一緒だった。小者を連れた伝兵衛、お糸、久兵衛、それに新八郎は竜の口の評定所へ向った。

呉服橋御門から、内桜田へはいることになる。内桜田の大名小路で、そこには幕府高官の地位にある大名の上屋敷のほかには何もなかった。町方の者が、自由に出入りできるところではない。

だが、いまは評定所から、町奉行配下の者とその同行者に限り通すようにと、呉服橋御門へ特別指令が出ている。一石橋を渡ると、あたりが広くなる。右手に、呉服橋御門がある。濠に沿って樹木が多くなり、呉服町の町家が遠ざかる。濠の対岸も、森になっている。そこにさしかかったとき、三人の浪人が駆け寄って来た。無言のまま、抜刀した。殺気が、感じられた。

「今度は長十郎とお市殺しの生き証人が、わざわざ名乗り出て来たぜ」

新八郎は微かに笑って、大刀を抜き放った。伝兵衛が、お糸と久兵衛を庇いながら、呉服橋御門のほうへ退避した。三人の浪人は、新八郎を三方から囲んだ。その構えを見極めた上で、新八郎はいちばん気の弱そうな浪人をひとり選んだ。

「この心形刀流に、勝てるかねえ」

新八郎は、八双の構えをとった。

「むっ！」

唸り声を上げて斬りつけて来た浪人者の刀を弾き返した次の瞬間、新八郎は一メートルほど跳び上がっていた。新八郎の大刀がまず、右側の浪人の顔面を真二つに叩き割っていた。新八郎の足が地面につく前に、左側の浪人の首が逆さまになっていた。皮一枚を残して切断された首が、逆さまになってその浪人の肩の上に載っていたのである。霧雨のような鮮血を撒きながら、二人の浪人は地上に倒れ込んだ。

残ったひとりは、最も気が小さい男として選んだ浪人だった。その浪人は蒼白な顔で、凝然と立ちすくんでいた。新八郎は刀の峰で、浪人の右腕を叩いた。浪人は、刀を取り落した。

「さあ、一緒に来ねえ」

刀を鞘に納めたあと、新八郎は浪人の背中を押しやった。放心したような顔で、浪人は素直に歩き出した。

評定所の白洲の砂利場に、お糸、久兵衛、浪人がすわった。呼び出された大岡忠相は板縁までおりて、その三人を見やりながら新八郎と伝兵衛の報告を聞いた。忠相の頭痛はもう我慢できないほどであり、時間は三時になろうとしていた。

「御奉行、ちょいとばかり気になることがございましてね」

最後に、新八郎がそう付け加えた。

「申してみよ」

忠相は目を閉じて、音を立てるような頭痛を堪えた。

「お市がお糸に狆を渡すとき、金輪際この犬を人にくれてやったり、逃がしてしまったりするなって、堅く言い付けているんでございますよ」

「気になるか」
「感じとして、念入りにすぎるような気が致しやす」
「町人侍の考えは、どうなのだ」
「あるいはこの狆こそ、本物の生き証人じゃあねえかって思いやしてね」
「相わかったぞ、町人侍。その狆を、こちらへ……」
忠相は、両手を差し出した。新八郎はお糸から狆を受け取り、忠相に手渡した。忠相は狆を抱いて、奥の広間へ急いだ。広間で雑談を交わしていた六人が、忠相の腕の中の狆を見て唖然となった。
「ただいま、二名の生き証人が砂利場に到着、控えおりまする」
忠相は着座するとすぐ、老中の水野和泉守にそう告げた。
「二名の生き証人とは……？」
若年寄の石川近江守が、忠相を見据えた。
「ひとりは、本石町の太物問屋駿河屋久兵衛の娘、また殺害されしお市の妹でもあるお糸にござります。この者は、銀次郎の無実を証す生き証人……」
「殺害された者の妹が、銀次郎を庇ってのこととは考えられぬな」
「いまひとりは西尾内匠並びに右近より、長十郎並びにお市を殺害するよう依頼され、百両を受け取った三人の浪人のうちの一人にございます」
「まことか！」

「短刀を用いて殺害せしは、長十郎とお市を相対死と見せかけるためと、申し立てております」
「右近までが……！　愚か者め！」
「更に、ここにおります狆もまた、生き証人と申せましょう」
「越前、悪戯がすぎようぞ」
「西尾錦太夫どのと内匠との密約の証文を見つけたお市は、まずそれを隠す場所に苦心したのでござりましょう。その挙句に、お市が思案はこの狆に証文を委ね、更にわが妹に狆を預けることに至ったのでございます」
忠相は狆の首から、丸打ちのヒモをはずした。
「ご免……」
一礼して脇差しを抜き、忠相は丸打ちのヒモの縫い目を裂いた。丸打ちのヒモの中には、綿が詰めてある。その綿の中から忠相は、細い棒のように丸めた紙を取り出した。忠相はその紙を広げて、老中の前に差し出した。
「いかにも、越前が推察の通りじゃ」
水野和泉守が、頷きながら言った。
「西尾錦太夫と内匠が血判と、享保二年八月吉日の日付がある。内匠は右近を廃嫡し、長十郎に家督を譲る旨、認めてあるが……。本日の評定を、これにて終る」
水野和泉守の声が消えたあと、口を開く者はいなかった。重苦しい沈黙が、しばらくは続

いていた。

大岡忠相は行列を急がせて数寄屋橋御門内の役宅へ戻り、裏居間にはいってから倒れた。裏居間にいるのは、千代と新八郎だけだった。

「心おきなく、苦しむぞ」

忠相はそう言ってから、気を失ったという。

病める人質

1

南町奉行大岡越前守忠相が、煙の如くに蒸発したのは、享保四年の十二月十八日のことであった。

時刻は申の刻、午後四時である。

この日、大岡忠相はいつものように午前十時に登城し、午後二時には退出した。そのまま、数寄屋橋御門内にある南町奉行所へ引き揚げて来る。それから公事訴訟、請願、裁判などに時間を割く。

月番の町奉行の多忙な日課であり、その行動にはまったく狂いがない。狂わせたくても、分刻みのスケジュールがそれを許さないのだ。午後四時前後には、約十五分ほど番所と役宅の境にある裏居間で、一息入れることになる。

ところが、その十五分の間に、大岡忠相は消えたのである。裏居間で休憩するときは、余程のことがない限り忠相ひとりであった。心静かに頭を休めるための休憩時間だから、妻であろうと寄せつけなかったのだ。

それで、大岡忠相がいつどのようにして消えたのか、知る者はまったくいなかった。裏居間から、廊下へ出たのかもしれない。しかし、もしそうであるならば、誰かの目に触れたはずであった。

町奉行がひとりで、ひょこひょこ歩き回ることは、特別な場合を除いてあり得なかった。裏居間を出たところで手を叩けば、誰か控えの者が飛んでゆく。やはり、裏居間から廊下へは、出ていないのだ。

そうなると、裏居間から庭へ出たとしか、考えられなかった。裏居間からは、土蔵が幾つも並んでいる役宅の庭へ出ることができる。但し、土蔵や井戸を塀が囲んでいる裏庭だから、表門へ向わない限り外へ出ることはできない。

表門の周辺には仮牢、囚人置場、牢屋同心詰所、公事人溜り、腰掛と称する待合室などがあって、人目の多いところである。しかも、表門は門番所の番人によって、厳しく見張られている。

大岡忠相の姿に、気づかない者はいない。町奉行が山積する公務をほうり出して、単身のこのこと表門から外部へ立ち去るようなことをするはずがない。何者かに拉致されるにせよ、門番所の者たちがそれに気づかずに通すということもあり得ないのだ。

だが、大岡忠相は消えたのである。

裏居間の一隅に、文机が据えてあった。文机の上には、書類や書物、巻紙、硯、筆などが置いてある。その前にある座蒲団にはまだ、忠相がすわっていた跡の窪みが残っている。

手焙りの炭火が赤々と燃えていて、飲みさしの茶と干菓子を盛った器があった。忠相がひょっこり、席に戻って来てもおかしくない雰囲気である。裏居間のどこにも、荒されたり乱れたりの異常は見られなかった。

驚愕した忠相の妻千代、それに用人、与力の筆頭格である支配、同心の最高とされている年寄などが集まって協議した。その結果、与力二十五騎と同心百二十人の全員に異変を知らせて、南町奉行所の番所と役宅を隈なく捜索することにした。

それにはまず、絶対的な条件があった。

与力と同心以外には、他言無用のことという条件である。秘密厳守である。町奉行が消えたなどと外部に洩れたりしたら、大岡忠相の命取りにもなりかねない。重大な責任問題に、発展するからであった。

それで、忠相蒸発の騒ぎを知った者は与力と同心のほかに、妻の千代、用人、水木新八郎だけだったのである。それらの者によって秘密裡に、町奉行所内の大捜査が行われた。しかし、結果は徒労に終り、事態は一層深刻になった。

南町奉行所の建坪、二千六百二十六坪。敷地、およそその倍。

そこには、忠相が存在していないものと、判断が下されたのである。前代未聞の異変ということで、与力の支配、支配並、本勤など首脳部は顔色を失った。忠相が煙のように消えたその奇怪さばかりが、問題ではなかったのだ。

実際的な公務に支障を来たすことが、最大の悩みなのであった。二、三日の登城は病気と

いうことで、何とか誤魔化せる。だが、裁判のほうは、そうはいかない。特に明後日には、重要な裁判が開かれることになっているのである。

「進退極まった」

「明日中には、何とか致さぬとな」

「だが、何とも手の打ちようがない」

「明後日のお裁きは、どのようなことがあっても延期を許されぬ」

「さよう」

「南町奉行所、延いてはお上のご威光にも関わることじゃ」

「宝来屋の一件には何としても、決着をつけねばならぬ」

「御奉行も、御評定所でその点を指摘され、苦しいお立場にあった」

「この上、決着を遅らせたとあっては、御奉行も相応のご覚悟をされねばならぬ」

「まさか、御奉行は宝来屋の一件に恐れをなして、お姿を隠されたのではあるまいな」

「まさか……」

「御奉行が夜逃げ同然に、お姿を隠されるはずはない」

「一時だけ逃れて、それで片付くことではないからな」

「宝来屋に関するお裁きが、延期できぬとあらば、何とするのじゃ」

「われわれの手で、どうにかせよと申されるのか」

「南町奉行所の威信にかけても、何とかせねばなるまい」

「無理な相談だ」

「すでに一年がすぎようとしておるのに、決着が未だにつかぬお裁きではないか」

「御奉行の手にも負えなかったことを、われわれがどう処理できる」

「最後の手段に訴えては、いかがでござろう」

「最後の手段とは……？」

「明日、吟味ということで宝来屋京左衛門を呼び出し、拷問にかけて白状させる」

「京左衛門は、死しても白状すまい」

「では、死ぬまで責め抜いてみては、いかがかな」

「町奉行所で許される拷問は、笞打ち責めだけに限られておる」

「笞打ち責めで死なせるには、五、六日もかかることよ」

「縄付きでもなければ、御牢屋敷へ送られてもおらぬ宝来屋京左衛門を、いきなり拷問にかけるといった無法が、許されるはずもない」

「証拠の品もなく、生き証人もおらぬ。京左衛門を吟味のために呼び出すのさえ、叶わぬことだ」

「御奉行を、お捜しするほかはない」

「明日のうちに、御奉行を見つけ出さねばならぬ」

支配、支配並、本勤の与力たちはそんなふうに話し合い、ただ溜め息をつくばかりであった。

明後日の裁判が、重要なことは事実であった。

宝来屋とは、日本橋南にある薬種問屋だった。江戸でいちばんの薬種問屋と言われ、宝来屋にない薬はないという評判であった。豪商とまではいかないが、名の知れた大店である。

去年、三人の男女が原因不明の悶死を遂げた。毒死と見られたが、はっきりしたことはわからなかった。三人はいずれも、心の臓が弱いと日頃から苦にしていた、という共通点が知れただけであった。

そのうちに、その三人が宝来屋の主人京左衛門と親しかったということが判明し、南町奉行所では内偵を始めた。三人が心の臓の病状を訴え、京左衛門に良薬を求めたのではないか。

京左衛門はもともと研究熱心な男で、商売のほかに新種の薬草や薬剤の発見、あるいはより効果的な調合方法などに打ち込んでいた。そこで京左衛門は自分で作った新薬を、三人の知り合いに飲ませたのではないか。

その結果、三人が三人とも、死亡したのではないか。毒物を配合して京左衛門なりに、画期的な新薬を作ったつもりだったのが、三人の男女の死という事態を招いたのではないか。

大岡忠相は、そのように疑ったのであった。

もちろん、新しい薬を高く売りつけて、金儲けをしようと企んだわけではない。京左衛門は金に不自由していないし、そんな馬鹿なことをするほど頭が悪くない。京左衛門は新しく工夫した薬の効果を試すために、三人の男女に飲ませてみたのではないだろうか。

つまり、人体実験である。

まさか、死ぬとは思っていなかったのだ。薬を飲ませた三人の様子を見守りながら、更に手を加えて改良しようという考えだったのに違いない。毒物を薬に変えての効果というものは、実際に病人に飲ませてみなければわからないのである。

営利のためではない。万人の今後を考えて、良薬を作ろうと研究に打ち込んだ結果だと言える。しかし、三人の男女が悶死したのだから、明らかに罪であった。毒と承知の上で、人体実験を試みたのだ。

この場合は、危険罪に相当する。毒薬を売った者は、引回しの上獄門という重罰に決っている。大岡忠相は、宝来屋京左衛門を罪に問うことにした。だが、すべては忠相の想像と推理であり、証拠を見つけることは困難であった。

京左衛門に、縄を打つことはできなかった。そこで、忠相は京左衛門を奉行所の白洲へ呼び出して、直接の尋問を行うことにした。そうしながら一方で、証拠なり証人なりを見つけ出そうと努めたのである。

ところが、京左衛門という男は、予想以上の傑物だったのだ。頭の回転は早いし、弁舌爽やかである。白洲で忠相を相手に、五分と五分で渡り合う。弁論は忠相を上回り、決して負けることを知らなかった。

その上、忠相の手の内を読み取り、考えを見抜いていた。次回の忠相の尋問を承知しているかのように、ちゃんと反論すべきことを用意して来る。更に、ただひとりの生き証人と思われた宝来屋の番頭忠兵衛が、奉行所へ呼び出しを決めた翌日、夜釣りに出かけて溺死した

のであった。

そのときすでに二月、四月、六月、八月と忠相が月番のときに行われた尋問四回が、何の収穫もなく終了していた。番頭忠兵衛の死が一段と京左衛門への疑いを強めたが、この事故死にもまた他殺だという証拠がなかったのだ。

十月には二回、京左衛門を白洲へ呼んだ。だが、相変らず、進展は見られなかった。もう証拠の品も生き証人も、発見することは不可能であった。いつまでも同じことを続けているわけにはいかないし、すでに忠相が尋問を始めてから一年近くになる。

裁きに、決着をつけなければならない。しかし、いまのままでは京左衛門に対して、罪に問われるような事実なしと、申し渡すほかに決着のつけ方がないのである。それでは三人の男女と忠兵衛の死が、まるで浮き上がってしまう。

同時に大岡忠相と南町奉行所の面目はまる潰れになり、お上の威光にも傷がつく。忠相が一年間も直接、尋問を行いながら何もなかったでは世間が黙っていない。だからと言って、無理やり京左衛門を有罪とすることが、できるはずもないのである。

評定所でもそうした成り行きを重視して、再三この問題を取り上げ、忠相に対して助言と警告を与えていた。十二月の裁きで決着をつけること、お上の威光に傷をつけないこと、世間を納得させることというのが、助言と警告であった。

無理とはわかっていても、忠相としてはその通りにすると答えざるを得ない。忠相は、窮地に立たされた。正直なところ、生き証人がいない限り手も足も出ないのだ。その生き証人

は、もはや存在しない。

十二月二十日に、最後の裁きが行われることになっている。京左衛門を罪に問うや否やを、その場で決定するのである。いや、罪に問うという結論を、出さなければならないのだ。

十二月二十日という絶体絶命の日を明後日に控えて、大岡忠相が謎の蒸発を遂げてしまったのだから、南町奉行所が大混乱に陥るのも無理はなかった。南町奉行所としては、まさに最悪のときを迎えたのである。

しかし、十八日の夜になって、事態は急変した。忠相が姿を消した理由が、はっきりしたのだった。千代が裏居間の文机の上にある妙な書付けに、気がついたのであった。書物の下にあったので、誰もが見逃していたものだったのである。

書付けには、意外なことが記されていた。金釘流の字が、次のように躍っていたのだ。

明朝辰の刻、町人侍こと水木新八郎一人にて、根津権現裏手まで出向くべし。人質とした大岡忠相と、引き換えのためなり。

大岡忠相を、人質としたとある。町奉行を誘拐したというのも、また江戸幕府始まって以来の大椿事であった。

2

十九日の早朝五時に、水木新八郎は南町奉行所を出た。着流しに大小を差し、冬だというのに足袋を用いない雪駄ばきだった。書付けには、水木新八郎ひとりだけで来るようにと指示されていた。

だが、そうはいかないと考えるのが、支配与力たちの頭であった。水木新八郎に同行はさせないが、遠くから選り抜きの与力と同心が十人、見張ることになっていた。目的は忠相の救出と、大胆な誘拐犯を逮捕することである。

根津権現まで、ひとりで歩くのは退屈だった。根津権現の近くまでなら、二人連れ立っていても差し支えはないだろう。水木新八郎は、馴染みの定回り同心浅香伝兵衛を誘って、並んで歩くことにした。

「水木さんをお名ざしと来りゃあ、相手が何者か見当もつくだろうよ」

浅香伝兵衛が定回り同心特有の、伝法な言葉遣いでそう指摘した。

「ああ、わかりきっていらあな」

と、水木新八郎はそれに輪をかけて、武士らしくない言葉遣いであった。町人も、職人といった感じの喋り方である。

「水木さんが南町奉行所に客分として巣食っているってことを、承知しているのは極く限られた連中だからな」

伝兵衛は、白い息を吐いた。雪でも落ちて来そうな、冬の曇り空が広がっている。

「まあね」

新八郎は、鼻の先で笑った。

「それに、町人侍って異名さえも、承知しているんじゃあねえかい」

「そういうわけだ」

「本当に、見当がついているのかい」

「間違いねえ」

「どうして、そうまで言い切れるんだ」

「人質とした御奉行を、あっしと引き換えに返すってんだろう。先方の目当てはつまり、このあっしってわけだ。それだけでもう、敵の見当はついたぜ」

「もう少し、詳しく話してもれえねえかい。水木さん……」

「一口に言って、あっしの命を欲しがっている者の仕業さ」

「奉行所内での噂を耳にしたことがあるんだが、水木さんは敵と狙われているそうじゃあねえかい」

「筋の通らねえ話だが……」

「すると、その連中が水木さんの命欲しさに、御奉行をかどわかしたってことになるのか」

「そうとしか、思えねえ。その連中なら、あっしが南町奉行所にいるってことも承知だし、町人侍という異名ぐらいは訊き出しているはずだ」

「水木さんを敵と狙っているのは、武蔵国忍十二万四千石の阿部豊後守さまの御家中とか、聞いているぜ」
「あっしも昔は二百石取り、阿部家の武芸師範だったのさ。それが些細なことから同役の向山右近と果し合いという騒ぎになって、あっしが勝ち、向山右近は死んだ」
「そいつが、遺恨のタネかい」
「そうだ」
「しかし、果し合いの勝ち負けじゃあ、敵討ちの許可が出ねえはずだ」
「だから、私闘よ」
「武士の意地ってやつかね」
「あっしが町人の出でありながら、向山右近を斃したってことが、どうにも気に入らねえんだ」
「それで、相手は……？」
「名目人は、向山右近の奥方さ」
「後家さんかい」
「綾どのといってな」
「ほかに、何人いる」
「そいつは、わからねえ。阿部家の家中で江戸詰め、向山右近を知っている血の気の多いやつなら、誰でも喜んで綾どのに助勢するだろうよ」

「阿部豊後守さまは、そいつを見逃していていいもんなのかねえ」
「豊後守さまも策に窮して、あっしを南町奉行の大岡越前守忠相に預けたってわけさ」
「だが、その御奉行さまをかどわかしたってことが、将軍家のお耳に達してみろい。豊後守さまは切腹、阿部家はお取り潰しってことになるぜ」
「だから、あっしも何とかしてえと、思っているんだ」
「その綾どのってのは、どこに住まっているんだ」
「知り合いの商人の寮を仮の住まいにしているとは、あっしも御奉行から聞かされたことがある」
「その寮は、どこにある」
「千駄木町だそうだ」
「千駄木町となると……」
「そうよ。千駄木町と根津権現裏は、つい目と鼻の先だぜ。だから、綾どのも一枚嚙んでのことだろうと、見当をつけたんだ」
「なるほどねえ」
腕を組んで、伝兵衛は頷いた。
「それにしても、目立ちすぎるぜ」
新八郎はあたりに目を配って、大きく舌打ちをした。それぞれがバラバラの通行人のつもりでいるのだろうが、尾行の与力や同心の姿はやはり異様に感じられる。見る者が見れば、

何となくおかしいと、すぐに気づくはずである。

「天下の一大事に、みんな血迷っているからな。普段の捕物より、まずいんじゃあねえのかい」

伝兵衛が、他人事みたいな言い方をした。

「こいつは、しくじるかもしれねえ」

新八郎は、口の中で呟いた。

「水木さんひとりじゃあねえと気づけば、根津権現裏には誰も姿を現わさねえ。もちろん、御奉行もだ」

伝兵衛も、眉をひそめていた。

やがて、神田明神下に出る。湯島一丁目から六丁目への通りを行き、聖堂の北をすぎれば間もなく本郷である。すでに町人地は、朝の混雑を迎えていた。本郷一丁目から右へ折れて、春木町の通りを抜ける。

もう一度、右へ曲ると湯島天神である。茅町にぶつかって、不忍池の朝の水面を眺めた。不忍池を迂回して七軒町、宮永町をすぎると、根津門前町であった。左手に、根津権現の鬱蒼とした森が見える。

不忍池の手前で、浅香伝兵衛とも離れていた。新八郎は、ひとりで歩く。まだ根津権現も、参詣人が集まる時刻ではない。門前町にも、人影は疎らであった。門前町をすぎると、とたんに寂しくなる。

大名屋敷が、広範囲を占めている。それに百姓地が多く、田園風景があちこちに展開する。

町という感じがしなかった。あけぼの里と呼ばれているくらいで、見た目にものどかな里のような印象であった。

このあたりには、商人たちの寮が多くある。いまでいう別荘だが、特に豪勢な造りではない。要するに、広い庭と緑の樹木に恵まれていて、そこに一戸建ての家があるというだけのことだった。江戸の町人が寮に凝るようになるのは、もっと後年のことであった。

北に田園風景を見て、南に根津権現の森を背負う。そこが、根津権現の裏である。近くに、人家はない。枯草に被われた野原が広がっていて、四方とも見通しが利く。そこに佇むのは、新八郎ただひとりであった。

冷たい風が、吹き抜ける。枯草が騒ぐ。だが、ほかに人影はない。約束の刻限がすぎても、変化は生じなかった。暗雲が低く垂れ込めて、風が頭上で唸る。荒涼たる冬の視界であり、心までが冷たくなりそうだった。

二時間、待ってみた。

巳の刻、午前十時になった。ついに、新八郎に近づく人影を、見ることはできなかった。誰も、現われない。取引きには失敗するという新八郎の予感通りになり、変化は雪が降り始めたことのほかにはなかった。

やがて、二つの人影が近づいて来た。ひとりは、浅香伝兵衛である。もうひとりも、若い同心であった。奉行所内ではよく見かける顔だが、まだ新八郎と言葉を交わしたことがない同心だった。

「諦めた」

伝兵衛が両手に、息を吐きかけた。

「全員、引き揚げたのか」

新八郎は、雪が舞う空を振り仰いだ。

「おれと、この小此木を除いてはな」

伝兵衛が背後の、若い同心を振り返った。

「小此木勇助です」

若い同心が、新八郎に会釈を送った。二十七、八で、なかなかの美男子である。

「臨時回りだ」

伝兵衛が、そう付け加えた。伝兵衛のような定回り同心は、六人しかいなかった。定回り同心は、犯罪の捜査と犯人逮捕が専門の捜査官である。その定回り同心の手不足を補うのが、臨時回り同心なのであった。

「あっしひとりじゃあねえと、見抜かれたんだぜ」

新八郎が言った。

「そうだろうねえ」

伝兵衛が、顔をしかめた。とたんに、ピーッと笛が鳴った。音はそっくりだが、笛が鳴るはずはなかった。それは、伝兵衛の歯ぎしりの音なのであった。

「浅香さんは、どうする」

「一旦は、引き揚げよう。アテもないのに、歩き回ったって仕方がねえさ」

「それに、この雪だ」

「水木さんは……？」

「あっしには、行くアテがある」

「この近くにある寮かい」

「そんなところだ」

「だったら、ここで袂を分つか」

「そうしよう」

新八郎は息を吹き上げて、伸びた月代に付着している雪を飛ばした。

「おめえさんは、どうするつもりだ」

伝兵衛が、小此木勇助に訊いた。

「御奉行の身を案じて、とてもじっとしてはいられません」

小此木勇助が、緊張した面持で答えた。

「水木さんと、一緒に行きてえのかい」

伝兵衛が、苦笑を浮べた。

「いかがなもんでしょう」

小此木勇助が、新八郎へ目を転じた。

「目の前をうろちょろされたり、余計な口をはさんだり、そうした邪魔はご免を被りたいね」

歩き出しながら、新八郎は背中で言った。
「でしたら、遠くから眺めております」
小此木勇助の生真面目な言葉が、新八郎を追って来た。
新八郎は、北へ向った。百姓地を別にすれば、もうこのあたりは千駄木町であった。綾が仮の住まいに借り受けているのは、武蔵屋という太物問屋の寮だと聞かされていた。このあたりに点在しているそれらしい建物の一つが、綾の仮の住まいのはずである。
雪の中を、娘が小走りに来る。一目で、地元の娘が小女として、どこかの寮に雇われているのだと、察しがついてしまうような女であった。その小女は、ひどく慌てている様子だった。
「武蔵屋の寮ってのを、知らねえかい」
新八郎は、小女に声をかけた。小女は立ちどまると、繰り返し頷きながら、新八郎の腕を摑んで引っ張った。武蔵屋の寮に雇われている小女で、助けを求めているのだと新八郎は気がついた。

3

門からはいったあと、小女が指さす方向へ新八郎は走った。
野趣を生かそうと、人工的には手を加えていない庭を突っ切って、新八郎は正面の縁側を目ざした。庭に面した座敷であり、障子があけ放たれている。新八郎は、声にならない女の

声を耳にした。
新八郎の身体が宙に舞い、雪駄をはいたままの足が廊下を踏んでいた。その新八郎の目に、ひどく複雑で華やかな模様みたいなものが映じた。何であるかを確かめる前に、それは煽情的なものとして感じられた。
女の首筋、胸、二の腕、太腿、脚の白さが躍っていた。乱れた女の着物が、鮮やかで華やかに見えた。女は完全に押し倒され、その上に男がのしかかっている。女はのけぞり、激しく首を振っていた。
「おやめ下さい！」
「よいではござらぬか」
「なりませぬ！」
「まだ若い身体に、独り寝は毒というもの。心とは裏腹じゃ」
「やめて……」
「誰にも、わからぬことではないか」
男も女も、喘ぎながら言葉を口にしている。ともに身体の動きが、かなり激しくなっていた。このままでは間もなく、女が全裸になってしまうだろう。男の袴も、自然におろされてゆくように見える。
「小女が、人を呼びに走りました」
女はなぜか、押し殺した声しか出さない。

「綾どの」
男は女の乳房を求めて、ペコペコ頭を上下させている。
「誰にもわからねえとは、虫がよすぎるんじゃあねえのかい」
新八郎は、いきなり声をかけた。
「ひえっ！」
女が叫んだ。
「うおっ！」
男も奇妙な声を洩らして、ただ闇雲に立ち上がった。
もんどり打つように、女が座敷の隅へ転がって行った。男はのめって、両膝を突いた。袴を半ば脱いでいることを忘れて、走り出そうとしたのであった。三ツ紋付きの羽織に、仙台平の袴をつけている。
新八郎は、武士の顔を見やった。記憶にはない顔だが、阿部豊後守の臣であることには間違いなかった。長年、江戸詰めであれば、新八郎の知らない顔であろうと不思議ではない。
阿部家の家中でなければ、綾の仮住まいを訪れるはずはない。だが、阿部家の臣だろうと新八郎は、その武士を見逃してやろうと決めていた。用のない相手だと、見て取ったからである。
三十七、八の武士であった。向山右近のため、根っからの武士としての意地のために、新八郎を斃そうと考えるには年をとりすぎている。それに向山右近の死を無念に思っている者なら、綾を犯そうなどと考えも及ばないだろう。
武士は袴をはき直すと大小の刀を抱えて、白足袋のまま庭へ飛び降りた。新八郎を蒼白な顔で振り返り、武士は一目散に逃げ去った。玄関まで逃げて、草履をはくことになるのだった。
新八郎は雪駄を庭へ投げて、大刀を抜き取ると、障子に凭れるようにして腰をおろした。その新八郎に背を向けて、綾が身繕いを続けている。敵同士が奇妙な形で、出合ったという感じであった。
「この寮にいるのは、綾どのと小女だけなんですかい」
新八郎は、綾の後ろ姿に声をかけた。
「さようです」
小さな声で、綾が答えた。
確かに、そのようである。息を殺して隠れていようと、人の気配は感じ取れる。だが、この建物の中には、それらしい気配がない。すると、大岡忠相の誘拐と綾が住むこの寮は、無関係ということになるのだった。
「あっしがどうしてここに現われたのか、綾どのにはおわかりでござんしょう」
新八郎は言った。
「いいえ……」
傾いた髷を気にしながら、ようやく綾は横向きになった。

「そうでござんすかねえ」
新八郎は、綾の横顔を見守った。
「大変に、見苦しいものをお目にかけまして……」
綾は、一礼した。匂うような美しさだが、綾は努めて感情を殺し、冷たい顔を作っているのだった。
「いや、別に……。綾どのが、悪いわけじゃあなしね」
「いいえ、わたくしの心掛けが、悪いのでございます」
「どうしてです」
「油断があるので、隙を見せるので、つけ入られるのでございましょう」
「まあ、よろしいじゃあござんせんか」
「堅苦しく考えすぎると、申されたいのでございますね」
「武家のいちばん、つまらねえところでしょうよ」
「武家の出の者は、そのように感じないものなのでございます」
「お見それ致しやした。ご存じの通り、あっしは町人の出でござんすからね」
「いずれにしても、わたくしは恥じております」
「あっしは、目の保養をさせてもらったと、思っておりやすよ」
新八郎は、白い歯を覗かせた。綾は逆に、怒ったような顔になった。新八郎に肌を見られたことを、意識したのに違いなかった。

「ご用を、承りましょう」
綾が、目を伏せたままで言った。
「大岡さまが、人質に取られやしてね」
新八郎は、綾の反応を窺った。
「越前さまが、人質にとは……？」
怪訝そうに、綾は首をかしげた。
「つまり、大岡さまを人質に取ったってことですよ」
「まことの話でございますか」
「冗談にしちゃあ、あまりにも馬鹿げた話でござんしょう」
「何者が、そのようなことを……？」
「あっしに、根津権現裏まで来いってことなんです。あっしと引き換えに、大岡さまを返すとかでねえ」
「それで、いかがなりました」
「根津権現の裏で、待ちくたびれやしたよ。それで、ここへ乗り込んで来たってわけでしてね」
「お待ち下さい。それでは、わたくしが越前守さまを人質に取ったというような、申され方ではありませんか」
「そうとしか、思えねえでしょう。目当ては、あっしの命なんでござんすからね。あっしの

薄汚れた命を欲しがるのは、この世に綾どのとその一党しかいねえんですよ」
「とんでもない濡れ衣でございます」
「濡れ衣……？」
「確かに水木さまを斃すために、わたくしに力をお貸し下さる御家中の方が十人ほどおられます。でも、その方たちにしても、ご主君に不忠を働こうと、お考えではございませぬ」
「そりゃあ、そうでござんしょう」
「ならば、どうして大岡越前守さまを人質に取るといった愚かなことを、致すでしょうか」
「まったく、愚かなことでござんすよ」
「そのような大それたことをして、お家の一大事となったら、取り返しがつきませぬ」
「その通り」
「わたくしたちにとっては、まるで身に覚えのないことでございます」
「その言葉に、嘘はござんせんか」
「嘘いつわりは、申しませぬ」
「わからなくなりやしたねえ」
「それに、妙ではございませぬか」
「何がです」
「水木さまのお命が目当てで、そのために越前守さまを人質に取ったというような、申され方でございましたね」

「そう、申しやしたよ」
「御町奉行を人質に取るとなれば、それはもう至難の業でございましょう」
「確かに……」
「むしろ、話は逆でございます。最初に水木さまを人質に取って、それから越前守さまをということなら頷けます。それは越前守さまを人質とすることよりも、水木さまを人質に取ることのほうが、はるかに容易だからでございます」
「なるほど……」
新八郎は無意識のうちに、腰に差している毛抜きを摑んでいた。長さが二十センチもある大きな毛抜きで、それは忠相からもらったものであった。忠相は、大小の毛抜きを、幾つも持っていた。
思索あるいは苦悩するとき、目を閉じて髭を抜くのが、忠相の癖だったのだ。そのために大小の毛抜きを、取り揃えていた。そのうちの大型の毛抜きを、新八郎はもらい受けたのであった。忠相の大小の毛抜きは、その一部が現存している。
新八郎は毛抜きを、弄ぶだけであった。そうしていると、忠相の囁きが聞えるような気がするのである。忠相から知恵を授けられるように、思えて来るのだった。だが、いまは綾の正論に、新八郎は感じ入っていた。
忠相を誘拐することが可能なら、何でもできると言って、過言ではないのである。まるで魔力を用いたように、忠相を消すことができたのだ。それなら、新八郎を誘拐するほうが、

より簡単だったのに違いない。

新八郎の剣を恐れるならば、わざわざ誘拐することはない。直ちに新八郎を、殺してしまえばいいのだ。どうせ新八郎を殺したいのだろうから、場所を選り好みすることもないのである。

大岡忠相を、奉行所から連れ出すこと。

新八郎を、一瞬に殺すこと。

このどちらが、至難の業だろうか。もちろん、前者なのである。比較にならないほどであった。ところが、その前者をあっさりやってのけたのだ。それでいて新八郎と引き換えに、忠相の身柄を渡すというのは、いったいどうしたわけなのだろうか。

「すると、あっしと引き換えになんてことは、初めからその気もない出鱈目だったんでござんしょうかね」

憮然たる面持で、新八郎は毛抜きを眺めやった。

「でも、そのような出鱈目が、いったい何の役に立つのでございましょう」

畳に指先で、綾は字を書いていた。

「それにもう一つ、どうして根津権現裏という場所を、定めたのか……」

「根津権現裏と、わたくしの仮の住まいとは近くにございます。あたかも、わたくしが関わっているかのように、思わせたかったのでしょうか」

「しかし、それにしたって、いったい何の役に立つのかってことに、なるんじゃあねえんで

すかい」

「さようですね」

「とにかく、綾どのが預かり知らぬってことだけは、よくわかりやしたよ」

「では、疑いが晴れたのですね」

「今回に限っては、確かに……」

新八郎は、立ち上がった。大刀を腰に押し込みながら、新八郎は庭におりて雪駄をはいた。まだ地面に積ってはいないが、雪の降り工合が本格的になりつつあった。

「ご無礼を……」

綾が廊下に、三つ指を突いた。

「こちらこそ、とんだお邪魔を致しやした」

新八郎も、頭を下げた。

同時に顔を上げたその一瞬に、二人の視線が絡み合った。綾がまともに新八郎を見据えたのは、これが初めてのことであった。綾はすぐに、目をそらせた。自分を夫の敵と狙う女の顔に羞恥の色を見て、新八郎は何とも不思議な気分を味わっていた。

武蔵屋の寮を出ると、小此木勇助が雪の中に立っていた。

「さあて、次はどこへ行くかねえ」

新八郎は言った。本音であった。忠相を誘拐したのが綾たちではないとなれば、もう闇の中で目隠しをされたのも同然だったのである。

4

神田佐久間町の久野屋。
阿部豊後守の江戸上屋敷。
同じく下屋敷。
長谷川町の鳥屋。
そして、日本橋南の宝来屋。
最後に、烏森稲荷。

これだけ回ってみて、新八郎は夜の雪の中を、南町奉行所へ帰りついたのであった。ずっと付かず離れずで、行動をともにした小此木勇助も一緒だった。二人ともすっかり濡れてしまい、身体の芯まで冷えきっていた。

浅香伝兵衛が新八郎の帰りを待って、同心詰所に居残っていた。新八郎は役宅内の自分の部屋へ、浅香伝兵衛を案内した。まずは大きな手焙りに炭火を盛り上げて、新八郎は一升徳利と丼をその近くへ運んだ。

「神田佐久間町の久野屋……？」

浅香伝兵衛にも、何のためにそんなところへ行ったのか、まったくわからなかったのである。

「笑ってくれるなよ」

新八郎は手焙りにかぶさるようにして、二つの丼に一升徳利の酒を注いだ。

「久野屋ってのは、確か扇子屋だったんじゃあねえのかい」

浅香伝兵衛は付き合いで、飲めない酒をちょっぴり口に含んだ。

「その通りだ」

「久野屋が御奉行を、人質に取ったってのかねえ」

「そんなはずはねえさ」

「だったら、どうして久野屋なんぞへ足を向けたんだ」

「御奉行は大層、久野屋の扇子がお気に入りだった。扇子となりゃあ、久野屋のものしか使わなかったんだぜ」

「だから……？」

「だからって、ただそれだけさ」

「久野屋の扇子が、ひどくお気に入りだった。それで御奉行が、久野屋においでになると思ったのかい」

「そんな気がしただけなんだ」

「じゃあ、烏森稲荷へは、どんな見込みがあって行ったんだね」

「見込みなんて、別にありはしなかった。ただ、御奉行が烏森稲荷へよく、足を運ばれたんでね」

「まさか、御奉行が烏森稲荷の祠の中に、隠れておいでだなんて、考えたんじゃあねえんだ

ろうな」
「そこまでは……」
「長谷川町の鳥屋ってのは、どんな謂れがあってのことなんだい」
「御奉行が可愛がっておられた文鳥、手乗り文鳥さ」
「この秋に、猫に咬み殺された文鳥かい」
「そうよ。あの文鳥を買ったのが、長谷川町の鳥屋だったんだ」
「いいかげんにしてくれよ、水木さん。およそ、水木さんらしくないぞ」
「藁をも摑む気持ってのは、こういうのを言うのかもしれねえ」
「阿部豊後守さまの御上屋敷、御下屋敷ってのも、考えてみりゃあ妙な話じゃあねえかい」
「あっしの心の中に、綾どのの知らねえところで、家中の若い連中が何かを企んでいるんじゃあねえかって、そんな気持があったんだろうよ」
「だからって大名の上屋敷や下屋敷へ、御奉行を運び込むわけがねえだろう」
「その通りだ」
「宝来屋にしたって、同じことだ。御町奉行をかどわかして、商家の土蔵に押し込めるなんてことができるもんじゃあねえし、やる者もいるはずがねえ」
「だったら御奉行は、いってえどこにおいでなんだ」
「さあねえ」
「気が気じゃあねえぜ」

新八郎は、丼の酒を呷った。新八郎には、二重の心配があるのだ。そのことだけは、伝兵衛にも打ち明けることができないのである。ただ単に誘拐されたというだけではなく、更に重ねて監禁されている忠相を襲う苦痛が気がかりなのであった。
この二重の心配を胸にかかえているのは、新八郎のほかに千代がいるだけである。忠相には、惨い持病があるのだ。忠相にそうした持病があることを、絶対に人に知られてはならないのであった。
忠相は、病める人質なのだ。監禁されている時間が長引けば、それだけ発病する可能性が強まるのである。すでに、まる一日がすぎている。病める人質に刻一刻と、危険が迫っているのであった。
「御奉行を人知れず、どこかに押し込めておくなんて、金輪際できることじゃあねえだろう」
伝兵衛が言った。
「考えれば考えるほど、そう思えて来るんだがねえ」
新八郎は寝転がって、薄暗い天井を見上げた。
「無理だ。できねえ相談だ」
「無理か」
「そうよ」
「だとすると、いってえどういうことになるんだ」

「どういうことって……」
「御奉行を押し込めておけるところは、この世間にまったくない。そうなると、御奉行は世間にいねえってことになるんだ」
「世間においでにならねえって、まさかこの世に……」
「違う。世間にいられねえとしたら、御奉行が身を置けるところとして、ほかにどこがある」
「この南町奉行所の中しかねえだろう」
「そうよ」
「じゃあ、御奉行はやっぱり、この南町奉行所内においでになるのかい」
「この南町奉行所の中しか、御奉行のいるところはねえのさ」
「しかし、水木さん、奉行所内はいちばん最初に、隈なく捜しているんだ」
「床下から、天井裏までな」
「だが、御奉行のお声すら、聞えなかったんだぜ」
「どこかに押し込められているんなら、必ず助けを求めるはずだ」
「奉行所内にはどこだろうと、何人かの者が詰めている。助けを求められる御奉行のお声が、誰かの耳に届かなけりゃあならねえ」
「しかし、助けを求める声を聞いた者は、ただのひとりもいねえんだな」
「そうだ」

「なるほどねえ」
と、そこで新八郎は、むっくりと起き上がったのである。
「何か、読めたのかい」
伝兵衛が、慌ててすわり直した。
「浅香さん、もう御奉行の身を案ずるのはやめようぜ」
新八郎は、破顔一笑した。急激に安堵感を覚えて自然に口許が緩んでしまい、引き締めようがないといった新八郎の顔であった。
「そいつはまた、どういうことなんだ。水木さん……」
伝兵衛が薄気味悪そうに、新八郎の顔を見やった。
「いいかい、浅香さん。御奉行は、この南町奉行所の中にいる」
「うん」
「だが、御奉行はまったく、助けを求めようとしない」
「だから……」
「それは、御奉行の意志で、どこかに押し込められているからだろう」
「御奉行の意志で、押し込められているって、どうもよくわからねえな」
「つまり、御奉行は隠れておいでなのさ。隠れんぼをしている子どもが、自分から声を立てるはずはねえだろう」
「じゃあ、御奉行は何者かに連れ出されたと見せかけて、実はご自分の意志で隠れておいで

だというのかい」

「そうだ」

「すると、水木さんだけで根津権現裏まで出向くようにと認められたあの書付けも、御奉行がご自分で筆を走らせたってことになるんだな」

「筆を走らせるって工合には、いかなかっただろうよ。あの金釘流の文字は、左手に筆を持って書いたんだからねえ」

「御奉行の書付けとなりゃあ、別に不思議でも何でもねえ。綾どのたちのことも、御奉行なら百もご承知なんだからな」

「綾どのの一味に連れ去られたものと思わせるために、武蔵屋の寮に程近い根津権現裏なんて場所を定めたんだ」

「ところで御奉行は、奉行所内のどこに、潜んでおいでなんだろう」

「どこだって、いいじゃあねえかい、浅香さん。安全だと知れていりゃあ、正直なところ、勝手に隠れておいでなせえで、何の差し支えもねえのさ」

「じゃあ、御奉行は何のために、隠れんぼを楽しんでおいでなんだ」

「そいつも、知る必要はねえ。まあ、気のすむように、やって頂こうぜ」

新八郎は、再び寝転がって目を閉じた。身体が、火照るように熱い。安心したせいか、急に眠くなったようだ。明日は十二月二十日、宝来屋京左衛門に対する最後のお裁きの日だと、新八郎は朦朧となった頭の中で考えていた。

5

十二月二十日は晴天であり、前夜まで降り続いた淡雪はその痕跡も留めていなかった。午後三時から、白洲において宝来屋京左衛門に対する最終尋問が始められた。町奉行ひとりだけの出座だから、体裁としては『奉行手限り裁判』であった。

大岡忠相のほかには、正面向って左に目安方、右に与力、隣室に当番与力がいるだけである。白洲の左右には、同心が控えている。だが、罪に問うべきか否かを決める予審のようなもので、手続きなども裁判とは違っていた。

裁き裁かれるのではなく、いわば議論であった。しかし、この日の大岡忠相は、これまでの言動を一変させた。奉行、裁判官の厳しさをさらりと捨てて、世間話をするような調子を保ち、顔から笑いを消すこともなかったのである。

記録の一部には、次のようなやりとりがあった。

「長い間、ご苦労であった」

「御奉行さまも、ご苦労なことだったと思います」

「今日で決着をつけることになるが、何か感想があるだろうか」

「率直に申して、よろしいでしょうか」

「結構だ」

「お互いに、時間を浪費したというのが、私の感想であります」

「その感想は、大変に妥当なものだと思う。余も同感だ」
「御奉行さまも私も多忙な人間なので、大きな損失だったと思います」
「損失と申したのか」
「はい」
「その点は、意見がいささか違う」
「なぜでしょうか」
「余は時間を浪費したとは思うが、それが損失だったとは考えていない」
「御奉行さまともあろうお方が、理に叶わぬことを申されます」
「どう、理に叶わぬのだ」
「浪費とは、不必要なことのために費やすのです。これは即ち、無駄をしたということです。無駄は当然、損失ではありませんか」
「そのほうは、字の意味ばかりを重く見ている。もっと、実際的に考えたほうがいいのではないか」
「たとえば……？」
「時間の浪費だが、余とそのほうの場合を、実際的に見てみよう。ただひとり、ぼんやり考え込んでいて時間を浪費したとあれば、それは確かに自分で無駄をしたことになる。だが、余とそのほうは、二人だったのだ。二人が一致協力すれば、時間の浪費にはならなかったのではないか」

「御奉行さまは、私が協力しなかったために、時間を浪費したと申されるのですか」
「その通りだ。一方が協力しなければ、いつまでたっても結論が出ない。そのために、時間が浪費された」
「では、その浪費が損失にならないとは、どういうことなのでしょう」
「一年間、余はそのほうのために、浪費を強いられて来た。だが、その浪費のお蔭で、余はあることに気がついた。従って、大いに役に立った浪費は、決して損失とならないのである」
ここで、京左衛門は不安を覚えたのであった。忠相が何か、新事実を摑んだと思ったのだ。最後になって危険を感じたことから、京左衛門は珍しく興奮し、感情的にもなったのである。
「御奉行さまはどうやら、私を罪に問う方針のようですが、結論としてはどうなのでしょうか」
「もちろん、そのほうを罪に問うつもりでいる」
「しかし、私にはどうも御奉行さまの強がりに、思えてなりません」
「なぜだ」
「新事実など、あろうはずがないのです。何の変化もないのに、結論だけが一転するものなのでしょうか」
「もちろん、余もそれなりの苦労を強いられた。一時は進退極まって、奉行の職を退くことも考えた」

「そうでしょう。御奉行さまが今日の裁きを恐れて、一切を投げ出し逃げてしまわれたのではないかという噂さえ、あったそうですから……」
「実は、その通りだったのだ」
「それなのに、なぜ今日になって急に、強気になられたのでしょう」
「それなりの根拠があってのことだ」
「その根拠とは……？」
「さっきも申したが、一年間の浪費がそうだ」
「よく、わかりません」
「この一年間、なぜ決着をつけることができなかったのかを、つくづく考えてみた。すると、二つの答えが出た」
「二つ……」
「その第一は、余が攻勢に出ようとすると、そのほうは必ず防禦を固めている。その第二は、余が突破口を見つけると、そのほうはちゃんとその部分を塞いでいる」
「つまり、先手を取られてしまうと、申されるのですか」
「その通りだ。手の内を読まれ、常に先手を取られている」
「致し方がありません」
「そこでまた、余は一つの答えを出した。どうして、手の内を読まれ、先手を取られるのだろうか」

「その答えとは……？」
「奉行所内に、内通者がいる。それ以外に、答えはない」
「内通者ですか」
「たとえば、そのほうは余が今日の裁きを恐れて逃げたのではないかという噂さえあったと申したが、それはどこにおける噂だったのか」
「それは……」
「当奉行所における与力・同心の間での噂だと、余も承知している。余が姿を消した直後に、そのような噂が広まった。さて、余が姿を消したことを知らせた者は、当南町奉行所の与力と同心のみに限られている。そうした噂をそのほうが知っているのは、当奉行所の与力・同心の中に内通者がおるためである」
ここで、京左衛門は顔面蒼白になった。この時点で、すでに事態は明白となったのであった。
「内通者は常に何かを見たり聞いたりして、集めた情報を依頼者に届けなければならない。従って、内通者を発見する方法としては、非常に興味深い事件を引き起すことだ。そうすれば必ず、その事件に関する情報を得るために行動を開始する」
「それで、その内通者は、判明したのでしょうか」
「余が、消える。しかも、ある人物に余を見つけることができるような、手がかりを与えておく。その人物は当然、余を捜し出そうと動き出す。その人物の行動に強い関心を示す者こ

そ、内通者ということになる」

「お見事でございました」

「当奉行所の臨時回り同心小此木勇助の私行を調べたところ、女によって作った借財三百両をこの一年間で返済したという事実が判明した」

「その三百両の出所が、私の命とりとなりましょう」

「潔白な人間であるならば、三百両という大金を出して、内通者を獲得する必要はない。京左衛門、今度は小此木勇助という生き証人がおるぞ」

大岡忠相は最後に、奉行としての威厳を示したのに留まった。

だが、このとき奉行所内の表門と白洲入口の間の広場で、ちょっとした騒ぎがあったのだ。同輩たちの監視下にあった小此木勇助が、逃亡を図って抜刀したのである。小此木もなかなかの使い手だというので、すぐに水木新八郎が呼ばれた。

斬るなという指示が出ていたので、このときの対峙には時間がかかった。もちろん、水木新八郎の心形刀流に、勝てる小此木勇助ではなかった。表門の内側を抜け、はるか作事小屋のほうまで後退した小此木勇助は、ついに水木新八郎の峰打ちを身体の左側面に浴びたのであった。

左腕、左肩の骨が砕かれ、肋骨を三本折って、小此木勇助は気絶した。生き証人として、死なせてはならなかったのだ。しかし、結果的には、生き証人を必要としなかった。京左衛門が白洲で、用意の毒物を嚥下し、悶死を遂げたからであった。

「新さん……」

二日後の雪降る晩に、大岡忠相が珍しく水木新八郎の私室を覗いた。

「へい」

新八郎は、声だけで応じた。

「わしが、いずこに潜んでおったかだが、これだけは新さんにも教えるわけには参らぬからな」

忠相はそう言って、悪戯っぽく笑った。

「ほかに誰も知らねえことなら、あっしも諦めますよ」

新八郎は潤んだ目で、忠相を見上げていた。

「いや、誰ひとりとして知らぬことではないのだ」

「誰かもう、承知している者がいるんですかい」

「わしのほかに、ひとりだけな」

「そいつは、どこの誰なんでござんす」

「それも、教えることができんのだ」

「そんな……」

廊下を遠ざかる忠相の足音を聞きながら、新八郎は起き上がる元気さえなかったのである。新八郎は高熱を発し、寝たきりだった。病める人質の身を案じて夜まで雪の中を歩き回ったのが悪く、風邪を引いた水木新八郎のほうが病める人質になったようなものであった。

さて、大岡忠相は、どこに潜んでいたのか。まさか、そこだけは絶対に、と捜そうとする者がまったくいなかったという場所が、奉行所内に一カ所だけあったのである。それは一名『軍鶏』とも呼ばれている奉行所内の牢屋であり、大岡忠相のほかにそのことを知るもうひとりとは、潜伏に協力した牢番だったのだ。

怪談行人坂

1

この三年間、七月になると必ず目黒の行人坂に幽霊が出るという噂が、江戸市中に広まるようになっていた。陰暦七月は盂蘭盆の時期であり、怪談には持って来いの雰囲気となる。

しかし、あながち暗示にかかってとか、気のせいとかだけで、幽霊を見たという人が多くなるのではないらしい。大の男までが奇妙な人影を見たと、青い顔をして逃げ帰って来るのだから、あるいは事実なのかもしれなかった。

盂蘭盆に幽霊が出るというのも、もっともらしいことだが、そのほかにも頷きたくなるような話があるのだった。今年、享保五年も陰暦七月にはいったとたんに、行人坂の幽霊の話題が江戸市中にばら撒かれた。

当時の目黒は大半が、田畑と百姓地であった。あとは大名屋敷と寺社で、町人地は極く一部にすぎなかった。この目黒の行人坂というのは江戸時代に知らない者はなく、江戸有名三十一坂のうち六番目に挙げられているくらいだった。

現在の目黒駅から大円寺の前を、雅叙園のほうへ下る坂である。江戸の初期に、湯殿山の

行人が大日如来堂を建立して修行を続けていたことから、行人坂と呼ばれるようになったのだ。

並んで権之助坂があるが、これは農道へ通ずる小さな坂で、通行人の往来は殆どなかった。権之助坂と呼ばれる一人前の坂になったのもずっと新しく、現在のような道路になったのは近代のことである。

当時は、行人坂一本だけであった。行人坂からは、富士山がよく見えた。富士が見える坂として、行人坂は多くの錦絵などに描かれている。明るいうちは、人の往来が途切れない坂であった。

だが、夜になると真っ暗で、ひどく寂しい坂になる。坂下は下目黒の町家があるので救われるが、それから先の坂をのぼりきるまでは大円寺、明王院、上覚寺、昌源寺などの寺院の土塀が左右に続いていて、無気味なくらいであった。

昌源寺の塀際に、天を突くような銀杏の巨木がある。夏は大きな日蔭を作り、銀杏の葉が散れば行人坂に黄金の絨毯を敷き詰める。はるか彼方からまるで目印のように、この行人坂の大銀杏は望見できた。

四年前までは、銀杏の木と並んで井戸があった。湯殿山の行人が掘った井戸と言われ、誰もが自由に水を使うことができた。夏などは汗をかいて行人坂をのぼって来た通行人が、この井戸の水を飲んで銀杏の木蔭で一休みするのであった。

ところが四年前の七月十四日、盂蘭盆の前日にお弓という娘が、この行人坂の井戸へ飛び

込んだのである。投身自殺であった。人間が身を投げた井戸となると、誰もがその水を使いたがらなかった。

盂蘭盆に冥土から訪れる霊は、七月十四日の午前六時に来て、十六日の正午に帰るものとされている。お弓はその七月十四日の日暮れどきに、井戸へ身を投げたのである。そうなっては、誰もが気味悪がるわけだった。

それで、行人坂の井戸は埋めてしまおう、ということになった。井戸は完全に埋められて、井桁も取り払われた。その跡に、小さな地蔵堂が建立された。行人坂の井戸は、跡形もなく片付けられたのであった。

だが、これで一件落着とは、ならなかったのである。翌年の七月に、お弓の幽霊が出るという噂が広まったのだ。盂蘭盆に、お弓らしい人影を見たと言って、行人坂から逃げ帰った者もいた。

「日暮れてからの行人坂には、近づかねえほうがいいぜ」

「銀杏の木の下に、人影が立つってんだろう」

「その人影は、じっと動かずにいるそうだぜ」

「男か女かはっきりしねえくれえに、ボーッとした人影でな」

「項垂れた女に、間違いねえって聞いている」

「行人坂の井戸へ身を投げて死んだお弓って女の幽霊で、未だに浮ばれねえんだろうって話だ」

「お弓って女が身を投げたのは、去年の盂蘭盆だったんじゃあねえのかい」

「しばらくは昼間だけ、行人坂を往来することにしよう」

普段は威勢のいい職人たちまでが、真剣な顔つきで噂話を交わしていた。だが、そうした噂も八月にはいると、いつの間にか消えてしまっていた。お弓の幽霊を見たという者も、まったくいなくなるのであった。

それに、ただ幽霊がいるというだけで、被害を受けた者はひとりもいないのである。相手は幽霊だというし、実害がない以上、調査する必要はなかった。それで町奉行所も、その幽霊騒ぎには介入せずにすんだのであった。

だが、その翌年も七月にはいると、また例の幽霊の話が再燃した。行人坂の銀杏の木の下に、ボーッと項垂れた女の姿が浮び上がるというのである。何人かの者がそれを見たというので、またしても大変な噂になったのだった。

その翌年も、同じことが繰り返された。いずれも七月いっぱいで噂が消えて、やはり実害なしであった。三年も同じことが続いたので、いまでは行人坂の幽霊というのが、七月を迎えた江戸の名物になっていた。

そして、享保五年の七月——。

ついに、実害が出たのである。四人の男女の死、という実害であった。最初のうちは、単なる事故死と見られていた。しかし、間もなく行人坂の幽霊によって、あの世へ連れ去られたのに違いないという噂が、江戸市中に広まったのだった。

これがまた、大変な評判になった。江戸中がその噂で、持ちきりであった。盂蘭盆には相応しい怪談だし、幽霊に四人の男女が取り殺されたというのだから、人々が好奇心と不安に駆り立てられるのも無理はなかった。

七月二日。
芝森元町の金貸し与兵衛、五十一歳。
七月四日。
芝三田二丁目の銘酒屋『三輪屋』の酌婦お島、二十九歳。
七月五日。
芝三田同朋町、浪人・寺田数之進、三十歳。
七月八日。
芝三田一丁目の大工職人虎吉、二十八歳。

七月二日から八日までの間に、以上の四人が死んだのであった。その四人の死が、なぜ行人坂の幽霊の仕業ということになったのか。それは四人の死に、多くの共通点があったからである。

まず四人とも、死にざまがまったく同じだった。自殺とも受け取れるが、四人にはみずからの命を絶たなければならない理由がなかった。また、七日間に四人が同じ形で、事故死を

遂げるはずはない。

やはり、殺されたのである。それも、刺す、斬る、撲る、首を締める、毒を盛る、といった一般的な殺し方ではなかった。死骸には、何の傷も残っていない。水も飲んだり飲まなかったりなので、四人とも溺死ということにはならなかった。

呪い殺された、あるいは祟りで殺されたという死に方であった。目には見えない糸で手繰り寄せられて、井戸の中へ引きずり込まれたのに違いなかった。つまり、幽霊に取り殺されたのである。

四人が四人とも、井戸の中へ落ち込んで死んだのだ。しかも、その井戸の周辺には、無数の木の葉が舞い散っていた。それは、銀杏の葉であった。銀杏の葉は、井戸の中にも散り落ちていた。

これだけ聞けば、人々は行人坂の幽霊を思い浮べずにはいられないだろう。四年前に行人坂の井戸へ、お弓という娘が飛び込んで死んだ。その井戸と並んで、銀杏の巨木がある。お弓は未だに成仏できないのか毎年、盂蘭盆の前後に幽霊となって姿を現わす。四人の男女は井戸に落ちて死に、その周辺には銀杏の葉が散らばっている。四人はお弓の幽霊に、取り殺されたとしか思えないではないか。

このように騒ぎが大きくなると、町奉行所としても知らん顔ではいられなくなる。月番は南町奉行の、大岡越前守忠相であった。江戸町奉行に就任して三年、大岡越前守忠相は四十四歳になっていた。

大岡忠相は持病となった頭痛と闘いながら、相変らず多忙を極めていた。この年には大きな仕事として、江戸町火消組合を創設し、刑法典の成文化に着手している。多くの訴訟が持ち込まれ、それらを消化するだけでも大変な労力を要した。

七月十一日に忠相は、奇妙な訴えを受理した。女二人からの訴えであった。二人の女が、ひとりの娘の実の母であることを主張し、互いに譲らないというのだった。こうなったからには、どちらが実の母であるかお上に決定してもらおうと、京橋南内山町の町役人一同とともに訴え出たのである。

京橋南内山町の川田屋の奉公人お久には、お花という七歳になる娘がいる。最近になってお久のところへ、築地南小田原町の職人の女房お富が乗り込んで来た。お富はお久に、お花は自分が生んだ娘だから返して欲しいと、掛け合った。

もちろん、お久はとんでもない言いがかりだと、承知しない。内山町の町名主が間にはいり事情を聞いてみたが、結論を出すことはできなかった。妊娠し出産した頃のお久を、誰も見知っていないのである。

それに、お久は二、三の人に、実はお花はもらいっ子だと洩らしているのだった。お久がお花を養い育てたことは事実だが、実の娘かどうかは疑わしい。お久は養母であっても、実母ではないのかもしれない。

一方のお富は、お花を生んだとき生活が苦しくて、とても赤ン坊を育ててはゆけなかった。餓死させるよりはマシだろうと、お富は涙をのんで赤ン坊を人手に渡した。その後、お富は

お花が、仙吉とお久という夫婦者に育てられていることを知った。

最近になってお富は、仙吉が病死し、女房のお久が商家の奉公人となって、女手一つでお花を養っている噂を聞いた。お富自身は働き者の職人の女房となり、食べることだけには不自由していなかった。

その上、亭主との間に子ができない。お久に対しては身勝手なやり方にもなるが、お花を引き取ろうではないかとお富は考えた。そう思い立つと親子の情を断ち難く、お富は恥も外聞も捨ててお久の許を訪れたというわけであった。

だが、お富の言い分にしても、それを裏付ける証拠がない。お久も頭から、お富の主張を否定した。娘のお花にどちらが実母か、わかろうはずもない。お花はただお久に、母親を感じているだけだった。

では、お花の父親は誰か。町名主はお久とお富を別々に呼んで、父親の名前を確かめてみた。

「美濃大垣十万石、戸田さまのご家来で、小笠原織部というお方です」

「大垣の戸田さまの江戸御勤番衆で、小笠原織部さまです」

二人の答えは、完全に一致した。この小笠原織部というのは大変な美男子で、女にモテるのをいいことにあちこちにタネを蒔いて回ったらしい。武家社会の女では、遊びの対象にするとあとが面倒である。

それで小笠原織部は、町方の出戻り娘や尻軽女でその気があるのを相手に、遊びまくったのだった。もともと一刀流の使い手で、将来は戸田家の剣術指南役にと期待されていたのだが、もっぱら恋愛遊戯に打ち込んでいたようである。

いまから六年前に、ついに女のことでゴタゴタを引き起し、江戸勤番のままで小笠原織部は主君から暇を出された。小笠原は浪人となった以上、国許へも帰れず、江戸で長屋暮しをすることになった。

自分が生んだ子どものことで、小笠原織部に縋れなかったのも、そういう事情があったからだと、お久もお富も説明した。つまり、一介の浪人となった小笠原織部を、頼れなかったというのである。

小笠原織部はその後、高輪車町の長屋に住みつき、生れ変ったような堅物となった。力仕事であればどんなことでもやる人足となり、生計を立てると同時に身体の鍛錬に打ち込んだ。仕事にあぶれると、白金正源寺門前の一刀流道場へ通い、激しい稽古に一日を費やした。正源寺門前の一刀流道場では、師範代よりも腕が上だという評判だった。もはや剣一筋の小笠原織部であった。

その小笠原織部に尋ねると、当時お久とお富の両方から妊娠したらしいと言われたという。それでお久もお富も、小笠原織部の子を生んでいるらしいことは、ほぼ認められた。だが、それ以上のことはわからない。

考えあぐねて町名主は、町奉行の裁定を仰ごうと決意したのである。

この珍しい訴えを受理したその日、大岡越前守忠相は行人坂の幽霊が四人の男女を取り殺

したという江戸市中の評判について、報告を受けたのであった。

2

裏居間は半公半私の部屋で、大岡忠相は夜間ここで世情についての報告を受けたり、密談したりすることが多かった。いま、裏居間には忠相のほかに、町人侍の水木新八郎と、定回り同心の浅香伝兵衛がいた。

大岡忠相が目、浅香伝兵衛が耳、水木新八郎が腕ということになる。目、耳、腕が揃ったわけである。朝夕に涼気を感じ、秋の気配が日一日と濃くなっている。もう萩が咲き、芒が穂を出し、モズの声を聞くようになっていた。

現代の盂蘭盆は真夏だから、何となく陽気だし、凄味や寂しさに欠けている。だが、当時の盂蘭盆は秋口であり、死者の霊を迎えるに相応しく陰気であった。シトシトと雨でも降れば、雰囲気に凄味が加わる。

白張提燈、盆燈籠、精霊棚といった小道具も揃っている。背筋が寒くなるような寂寥感を覚えて、ふと夜道を振り返ったりする。幽霊とか怪談とかに実感がこもるのも、秋風の吹くお盆だからなのである。

「町人侍、浅香の話を聞いてみよ」

大岡忠相が、水木新八郎に言った。忠相が、得意とするところである。自分で質問したりしないで、ほかの者に喋らせておく。忠相は目を閉じて、話を聞いているだけなのだ。そのほうが客観的に捉えることができるし、理解や分析も早くなるというのであった。

「へい」

水木新八郎は、浅香伝兵衛と向い合った。奉行の前だから、伝兵衛は心持ち固くなっている。

「浅香さん、御前とは思わねえで、いつもの調子で喋ろうぜ」

表情を動かさずに、水木新八郎が言った。浅香伝兵衛は、忠相の顔色を窺った。忠相はすでに瞑目して、知らん顔でいる。好きなようにしてよいと、その顔が言っているようだった。

「どこから、始めようか」

伝兵衛が安心したように、水木新八郎の顔に視線を戻した。

「四人の男と女の死にざまについては、よくわかった。次は、幽霊の正体ってものを、知りてえな」

「四年前に、行人坂の井戸に飛び込んで死んだ娘のことかい」

「名は、お弓だったな」

「年は当時で、十八だった」

「どこに、住んでいたんだ」

「芝三田一丁目の柿の実長屋に、病人の父親と二人だけで住んでいたらしい」

「三田一丁目に住んでいる者が、何だって目黒行人坂の井戸なんぞに身を投げたのかねえ」

「四年前の七月十四日、三田一丁目の柿の実長屋を、お弓は朝早くに出ているんだ。ところ

が、行人坂の井戸に身を投げたのは、日暮れどきだったんだぜ」
「つまり、朝から日暮れまで、アテもなく歩き回っていたってわけかい」
「恐らく、どこをどう歩いたかは、当のお弓にだってわからなかっただろうよ。虚ろな心で、死に場所を求め、ふらふら歩いていたのに違いねえ」
「日暮れどきになって、お弓は行人坂にさしかかった。その目に、井戸が映じたってことか」
「お弓はいきなり、井戸へ身を投げた。そいつを見かけた者の話によると、お弓は井戸に駆け寄ると同時に、飛び込んだそうだからな」
「ところで、お弓はどうして死ななけりゃあならなかったんだ」
「いろいろと、あったようだ。まずは、お定まりの借金だ」
「病人の父親のために、借金をしなくちゃあならなかった」
「その借金も、利息が嵩んで八両二分になってしまった」
「ほかに、どんなことがあったんだ」
「男に捨てられた」
「ほう」
「末は夫婦にと思っていた男が心変りをして、ほかの女に現を抜かすようになっちまったのさ」
「なるほど……」

「十八の娘が、死にたくなるのも無理はねえだろう」
「お弓はこの世に恨みを残して、みずからの命を絶ったってことになる」
「その恨みを晴らそうと、お弓は幽霊となって四人を取り殺した。ただ井戸の中へ引きずり込まれて死に、あたりに銀杏の葉が散っていたってだけじゃあねえ。死んだ四人ってのは、いずれもお弓と関わり合いのあった連中なんだ」
「そうらしいな」
「最初に死んだ与兵衛は、八両二分の借金の取り立てで、お弓を責め抜いた金貸しなのさ」
「芝森元町に住む金貸し与兵衛は、どこの井戸に引きずり込まれて死んだんだ」
「手めえの住まいの裏庭にある井戸の中へ、引きずり込まれたんだ」
「次なる三田二丁目の銘酒屋の酌女、お島はどこの井戸なんだい」
「三田四丁目の西蓮寺という寺の井戸へ、引きずり込まれたのさ」
「このお島ってえのは、お弓から末は夫婦にと思っていた男を奪った女だろうよ」
「その通りだ」
「次は、浪人だったな」
「寺田数之進だ」
「この浪人は、お弓からどんな恨みを買っていたんだ」
「三田同朋町の長屋住まいで、柿の実長屋とはそう離れていねえ。寺田数之進は、お弓とも顔見知りだ。ところが何年か前に、寺田数之進とお弓の父親が、柿の実長屋の入口で出会い

頭にぶつかった。お弓の父親は倒れて、石畳に強く腰を打ちつけた。それが因で、お弓の父親はやがて腰や足が不自由になり、寝たっきりの病人になっちまったと、こういう次第よ」

「寺田数之進は、どこの井戸に引きずり込まれたんだ」

「お島と同じ、西蓮寺の井戸よ」

「最後は大工の虎吉だが、こいつはお弓と同じ柿の実長屋の住人じゃあねえのかい」

「ご明察通りだ。お弓といい仲になっていた若い衆だが、年上のお島に誑かされて夢中になり、心変りしてお弓を袖にしたってわけさ」

「その後、虎吉とお島は、ずっと続いていたのかい」

「取り殺されるまで、お島が虎吉のところに泊りに来たりして、夫婦気取りでいたそうだぜ」

「虎吉は、どこの井戸に引きずり込まれたんだ」

「柿の実長屋の井戸だ」

「ところで、お弓の父親ってのは、いまどうしているんだ」

「お弓が亡きあとは大家が面倒を見ていたが、半年前に死んじまったそうだ」

「なるほどねえ」

そこで口を噤んで水木新八郎は、大岡忠相のほうへ向き直った。一応これで、浅香伝兵衛の報告の要点だけは、引き出したものと思ったからである。それにしても、二人の言葉遣いは荒っぽい。

襖の外にいて声だけ聞いていれば、町人が話し合っているとしか思えない。町人でもお店者ではなく、威勢のいい職人ということになるだろう。町奉行所の定回り同心は、わざわざ荒っぽい町人言葉を用いるのが、一種の慣行になっていた。

水木新八郎は町人侍と呼ばれる通り、すべての点で町人ふうを好むのであった。外見は武士でも、魂は町人である。武士の形式主義を、何よりも嫌っている。言葉遣いは特に、粗暴な町人のものだった。

「そのほうたちは、どのように解釈するかの」

大岡忠相は、目を閉じたままで言った。

「何を、でございますか」

言葉遣いを改めて、浅香伝兵衛が忠相を見やった。

「まこと幽霊の仕業と、思っておるのか」

忠相は、微笑した。

「幽霊などこの世に現われるものではないと考えておりましたが、この度の四人殺しの一件については、お弓なる者の幽霊の仕業としか思いようがございませぬ」

真面目な顔で、浅香伝兵衛が言った。

「町人侍は、どうじゃ」

忠相は目を開いて、水木新八郎に笑いかけた。

「あっしは幽霊とか、物の怪とかいったものが、信じられねえんでござんすよ」

新八郎は、苦笑を浮べた。

「浅香、奉行はもちろんのこと、そのほうたちが幽霊なり怨霊なりが存在することを信じておったのでは、江戸の平穏無事を保つことは難かしい」

忠相は、伝兵衛に目を移した。

「ではございますが、お弓の怨霊を除いていったい何者が、かくなる騒動を引き起しましょうや」

伝兵衛が熱っぽい目で、両手をついた姿勢から忠相を見つめた。

「死んだ四人だが、ほかに殺されるような事情にはなかったのか」

「お弓のほかにも恨みを抱いている者が多くいたのは、金貸しの与兵衛ただ一人にございます」

「ほかの者は特に……？」

「殺されるほどの恨みは、買っておりませぬ」

「しかと、さようか」

「はい」

「怨霊の仕業と見せかけて、生きておる者が四人を殺したとは、まったく考えられぬと申すのだな」

「死んだ四人をひとまとめにして、恨みを抱いていたのは、お弓だけだったのでございます」

「相違ないか」

「言い換えるならば、お弓を死へ追いやったのは、この度、井戸に落ちて死んだ四人なのでございます」

「うむ」

「さすれば、その四人を殺したのは、お弓だと考えるのが道理でございます。そのお弓が死者であれば、お弓の怨霊の仕業と見るほかはございますまい」

「だがのう、浅香……」

忠相は冷たくなった茶を口に含み、音を立てずに飲み下した。

「はい」

何を言われるのかと、伝兵衛はやや緊張した面持であった。

「気になることが一つある」

忠相は言った。

「どのようなことで、ございましょうか」

伝兵衛は、眉をひそめた。

「お弓とやらが、行人坂の井戸に身を投げたのは、いつのことだったのじゃ」

「四年前にございます」

「毎年、盂蘭盆の前後になると、行人坂に幽霊が出るという騒ぎになったそうじゃな」

「はい」

「しかし、これまでの幽霊は行人坂の銀杏の木の下を離れず、何者にも害を及ぼさなかったのではないか」
「はい」
「では尋ねるが、何故に今年に限っては、四人も取り殺したり致したのじゃ」
「それは……」
「怨霊であるならば一日も早く、四人を取り殺して、恨みを晴らさんとするのではないか」
「はい、確かに……」
「それが、どうじゃ。これまでは至って、おとなしい幽霊であったのに、今年になって急に恐ろしい怨霊として、四人も取り殺すとは……」
「恐らく……」
「恐らく、何じゃな」
「この四年の間、お弓の幽霊は四人の者が線香の一本も供えに参るのを、待ち続けておったのではないでしょうか。しかし、お弓の幽霊が出ることを噂で知りながら、四人の者は一向に行人坂へ足を運ぼうと致しませぬ。そのために、お弓の幽霊はもはや容赦できぬものと……」
「ずいぶんと、気の長い怨霊じゃな。だが浅香、残念だが、怨霊が恨みを晴らすのを四年も待ったとは笑止。幽霊とは死後、間もなく出るものじゃ」
「はい」

「お弓の幽霊の噂を悪用し、何者かが四人の男女を殺害したものと、越前は見た。よって、そのほうは水木新八郎とともに、事実を究明し、生きたる下手人を捕えよ」
忠相は、厳しい口調で言った。
忠相の見方は正しいと、水木新八郎は思った。自殺したお弓の幽霊が、四年もたってから恨みを晴らすというのはおかしい。実際にお弓の幽霊が行人坂の銀杏の木の下に、出るのかどうかもわからないのである。
ときは盂蘭盆の前後、夜になってから行人坂にさしかかり、お弓が身を投げた井戸のことを思い出せば、風に揺れる木の葉でも幽霊に見えるだろう。しかし、いったい誰が何のために、お弓を死へ追いやった四人を殺したのかということになると、おいそれと見当がつくはずもなかった。

3

水木新八郎は、黒の紹の着物で三ツ紋付きである。着流しだった。腰に大小の刀を落して、伸びた月代に雪駄ばきと浪人風であった。浅香伝兵衛も袴をつけずに、紗の三ツ紋付きの黒羽織を着ている。
髪を小銀杏に結い、大小のほかに朱房の十手を背後に差している。博多帯に雪駄ばきと、これもまた粋な姿だった。だが、取り合せが妙である。並んで歩く二人を、通行人がもの珍しそうに振り返った。

朝早くに数寄屋橋御門内の南町奉行所を出て、二人はそのまま目黒の行人坂まで足を伸ばした。日中はまだ残暑が厳しく、蟬の声を聞いた。あちこちの軒下に、白張提燈が下がっている。

行人坂の坂上にある茶屋で、二人は一息入れた。問題の銀杏の巨木が、坂に木蔭を作っている。小さな地蔵堂が、その脇にあった。遠く青空に、紫色のシルエットが見えた。富士山だった。

「水木さんは本当に、幽霊の仕業ではないと思っているのかい」

冷やした麦茶に口をつけながら、浅香伝兵衛は深刻な顔つきで行人坂を見おろしていた。

「浅香さんらしくもねえ」

水木新八郎は目を細めて、遠くの富士山を眺めやった。

「おれも定回り同心、幽霊の人殺しなんぞは信じたくもねえ。だが、お弓の怨霊がやったとしか、考えようがねえんだ」

「とにかく、生きている野郎の仕業として、思案してみようじゃあねえかい」

「よかろう」

「下手人はまず、四人を井戸の中へ投げ込んだ。そのときどきに、籠一杯ぐらいの銀杏の葉を用意しておく」

「四人をそれぞれ井戸の中へ投げ込んだあと、あたりに銀杏の葉を撒き散らした上で逃げる」

「井戸の中で死に、あたりには銀杏の葉が散らばっている。こいつは、お弓の亡霊の仕業だと、見る人に思い込ませるための小細工だ」

「それほど、難かしくはねえ小細工ってことになる」

「銀杏の葉なんぞ、どこへ行っても集められるからな」

「難かしいのは、人を井戸へ投げ込むってことのほうだろう」

「その通りだ」

「四人とも、身体には引っ掻き傷の一本も、残っちゃあいなかったんだ」

「あくまで、井戸の中へ投げ込んで、殺したってことになる」

「水をいっぱいに飲む飲まねえは別として、溺れ死んだものと見るべきだな」

「殺された四人が悲鳴を上げたり、助けを求めて叫んだりするのを、聞いた者はいねえんだろう」

「そいつが、ひとりもいねえらしい。井戸の中の死骸に気づいたことから、いずれも大騒ぎになっているんだからな」

「下手人はいってえどうやって、四人を井戸の近くまで連れて行ったんだ」

「うん」

伝兵衛は、顎を撫で回した。

四人の死骸は、井戸の中で発見された。いきなり井戸の中へ、突き落されたとは考えられない。犯行はすべて夜間であり、被害者が揃って偶然にも井戸の近くに立っていたというこ

とは、絶対にあり得ないのである。

与兵衛は、自宅の裏庭にある井戸だった。虎吉は、住んでいる柿の実長屋の井戸であった。寺田数之進とお島は、少し離れた西蓮寺の井戸である。お弓の幽霊におびき出されたというのであれば、異常の現象として起り得ることかもしれなかった。

だが、生きている人間の犯行となると、何とかして被害者たちを井戸端まで連れ出さなければならない。それにはまず、下手人が四人の男女とかなり親しい仲だったという前提が必要である。

そうでなければ、夜になってから下手人の言葉に従って、井戸のところまで行ったりはしないだろう。しかし、伝兵衛の聞き込んだところによると、四人の被害者の共通の知り合いは、お弓のほかにひとりもいなかったというのである。

そうなると、ますますおかしくなる。なぜ四人の被害者は下手人の言葉通りに、井戸端まで一緒に行ったりしたのだろうか。誘い出す口実にしても、それほど効果的な言葉があるとは思えない。

では、拉致したということになる。それも、考えられないことだった。強引に連れ出されたら当然、悲鳴を上げるか助けを求めるかする。しかし、悲鳴や助けを求める声を、聞いた者がいないのである。

特に、与兵衛の場合が、不思議であった。下手人は自宅に忍び込んで、与兵衛を裏庭の井戸のところへ連れ出しているのだ。それなのに与兵衛は、叫び声一つ家人に聞かせていないのである。

寺田数之進にしても、そうであった。寺田数之進はまだ壮年で、浪人といえども武士だった。その寺田数之進までが連れ出されて、抵抗することもなく井戸の中へ投げ込まれているのだ。

下手人が大勢であれば、そうするのも可能であっただろう。だが、下手人はひとりと、見なければならなかった。複数ならそれらしい気配もしただろうし、人目についたり気づかれたりする。

「考えられるのは、ただ一つということになる」

水木新八郎が、床几から腰を浮かせた。

「どういうことだ」

浅香伝兵衛も、茶代を置いて立ち上がった。

「下手人は、もの言わぬ与兵衛、お島、虎吉たちを、井戸へ運んだのさ」

新八郎は、行人坂に背を向けた。

「もの言わぬとは……？」

伝兵衛は慌てて、新八郎のあとを追った。

「つまり、気を失っていたのだ」

「最初にまず気を失わせておいて、それから目ざす井戸まで運んだってことか」

「だとしたら、叫び声も上げねえし、助けを求めたりもしねえだろう」

「身体に傷を残さずに、気を失わせるとなると……」
「手段は、一つしかねえ」
「当身か」
「それしか、ねえんじゃあねえかい」
「当身を喰らわせて、井戸の中へ投げ込む。死骸には何も残っちゃあいねえから、井戸の中へ引きずり込まれて溺れ死んだとしか見えねえ」
「いかにも、お弓の怨霊がやったみてえだろう」
「なるほど……」
「これで、下手人は武士だってことが、まずははっきりしたぜ」
「しかし、水木さん。寺田数之進には幾らかでも、武芸の心得があっただろうよ。その寺田数之進も女みてえに、当身を喰らって気を失ったのかい」
「それだけ武芸の心得に、差があるってことだろうな。下手人は同じ武士でも、相当の武芸者だと見ていいだろうな」
「腕の立つ武士が何のために、与兵衛、お島、寺田数之進、それに虎吉を殺さなければならなかったかだ」
「下手人の目当は、何だったのか。そいつさえ明らかになりゃあ、この一件は案外あっさりと片付くかもしれねえ」
「何とか、なりそうだ」

伝兵衛が、笛を吹くように口を鳴らした。伝兵衛の鼻息が、俄かに荒くなったようだった。雲を摑むような話だったのが、急に具体的な捜査の道を示し始めたからであった。とたんに、伝兵衛の目つきが鋭くなっていた。

二人はまず、芝森元町の与兵衛の住まいを訪れた。故人に武士の知り合いがいたかどうかを、確かめるためであった。与兵衛の女房というのを表へ連れ出して、浅香伝兵衛が厳しい口調で尋問した。

「お武家さまの知り合いなんて、ただのひとりもおりませんでした」

因業だと評判の悪かった与兵衛には似つかわしくなく、見るからにおとなしそうで控えめな女房であった。

「与兵衛から、金を借りていた侍ってのも、いなかったのかい」

睨みつけるような目で、伝兵衛は四十すぎの与兵衛の女房というのを見据えていた。

「ご承知の通り、表向きの稼業は絵草紙屋でございます。世間さまからは因業な金貸しと見られておりますが、与兵衛は知り合いのお困りの方だけに、融通して差し上げておりましたので……」

「定回り同心の前で、甘ったれたことを吐かしちゃあいけねえ。与兵衛がモグリの金貸しだったことに、間違いはねえんだぜ」

「申し訳ございません」

「絵草紙屋なんて、店先をそれらしく見せかけているだけじゃあねえかい」

「恐れ入ります」
「与兵衛は毎日、貸した金の取り立てに回っていたんだろう」
「は、はい」
「法外な利息を含めて、容赦なく貸した金を取り立てていたんだ。因業な金貸しと言われて、どんな不思議があるってんだい」
「どうか、お許しを……」
「まあ、いいだろうよ。いまはモグリの金貸しを、取り締っているわけじゃあねえ。しかし、困っている者に融通してやっているだけだなんて体裁のいいことを言っていると、おめえもお弓の怨霊に取り殺されるかもしれねえぜ」
「そんな、脅かさないで下さいまし」
「侍には、金も貸してなかったというんだな」
「はい」
「浪人も、いなかったかい」
「何しろ、看板を出していたわけでもないので、口ききなしに金銭の工面を持ち込む方はいなかったんでございます。それで、与兵衛が付き合いを持たないお武家さまが、お見えになったことは一度もございませんでした」
「おめえが、見逃しているってことはねえだろうな」
「実は与兵衛も、お武家さまを嫌っておりまして……」

「そいつは、どうしてだい」
「お武家さまには、金銭をお貸しするものではない。お武家さまには働いて返すということが無理だし、返せないとなると刀を抜いて脅しにかかったりするので面倒だ。与兵衛は日頃、そう申しておりました」
「確かに、そうかもしれねえな」
「それでお武家さまとの付き合いは、たとえご浪人さんだろうと、まったくございませんでした」
「間違いねえかい」
「はい」
「手間をとらせたな」
伝兵衛は新八郎のほうを見て、手応えがないと言いたそうに力なく首を振った。浪人を含めて武士とは、まったく接触がなかったという。それが事実だとしたら、与兵衛には武士に殺される動機がなかったということになる。
次に二人が足を向けたのは、芝三田一丁目にある柿の実長屋であった。路地の奥に柿の木が三、四本あったが、もちろんまだ赤い実をつけてはいなかった。伝兵衛は生前の虎吉について、よく知っているという女房連中を集めた。
「虎吉さんに、二本差しの知り合いなんていなかったねえ」
「一人前になったばかりの大工に、お侍の知り合いなんているはずがありませんよ」

「虎さんが出入りする普請場というのは、商家だけに限られているもんね」
「この長屋の住人が、お侍に関わり合うなんて、そんなことはありっこありませんよ」
「ご浪人さんが、虎さんのところへ来るなんてことだって、わたしは見も聞きもしないよ」
「虎吉さんのところへ来るのは、女だけだったねえ」
「お島って酌女かい」
「わたしはあの女を見ると、虫酸が走ったもんね」
「お弓さんから、虎さんを取り上げた女だもの」
「可哀想だったね、お弓ちゃん……」
「虎さんも虎さんだよ、あんな女に血道を上げるなんてさ」
「そりゃあ、仕方がないよ。お弓さんは手を握るのが精々の生娘、片方は身体でぶつかってくる年増なんだからね。若い男がどっちに熱くなるかは、わかりきっているじゃないか」
「とにかくさ、虎吉さんに二本差しの知り合いってのは、いなかったね」
「金輪際、いやしないよ」
「ご浪人さんじゃないと口もきけないだろうし、そのご浪人さんだって虎さんは縁がなかっただろうよ」
「大工職人のような町方の者は、特に二本差しってのを毛嫌いするしね」
長屋の女房たちは、伝兵衛に質問の暇を与えなかった。口々に勝手なことを言い、それでいて同調し合うのである。だが、それでも伝兵衛の問いに対する答えになっていて、彼女たちの情報は正確であった。
新八郎と伝兵衛は、隣町の三田二丁目へ足を運んだ。銘酒屋『三輪屋』は、酌婦を置いた居酒屋である。白昼のことで、さすがにだだっ広い店内には、酌婦や酔客の姿は見当らなかった。
お島はこの『三輪屋』に住み込んでいたが、営業時間外の行動の自由は一応、認められていたようである。それでお島は、柿の実長屋の虎吉のところへ、泊りに行ったりもできたのだろう。
このような店の亭主が、何よりもケムたがるのは十手持ちであった。同じ十手持ちでも岡っ引などではなく、町奉行所の定回り同心が出張って来たのだから、『三輪屋』の亭主は卑屈なまでに恐縮しきっていた。
「へえ、そりゃあまあ旦那、酒を飲ませるのが商売でございやすから、お武家さまだろうとお断わりするはずはないんで……」
亭主は揉み手をしながら、媚びる目で伝兵衛を見上げた。
「だが、ガラの悪い店だし、ちゃんとした武士なら寄りつきもしねえってんだな」
伝兵衛のほうも、出方次第では頭から威嚇していい相手だとは、先刻ご承知である。それで伝兵衛は最初から、亭主の顔の前に朱房の十手を突き出していた。
「その通りなんで、旦那……。まあ二本差しとなると、継ぎはぎだらけのお召物をまとったご浪人さんと、相場は決っておりやした」

「浪人でもいいんだが、お島と懇意にしていた二本差しはいなかったのかい」
「それが生憎と、ひとりもいなかったようでございやす」
「酌をしてやるって、その程度だったのかい」
「ご浪人さんは酌女に、悪戯をして仕方がありやせん。それで、たとえ客だろうとご浪人さんと見りゃあ、お島は近づこうともしなかったようで……」
「それじゃあ、まるで初心な女みてえに聞えるぜ」
「旦那、お島は中身が初心な女でございやした。決して、世間で言うような、アバズレじゃあなかったんで……」
「虎吉への操を、忘れちゃあいなかったってのかい」
「へえ。年下の男ほど、可愛いものはねえって申しやすからねえ。お島も虎さんと所帯を持とうってんで、そりゃあ一生懸命だったんでございやすよ」
「いずれにしても、お島は二本差しには縁がなかったってんだな」
「へえ。その点については、もう間違いも何もございやせん」
「邪魔したな」
伝兵衛は不機嫌な顔で言って、『三輪屋』の亭主に背を向けた。収穫は、ゼロであった。与兵衛、虎吉、お島といずれも浪人を含めて武士には縁がなかったらしい。知り合いはおろか、武士とは接触を持ったことがないというのである。
そうなると、三人が武士に殺されたという判断も揺らぐのであった。殺される動機がないのだ。知り合いでもない武士に、井戸へ投げこまれたりするはずがなかった。あるいは下手人は武士という想定が、まず狂っているのかもしれない。
「残りは、寺田数之進だ。まあ、寺田数之進には二本差しの知り合いがねえってことは、ねえだろうがね」
伝兵衛は、溜め息をついた。
「浅香さん、もう一つ妙なことに気づいたぜ」
歩きながら、新八郎が呟くように言った。

4

三田二丁目から三田同朋町まで、つい目と鼻の先である。
三田同朋町の吉兵衛長屋に、寺田数之進は住んでいたのだった。寺田数之進は、越前福井三十万石の松平家の家臣だったという。若くして、浪々の身となった。主君の不興を買ったのである。
寺田数之進は、学問に秀でた武士だった。二十前にすでに、一端の儒学者として通用したという。その後、天文地理に興味を持ち、密かに研究を続けていたらしい。だが、武芸となると、寺田数之進の泣きどころということになる。
福井の松平家は伝統的に、武芸を重んじていたし、家中においても武芸に関する行事が盛んであった。ところが、あまりにも弱すぎる家臣のいることが、主君の目にとまったのであ

る。

腰抜け武士め、一年だけ待ってやると、主君は激怒した。主君としては、翌年の御前試合にせめてもの期待を残したのだ。だが、翌年もまったく同じで、寺田数之進は逃げ腰の試合ぶりを披露した。

剣の上達に励めという君命に背いたと、寺田数之進には暇が出された。浪人となった寺田数之進は、学問の場を求めて江戸へ出て来た。しかし、現実はそれほど甘くなく、寺田数之進は長屋住まいの一介の素浪人の身に落ちぶれたのである。

寺田数之進は近所の子どもに手習いを教えたり、手紙の代筆や看板の字を引き受けたりで、何とか糊口をしのいでいた。浪人ばかり多くて万が一にも仕官は望めない時代にあって、寺田数之進もまた無為な日々を過していたのだ。

「妙なことに、気づいたって……？」

吉兵衛長屋の入口で、浅香伝兵衛が思い出したように足をとめた。

「浅香さん流にだ……」

水木新八郎は、悪戯っぽい目で伝兵衛を見やった。

「おれ流に……？」

「四人はお弓の怨霊に、取り殺されたものと考えてみよう」

「何でえ、また怨霊の仕業に逆戻りかい」

「まあ、聞いてくんねえ。与兵衛は、お弓に恨まれていた。お弓が死に追いやられたのも、

一つには与兵衛の因業ぶりがあったからだろうぜ」

「水木さん、何を今更……」

「だとすりゃあ、与兵衛がお弓の怨霊に取り殺されたとしても不思議はねえ」

「そいつは、虎吉だって同じじゃあねえかい」

「そうよ。虎吉もお弓を、死に追いやったひとりだ。だから、取り殺されようと、文句は言えめえ」

「お島にしたって、そうだろうよ」

「肝心なのは、浅香さん。そのあとのことなんだが……」

「そのあとのことって、寺田数之進かい」

「そうだ。そいつが、どうも妙なんだよ。果して寺田数之進が、お弓を死に追いやった者のひとりと言えるかどうか……」

新八郎は、地上に落ちている自分の影を、じっと見おろしていた。

「うん」

伝兵衛は逆に、空を振り仰ぎながら腕を組んだ。

寺田数之進は、お弓やその父親と接触を持っていた。いわば、知り合いである。だからこそ長屋の入口で出会い頭に、寺田数之進とお弓の父親がぶつかるという事故も起ったわけである。

そのとき転んで腰を痛めたのが因で、お弓の父親は寝たっきりの病人になるのだった。確

かに寺田数之進は、お弓とその父親に不幸をもたらした。悲劇の遠因を作った、ということにもなる。

だが、それは故意にやったことではない。ほんの過失であり、お弓の父親のほうにも原因がある。現に、そうした事故があってからも、お弓は寺田数之進との付き合いを保っていたのだった。

寺田数之進が、お弓を死に追いやったということにはならないのだ。寺田数之進もお弓の怨霊に取り殺されたとするには、ほかの三人に比べて動機が稀薄すぎる。それに怨霊は、過失を責めたりはしないものである。

「なるほど……」

伝兵衛は、小刻みに頷いた。

「寺田数之進だけがほかの三人とは、ちょっぴり違うようだぜ」

足許の石ころを、新八郎は蹴飛ばした。

「すると、水木さん……」

ハッとしたように、伝兵衛が顔を上げた。

「下手人の狙いは、寺田数之進にあったんだろうよ」

新八郎は、重そうに唇を動かした。

「下手人にとって、与兵衛、お島、虎吉はどうでもよかったんだ」

「恨みも何もねえし、殺さなけりゃあならねえ理由もなかったんだろうさ」

「ところが寺田数之進だけを殺したんじゃあ、下手人がどこの何者だかすぐに見当がついちまう」

「それで四人も殺して、下手人の狙いが誰にあったのかを、誤魔化そうとしやがったんだろう」

「それには行人坂の幽霊、お弓の怨霊の仕業と見せかけるのが、何よりもぴったりだったってわけかい」

「九分通り、読めたな」

「それにしても、何の関わりもねえ与兵衛たち三人を、小細工のために殺すとは、惨い下手人だぜ」

腕組みを解いた伝兵衛は、憤然とした足どりで大家の吉兵衛宅へ歩み寄った。吉兵衛はいかにも大家らしく、親分肌でものわかりのよさそうな男であった。吉兵衛は、寺田数之進という名前を聞いただけで、沈痛な面持になった。

「寺田さんは、いいお方でした。いつも明るくて、どなたへも笑顔を向けられるのでございます」

しんみりとした口調で言って、吉兵衛は目をしばたたかせた。

「他人に恨みを買うようなことなんて、まるでなかったってのかい」

伝兵衛は、出された座蒲団を押し返して、立ったままでいた。

「そりゃあもう、その通りでございます。お弓さんの怨霊に取り殺されたなんてことも、何

かの間違いでございましょう」
「お弓も寺田数之進のことを、恨んじゃあいなかったってのかい」
「わたくしどもは、そのように見ておりました。それに寺田さんも、あるいはお弓の父親に楽な暮しをさせてやれるかもしれないし、そうなれば少しは償いになるだろうと、おっしゃっていたくらいなのでございますから……」
「あるいは、楽な暮しをさせてやれるかもしれねえとは、いってえどういうことなんだい」
「これはいまでも、惜しまれることなんでございますが、実は寺田さんには御仕官の話がまとまりかけておりまして……」
「仕官の口だと……？」
「はい」
「どこのお大名から、そんな話が持ち込まれたんだ」
「会津の松平さまからと、聞いておりました」
「会津二十三万石とは、大大名じゃあねえかい」
「そんな耳寄りの話がどうして、寺田数之進のところへ持ち込まれたりしたんだ」
「昨年の暮、寺田さんはたまたまお武家のお女中が馬に蹴られて気を失っていなさるところを通りかかり、医師の真似事をして手当をされた上に、お屋敷まで送り届けられたのでございます。ところが、そのお女中が松平さま江戸御屋敷詰めの御家老さまの末のお嬢さまだったそうで……」

「ほう」
「お嬢さまの命の恩人だと何度か、御家老さまは寺田さんを御屋敷にお招きになりました。そのときに御家老さまは、寺田さんの学問の知識の豊かさに、いたく感心なされたそうでございます」
「それが縁となって、仕官の口が舞い込んだってわけかい」
「はい。今年にはいりまして、会津の松平さまではただ一人だけ、新たな御仕官を認めるという決定がなされたそうで……」
「そこで江戸詰め家老が、寺田数之進を推挙したってことなんだな」
「はい。三百石取りという新規お召抱えとしては、破格の御推挙を頂いたのだそうでございます」
「この時代に、三百石の新規召抱えとは豪儀なもんだ」
「ではございますが、もちろん御推挙を受けたのは、寺田さんだけではありません」
「そりゃあ、そうだろう」
「もうひとり、寺田さんと肩を並べて、新規お召抱え決定の呼び声が高かったお方がおいでした」
「そいつは、どこの何者だい」
「松平さまの御側衆から、強い御推挙があったそうでございますが、この方は寺田さんとは逆に剣の達人というふうに聞いております」

「文武の争いかい」
「この方もまた、三百石取りの新規お召抱えになるということでございました。美濃は大垣十万石の戸田さまの御家来だったそうで、やはり長年の浪人暮しをなさっていたと聞いております」
「その浪人の姓名は……？」
「寺田さんの口から聞いたんですが、確か小笠原織部さまとか……」
「小笠原織部だな」
「はい」
「住まいは、わからねえかい」
「そこまでは、存じておりません」
「大家さんよ、助かったぜ」
伝兵衛は思わず、本音を吐いたようだった。
「お役に立てば、何よりでございます」
吉兵衛も初めて、晴れがましい顔を見せた。
三田同朋町をあとにした新八郎と伝兵衛は、数寄屋橋御門内の南町奉行所へ向いながら、殆ど言葉を交わさなかった。顔を見合せては、ニヤリとするだけであった。何度繰り返しても、それは会心の笑みだった。
まるで絵に描かれたように、動機がはっきりしたのである。それに下手人は幽霊ではなくて生きている人間、腕の立つ武士、その狙いは寺田数之進であった、という推理がまるで階段をのぼるように的中したのだ。
会津二十三万石の松平家に、ただひとりだけ新規お召抱えになる。それも、三百石取りという中堅どころの地位につけるのだ。巷に氾濫する浪人にとっては、これほど魅力のあるものがほかに存在するだろうか。
最終候補に残った者は二人、一方は学問の徒として価値を持つ寺田数之進、他方は剣の達人である小笠原織部。推挙者は、江戸家老と御側衆。こうなっては、どちらが選ばれるか予断を許さない。
小笠原織部は、この千載一遇のチャンスを逃したくなかった。何が何でも、仕官したかったのだ。目的のためには、手段を選ばない。寺田数之進が不名誉な死を遂げれば、新規お召抱えは小笠原織部と決定する。
寺田数之進が自殺したお弓に関わりを持っているということを知ったとき、小笠原織部は行人坂の幽霊を利用する計画を思いついたのに違いない。寺田数之進だけを殺せば、松平家の家中の者までが小笠原織部に疑いを抱く恐れがある。
それで、関係者全員がお弓の怨霊に取り殺されて、たまたま寺田数之進もそのうちのひとりだったと、見せかけることを企んだのだ。そのために小笠原織部は、まったく関係のない与兵衛、お島、虎吉の三人を殺さなければならなかったのである。
「ほう、小笠原織部とな」

大岡忠相は、浅香伝兵衛からの報告を聞いて、目を大きく見開いた。小笠原織部のことであれば、改めて調べることもなかった。芝高輪車町の長屋に住み、白金の正源寺前の一刀流道場で腕を磨いている浪人と、大岡忠相にはわかっていたのである。

町人を殺した浪人者となれば、町奉行所で裁くことができる。だが、小笠原織部は会津二十三万石の松平家に、お召抱えが決りかけている男だった。それを町奉行所が捕えたとあっては、何かと面倒である。

それに、剣の達人ともなれば、素直に縄をかけられるとは思えない。捕物となって、多くの死傷者を出す恐れもあった。小笠原織部のような浪人には、斬り合いで死んでもらうのが一番である。

「これ、町人侍……」

忠相は、新八郎に声をかけた。

「一刀流の達人とそのほうとでは、どちらが勝つだろうな」

忠相の口許は綻んでいたが、目は笑っていなかった。

「やってみなけりゃあ、わからねえことでござんすよ。一つ、試してみやしょうかね」

新八郎はそのあと、蜩の声に耳を傾けていた。

5

翌朝——。

白金の正源寺境内で、水木新八郎と小笠原織部は対峙していた。早朝から待ち受けていて、正源寺前の道場に姿を現わした小笠原織部に声をかけたのである。新八郎と一緒にいる浅香伝兵衛を見て、小笠原織部には察するところがあったようだった。

「寺田数之進の身寄りの者から、敵討ちを頼まれやしてね」

笑いのない顔で、新八郎は言った。

「よかろう」

小笠原織部は小さく頷いて、自分から正源寺の境内へ足を運んだ。その後ろ姿は、自信の塊みたいだった。だが、それは自惚れや、根拠のない自信ではなかった。かなりの腕前だと、新八郎にはよくわかった。

「一刀流、小笠原織部」

織部は大刀を抜き放つと、そのまま八双の構えにはいった。八発八止で、攻撃に対する変化が無限の八双の構えであった。

「心形刀流、水木新八郎……」

新八郎は一歩後退して、刀を鞘走らせた。やや右寄りの下段の構えである。

見事だ——。

新八郎は、そう思った。これほどの腕前の者と、立ち会うのは初めてのことである。剣の達人と言われるだけのことはあるし、天下太平の御世にもったいないくらいだった。しかも守勢に回っていて、極めて冷静な気持でいる。

息を殺して、浅香伝兵衛が勝負を見守っている。伝兵衛にも優劣の差がないとわかるらしく、不安そうな顔つきでいた。もし新八郎が敗れたらと、頭の隅にそんな考えがあるのだろう。

正源寺の境内は、鬱蒼とした樹木の茂みによって薄暗くなっている。地面に、日射しが届かない。蝉の声もなく、あたりは静寂に包まれている。境内全体が、異様な緊迫感に支配されていた。

このままではいけないと、新八郎は自分に言った。敗れないまでも、勝ち目はない。相討ちということになる。織部の顔色も蒼白だが、新八郎にしても全身が脂汗で湿っていた。

「四人を殺してまで、召抱えられたかったのかい」

新八郎が、不意に言った。言葉による奇襲であった。

「黙れ！」

織部の目つきが、熱っぽくなった。冷静さを、失いかけたのだ。

「あっしなんぞは、大名の家臣を嫌って、いまじゃあ気楽なもんだぜ」

新八郎は、追討ちをかけた。言葉の意味だけではなく、およそ武士らしくない口のきき方に、織部は面喰らったようだった。屈辱と戸惑いに、織部は心を乱されたのであった。

「おりゃあ！」

凄まじい気合いとともに、織部はいきなり攻勢に転じた。そこには、一瞬の無理というものが生じた。その一瞬に、新八郎はすべてを賭けた。

新八郎は半歩、横へ跳んだ。新八郎の刀が下から半円を描き、伸びきった織部の右腕を切断していた。織部の右腕と刀が、宙を飛んで地面に転がった。新八郎は、一歩踏み込んだ。斜め左上から振りおろした刀が、織部の首を叩いていた。一枚皮を残して、織部の首は背中へ垂れ下がった。血を霧のように噴き上げながら、首のない織部の身体がゆっくりと崩れて横転した。

「水木さん……！」

伝兵衛が、駆け寄って来た。顔から血の気が、失せていた。

「惜しい」

肩で喘ぎながら、新八郎は顔の汗を拭った。

この日の午後——。

南町奉行所のお白洲にお久とお富が呼び出された。町役人を背後に、お久とお富が蓆の席にすわった。二人にはさまれて、お花という娘もいた。間もなく、大岡忠相も着座した。

「さてと……」

本題にはいると忠相は、お久とお富を見おろして苦笑した。

「娘ひとりに、実の母が二人とは、まこと異なる話じゃ。よって、この場において実の母を、決めることとする。双方ともに、苦情はあるまいな」

忠相は言った。

「何の苦情もございません」

「お久が答えた。
「同じくでございます」
お富も縋るような目つきで、忠相を見上げている。
「念のために尋ねる。これお久、娘の父親は小笠原織部なるものか」
忠相が訊いた。
「さようでございます」
お久は、深々と頷いた。
「お富もまた、それに相違ないな」
忠相は、お富に目を移した。
「相違ございません」
お富はそう答えて、口を一文字に固く結んだ。
「聞いたところによると、小笠原織部は近々さる大名家に、三百石取りで新規お召抱えになるとのことだが、そのほうたちは承知しておったか」
忠相は、質問を続けた。お久もお富も、曖昧に首を振った。
「もしもそうなれば、そのほうたちは三百石取りの武士の娘の生みの親ということになる」
忠相は、冷やかに笑った。二人の女は、目を伏せてしまっていた。
「だが、残念なことに小笠原織部は、もはやこの世の者ではない」
忠相が言った。

「そ、そんな……！」
「まさか……！」
お久とお富が、愕然となって腰を浮かせた。
「今朝、水木某なる武芸者との果し合いに敗れて、小笠原織部は惨死致した。疑うのであれば、織部の死にざまをしかと見届けるがよい。お富、それでもなお、織部の子のお花の実母だと、言い張るかの」
忠相は、お富に言った。
「い、いいえ……」
お富は白洲の砂利に、顔を埋めるようにした。
「三百石取りの武士の子の生みの親にはなりたくとも、この世の者ではない浪人者の娘の生みの親などには、到底なりたくはないであろう」
「恐れ入りました」
「そのほうが織部の子を出産致したることは事実だが、すでにその幼児は他界したものなのであろうな」
「その通りにございます」
お富は音を立てんばかりに、蓆の上で全身を震わせていた。
「さて、お久。そのほうの言い分は、どうなるのじゃ」
忠相が、お久に言った。

「は、はい」
お久は、顔を上げようとしなかった。
「お花の実母はそのほうと認められて、さぞ満足だろうと申したいところだが……」
「ありがとうございます」
「改めて尋ねるが、お花はまことに小笠原織部が娘なのか」
「実は……」
「やはり、そのほうも三百石取りの武士の娘にしたくて、偽りを申しておったのか」
「申し訳ございません」
「織部の子を出産したるは事実でも、お富の場合と同様、幼くしてこの世を去ったもののようだな」
「はい」
「そのことを、お富は知らずして、お花の生みの親などと名乗り出たのか」
「実を申しますと、このお花は大恩あるお方の子でございます。そのお方に頼まれて引き取り、わたしが育てた娘でございます」
「互いに実母であることを申し立てながら、双方とも実母に非ずか」
忠相は短く吐息し、ふと裏居間に飾られた萩の花を思い浮べていた。あの萩の花の可憐さに比べて、お久とお富がいかにも薄汚れた女として感じられたのである。忠相としては珍しく、不快げな顔で裁きの席を立ったのだった。

裏居間に戻ると、そこには水木新八郎がいた。忠相は文机の脇の書院へ、目を走らせた。可憐な萩の花を見て、心の目を休めたかったのである。だが、書院に飾られたばかりの萩の花は、忠相の目に映じなかった。
「萩の花が……」
忠相は思わず、そう口に出して呟いていた。
「萩の花などは一向に見かけやせんが、書院にこいつが散らばっておりやしたよ」
水木新八郎が、右手を差し出した。その右手には七、八枚の銀杏の葉が握られていた。
「まさか……」
「いや、まさかじゃあねえんで……」
「冗談がすぎるぞ」
「冗談なんかじゃあござんせんよ」
「では……」
笑うに笑えないという顔で、大岡越前守忠相と水木新八郎はあたりを見回した。妙に静まり返った日暮れどきの裏居間であった。

巾着切の爪

1

秋の風が、ひどく冷たい。

日射しが明るいだけに、何ともチグハグな気持にさせられる。風が薬研堀の水の上を、音を立てて吹き渡る。水面がチリチリと毛羽立ってから一瞬、曇った鏡みたいに滑らかになる。

風がやむと、元通りの水面に戻る。枯草がサラサラとなり、心細そうに揺れている。享保五年もまだ十月半ばだというのに、いきなり冬が訪れたような寒さが続いている。枯草の中に、野菊が咲いていた。

両国広小路の西側に、米沢町一丁目から三丁目がある。その米沢町三丁目の南側から西側にかけて、鉤型に水を湛えた堀があった。それが、薬研堀であった。米沢町三丁目の南側の薬研堀は、大川に通じている。

大川に通ずるあたりに、橋が架っていた。その橋は、元柳橋であった。米沢町の西側の薬研堀は後年、埋立地になってしまった。だが、享保の頃はまだ、水を湛えた堀だったのである。

その薬研堀の岸の近くに、十人ほどの男たちがいた。髪を小銀杏に結い、着流しに三ツ紋付きの黒羽織、腰には大小、背中には朱房の十手を差していて、一目で町奉行所の同心とわかる男が中心になっている。

あとは下役たち、自身番の連中、岡っ引とその手先であった。もうひとり、毛色の変ったのがいる。三十前の男で、月代を伸ばしていた。着流しで、羽織は用いていない。素足に、雪駄ばきだった。

浪人風に見えるが、藤色の着物には白く三ツ紋が浮き上がっている。大小の刀のほかに、まるで鉄扇代りみたいに、長さ二十センチもある大きな毛抜きを差していた。背が高いこともあって、よく目立つ男である。

町人侍、水木新八郎であった。

野次馬は、遠くにいた。制止されなくても、近づいて来たりはしない。一つには上役人を敬遠するのが、町人の習性となっているからである。もう一つは、惨殺死体を見るのを気味悪がっているためだった。

死骸は、堀端の枯草の上に転がっていた。無地の着物に羽織、白足袋をはいている。草履は、ぬげてしまっていた。男であることは間違いないし、商家の主人だという見当もつく。首がなかった。

見事に、切断されている。切り口に血が凝結し、弾けた肉の中に白い骨が見えていた。あたり一面に血が飛散して、枯草をドス黒く染めている。首は五メートルほど離れて、投げ出

したように転がっていた。

首を見れば、年の察しはつく。四十すぎだろうか。やはり、商家の旦那という顔と髷であった。苦悶していなかった。驚いたように、目を見開いている。驚いた瞬間に、もう首を刎ねられていたのだ。

「大した腕じゃあねえかい」

定回り同心の浅香伝兵衛が、また同じことを口にした。心形刀流の達人で、武芸者と言ってもいい水木新八郎の前では、そのくらいのことしか口にできないのかもしれなかった。

「まったく、その通りだぜ、浅香さん……」

水木新八郎は例によって、乱暴な町人言葉で言った。

「水木さんよりも、腕は上かい」

浅香伝兵衛のほうも、負けず劣らずの下種言葉である。もっとも町奉行所の回り方同心というのは、全員が好んでそうした言葉遣いをするのだった。

「さあ、そいつばかりは、立ち会ってみなけりゃあわからねえ」

水木新八郎は、ニヤリとした。

「辻斬りだろうか」

浅香伝兵衛が訊いた。

「そうじゃあねえだろう」

真顔になって、水木新八郎は首を振った。

「試し斬りか」

「違うねえ」

「どうしてだい」

「辻斬りや試し斬りをする者に、これほどの使い手はいねえと思うぜ」

「しかし、下手人はちゃんと、財布を抜き取って行っているからな」

「そいつは、行きがけの駄賃ってやつだろうよ」

「腕は立つが、根性は卑しい野郎じゃあねえかい」

「たとえば、金になるんなら何でもやる素浪人ってのはどうだい」

「浪人にこれほどの使い手が、いるもんだろうか」

「剣の達人だろうと、学者並みの侍だろうと、仕官の道は閉ざされているって世の中だ。しかも、これだけ大勢の浪人が巷に溢れているんだから、その中には天下無双の使い手だっているかもしれねえ」

「すると、その浪人が何者かに金で雇われて、人斬りをやったってことになるじゃあねえのかい」

「まあ、そんなところだろうよ」

「いきなり、首を刎ねているな」

「そこが、大した使い手だってことよ。相手は観念して、すわっているわけじゃあねえ。据え物を斬るんでもねえ。立っている相手の首を一刀のもとに刎ねるってのは、生易しいこと

じゃあねえんだよ」

「そうだろうな」

「相手に手傷を負わせてから、首を刎ねるというんなら、さして難かしいことじゃあねえんだが……」

「この死骸には、かすり傷一つねえ。いきなり、首を刎ねている」

「辻斬りなんかじゃあねえ」

「もっとも、これで二人目なんだし、辻斬りがこんな紙きれなんぞを残して行くはずはねえや」

浅香伝兵衛は改めて、手にしている紙に目を落した。その紙片は、死骸の懐中に押し込んであったのである。あまりうまくない墨の字で、「二番首　丹波屋重兵衛」と書いてあった。

これが二度目だというのは、同じような事件が五日前に起っているからなのである。やはり、男が殺されたのだった。場所は、柳原土手であった。筋違御門よりほんの少し、和泉橋寄りである。

柳原土手が筋違御門の手前で、切れようとしているあたりだった。柳原通りが、広い火除け御用地に達するところで、夜になると寂しい場所であった。その土手に神田川へ落ち込むような恰好で、死骸が転がっていたのである。

やはり一刀のもとに、首を刎ねた死骸だった。切断された首は当然、土手の斜面を転がって神田川へ落ちることになる。首は見つからなかったが、殺された男の懐中に紙きれが押し込んであった。

それには、「一番首　巳之吉」と記されていた。身許は、間もなく知れた。殺された地点から遠くない神田鍋町のオケラ長屋の住人で、無職の巳之吉という男であった。所持品と着ているものから、長屋の連中が巳之吉であることを確認した。

巳之吉は三十八にもなって、まだ独り身であった。肉親はおろか、親類縁者もなかった。四年ほど前に、それこそ吹き溜りのような貧乏長屋、神田鍋町のオケラ長屋に住みついた男だった。

かつては大変な遊び人だったようだが、オケラ長屋に住みついてからの巳之吉は、不景気そのものであった。定職もなく、毎日ぶらぶらしていた。どうやら武家屋敷の中間部屋にはいり込んで、小博奕に手を出していたらしい。

あとはタカリとか、寸借詐欺とかで、何とか食べていたようである。そんな巳之吉を殺したところで、大した意味はないだろう。だから、武士の試し斬りの犠牲になったのだという見方が、大勢を占めていた。

しかし、そうなると「一番首　巳之吉」という書付けは、どう解釈すべきなのだろうか。「一番首」とあるからには、「二番首」が出ることも予測されると、噂されていた矢先に薬研堀での事件が起ったのである。

「寒いねえ」

浅香伝兵衛が、肩を震わせた。背後は旗本屋敷、元柳橋を渡っての向う側は大名屋敷であ

った。日が暮れたとたんに、人気がなくなる薬研堀だった。そういうところは、風が吹けば吹きっ曝しと相場が決っているようである。

「浅香さん……」

と、そこへ伝兵衛の助手の臨時回りが、息せききって駆けつけて来た。臨時回りは、商家の番頭らしい男を連れていた。「二番首　丹波屋重兵衛」とあるし、もちろん実在の人物に違いない。

遠くから夜の薬研堀へ、わざわざ出かけて来るはずはない。恐らく、この近くに丹波屋という商家があるのだと、浅香伝兵衛は判断した。それで伝兵衛は臨時回りに小者をつけて、丹波屋を捜せと命じたのである。

その臨時回りが、番頭らしい男を連れて戻って来たのだ。主人の名前が重兵衛で、屋号が丹波屋という商家を見つけたのに違いない。まず番頭らしい男が、恐る恐る転がっている首を覗き込んだ。

「旦那さまに、相違ございません」

番頭らしい男が蒼白な顔で、吐き気を堪えながら言った。

「惨い死にざまなので、女房は連れて参りませんでした」

臨時回りが、浅香伝兵衛に報告した。

「どこの丹波屋だい」

浅香伝兵衛が訊いた。

「横山町一丁目の瀬戸物問屋です」

「大店かい」

「そこまではゆきませんが、まあまあの商家でした」

「奉公人は、何人だ」

「下男や下女を数に入れて、十二人ということです」

「女房と、子どもは何人だ」

「女房だけです。まだ二十五だそうで、脂の乗りきった年増でしたよ」

「ずいぶんとまた、若い女房じゃあねえかい」

「丹波屋重兵衛は四十三だそうですから、十八も若いってことになりますね」

「別嬪かい」

「浅香さん好みの、いい女ですよ」

「何を言いやがる」

「重兵衛と一緒になったのは五年前だそうですが、素人女じゃあないと睨みましたねえ。水茶屋の女ってところですよ」

「重兵衛には、二度目の女房かい」

「それが、どうやら初めてらしいんです」

「はっきりしねえな」

「はっきりしないはずですよ。何しろ重兵衛が丹波屋の主人になったのが、七年前のことだ

というんですからね」

「何だと……」

「丹波屋という瀬戸物問屋は、古くからある店なんだそうです。ところが、七年前に当時の主人の丹波屋幸之助が女房と子どもを流行病で一度に亡くしたことから商売に嫌気がさして、店をたたむ決心をしたらしいんですよ。そのとき、そうした噂を耳にして店を譲ってはくれまいかと、話を持ち込んで来たのが重兵衛だというわけなんです」

「それで重兵衛が丹波屋をそっくり買い取って、そこの主人におさまったってえ筋書かい」

「奉公人たちも、幸之助の代からの者がそっくり、いまもいるということなんです」

「重兵衛への奉公人たちの評判は、どんなもんだい」

「素人から始めて商売をよく覚えたし、ものわかりがよくて働き者で、頼りになる旦那さまだと、誰もが褒めていますね」

「夫婦仲はどうだ」

「重兵衛が殺されたと聞いて、気を失ったくらいの女房なんですよ」

「七年前に、素人が丹波屋を買い取って、商売を始めた。そこまではわかったが、それ以前の重兵衛はどこで何をしていたんだ」

「気になるのは、そのことなんです」

「まるで、わかっちゃあいねえのかい」

「あの番頭も女房さえも、重兵衛の前身については何も聞かされていないし、見当もつかないんだそうです」

「だが、何かやっていたはずだぜ。丹波屋を買い取るだけの、まとまった金を持っていたんだ。丹波屋をそっくり買い取るのに、百両や二百両で間に合うはずはねえ」

「それが……」

臨時回りが、首をひねった。

「匂って来そうだね、水木さん」

浅香伝兵衛は、水木新八郎を振り返った。水木新八郎は顎を撫で回しながら、毛羽立つ薬研堀の水面を見据えていた。

「巳之吉は四年前に、神田鍋町のオケラ長屋に住みついた。その前身についちゃあ、何もわかってはいねえ」

水木新八郎が言った。

「重兵衛は七年前に、丹波屋を買い取ってそこの主人におさまった。その前身について、知る者はいねえ」

浅香伝兵衛が、新八郎の口調を真似て言った。

「そして巳之吉が一番首、重兵衛が二番首……」

水木新八郎は、ニヤリと笑った。

浅香伝兵衛が、顔をしかめた。とたんに、ピーッと笛に似た音が鳴った。浅香伝兵衛が歯ぎしりをすると、そんな妙に美しい音が出るのであった。

2

五日後の昼下がりに、水木新八郎は数寄屋橋御門内の南町奉行所を出た。

相変らずの着流しで、素足に雪駄ばきであった。懐ろ手をして、のんびりと散策する足どりだった。冷たい秋風がやんで、爽やかな陽気になった。風さえなければ、まだ寒いという季節ではなかった。

水木新八郎は、日本橋へ向った。目的はなかった。気紛れな、そぞろ歩きであった。雑踏の中を歩くのが好きという奇妙な趣味を、水木新八郎は持っていた。いろいろなものが目につくし、賑やかなのが楽しく感じられる。

いかにも、町人侍らしい好みであった。

十軒店本石町へはいった。このあたりから、通りは賑わっている。真直ぐ行くに従って、混雑がひどくなる。本町をすぎると室町三丁目から一丁目までは、人込みの中を歩くことになる。

そして、日本橋である。江戸で最も、人出のあるところだった。だからこそ、御高札場や晒しものにする刑場があるのだ。道中の起点となる日本橋からの、江戸城と富士山の眺めは絶景とされていた。

室町三丁目あたりから混雑を蹴散らすようにして、傍若無人ぶりを発揮している男たちに、新八郎は気づいていた。薄汚れた着物によれよれの袴をはき、月代と無精髭を伸ばした浪人が三人だった。

ひとりが先に歩き、あとの二人がそれに従っている。三人とも、酒気を帯びているようだった。前を行く浪人ひとりは、ただ人を人と思わず、突き飛ばしたり押しのけたりしながら、ただ黙々と歩いている。

壁をも貫くような鋭い視線であり、尋常な目の配りではなかった。陰気で、凄味のある顔だった。磐石のような重みを感じさせるのは、それだけ腕に自信があるからだろう。事実、かなりの剣の使い手だと、新八郎は見て取っていた。

あとから行く二人は、まるで駄目な痩せ浪人と、新八郎は判断していた。隙があるといった以前の問題で、まったくの腑抜けであった。だらしなく酒に酔い、ただ浮かれているだけである。

威張っているのは、前を行く浪人の腕に頼ってのことだった。何かあっても、仲間が片付けてくれるからと、安心しているのである。それで、わがもの顔で歩いている。虎の威を借る狐であった。

「軍資金は、拙者が預かっておる。好きなように、散財の場所を選んでくれ」

左側の浪人がそう言って、これ見よがしに財布を差し上げたりしている。

「ほれ……」

右側の浪人が、すれ違った娘の尻を撫でた。

「きゃあ……！」

娘が、悲鳴を上げる。二人の浪人は、手を叩いて喜んでいる。
「貴公は女か」
「当然だ」
「では、拙者は男にしよう」
「男だと……？」
「面白いだろう」
「一緒にやるか」
「よかろう」
「澄まし顔の年増が来る。あれを、やるとしよう」
「拙者は、あの手代ふうの男をやる」
「参るぞ」
右側の浪人が、前から来た年増の下腹部に手を伸ばした。女の恥ずかしい部分を、強引に摑むようにした。同時に左側の浪人が、やはり前から来た手代ふうの若者の股間を、いきなり蹴りつけた。
「ああ……！」
年増が腰を引くようにして、その場にすわり込んでしまった。
「あっ！」
手代ふうの若者は、尻餅をついて転がった。人波が大きく揺れて、あちこちで悲鳴が聞えた。二人の浪人だけが、大きな口をあけて笑っている。前を行く浪人は、知らん顔であった。新八郎の関心も、その騒ぎには向けられていなかった。新八郎の目は、二人の浪人のすぐ後ろを歩いている若い娘に、注がれていたのだった。十七、八の娘であった。その身装が、貧しさを物語っていた。
巾着切か――。
新八郎は、胸のうちで呟いていた。どうやら娘は、左側の浪人の懐中を狙っているらしい。その浪人の懐中には、見せびらかしていた財布がはいっている。しかも、新八郎が三人連れの浪人に気づいたときから、娘はずっとその背後にいたのだった。
玄人と言える巾着切ではないと、新八郎は見抜いていた。すっかり固くなっているし、顔から血の気が引いている。決行が遅れているのも、迷いがあるからだろう。勇気が不足しているし、明らかに気遅れしているのである。
娘は左側の浪人の横へ出て、寄り添うような恰好になった。その娘を浪人が、見過すはずはなかった。浪人は待っていたとばかりに、歩きながら娘の肩に手を回した。
「あれ……」
娘は逃げようとした。
「よいではないか」
浪人が、娘を抱き寄せた。娘は浪人のほうへよろけて、その胸に倒れ込むようにぶつかった。

「やめて、やめて下さい！」

娘は浪人の胸を押しこくって、激しくもがき続けた。浪人は笑いながら、娘を突き放した。やった――。

新八郎は、胸のうちでニヤリとした。何も気づかずに、浪人たちは遠ざかって行く。娘は人波を掻き分けて、道の端へ寄ろうとしていた。新八郎は、娘のあとを追った。太物問屋の天水桶の脇に立って、娘は呼吸を整えていた。

新八郎は娘に近づくと、その二の腕を摑んだ。娘は飛び上がらんばかりに驚いて、新八郎の手を振り払おうとした。新八郎は抵抗しても無駄だというように、ゆっくりと首を振って見せた。

紙のように白くなった顔を伏せて、娘はがっくりと肩を落した。もう娘は、逃げようとしなかった。すくみ上がってしまい、どうしようという気力も失ったのに違いない。新八郎は、娘の腕を引っ張った。

「この人込みじゃあ、話もできねえだろうよ」

新八郎は言った。

娘は怪しむように、新八郎へチラリと目を走らせた。外見に似合わぬ伝法な言葉遣いが、娘には不思議だったのだろう。新八郎は目立たないように娘の手首を摑んで、人込みの中を歩き出した。

通りを逆戻りして、十軒店本石町の四ツ辻から本石町二丁目へはいった。更に南へ折れて常盤橋御門前を抜け、一石橋を渡るとようやく人通りが疎らになる。歩きながら話をしても、人に聞かれる心配はなかった。

「名を聞かせてもらおうか」

娘の手首を握ったままで、新八郎は言った。

「花と申します」

娘は項垂れて、小さな声で答えた。

「お花ちゃんかい」

新八郎は、娘の横顔を見やった。顔色が悪くて痩せてもいるが、可憐な感じがして悪い器量ではなかった。

「住まいはどこだ」

「長崎町の清洲長屋です」

「親は達者かい」

「おとっつぁんは去年の暮に、普請場の足場から落ちて死にました」

「左官職か何かだったんだな」

「はい」

「そいつは、気の毒だ」

「おっかさんは、床についたきりの病人です」

「ますます、不運じゃあねえかい」

「それに弟と妹が、五人もいて……」
「おめえが、いちばん上ってことか」
「はい」
「食うや食わずの貧しい暮しってことになり、病人や幼い弟妹たちに何か食べさせてやりてえと思い余って、おめえは心ならずも他人さまの懐中物に手を出した」
「その通りなんです」
「お定まりの身の上話と、言いてえところだが……」
「でも、本当なんです」
「まあ、いいさ。家主を呼び出して問い質せば、すぐにわかることだぜ」
「え……！」
お花という娘は、愕然となって足をとめた。堀に沿った道が続いている。そこは呉服橋御門と、鍛冶橋御門の中間あたりだった。
「どうしたい」
新八郎は、構わずに歩き続けた。
「大家さんを、呼び出すんですか」
引っ張られる恰好になって、お花という娘は泣き出しそうな声で言った。
「当りめえじゃあねえかい。おめえは、巾着切なんだぜ。本来ならば、自身番に突き出すところだ。だが、自身番じゃあ、いろいろといやな思いをすることになる。岡っ引や定回り同心にも、嬲られるだろうよ。それじゃあ、まだ初心な小娘が可哀想だと思うから、こうして例のねえ扱いをしてやっているんじゃあねえかい」
「お願いです。お見逃しを……」
「そうはいかねえ」
「堪忍して下さい。わたしがこんなことをしたって、おっかさんの耳には入れたくないんです！」
「惨いことを言うようだが、おめえは悪事を働いたんだ。たかが巾着切と思うかもしれねえが、天下の御定法を破ったことには違いねえのよ」
「お願いです、後生です、見逃して下さい！」
「人が、見ているぜ」
「これも、お返ししますから……」
お花が財布を、新八郎の顔の前に差し出した。
「こいつは、預かっておくぜ」
その財布を受け取って、新八郎は懐中に納めた。
「助けて……！」
お花は、そう叫んだ。これから人気のないところへ連れ込んで、新八郎は弱みにつけ入りお花の身体を弄ぶつもりでいる。お花は、そのように思っているらしい。無理もない。新八郎が南町奉行所の客分などとは、その外見から察して判断できるはずがないのである。

「心配するねえ。南町奉行、大岡越前守さまのことだ。罪は罪としても、悪いようにはしねえだろうよ」

新八郎は言った。

その一言で、お花は放心状態に陥った。町奉行の名前を持ち出されて、お花は強い衝撃を受けたのである。圧倒され、覚悟しながらも、絶望感に捉われたのだ。

比丘尼橋を渡ると、間もなく数寄屋橋御門であった。新八郎はお花を、南町奉行所の番所へ連れ込んだ。新八郎でなければできないことであり、まったくの例外と言えた。現行犯であろうと、犯人を直接、町奉行所へ引っ張って来るというのは、異例のことであった。

町人の犯罪者はまず自身番で取調べを受けて、それから大番屋送りになる。そのあと、町奉行所の本格的な吟味が始まるのであった。

新八郎はお花を吟味方与力に任せたが一応、大岡忠相にもこの一件について報告しておいた。しかし、お花の一件が重大な事件に結びつくだろうといった予測は、もちろん新八郎にもなかったのである。

翌日の午後、下城した大岡忠相はすぐに、新八郎を裏居間へ呼びつけた。裏居間は南町奉行所の役宅と番所の境にあって、大岡忠相はよくこの座敷を密談や内々の打ち合せの場として使っていたのだ。

新八郎が裏居間へ行くと、すでにそこには浅香伝兵衛が控えていた。脇息に凭れている大岡忠相の前には、見覚えのある財布が置いてあった。浪人の懐中から、お花が掏り取った財布だったのだ。

「町人侍、思わぬ拾いものを致したぞ」

新八郎が着座するのを待って、大岡忠相は目の前の財布を扇子で叩いて見せた。

「どういうことでござんしょう」

新八郎は訊いた。

「この財布の中身じゃ。六両二分と小銭のほかに、これなる書付けがはいっておったのだ」

大岡忠相は一枚の紙きれを、扇子の上にのせて差し出した。伝兵衛が、それを受け取った。伝兵衛と一緒に、新八郎はその紙きれに書かれている字を読み取った。

「こ、これは……！」

伝兵衛が、目を見はった。新八郎は、ニヤリとした。その紙にはあまりうまくない墨の字で、「三番首　江戸屋太助」と記されていたのである。

3

江戸屋太助だけでは、どうすることもできなかった。江戸屋という屋号の商家は幾らでもあるし、太助もまた平凡な名前であった。商売もわからないし、どこに住んでいるのかも不明である。

広い江戸に、多くの商家がある。その中から短時間のうちに、江戸屋太助を見つけ出すことは不可能であった。巳之吉、丹波屋重兵衛に次いで、江戸屋太助なる者が首を刎ねられる。

そうとわかっていて、手も足も出ないのだ。恐らく今夜にでも、江戸屋太助は殺されるだろう。いや、すでに殺されているかもしれない。巳之吉が殺されて五日後に、丹波屋重兵衛が殺された。

丹波屋重兵衛が殺されてから、もう六日がすぎている。時期的にいっても、江戸屋太助が殺される頃であった。それに、例の三人組の浪人は、財布を掏られたことに気づき、江戸屋太助殺しを急ごうという気持になるはずである。

お花に訊いても、明らかになることではなかった。お花は財布の中身については、何も知らなかったのである。そのお花の吟味は、すでに終っていた。現行犯なので、取調べも簡単にすんだのだ。

長崎町の清洲長屋の家主、その家主を含めての五人組を呼んで事情を聞いたところ、お花が同情すべき境遇にあることが明らかになった。左官職だった父親が事故死したことから、七人の家族は清洲長屋へ今年の初めに移転して来た。

母親は気落ちして病気になり、未だに床についたままである。五人の弟妹が幼いので、お花は働きに出ることができない。同じ長屋の住人たちの情けに縋ったり、町内の手伝い仕事をやったりで、お花は何とか母親と弟妹を養って来た。

だが、貧しさから、解放されることはなかった。次第に追いつめられてお花は、ニッチもサッチもゆかなくなった。それで恐らく、お花は出来心から巾着切の真似事など、やってしまったのに違いない。

つきましてはお慈悲をもって、お花に軽いお咎めをと、家主と五人組は嘆願した。もともと巾着切の罪は、それほど重くなかった。初犯でまず入墨、二度目で江戸払いという罪だった。

日本橋を中心に五里四方のうちには、住めないという刑罰である。しかし、旅姿でいれば江戸にいようと、住んでいるのではなく通行しているだけ、という主張が認められる。それで相変らず、江戸市中で巾着切を続けている。

だが、四度目に捕えられると、盗賊と看做されて、容赦なく死罪である。そうしたことから巾着切の現役は十四、五から二十四、五までで、殆どが死罪になると言われている。三十歳をすぎた現役の巾着切は、まずいなかったわけである。

お花も初犯だから、入墨の刑ということになる。しかし、十七歳の娘が入墨されたら、その一生に影響する。堅気の男とは夫婦にもなれないし、世間から白い目で見られて、その汚点は生涯消えないのである。

だから、入墨は勘弁してやってくれと、家主たちは嘆願したのだった。それに対して大岡忠相は、お花に六十日間の入牢を申し付けた。南町奉行所内にある仮牢へ、入れておけという命令であった。

これは、判決ではなかった。とりあえず六十日間、仮牢へ入れておいてから、改めて判決と刑を言い渡すわけである。なぜ、そんなことをするのだろうかと、関係者一同は首をひねったくらいであった。

ほかに大岡忠相から清洲長屋の家主に、お達しがあった。お花が入牢中、母親と弟妹たちの面倒を、責任を持って見るようにということだった。お花の件に関しては、六十日後の判決を待つほかはなかった。

翌朝、新八郎は伝兵衛の巡回に同行して、早々に南町奉行所を出た。中間と小者が、お供についている。定回り同心が巡回するコースは、江戸市中を四つに分割して、それぞれ決められていた。

伝兵衛の場合は、日本橋より北で内神田、両国広小路、南は浜町、高砂町、小網町のあたりまでだった。各町の自身番を回り、何か異常はないか確認するのである。事件があった自身番では、首を長くして定回り同心の巡回を待っている。

伝兵衛、新八郎の一行は北鞘町、本船町から始めて荒布橋を渡り堀江町、小網町と回った。川の匂いを嗅ぎながら行徳河岸、汐留橋をすぎる。左側は大名屋敷、右側は大川であった。

「その三人組の浪人が、下手人ってことになるんだねえ。水木さん……」

伝兵衛が、思い出したように言った。

「どう見たって、小判を何枚も持てるような身分じゃあねえ。それに、三番首の書付けを、財布の中に入れていたんだ。今度の一件の下手人と見ねえほうが、おかしいんじゃあねえのかい」

新八郎はしきりと、顎を撫で回していた。苛立っているのである。

「巳之吉の一番首、丹波屋重兵衛の二番首の書付けと照らし合せてみたんだが、江戸屋太助の三番首とまったく筆跡が同じだったぜ」

「だったら尚更、あの三人組の浪人が下手人ってことになる」

「書付けを財布の中に入れて持ち歩いていたとなると、手めえたちで書いたものじゃあねえだろう」

「浪人も武士のはしくれ、もう少しマシな字を書くだろうよ」

「人殺しを三人の浪人に頼んだ野郎が、三枚の紙に字を認めたんだな」

「今度はこいつの首を刎ねてくれと、浪人たちに書付けを渡すんだ」

「首を刎ねるのは、三人のうちのひとりに限られているんだろう」

「そうだ」

「水木さんの話だと、ひとりだけ腕の立ちそうな浪人が、いたそうじゃあねえかい」

「あれは、なかなかの使い手だ。一刀のもとに首を刎ねることができて、少しも不思議じゃあねえ腕前だろうよ」

「あとの二人は……？」

「話のまとめ役と見張り役ってところじゃあねえのかい」

「なるほどねえ」

「それにしても、口惜しいことをしちまったな」

「何がだい」

「下手人を目の前にしながら、そいつに気がつかなかったってことよ」

「そいつは水木さん、仕方のねえことじゃあねえのかい」
「だが、腹が立つ」
「それより、何とも合点がいかねえことが、一つあるんだがなあ。どうして首を刎ねたあとの死骸の懐中に、例の書付けを押し込んでゆくんだろうか」
「さあ……」
「一番首が巳之吉とか、二番首が丹波屋重兵衛とか、わざわざ教えることはねえじゃあねえかい」
「死骸の身許を、世間に知らせるとは、ご親切な話だ」
「人殺しを頼まれた浪人たちが、勝手にやっていることじゃあねえだろう」
「人殺しを頼んだ野郎の、指図に決っていらあな。殺したあと死骸の懐中に入れて来るようにと、例の書付けを浪人どもに渡しているんだ」
「そんなことをして、いってえ何になるんだ。損することはあっても、得はしねえだろう」
「一番首、二番首ってことで殺すのは、意趣返しとしか思えねえ。恨みを晴らしてやったぞと、世間に知らせてえって思いがあるのかもしれねえ」
「何とか、その謎を解きてえもんだ」
「その前に、解かなくちゃあならねえ謎がある。巳之吉、丹波屋重兵衛、江戸屋太助がどんな形で、関わりを持っていたかってことよ」
「いずれにしても、頭が痛いことばかりだぜ」

そう言って伝兵衛は、自分の頭を叩いて見せた。
川口橋の手前であった。右手は三ツ股と呼ばれる舟遊びの名所だが、この時代にはまだ中洲も埋め立ててなかったし、繁盛する船宿も見当らなかった。大川の水が永代橋の手前で浅草川、新堀、霊岸島へと三つの方向に流れることから、三ツ股と称されていたのである。
その三ツ股に面している川岸に、人だかりがしていた。伝兵衛の姿に気づいたらしく、急き立てるような声が飛んで来た。伝兵衛と新八郎は走り出すと、音を立てて川口橋を渡った。そこに集まっている顔に、伝兵衛は見覚えがあった。浜町河岸の西側の、高砂町の自身番でいつも顔を合わせている連中だった。町代、書役など町役人が顔を揃えている。五人組の責任者である月行事も加わっているし、あとは怖いもの知らずの河岸の若い衆たちである。
「お待ちしておりました」
青い顔で、町代が挨拶をした。その背後に、蓆を掛けたものがあった。小者が、蓆を取り除いた。死骸である。首がなかった。伝兵衛と新八郎はしゃがみ込んで、しみじみと死骸を眺め回した。
「やっぱり、手遅れだったか」
伝兵衛が、舌打ちをした。
「夜明け前に、河岸の者が見つけましてございます」
町代が言った。
「高砂町の住人かい」

伝兵衛は、町代を見上げた。
「はい」
「江戸屋太助か」
「どうして、そうとご存じなんで……？」
「お上は何もかも、お見通しよ」
「その通り、江戸屋太助でございます」
「年は……？」
「四十五と、聞いております」
「女房子どもは、いるのかい」
「子はおりませんが、おかみさんがおります」
「まさか、女房が二十も若いってえんじゃあねえだろうな」
「驚きました。そこまで、お見通しなんでございますか」
「やっぱり、若いのかい」
「江戸屋のおかみさんは二十六、旦那より十九も若いってことになります」
「いつ、一緒になったんだ」
「六年前だったと思います」
「女房の実家は……？」
「一応、武州川崎ということになっておりますが、旦那が手を付けて江戸屋へ引っ張り込んだという話で、女房代りの妾だと蔭口を叩く者もいるようでございます」
「江戸屋ってのは……？」
「舟具問屋でございます」
「このあたりの舟具問屋なら、堅い商売だろうな」
「はい。地味ではあっても、商売が下り坂になるということはございません」
「奉公人は、どのくらいいるんだ」
「十人たらずでございます」
「江戸屋の暖簾は古いのか」
「いいえ、高砂町で商売を始めて、まだ七年ほどでございます」
「七年だと……！」
「はい。七年前に売りに出ていた店を買って、江戸屋という舟具問屋を始めたのでございます」
「それまでの太助が、どこで何をしていたのか、知る者はいねえとか言うんじゃあねえのかい」
「実は、その通りなのでございます」
「太助の前身についちゃあ、何もわかっていねえってんだな」
「はい」
「太助の評判は、どんな工合だ」

「上々でございます。苦労人らしく腰が低くて、話のわかる旦那。気前がよくて、親切なお人。このように江戸屋の奉公人も町内の者も、太助さんのことを悪くは申しませんので……」

「女房は、別嬪かい」

「そりゃあもう……」

「何から何まで、丹波屋重兵衛にそっくりそのままじゃあねえかい」

伝兵衛は、立ち上がった。首は三メートルほど、離れたところに転がっている。すでに町代たちが、太助の首であることを確認しているのだ。いまさら首を検分したところで、何の役にも立たないだろう。

「財布は抜き取られているし、懐中にはこの書付けだ」

と、新八郎が、紙きれを差し出した。「三番首　江戸屋太助」と書いてある。但し、筆跡が違っていた。本物の書付けを財布と一緒に掏られてしまったので、浪人のひとりが改めて同じ文句を書き、死骸の懐中に残して行ったのだ。

「まったく、わからねえ」

伝兵衛が、溜め息をついた。

「あっしは逆に、道が開けたような気がするぜ」

そう言って、新八郎はニヤリとした。

4

次の日も朝から、伝兵衛は巡回に出かけて行った。回り方同心の辛いところである。月番が変って北町奉行所の掛りになっても、定回り同心は毎日、決ったコースを巡回しなければならない。南、北の区別に無関係な、定回り同心の勤務ぶりであった。

その点、新八郎は気楽である。暇を持て余していても、大岡忠相のお声がかりでない限り、新八郎に何かを強制したり命令したりする者はいないのだ。だが、この日の新八郎は朝から、仕事らしい仕事に打ち込んでいたのだった。

筆頭与力の許可をもらって、新八郎は奉行所に保管されている記録を調べ始めたのであった。食事抜きであり、番茶の一杯も飲まなかった。新八郎が文書蔵から出て来たのは七ツ、午後四時をすぎてからであった。

新八郎は同心詰所へ行き、巡回から帰って来たばかりの伝兵衛を呼び出した。新八郎は伝兵衛を、裏居間の隣にある内寄合座敷へ連れ込んだ。内寄合座敷は広間で、二人だけでいるには寒々とした感じであった。

新八郎が取り出したのは、『盗賊御手配書』の写しで、正徳二年の十二月に作成されたものだった。新八郎が一日がかりで、文書蔵の中から捜したのは、このわずか五枚綴りの記録だったのである。

「水木さんはどうして、盗賊と睨んだんだね」

火種のない手焙りを、伝兵衛は膝の前に引き寄せた。

「一つには、丹波屋重兵衛も江戸屋太助も、まとまった金を持っていたからさ。それまで何をやっていたのか皆目わからねえってのに、商家をそっくり買い取れるだけの金を握っている。まずは、盗賊ってことになるんじゃあねえのかい」

新八郎は片膝だけを立てて、柱に寄りかかっていた。

「盗賊だからこそ、前身を語りたがらねえか」

「そういうことにもなる」

「そう言われりゃあ、確かにそうだ」

「盗賊が足を洗って、堅気になってみねえ。悪い評判は立てられたくねえし、二度と道を踏みはずしたくねえって心が先に立つ。それで、連中はみんなに好かれよう、よく思われようと努めるのさ」

「それで重兵衛と太助も滅法、評判がよかったってわけかい。腰が低い、親切だ、頼もしい、ものわかりがいい、話がわかる、気前がよくて、苦労人だってね」

「まあ、苦労人だってことには、間違いねえだろう」

「盗賊も、苦労するだろうからな」

「さて、そこで首を刎ねられた連中の前身を盗賊と見て、古い御手配書を調べたんだが……」

新八郎は、記録文書を開いた。

『雲の重兵衛とその一味の事』とあって、四人組の盗賊が引き起した事件が書き連ねてあった。それによると正徳元年二月から正徳二年の十一月まで、約二年間に二十六回の強盗を働いている。

人をひとりも殺傷していないのが特徴で、刀を抜き放って押し込むのだが、家人を残らず縛り上げるだけで金を強奪する。あっという間に目的を果して、疾風の如くに逃げ去るのであった。

人を殺傷しないので、大勢の被害者からの証言がある。盗賊みずからが名乗ったりするので、その四人組に関する情報は豊富であった。人を殺傷しないのも利口なやり方だし、実に大胆不敵な盗賊と言えるのだった。

二年間に二十六軒の商家に押し込み、合計で四千九百両を強奪している。そして、正徳二年の十一月の押し込みを最後に、ふっつりと消息を絶ってしまっているのだ。その後に大々的な手配を繰り返しているが、雲の重兵衛の一味は二度と姿を現わさなかった。

事件も起さないし、雲の重兵衛の一味も捕えられなかった。いつの間にか、その盗賊に関しては沙汰やみとなり、世間も噂することなく、いまでは雲の重兵衛という名前すら思い出す者がいないのである。

一味四人の人相書、異名、推定年齢が記されてあった。人相書は覆面をして、目だけを出している顔なので、あまりアテにはならなかった。

雲の重兵衛　三十五、六。
千場の太助　三十七、八。
修羅の巳之吉　三十ぐらい。
相模（さがみ）の仙右衛門　三十一、二。

「こいつは、驚いた」
目を丸くして、伝兵衛が笛の音を鳴らした。歯ぎしりしたのである。
「間違いねえと、思うがねえ」
新八郎が冷やかな目で、四人の盗賊の名前を見やった。
「重兵衛、太助、巳之吉と揃っているじゃあねえかい」
「いずれも、親からもらった本名なんだろう。本名はなかなか捨てにくいものだから、足を洗ってのちもそのまま名乗ったのに違いねえ」
「正徳二年ってえのは、いまから何年前になるんだ」
「八年前よ」
「丹波屋重兵衛は四十三だというから、八年前が三十五、六でぴったりだ」
「巳之吉は三十八だから、八年前が三十ぐらいでいいわけだ」
「江戸屋太助は、四十五だということだ。八年前が三十七、八で、これも狂っちゃあいねえ」

「つまり首を刎ねられた三人は、八年前の盗賊仲間だったということになる」
「二年の間に二十六回の押し込みを働いて、四千九百両を奪った。それで、ぴたりと盗賊をやめて、さっぱり足を洗っちまったのか。頭のいい連中だな」
「二年の間、派手に金を使うということもしなかったんだろう」
「二年の間に四千九百両を、そっくり貯め込んだってわけか」
「まあ何やかやで、出費があったとしても、二年間で九百両どまりだろう」
「それでもまだ、四千両も残っている。そこで、ひとり頭が千両の分け前で、四人は足を洗ったってことになる」
「千両ありゃあ一軒買って、商売を始められるんじゃあねえのかい」
「それが丹波屋も江戸屋も、いまから七年前のことだった」
「七年前は正徳三年、この四人組の盗賊が消えちまった正徳二年の翌年だぜ」
「何から何まで、ぴったりだ。水木さん、こいつに間違いはねえ」
「だったら浅香さん、次はどうして八年前の盗賊仲間が三人も殺されたのかってことだ」
「うん」
「あっしの考えは、こうなるんだがね。四人の盗賊仲間のことを知っているのは、当の四人だけだろう。四人がそれぞれ足を洗って正業についたってことも、承知しているのは当の四人だけに違いねえ」
「ほかの者が、かつての四人の盗賊仲間を、次々に殺してゆくなんてことは、ちょいとばか

り妙な話だ」

「それより四人のうちのひとりが、かつての仲間を殺したと考えるほうが、合点がゆくんじゃあねえのかい」

「八年もたってからの、仲間割れってことになるぜ」

「たとえば何ぞというときのために、四人だけが知っている隠し金があったとしたらどうだい。その隠し金をひとり占めにしようと、仲間たちをみな殺しにすることだってあるだろうよ」

「そうだとすると、三人組の浪人を雇ったのは誰か、はっきりしているじゃあねえかい。四人のうち三人は、すでに殺されている。残ったのは、ただひとり……」

「相模の仙右衛門か」

「よし、やってみるぜ。何が何でも、この仙右衛門ってのを捜し出すんだ」

伝兵衛は、手焙りを押しやった。ここまで来たからにはと、伝兵衛は意気込んでいるのだった。

「前身のはっきりしねえ仙右衛門って男が、主人におさまっている商家を捜してみたらどうだろう」

腰を浮かせた伝兵衛を、新八郎は見上げて言った。

「そうしよう」

急に厳しくなった顔で、伝兵衛は深く頷いた。

伝兵衛は翌日から、小者という公称の岡っ引を動員して、仙右衛門捜しに取り組ませた。伝兵衛が張りきっただけのことはあって、二日後の夕方にこれはと思える情報が舞い込んだ。

両国広小路からさほど遠くない馬喰町三丁目に、相州屋という煙草屋がある。煙草が行商から店売りに変ってからも、大勢の職人が店先で煙草を刻んでいるというのは、まだ大変に珍しかった。

だが、この相州屋は店先で五人の職人が、煙草を刻んでいるということで知られていた。刻み煙草は五分切りという荒いものだが、相州屋ではかなり細かく刻むと好評でもあった。

奉公人は職人も含めて二十人余、主人の名は仙右衛門で、年が四十歳だという。七年前に小さな煙草屋を買い取って、現在の相州屋に発展させたということだった。未だに独り身だが、妾を囲っているらしい。

相模の仙右衛門と相州屋仙右衛門であれば、同じようなものである。七年前に、店を買い取っている。四十歳という年齢にしても、ぴったりであった。

その夜、伝兵衛と新八郎は、馬喰町の相州屋へ向った。相州屋はもう、表戸をおろしていた。戸を叩くと、潜り戸があいた。南町奉行所の提燈を見て、手代が奥へ駆け込んで行った。

伝兵衛と新八郎は、潜り戸から店の中へはいった。仙右衛門が逃げ出すようであれば、この場で捕えるつもりである。二人は緊張した面持で、仙右衛門が姿を現わすのを待った。

だが、奥から出て来たのは、五十に近い男であった。仙右衛門ではなかった。男は相州屋の番頭だということで、丁寧に挨拶をした。見るからに実直な小心者という感じで、嘘のつ

ける男ではなかった。

「旦那さまはただいま、江戸を離れておりまして……」

番頭は矢鱈と、頭を下げながら言った。

「旅に出たのかい」

伝兵衛が訊いた。

「はい」

「旅立ちは、いつのことだ」

「丁度、半月前のことでございます」

「帰って来るのは、いつ頃だい」

「十一月か十二月になるのではないかと、思っております」

「遠くまで、行ったらしいな」

「いいえ、遠いところではございません」

「行った先は、どこなんだい」

「相州の箱根でございます」

「箱根の湯治場かい」

「さようでございます」

「すると、湯治に出向いたんだな」

「はい。この夏から足腰の痛みがひどくなりまして、湯治をすすめられて旦那さまもその気になったのでございます」

「ひとりで、出かけたのかい」

「はい。独り身の身軽さ、というものでございましょう」

「丁稚のひとりも、供に連れて行かなかったんだな」

「商売熱心な旦那さまでございますから、湯治に行く者のために人手を割くことはできないとおっしゃって……」

「商売熱心か」

「はい」

「苦労人で、ものわかりがよくて、親切で頼もしくて、気前がいいってんだろう」

「まったく、おっしゃる通りの旦那さまでございます」

「おめえさん、仙右衛門が七年前まで、どこで何をやっていたか、まるっきり知らねえんじゃあねえのかい」

「はい、存じ上げません」

「半月前に江戸を立ったというのは、確かな話だろうな」

やや凄味を利かせて、伝兵衛は言った。

「間違いございません」

番頭は萎縮してか、両手をついて答えた。伝兵衛は、新八郎に視線を移した。新八郎は、目で頷いた。番頭は嘘をついていない、という意味であった。

「ところで旦那から、箱根に無事ついたという便りがあったかい」
新八郎が、番頭に訊いた。
「いいえ、ございません」
番頭は、不安そうに首を振った。
相州屋を出ると、外は真昼のように明るかった。空に大きな月があって、銀色の冷たそうな光を放っていた。眠ろうとしている江戸の家々の屋根が光り輝き、地上に落ちている影がくっきりと濃かった。

5

伝兵衛が、提燈の火を消した。月光だけで十分であり、提燈の火を必要としなかったのである。新八郎は伝兵衛の袖を引いて、両国広小路のほうへ歩き出した。方角が逆だったが、伝兵衛は黙ってついて来た。
何かあると、察したのであった。用もないのに、逆の方角へ向うはずはなかった。それに、新八郎の目つきが違っていた。伝兵衛は剣の達人ではなかったが、新八郎の眼光に殺気に通ずるものがあるということぐらいは、読み取れるのだった。
「連中は相州屋が気になって、近くから目を光らせていた。そこへ、南町奉行所の回り方同心がやって来た。それで連中も、何とかしなくちゃあならねえって気になっているはずだぜ」

月光を浴びた青白い顔で、新八郎はニヤリと笑った。
「それで、こっちから誘いに乗るのかい、水木さん……」
表情を固くして、伝兵衛が言った。
「そうすりゃあ、片付くんだ。この機を逃すと、かえって面倒なことになる」
懐ろ手をしたままで、新八郎は左右の袖を振って見せた。
広い通りへ出た。突き当りが浅草御門、左が柳原通り、右へ行けば両国広小路であった。新八郎と伝兵衛は、右へ曲った。人通りが疎らであり、神田川に点々と灯が映じているのも寂しい夜景であった。
「あの連中さ」
左手の柳橋を通りすぎたあたりで、新八郎が言った。前を行く四つの人影を、新八郎は見据えていた。そぞろ歩きの四人のうち、ひとりだけが町人風であった。あとの三人は、浪人である。
「ひとり、余計じゃあねえのかい」
伝兵衛が、眉をひそめた。
「あの町人こそ、浅香さんがお縄にしなくちゃあならねえ男だぜ」
「だったら、おれが召捕る」
「三人の浪人は、あっしが引き受ける」
「大丈夫かい、水木さん」

「さあね」
「やってみなくちゃあ、わからねえか」
「その通りだ」
新八郎は、足を早めた。四人の男は、両国橋を渡って行く。ゆっくりした足どりは、新八郎と伝兵衛を誘うためであった。新八郎と伝兵衛は足早になっているので、みるみるうちに距離が縮まった。
橋番所に明りがともっているだけで、両国橋の上にはほかに人影がなかった。橋の中ほどで、新八郎と伝兵衛は四人の男に追いついた。それを待っていたように、四人の男が一斉に向き直った。
凄味のある浪人は、橋の欄干に凭れていた。町人風の男は、その蔭に隠れている。二人の浪人が、緊張した顔つきで刀を抜き放った。静かであった。橋の上に六つの濃い影が落ちて、そのまま動かなくなった。
「町奉行所の回り方に、刃向うつもりかい！」
伝兵衛の声が、静寂を破った。
「貴公たちを斬り捨てなければ、どっちみち逃れられんのでのう」
浪人の一方が言った。お花に財布を、掏られたほうの浪人であった。
「その腕で、人が斬れるのかねえ」
新八郎が、懐ろ手を抜き取った。

「ほざくな！」
「おのれ！」
二人の浪人が冷静な判断を省いて、いきなり攻撃に転じた。新八郎は腰を落して一歩踏み込むと、柄に手をかけるのと同時に刀を鞘走らせていた。右側の浪人が、激しく弾き飛ばされた。
浪人は脇腹を断ち割られて、橋の欄干まで横へのめって行ったのである。腹の中央まで、深手を負っていた。胴を半分、輪切りにされたようなものだった。橋の欄干にぶつかって、浪人はその場に倒れ込んだ。あとは出血のために絶命するのを、待つばかりであった。
お花に財布を掏られた浪人が、反対側の欄干へ走った。逃げたのである。新八郎は、それを追った。浪人は、欄干の上に跨がった。大川へ飛び込んで、逃げるつもりなのである。
新八郎の刀が下から、銀色の半円を描いた。その刀は浪人の右腕を切断し、肩を削り、首の側面を抉って、顎を砕いていた。浪人は欄干の上で一度、飛び上がるという恰好になっていた。
「わあっ！」
絶叫を残して、浪人の姿は欄干の上から消えた。大きな水音が聞えて、すぐまた静かになった。凄味のある浪人が、それを見定めると同時に抜刀した。果して、大した腕の持ち主であった。
「心形刀流、水木新八郎」

新八郎は、中段に構えた。
「直心影流、但し名乗るほどの者ではない」
浪人は、下段の構えをとった。
「首を、もらい受けるぜ」
新八郎は言った。
「同じく……」
浪人は一瞬にして、上段に振りかぶっていた。新八郎は、跳躍した。腰のあたりへ来た浪人の刀を受けとめて弾き返すと、新八郎は次の瞬間、水平に薙いでいた。新八郎の足が橋の上に戻ったとき、黒いものが墨のような霧を舞い上げて宙を走っていた。
月光の中で鮮血は墨となり、首は黒い玉のように見えた。浪人の首は、欄干を越えていた。
間もなく、小さな水音が聞えた。それから首を失った浪人の身体が、朽ち木を倒すように引っくり返った。
「すんだかい、浅香さん」
新八郎は刀を鞘に納めながら、町人風の男を縛り上げている伝兵衛に声を立てた。
「こいつが、相州屋仙右衛門だろう」
伝兵衛は、縄をかけた男を引き起した。
「浅香さん、考えてみねえ。四人のうち三人までは、同じようなものじゃあねえかい」
「三人とは……？」

「丹波屋重兵衛、江戸屋太助、それに相州屋仙右衛門さ」
「三人とも七年前に店を手に入れて、商売もうまくいっていたってことかい」
「そうよ。それに三人とも、いい女を嫁にしたり、妾にしたりしている。この三人には、いまの暮し向きに何の不満もなかったんだ」
「わが世の春ってところだったな」
「いまのままの暮し向きが続いてくれりゃあ、それこそ文句のつけようもなかったのよ」
「つまり三人は、八年前の千両の分け前をうまく活かして、思い通りの暮しができるようになっていたってわけだ」
「ところがひとりだけ、思い通りにゆかなかった野郎がいる」
「巳之吉かい」
「千両の分け前を使い果して、オケラ長屋へ転がり込み、小悪党らしい不景気な毎日を過していた」
「自業自得ってもんだろう」
「だが、巳之吉にしてみりゃあ、面白くねえ。そのうちに、ふと思い出したのが昔の仲間たちのことよ。三人が三人とも、商家の主人におさまっている。その三人から、まとまった金をせしめようと、巳之吉は思いついたのさ」
「なるほど……」
「しかし、巳之吉は昔の仲間から、相手にしてもらえなかった。分け前を受け取って、それ

ぞれが散ったときから、もう見知らぬ他人同士になったはずだ。そういう約定を忘れずに二度と出入りしてくれるなと、巳之吉は追い払われたんだろうよ。まあ五両とか十両とかの金は、恵んでくれたのに違いねえが……」

「それで巳之吉は、三人の昔の仲間を恨んだってわけかい」

「三人がうまくいっていて、ひとりだけ尾羽打ち枯らしているってことも、やりきれなかったんじゃあねえのかい。だったらいっそのこと、三人をあの世へ送ってやろうって気になったのさ」

「そのために、三人の浪人を雇ったのか」

「それも、かつての仲間たちが、恵んでくれた金でな」

「すると、この野郎は巳之吉かい」

「最初にやられた巳之吉の首だけが、見つかっていねえんだ」

「すると、あの死骸は……」

「身装だけを巳之吉にした相州屋仙右衛門の、首のねえ死骸だったのよ。年恰好は変らねえし、首がなけりゃあ巳之吉の死骸ってことにもなるだろう」

「仙右衛門が江戸を立ったのは半月前、巳之吉の首のねえ死骸が見つかったのは十五日前だぜ」

「仙右衛門は、箱根に無事ついたという便りもよこしていねえ。供の者も、連れて行かなかった」

「旅立ったその日に仙右衛門を殺し、巳之吉の死骸に見せかけやがったのか」

「相州屋の奉公人たちは未だに、仙右衛門が箱根の湯治場にいるものと思い込んでいらあな」

「一番首、二番首の書付けをわざわざ残すってのも、そのための小細工だったんじゃあねえかい」

「その通りだ。このままだったら仙右衛門が巳之吉、重兵衛、太助を殺しておいて、箱根の湯治場へ行くと言って姿をくらましたってことになっちまっただろうよ」

新八郎は、歩き出した。男を引っ立てて、伝兵衛がそのあとに従った。

「おめえは、巳之吉だろうな」

伝兵衛が十手で、男の肩のあたりを叩いた。

「恐れ入りやした」

男が震える声で、そう答えた。

新八郎は、空の月を振り仰いだ。風のない夜であった。

享保五年も、十二月の半ばとなった。

その日、大岡忠相は下城して南町奉行所の役宅へはいると同時に、激しい発作に襲われた。

新八郎が近くにいた与力たちを煙に巻いている間に、妻の千代が忠相を寝所へ連れ込んだ。

新八郎は寝所の前にすわり込んで、用向きを告げに来る連中を、いまは奥方と内密に話し合っているからと次々に追い払った。事実、大岡忠相は奥方の千代と、二人きりで寝所にい

た。

しかし、口などきいていられる忠相ではなく、例の発作のために七転八倒していたのである。激しい頭痛に絶叫するほど苦悶し、錯乱状態に陥って気絶する。千代が忠相の頭を冷やし、薄荷の草をその鼻に宛がう。

一時間ほど昏睡していて、忠相はようやく平常に復する。忠相はすぐに、お花を白洲へ呼び出せと命じた。幾ら何でも発作のあとにすぐお裁きとは、と千代が引きとめたが、忠相は耳を貸さなかった。

お花は六十日ぶりに仮牢から引き出されて、日暮れが間近い白洲へと案内された。忠相はすでに、着座していた。形式的に、吟味与力たちも顔を揃えている。お花は、蓆の上にすわった。

今日の裁断と決っていたから、長崎町の町役人、五人組、名主たちも後ろに控えている。これから大岡忠相が言うことこそ、正式な判決なのである。それを、裁断という。一同は息を殺して、大岡忠相の裁断を待っていた。

「そのほうが掏り取った財布が手がかりとなって、人殺しの一件が落着したことは、存じおらなかったとはいえ手柄には相違ない。しかし、だからと申して天下の御定法をまげて、そのほうの罪を許すということはできぬ。罪は罪として、罰せねばなるまい」

大岡忠相は、そのように前置きしておいて、判決文を記した紙を広げた。

「入墨の刑は免除して頂きたいと嘆願書が、余の手許に届いておる。従って、入墨の刑は免除する。出来心によって他人の懐中物を掏り取ったとあるが、何よりも憎いのはそのほうの指であろう。よって入墨の刑に代えて、そのほうの指十本を残らず切り落すこととする」

何も書いてない白紙に目を走らせながら、大岡忠相は判決文を読んでいるふうを装っていた。

そんなこととは知らないから、お花も名主も五人組も顔色を失っていた。巾着切の罪は手の指にあるのだから、それを残らず切り落すというのだった。前例のないことだし、残酷すぎるくらいの刑罰であった。

「但し、六十日の入牢のうちに、そのほうずいぶんと爪が伸びたのう。爪も指の一部であるから、これよりそれを切り落す。謹んで、刑に服せよ」

と、大岡忠相は同心に命じて、お花のところへハサミを運ばせた。このときになって、お花を六十日間、仮牢へ入れておいた理由に気づいた者が何人もいたのである。名主や五人組は笑顔になるまいとして殊更、神妙な表情を保っていた。

お花は泣きながらハサミで、一センチほど伸びた十本の指の爪を丹念に切り取っていた。刑の執行中である。大岡忠相もお花が爪を切り終るまで、それを見守っていなければならなかった。

鬼と仏の吟味

1

田所町の飯屋『小はる』のお玉が殺されたのは、桜の花の満開が今日か明日かと噂される頃のことであった。

その日、水木新八郎は朝早くから南町奉行所の定回り同心浅香伝兵衛に付き合って、各町内の自身番を回って歩いていた。春は身体がナマる季節でもあり、武術の心得のある者は本能的に、じっとしていることを嫌うのだった。

南町奉行所の居候などと言われている水木新八郎だが、一方では大岡越前守忠相の耳目になっているという判断もなされていた。それに心安い仲の浅香伝兵衛に付き合うのだから、新八郎の役目外の行動も当然のこととして受け取られる。

例によって水木新八郎は、浪人風の身支度であった。月代は伸びているし、素足に雪駄ばきだった。着流しであり、腰に大小を落し差しにしている。

その長身の新八郎と肩を並べて歩くと、背の低さが目立ってしまうのは浅香伝兵衛であった。髪を小銀杏に結い、着流しに三ツ紋付きの黒羽織、紺足袋に雪駄ばき、腰には大小の刀、

背中には朱房の十手を差しているという町奉行所の定回り同心の典型的なスタイルである。

二人の後ろに、御用箱を背負った小者と、岡っ引にその手先が従っている。一行に新八郎が加わっているので、何とも奇異な感じではあった。だが、一年を通じて最ものんびりできる季節を迎えての江戸市民たちは、定回り同心の一行に関心を向けようともしなかった。

風もない。空は晴れ上がり、綿雲が幾つか遊んでいるだけである。江戸の町は隈なく、明るい日射しを浴びていた。どこからともなく、桜の花びらが舞って来る。町には笑顔が多く見られ、娘たちの姿が艶やかになるときであった。

「女にチョッカイを出す野郎が、多くなって仕方がねえ。陽気のせいだろうが、まったく厄介だぜ」

歩きながら浅香伝兵衛が、うんざりした顔で言った。武士ではあっても町人の下種言葉を用いるのが、町奉行所の回り方同心の特徴の一つであった。

「愚痴かい」

水木新八郎が、ニヤリとした。新八郎もまた、遊び人と変らない言葉遣いである。町人侍などと言われるのも、一つにはその伝法な口のきき方に起因している。

「取締るほうの身には、何ともやりきれねえからな」

浅香伝兵衛は、路上の石ころを蹴飛ばした。伝兵衛が愚痴をこぼしたがるのは当然で、この十日間に性犯罪が数十件も発生しているのである。春になると痴漢が多くなるのは、この享保年間でも同様だったのだ。

抱きつき（痴漢行為）
夜這い（家宅侵入）
いたずら（強制猥褻）
手籠め（強姦）

このような性犯罪が、急増しているのであった。しかも、この時代の性犯罪は、被害者の女の側からの届け出が、極端に少なかった。表面化するのは一割にも満たないというのが、町奉行所の判断であった。

「まったく、野暮なお役目だな」
「花見も何も、あったもんじゃあねえ」
「上野の山は、大した人出だろうぜ」
「ところが、花見も上野の山だけは、ご免を被りてえな」
「どうしてだい」
「日暮れとともに、追い払われるだろう。三味線も、罷り成らんと来ていやがる」
「山同心が、見回っているしな」
「花見だってえのに上野の山は、窮屈でいけねえよ」
「上野寛永寺には、宮さまがおいでになる。まあ、どうにかなることじゃあ、あるめえよ」

新八郎と伝兵衛は、そんなやりとりを交わしながら、江戸橋の東北にさしかかっていた。南隣が長谷川町の田所町へはいり、一行はまず自身番に足を運んだ。田所町の自身番では、

大騒ぎの真最中であった。

『小はる』の女主人が殺されていると、給仕女のひとりが自身番へ飛び込んで来た直後のことだったのだ。新八郎と伝兵衛は、自身番から百メートルと離れていない『小はる』へ急行した。

『小はる』の表戸だけは、取り払ってあった。通いの給仕女がまずは表戸をあけ、そのあとで女主人のお玉の死骸を見つけたのである。人の出入りを禁じて岡っ引や手先を見張りに立たせてから、新八郎と伝兵衛は店の奥へ踏み込んだ。

飯屋とは、一ぜん飯屋より高級な店だが、小料理屋というほどの規模ではない。一ぜん飯屋よりは落着いて、食欲を満たすことができる店だった。普通は、屋号を用いるほどのこともないのである。

だが、女主人のお玉は小才の利く女で一応、暖簾や軒燈に『小はる』という屋号を浮き上がらせていた。土間の奥が広い畳敷きの部屋になっていて、あちこちに衝立が置いてあった。

土間には、「御はき物に御用心」と書いた札が立ててある。客は好き勝手に場所を占領して、そこで食事をすることになる。『小はる』には三人の給仕女がいて、忙しく膳部を運んだり片付けたりする。

食事は一般に、二つの膳に分けて運ばれて来る。低い足のついた『くるみ膳』と、足がまったくない『すみきらず』という二種類の膳に、飯と汁のほか四品か五品の料理が並べてあるのだった。

あとは手焙りとか、煙草盆とかが置いてある。酒樽も据えてあって、注文があれば酒を出す。しかし、明るいうちの商売なので、酒を飲む客は少なかった。暮れ六ツ（午後六時）になると、店じまいであった。

細い土間を奥へはいると、飾り暖簾をくぐって仕切り戸にぶつかる。新八郎と伝兵衛は雪駄をぬぐと、短い梯子段を上がって仕切り戸をあけた。縁側に沿って、部屋が二間ある。

そこが、お玉の住まいだった。手前の部屋には、縁起棚、長火鉢などがあって、茶の間の感じであった。隣の部屋は寝間であり、夜具が一組のべてある。お玉の死骸は、茶の間の中央に転がっていた。

全裸であった。白い足袋をはいているだけで、生れたままの姿である。大の字になって、下腹部まで剝き出しにしている。真白な裸身に、恥ずかしい部分の草むらが、妙に生々しい。すでに全身が硬直しきっているが、生前の美貌を偲ばせるのに十分すぎる顔であった。苦悶の表情も消えて、眠っているように見えるのは薄化粧のせいだろう。首には青黒く、両手で締めつけた跡が残っている。

「手籠めにして、思いを遂げたあと、締め殺しやがったんだ」

死骸の股間を観察していた伝兵衛が、顔を上げて舌打ちをした。

「こいつも、陽気のせいかい」

新八郎は寝間を覗き込んで、背中でそう言った。

「殺されたのは、昨夜の五ツ半（九時）ってところだろう」

四肢の硬直の程度と肌の色から、伝兵衛は犯行時間を昨夜の九時と割り出したのである。多くの死骸を見ている検視の経験から、定回り同心の判断はかなり正確なものであった。

「ちょいと、こいつを見てくんねえ」

新八郎が、伝兵衛を呼んだ。

伝兵衛は新八郎と並んで、六畳の寝間へ目を走らせた。ひとり住まいの女の寝間らしく、小綺麗に片付けられている。夜具がのべたばかりのようになっているし、箱枕の位置もきちんと定まっていた。

寝た形跡がなく、お玉は夜具の中へはいる前に殺されたということになる。夜具の手前に着物、襦袢、帯、腰巻などが抜け殻のように、固めて置いてあった。お玉はそこで、身につけているすべてのものを、脱ぎ捨てたのである。

「浅香さん、おかしいとは思わねえかい」

新八郎が言った。

「おかしいな」

伝兵衛は、胸高に腕を組んだ。

「お玉は何だって、素っ裸になったんだろう」

「この様子から察したところじゃあ、着ているものを男に無理やり、引っ剝がされたんじゃあねえな」

「お玉がみずからの手で、身につけているものをそっくり脱ぎ捨てたのさ」

「そうなると、男に乱暴されたんじゃあねえってことになるぜ。女がみずから、素っ裸になったんだ。相手は思い思われの男か、情夫ってことになる」

「だとしたら、なぜ床の中で睦み合わねえんだ。何もわざわざ隣の部屋へ行って、畳の上で楽しむってことはねえだろう」

「そうか。それに幾ら相手が思い思われの男だろうと、女が前も隠さずに素っ裸で部屋の中をうろうろするはずはねえ」

「お玉はやっぱり、手籠めにされたのよ。男だって乱暴したからこそ、後難を恐れてお玉の息の根をとめたんだろう」

「そうなると、わからねえな。お玉はどうしてここで、素っ裸になったのか。それから、野郎はなぜ床の上で、お玉を手籠めにしなかったのか」

「寝間着に着換えようと、素っ裸になったところを、襲われたってわけでもねえ。寝間着はああしてまだ、枕屏風に掛けたままになっているからな」

「それに寝間着に着換えるにしたって、腰巻まではずさねえだろうよ」

「解せねえ」

新八郎は、死骸のところへ戻った。寝間は雨戸がしまっているので薄暗いが、お玉の死骸がある茶の間のほうは明るかった。縁側の雨戸が、開放されたままになっているからである。

昨夜、お玉がまだ雨戸をしめきらないうちに、男が侵入して来たことを物語っている。侵入口はもちろん、雨戸があいている縁側であった。外は二メートル幅の狭い裏庭で、垣根によって路地と仕切られている。

路地は行きどまりの袋小路で、その向うに離れ家が見えていた。どうやら商家の裏庭にある離れらしく、やはり垣根で囲われている。障子があけ放してあるので、離れの中はまる見えであった。

夜具の上に、人の姿があった。新八郎の真正面に見えるので、先方からもまともにお玉の住まいの中が見えるはずである。年老いた病人のようだが、目さえ不自由でなければ、よく見える距離ということになる。

「婆さんだな」

離れの病人を見やりながら、伝兵衛が言った。伝兵衛も新八郎と、同じことを考えているのである。昨夜の九時にもし病人が起きていたら、そして障子をあけ放していたら、当然この部屋の光景を目撃したのに違いない。

声が聞えるので、こっちへ目をやるだろう。明るい部屋の中の様子は、よく見えたはずである。だとすれば、病人は貴重な目撃者であった。病人を生き証人に、下手人をすぐにでもお縄にできる。

七十すぎの病人らしいが何とかならないものかと、伝兵衛はいまにも隣家の離れへ飛んで行きたそうな気配であった。

2

お玉殺しの一件はその日のうちに、日本橋や神田の各町内へ噂となって広まった。美人が全裸で、犯された上に殺されたとなると、庶民の好奇心が大騒動にしてしまうほどの猟奇事件だったのである。

お玉、二十三歳。

十七のときに一緒になった亭主が去年の春に病死してから、その跡を継いで女手一つで飯屋『小はる』を切り盛りして来た。その愛嬌のある美貌は、未亡人であることも手伝って、大変な評判になっていた。

お蔭で『小はる』は大繁盛だし、お玉に岡惚れしての常連客も少なくなかった。何しろ夫婦生活を五年も経験した挙句に未亡人になったのだし、二十三の女の身体は見るからに熟れきっているのである。

ただ男好きのする美人というだけではなく、雪のように白い餅肌や太り肉の腰のあたりが、ひどく刺激的なのであった。この美しく色っぽい年増が空閨に悶えているのではなかろうかと、余計なことを心配する男も大勢いたらしい。

それだけに多くの連中が、ショックを受けたのである。お玉のほうは身持ちが堅く、浮いた噂などまったくなかった。胸を触られようが尻を撫でられようが、お玉は知らん顔でどんな反応も示さない。

そうした若後家を素っ裸にして、犯した上に殺した。お玉を裸にして抱いてみたかったという思いと、あのようないい女を殺すことはないだろうという義憤が、男たちのあいだで騒ぎを大きくしたのだった。

「こんなことは、初めてでさあ」

田所町の自身番へ、岡っ引の吉兵衛が駆け込んで来るなり言った。新八郎と伝兵衛は、朝から田所町の自身番に詰めっきりであった。お玉の死骸を見たのは朝の日射しの中でであったが、もう自身番の腰高油障子を西日が照らしていた。

「何が、初めてなんだい」

浅香伝兵衛が、番茶をすすりながら訊いた。

「いつもなら十手持ちの面を見ただけで背を向ける町内の野郎たちが、今度ばかりは誰が怪しいの、あいつが臭いのと、先を競ってあっしの耳に入れようとするんですからね。驚きやしたよ」

吉兵衛はヤケになって、手拭で顔や首筋をごしごしやっていた。

「お玉の人気ってもんだろうよ」

伝兵衛が、苦笑を浮べた。

「もっとも、お蔭で噂の聞き込みには、不自由しやせんでしたがね。まず、はっきりしたのはお玉に思い思われの男も、浮気の相手も一切いなかったことでさあ」

「そうだろうな」

「お玉に岡惚れしていた男は数知れずですが、しつこく言い寄っていた野郎は八人ばかりってことでござんすよ」

「八人か」

「袋小路へはいって、木戸から垣根のうちに踏み込む。そこまでやるのは、この八人に限られておりやす。それで八人のうち七人に、一通り当ってみやした」

「何か、匂ったかい」

「へい。昨夜の五ツ半にどこにいたかがはっきりしたのは、七人のうち三人でござんしたよ。残り四人はどいつも、証人がいねえとか、ぶらぶらしていたとかで、明らかにできやせんでした」

「その四人のうちのひとりが、下手人ってわけかい」

「そいつはもう、間違いねえと思うんですがね」

「まあ、その四人ってのを、聞こうじゃあねえかい」

「へい」

吉兵衛は帳面を取り出すと、それに記してある四人の名前、住まい、職業などを読み上げた。

○　幾次郎　二十五歳。
長谷川町初右衛門店　飾り職人。

○　鬼造　三十四歳。
亀井町半吉方　無職。

○　弥七　三十八歳。
通油町鶴屋方　針問屋番頭。

○　虫の銀太（通称・虫銀）二十七歳。
田所町幸兵衛店　行商。

以上の四人で、いずれも独身である。

幾次郎はお玉に夢中で、毎日のように『小はる』へ出入りしていた。そのために飾り職人という稼業もおろそかになり、親方からは見放される、生活は苦しくなるで、かなり追いつめられた状態にあった。

鬼造は半吉という旧友のところへ居候に転がり込み、強請たかりをして小遣銭を得ている男だった。無職つまりゴロツキである。鬼造は酒を飲むと『小はる』へ押しかけ、一晩だけでも付き合えとお玉に迫っていた。

弥七は三十八にもなりながら妻子がなく、暖簾を分けてもらえる見込みもない針問屋の飼い殺し番頭である。弥七はお玉にすっかり参っていて、何とか妾にしようと口説き続けていた。

虫の銀太は春、秋、冬を甘酒売り、夏だけを虫売りとして過す行商人である。夏だけの虫売りの行商が印象的であることから虫の銀太、あるいは虫銀の通称で呼ばれている。なかな

かの色男で、それだけ自惚れてもいた。

当人はお玉の情夫気どりでいて、二人はすでに深い仲だみたいなことを言い触らしていた。だが、お玉は一向に靡かない。みんなに言い触らした手前もあり、早くお玉をモノにしなければと銀太は焦っていた。

「ところで、吉兵衛……」

岡っ引の説明が終るのを待って、水木新八郎が口を開いた。

「へい」

吉兵衛は、新八郎を見上げた。

「おめえさん、噂にのぼった八人のうちの七人まで当ったところ、いまの四人が怪しいってことがはっきりしたと言ったな」

新八郎は、ますます赤くなった腰高油障子を、見やっていた。

「その通りで……」

吉兵衛は頷いた。

「八人のうち七人までとは、どういうわけなんだい。あとのひとりには、なぜ当ってみなかったんだ」

「へい。実はそのもうひとりってのには、当りようがねえんでござんすよ」

「当りようがねえとは……？」

「町人じゃあねえんです」

「武士か」

「神田作之介さまとおっしゃるお旗本の三男坊で、堀留町の長崎屋に身を寄せてご浪人のように気ままな暮しをしておいでなんですがね」

「旗本の三男坊が、飯屋の女に思いを寄せていたってのかい」

「へい。お玉の肌に触れたいと、大変なご執心ぶりだったそうでござんす」

「旗本の三男坊となると、飼い殺しか養子の口がかかるのを待つかの部屋住みの身だ。面白くねえからと、無茶をやれば身持ちが悪くなる。そこで親は評判を恐れて、出入りの町方の者に三男坊を預けてしまう。形だけだが、勘当したのも同然ってことになる。神田作之介ってのも、大方そんなところじゃあねえのかい」

「その通りなんで……。ですが、相手がお旗本の三男坊とあっちゃあ、こちとらの出る幕じゃあねえってことになりやす」

「まあ、仕方ねえだろうよ。町奉行所だって、手出しができる相手じゃあねえんだからな」

「ですから、このお旗本の三男坊はひとまず取り除くってことで、幾次郎、鬼造、弥七、虫銀の四人をまず締め上げてみちゃあどうでしょう。まあ神田作之介さまも含めてですが、この五人はこれまでにも何度か夜の袋小路へ忍び込んで、お玉の住まいを覗いていたってことまでわかっているんですからね」

「そいつは、間違いねえことかい」

「へい。何度も袋小路の垣根のところで、この五人がお玉の住まいの様子を窺っていたのを

見ているって証人がおりやす」
「その証人ってのは、ひとりなのかい」
「袋小路を隔てた隣の加州屋の離れに、お留って七十五になる病人が臥せっておりやしてね。このお留婆さんが、お玉の住まいの様子はまる見えだってことで、確かな生き証人になるんでござんす」
吉兵衛が、やや得意そうな顔で言った。
新八郎と伝兵衛は、顔を見合せた。袋小路の向うの離れにいる病人こそ、真っ先に尋問すべき重要参考人だったのだ。だが、どうせ目も耳も不自由な老人に違いないと、あえて思い留まったのである。
「そのお留って病人は、目も耳も達者なんだな」
伝兵衛が、茶碗を蹴転がして立ち上がった。
「へい。中風で五年前から寝たっきりですが、目と耳はまだ確かなもんだそうで……」
吉兵衛が答えた。
「それでそのお留婆さんが、お玉の住まいを覗き込んでいる五人を、何度も見かけたと言っているのかい」
「へい」
「だったら、話は簡単だろう。お留婆さんの口から、昨夜のことを訊き出せば、それで落着じゃあねえかい」

「旦那、そいつがいけねえんでござんすよ。そうできるんだったら旦那に言われるまでもなく、あっしがとっくにお留婆さんの口から下手人の名を訊き出していまさあ」
「何がどうして、いけねえんだ」
「お留婆さんが生き証人として言えるのは、例の五人がこれまで袋小路へはいり込んでいるのを何度も見かけているってこと、それだけだってんですよ」
「すると何か、昨夜に限ってお留婆さんは、人の姿を見なかったってのかい」
「そうでもねえらしいんですがね。とにかくお留婆さんは、それ以上のことは言いたくねえって、口をきいちゃあくれねえんでござんすよ」
「まさか下手人に、口封じの脅しをかけられているわけでもあるめえ」
「そんなことは、ありやせんよ」
「じゃあ、なぜだ」
「変り者ってより、頑固な年寄りのせいでござんしょうねえ。お留婆さんは、死ぬ気でいるんですよ」
「死ぬ気でいるとは、いってえどういうことなんだ」
「もう十日も前から一切、食いものを口にしていねえんだそうで……」
「断食して、餓死するつもりか」
「へい。家の者が無理に口の中へ重湯を流し込んでも、お留婆さんは吐き出しちまうとかでしてね。医者ももう二、三日の命だろうと、サジを投げてしまっているって話でござんす」

「だからって婆さんはどうして、昨夜のことを話したがらねえんだろう」

「わたしはもう、仏になりかかっているんだって、お留婆さんは言い張るんですよ。仏も変らねえ身で、どうして他人さまを地獄へ堕とすようなことを口にできるかって、その頑固さったら手のつけようもねえんでござんすよ」

渋い顔になって、吉兵衛は頭に手をやった。

3

加州屋は、銅物屋である。

夫婦のほかに奉公人が二人いるだけで、商家としては規模が小さいほうであった。お留は亭主の死後、二十数年間も加州屋の暖簾を守り通して来た。気が強くて、男勝りの頑固者だったからこそ、二十数年間も女主人でいられたのだろう。

年をとるに従い、お留はますます頑固で独善的で依怙地な女になった。ひとり息子の嫁との折合いも悪く、隠居すると裏庭に離れを新築して、お留はそこに引きこもるようになった。

五年前に中風で倒れると、お留は息子夫婦の世話になりたくないと、離れに寝たままの日々を過すようになった。息子夫婦が離れに出入りすることを許さず、お留は古くからいる下女あがりの奉公人に一切の世話を任せていた。

いかにもお留らしいやり方で、独善的で依怙地な頑固者を絵に描いたような病人となった。二年ほど前から、お留は死を望むようになった。早くあの世へ行って清々したい、極楽往生

を遂げて仏になりたいと、奉公人に訴えるのだった。

去年の暮あたりから、その傾向が更に強まった。吹き降りの日を除いては、袋小路に面している側の雨戸を、夜もあけ放しておくようにと命じた。せめて障子ぐらいはと奉公人が言っても、お留は耳を貸さなかった。

奉公人が障子をしめたとしても、お留は何とか工夫してそれをあけてしまう。風邪を引くからと咎めると、そのほうが早く死ねるとお留は反論する。昼夜の別なくこの世の見納めに、外を眺めていたいというのを邪魔する気かと、皮肉も言うのである。

結局、夜も遅くまで障子をあけておき、寝たっきりの病人が外を眺めているという習慣ができ上がったのだ。お留の目や耳は確かだし、動くものもない袋小路へ人がはいって来れば、それに気づかないはずはない。

離れの行燈は消えているから、逆に袋小路へ忍び込んで来た者には、そこにお留の姿を見出すことができない。従って、例の五人の男がお玉の住まいを覗き込んでいるのを何度も見かけたことがある、というお留の証言は信じていいのであった。

お留のほうも、そこまでの証言は信じてくれていいと、言っているのだ。ただ、それ以上の証言については拒否すると、頑なに口を噤んでいるのであった。つまり、何よりも肝心な昨夜の出来事には、まったく触れたがらないのである。

その理由は、間もなく仏になる身で、他人を罪に陥れたくないということだった。お留は昨夜のことは知らない、何も見なかったとは言っていないのだ。喋りたくないと、頑張って

いるのである。

それはお留が昨夜の出来事を目撃し、下手人も知っているということを、意味しているのであった。お留こそ、完全な目撃者なのだ。当然お留の口から、下手人の名前を訊き出さなければならない。

水木新八郎と浅香伝兵衛は、加州屋の裏庭の離れを訪れた。袋小路に面している八畳間に、お留の寝たきりの姿があった。仏壇のほかには、何一つとして置いてない部屋である。

障子があけ放してあっても、室内には異臭がこもっている。五年も臥せっている病人の寝臭さと、垂れ流しの大小便の匂いが部屋にしみついているのだろう。それを感じないのは、当のお留だけなのだ。

お留は、枯れ果てた生物という感じであった。白髪はそっくり残っているが、骨と皮だけに痩せ細り、子どものように小さく見えた。憔悴しきっているせいか、いまにも絶息してしまうのではないかと気が揉める。

「お留婆さんよ、素直に喋ってもらいてえんだがな」

お留の枕許にしゃがみ込むと、伝兵衛が情けなさそうな顔で尋問を始めた。

新八郎は、濡れ縁に腰をおろした。垣根、路地、また垣根とあって、なるほどお玉の住まいが目前に見える。横になってしまえば視界から消えるが、お玉の家の室内に立つ人間の姿はよく見えるはずである。

「お役人さま、そうはゆかないんでございますよ」

お留が、弱々しい声で答えた。歯がないので、ゆっくり喋る。それで言葉が不明瞭、ということはなかった。

「そうはゆかねえって、おめえさん昨夜の出来事を、その目で見ているんじゃあねえのかい」

伝兵衛は威嚇するつもりか、十手で自分の掌をひたひたと叩いていた。

「そりゃあ確かに、見ておりますがね」

お留はあっさりと、事件を目撃したことを認めた。それだけ人を食っているというか、頑固に徹しているというか、鬼より怖い定回り同心が戸惑ったほどであった。

「やっぱり、見て知っているんだな」

緊張感と怒りが、伝兵衛の声を大きくさせた。

「はい」

お留は、ケロッとしている。鬼とされている回り方同心も、朱房の十手も問題にしていないという感じである。

「だったら、お玉を殺した下手人もわかっているな」

「はい」

「下手人は、誰なんだい。はっきり、返答しろい」

「言えません」

「言えねえだと……」

「十手持ちの親分さんにも、はっきりと申し上げましたがね。そのことについては、口が割

けても言いません」

「そいつは、悪い了見だぜ。お上に楯突き、人殺しを庇ったりすると、おめえも同罪ってことになるんだ」

「だったら、このわたしを煮るなり焼くなり、存分にしておくんなさい。どっちみち今日は来るだろう、明日こそはとあの世からの迎えを待っているんじゃもの」

「このままじゃあ、お玉が浮ばれねえんだ。おめえも毎日のように、お玉の顔や姿を見ていたんだろう。そのお玉が、哀れとは思わねえかい」

「お玉さんにはあの世で会って、お詫びをしますからね」

「おい、いいかげんにしねえかい」

「わたしはね、もう半ば死にかけている。仏になりかかっているんです。それなのに、みすみす死罪になるってわかっていて、告げ口をするなんて殺生ができますか」

「相手は、人殺しなんだぞ」

「たとえどのような罪人だろうと、仏は見殺しにできませんのじゃ」

「おめえが、殺すわけじゃあねえ。おめえはただ、お玉殺しの下手人の名を言うだけなんだ」

「仏の口から、言えることじゃありませんよ」

「おめえはまだ、仏でも何でもねえんだよ。気が触れたみてえなことを、吐かすんじゃあねえ」

「聞もなく冥土へ旅立つその置きみやげに、この人を死罪にしろなんて、名ざしで言えるもんですかね」

「おめえは、五人の男の顔も名も知っているんだな」

「はい」

「幾次郎、鬼造、弥七、虫銀、それとも旗本の三男坊か」

「言えません」

「下手人は、この五人の中にいるんだろう」

「はい」

「言え！」

「いやです」

「おい、お留！　年老いた病人だからと、やさしく尋ねてやっているんじゃあねえかい。そいつをいいことに、つけ上がりやがって！」

「つけ上がってなんて、おりませんよ」

「八丁堀の回り方を、舐めるんじゃあねえ。鬼より怖い定回り同心、場合によっちゃあ年寄りだろうと病人だろうと、容赦はしねえんだ！」

耐えきれなくなって、伝兵衛は凄味を利かせ、怒声を発した。伝兵衛のその声を聞いたら、人殺しの悪党でも顔色を変えると言われている。だが、お留は目をとじたままで、表情を動かすこともなかった。

「どうやら、あの世からお迎えが来そうじゃ」
お留は、そう呟いた。
「さあ、下手人の名を言え」
「間もなく死ぬ者とは妙なもので、こうして夜になってもちゃんとは眠れないんですよ。うとうとしたかと思うと、すぐ目が覚めちまってね」
「痛い目に、遭いてえのか！」
「このところ暮れ六ツから四ツまでは、どうしても眠れない。五ツから九ツまで、眠れないってときもありますよ。まあ八ツから七ツまでは、うとうとしちまいますがね」
「おい、お留！」
「今夜は珍しく、こんな時刻から眠くなりました」
「ふざけるんじゃあねえ！」
「とても、眠くて……」
「お留、目をあくんだ！」
伝兵衛は怒鳴ったあと、しばらくお留の顔を見守っていた。お留は目も口も、開こうとしなかった。表情にも反応はなく、すでに寝顔になっていた。微かではあるが、寝息を立てているようだった。
伝兵衛は、立ち上がった。憮然たる面持であった。これほど始末に悪いものはないというのが、伝兵衛の感想なのに違いない。お上も十手も恐ろしくないという人間を相手にしたときは、ただ諦めるしかないのであった。

新八郎と伝兵衛は、加州屋を出た。二人は夜道を、数寄屋橋御門内の南町奉行所へ急いだ。今夜のうちに、大岡忠相に会っておく必要があったのだ。ただお玉という女が殺されただけであるならば、その日のうちに奉行に報告することはなかった。
だが、容疑者のひとりに、旗本の三男なる武士が含まれている。それは、重大なことであった。武士の犯罪となると、町奉行所の管轄外である。しかし、それだからと言って、知らん顔をしているわけにはゆかない。
旗本の三男が町方の女を全裸にして、凌辱し、更に殺害したということが江戸市中に知れ渡ったら、それこそ一大事であった。町奉行としては評定所へ持ち込むか、目付に通報するかして善後策を講じなければならないのである。
大岡忠相は訴状調べの途中だったが、町方の事件に旗本の子弟が関係しているという伝兵衛の報告を受けたので、直ちに目通りを許した。大岡忠相は場所を、裏居間へ移すことにした。
裏居間は奉行所の役宅と番所の境にあって、公用にも私用にも邪魔されずに使える座敷であった。大岡忠相はこの裏居間を、密談や内々の打ち合せに利用していた。新八郎だけは出入りが自由だったが、ほかの者は裏居間へ無断で近づくことさえ禁じられていたのである。
忠相が裏居間へ行くと、そこにはすでに伝兵衛が控えていた。新八郎もまた柱に凭れて、夜の庭を眺めやっていた。

4

膝の前に置いた脇息をかかえるようにして、大岡忠相は浅香伝兵衛の報告に耳を傾けていた。話を聞きながら忠相は、頷いたり微笑を浮べたりした。それは忠相が、話に興味をそそられたときの癖であった。

無意味な内容の報告を受けたり、価値のない情報を聞かされたりするときの大岡忠相は、頷くこともなく殆ど無表情であった。最後に一言だけ感想を述べて、忠相はすぐに座を立ってしまう。

だが、いまはむしろ嬉しそうに、話に聞き入っている。もっとも今回の事件は、そもそもが忠相の好みに合っているのである。目撃者が下手人の名前を明かそうとしなかったり、お留のように個性的な変り者が登場したりすると、大岡忠相は冒険を志す少年みたいに目を輝かすのであった。

浅香伝兵衛の詳しい説明と報告が終り、裏居間は俄かに静まり返った。庭に丹塗りの木に絹張りの燈籠が立てられ、それに火が入れてあった。もちろん桜の季節に、臨時に設けられたものである。

闇がピンク色に染まり、いかにも花見の時期らしい雰囲気であった。だが、庭に桜の木はなかった。それでも風が、どこからか桜の花びらを運んで来る。いまも闇の中に白いものがチラチラしているが、恐らく気のせいではないだろう。

「神田作之介か」

と、忠相が沈黙を破った。

「お聞き及びでございましょうか」

伝兵衛が、畳に両手をついて訊いた。

「聞かされておる」

忠相は、思案顔の頬に手を当てた。

「屋敷は、いずれに……？」

今度は伝兵衛のほうが、興味を示す番であった。

「屋敷は、田安御門外にある。当主は神田十左衛門どの、千二百石取りで中奥御番衆のお役目についておいでじゃ」

「三男作之介は当年とって二十三歳、勘当同然の身として堀留町の諸国茶問屋、長崎屋に預けられております」

「長崎屋は、神田どのの屋敷に出入りを致しておる商人だそうな」

「はい」

「三男作之介は直心影流に剣を学び、多少の評判を得て慢心したことから、親や兄への不満を露骨に致し、素行が悪くなったと聞いておる」

「いずれから、さようなことが御奉行のお耳に……？」

「お目付から、内密に話があった」

「すると神田作之介の素行については、すでにお目付の知るところとなっているのでございますか」

「旗本を監察するのが、お目付のお役目じゃ。その目を誤魔化すことは、とても難かしいな」

「それで親や兄が慌てて、作之介を長崎屋に預けたのでございましょうか」

「さよう。長崎屋において謹慎致しておればよいが、町方の者に関わりを持って不行跡を重ねる恐れもあると、お目付から余に内々の話があったのじゃ。作之介は長崎屋に預けられる以前に、中間部屋での博奕に加わったり、下女二人に押して不義を働いておる」

「長崎屋に預けられて一段と自由な身になれば、更に悪の道に深入り致すのは当然ということになります」

「あるいはすでに、町方の娘の何人かに押して不義致しているやもしれぬ」

「そのような届け出は、未だに受けておりませぬが……」

「相手が相手だけに、町方の者は泣き寝入りということになろう。それに長崎屋が金品によって、示談ですませようと図るに相違ない」

「では、お玉殺しの下手人が、神田作之介だということも、十分に考えられましょう」

伝兵衛は、ガクッと肩を落した。お玉殺しの下手人が旗本の三男坊であることを想定して、伝兵衛は気落ちしたのであった。浪人でない限り、町奉行所の者は武士に手が出せない。事件を解決へと持ち込んだとき、下手人が武士であったり、武家に深い繋がりのある背景

にぶつかったりで、捜査打ち切りに無念の涙をのむことは、多くの町奉行所の同心が経験ずみなのである。伝兵衛もその経験を、思い出したのに違いない。

作之介はまだ屋敷にいるうちに、下女二人に押して不義したという。「押して不義」とは、強姦のことである。作之介にそうした過去がある以上、長崎屋に預けられてから町方の女にも同じことをしたかもしれないという見方が当然、成り立つのであった。

性犯罪は常習になりがちなものだと、町奉行所の同心は承知している。作之介がお玉を犯して殺したとしても、決して不思議ではないのだ。あるいは変質者的な目で見て、作之介はお玉に夢中になっていたのかもしれないのである。

「だが、浅香。この一件の下手人は、神田作之介と決めこんではならぬ」

口許を綻ばせて、大岡忠相が言った。

「はあ」

伝兵衛は怪訝そうに、忠相の顔を見守った。伝兵衛の報告を聞いただけの忠相なのに、断定的な推論を持ち出して来た。伝兵衛には、それが意外だったのだ。

「それにしても、愉快な話じゃな」

忠相は、嬉しそうに笑っていた。

「何がでございますか」

対照的に伝兵衛は、腑に落ちないと苦い顔つきでいる。

「鬼と呼ばれる定回り同心のそのほうが、みずからを仏と称するお留なる老婆に、歯が立た

なかったということじゃ」
「面目次第もございませぬ」
「いや、お留なる老婆の申すことが、もっともすぎるからであろう。それで鬼も、歯が立たなかったのじゃ」
「老婆の言い分がもっともなことだと、仰せでございますか」
「いかにも」
「御奉行、お留はお上に逆らう不埒者でございます」
「みずからを仏になりかかっておるものと信じ、死の訪れを待ち望んでいる年寄りに、お上の威光も天下の御定法も通用するはずがない」
「たとえ人殺しの下手人を庇うことになっても、それが許されるのでございましょうか」
「許すも、許さないもないのじゃ。死を欲する人間に恐ろしいものはなく、いやなことはいやとはっきり言い切れる。また、この世に悔いを残さずに仏になりたいと願う老婆の心はすでにあの世へ飛んでいる、ということになろうの。つまり鬼の吟味より仏の吟味を、お留なる老婆は恐れたのじゃ」
「はあ」
「しかし、お留なる老婆はあくまで、下手人の名を明かせぬと、言い張ったわけではないな」
「いいえ、言い張りました」
「そのほうの報告を聞いておるうちに気がついたのだが、老婆は下手人を名ざしで教えることはできぬと申している」
「確かにそのようなことは、申しておりましたが……」
「それにもう一つ、老婆は妙なことを口にしながら眠りに落ちたのではなかったか」
「妙なことでございますか」
「この時刻に眠れぬとか、うとうとするとか……」
「はい、申しておりました」
伝兵衛は指先で、額の脂汗を拭き取った。何が何だか、わからなくなったのである。確かにお留は、眠れる時間と眠れない時間についてとやかく言いながら、寝息を立て始めたのだった。
六ツから四ツまでは眠れない。
五ツから九ツまで、眠れないこともある。
だが、八ツから七ツまでは、当然うとうとしてしまう。
お留は、こう言ったのである。午後六時から午後十時までは、なかなか眠れない。午後八時から十二時まで、眠れないこともある。しかし、午前二時から午前四時までは、うとうとすることができる。
当り前のことを言っているとしか、伝兵衛には思えなかった。どうしてこれが、妙なことになるのだろうか。
「これ、町人侍。そのほう、謎は解けたかな」

忠相は新八郎へ、笑っている目を移した。楽しんでいるような忠相であった。

「お留は考えているうちに、面白いことに気がついたんでござんすよ。それで、そいつを利用したんでござんしょう」

新八郎は、答えながらすわり直した。

「下手人を名ざしで教えるわけにはゆかぬが、それとなく伝えるのであれば差し支えはなかろう、というのが老婆の胸のうちだったのじゃ。それで町人侍は、その老婆の謎かけを、いかように解いたのか」

忠相が言った。

「下手人の名を、六ツ、八ツの時で表わしたんでござんす」

新八郎は、ニヤリとした。

「それで、その下手人の名は……？」

「六ツから四ツまで眠れねえってのに、ムシが隠されておりやす」

「六ツと四ツでムシ、即ち五人のうちの虫の銀太、通称虫銀をさしておる」

「へい」

「それだけか」

「いや、それだけじゃあお留にしても、面白いことに気がついたってことにはならねえでしょう。次の五ツから九ツまでも眠れねえときもあるってのは、五ツと九ツでイクになりやす。イクはつまり、幾次郎でござんす」

「うむ」

「更にもう一つ、八ツから七ツまではうとうとできる。こいつは八ツと七ツで、弥七ってことになりやしょう」

「さすがじゃな、町人侍」

「恐れ入りやす」

「だが、虫の銀太、幾次郎、弥七と下手人が三人もおるとは妙ではないか」

「へい。いうまでもなく、下手人はひとりでござんす。この三人のうちのひとりが、下手人ってことになりやす」

「そのひとりとは……？」

「弥七でござんす」

「いかなる理由をもって、弥七を下手人と決められるのじゃ」

「六ツから四ツまでの虫銀、五ツから九ツまでの幾次郎は、どっちも眠れねえってことでござんす。ところが、八ツから七ツまでの弥七だけは、うとうとできるんですぜ。人を殺しておいて、のんびり寝ているのは弥七だって、お留は言いたかったのに違いありやせん」

新八郎は、どうだという目つきで、忠相を見やった。

「水木さん、こいつは驚いた。そこまで読んでいたとは、まったく恐れ入る」

伝兵衛が膝を叩いて、感嘆の声を放った。

「お留婆さんのお蔭だ」

新八郎はそう言いながら、ふと不安を覚えていた。忠相の顔に、満足の笑いが見られなかったからである。忠相は、新八郎の謎解きを、妥当なものと見ていないのかもしれない。その点が、新八郎は気になったのだ。

果して忠相は、首を横に振った。

5

翌朝、夜明け前に仲間の住まいで大酒を喰らって眠っていた鬼造が、浅香伝兵衛以下の急襲によって召捕られた。

鬼造の逮捕は、大岡忠相が命じたのである。浅香伝兵衛はその命令に、いささか不満を感じていた。伝兵衛としては、水木新八郎の読みこそ正しいものと、思っていたからだった。

虫の銀太。

幾次郎。

弥七。

この三人を挙げて、そのうちの弥七を下手人と判断した。それが、間違っているとは思えない。新八郎は、直感に頼ったわけではなかった。理詰めで謎を解き、納得がゆく結論の出し方をしたのである。

それを忠相はあっさり否定した上に、いきなり鬼造を引っ張り出して来た。新八郎が挙げた三人をわざわざ避けて、問題にされなかった鬼造を無理に持ち出して来たのではないのかと、受け取りたくもなる。

鬼造は強請たかりを常習にしているゴロツキで、確かにほかの三人よりは一枚も二枚も役者が上である。悪党として女を犯したり、人殺しをしたりしそうな鬼造であった。あるいは忠相も、そうした理由から鬼造に目をつけたのかもしれない。

そんなふうな気持から、伝兵衛は忠相の命令に不服だったのだ。だが、奉行じきじきの命令とあらば、それに従わないわけにはいかない。伝兵衛は鬼造を召捕ると、自身番と大番屋を省略して直接、南町奉行所へ引っ張って来た。

南町奉行所についたとき、ようやくあたりが明るくなった。直ちに鬼造を引き据えると、吟味が始められた。吟味方に任せてはあるが、新八郎も伝兵衛もその場に立ち会っていた。

大岡忠相は、鬼造を逮捕する理由について、何も語らなかった。ただ、鬼造をお玉殺しの下手人として召捕るようにと、命令を下したのである。どうもその辺が怪しいし、鬼造が白状することは期待できないと、伝兵衛は思っていた。

ところが意外にも、鬼造はあっさりと犯行の一部を認めたのである。

「お玉を殺害したのは、お前に相違あるまい。さっさと口を割って、楽な気持になるんだ！」

「あっしがお玉を殺したなんて、滅相もないことで……」

「往生際が悪いぞ。早々に、恐れ入ってしまえ！」

「恐れ入りやした。何もかも、正直に申し上げます。ですが、あっしはお玉を、殺してはお

りやせん」
「じゃあ、お前は何をやったんだ」
「あっしはそのう、お玉を手籠めにしただけなんで……」
「最初から正直に、見たことやったことを申し上げてみろ」
「へえ。一昨日の晩、あっしは袋小路からお玉の住まいへと、そっと忍んで行きやした。だけど、そのときのあっしには、お玉を手籠めにしようなんて気は毛頭ありやせんでした」
「では、何のために忍んで行ったのだ」
「雨戸をしめるまで、寝る前のお玉の姿を拝むためでござんす。そんなことはもう、これまでに何度もやっているんで……」
「覗くだけで、我慢できるのか」
「そりゃあ、寝間着のままでいるお玉の姿を、見ているだけでござんすからね。それが素っ裸でいるお玉を眺めたんじゃあ、もうカーッとなって前後の見境もつかなくなりやすがね」
「一昨日の晩は、どうだったのだ」
「お玉の素っ裸を、見せつけられちまったんでござんすよ」
「お玉はどこで、どうしていたのだ」
「路地のほうを向いて、生れたままの姿で長火鉢の前にすわっておりやした。それも膝を崩して股を開きかげんにして、まるで女悦の声を洩らしているみたいにのけぞっているんで……。お玉は冷え症で、寝るときは足袋をはくんだと話に聞いておりやした。そのときも足袋だけははいておりやしたが、素っ裸に白足袋ってのは何とも言えずに色っぽいもんでござんしてね。その上、悶えるような姿を見せられちゃあ、もはや我慢がなりやせん。あっしはもう無我夢中になって、家の中へ飛び込んで行きやした」
「それで、いきなりお玉を押し倒したのか」
「押し倒すも何も、のしかかるだけで事はたりやした」
「お玉は、されるがままになっておったのか」
「へい。拍子抜けするほど、お玉はおとなしくしておりやした。いやがって震えてはいましたが、思いきって逆らうってことはありやせんでした」
「そのあと、どうしたのだ」
「思いを遂げりゃあ、あとは逃げるだけでござんすよ。あっしはお玉に言葉もかけずに、さっさと逃げ出しやした。ですから、お玉を手にかけたなんてことは、金輪際ござんせん」
鬼造は、このように白状したのである。
伝兵衛と新八郎は、登城前の大岡忠相にそのことを報告した。忠相は当然の結果を待っていたように、表情も変えずにその報告を聞いた。
「お玉殺しの下手人は、いったいどうなるのでございますか」
伝兵衛が訊いた。
「町人侍の昨夜の謎解きには、二つほど忘れられておる点があった」
忠相は、厳しい表情で言った。

「あっしが、見落していた点が二つあったんでござんすかい」

新八郎が、眉をひそめた。

「その一は、老婆が名ざしで下手人を教えることはできないと、言い切っておる点じゃ。町人侍は六ツと四ツで虫銀、五ツと九ツで幾次郎、八ツと七ツで弥七だと解いたな」

「へい」

「それは、それでよいのじゃ。だが、その三人のうちから下手人を出そうとするのは、明らかに間違っておる。老婆は、名ざしをしないと申しておるのだから、はっきりと名が浮んでしまった虫銀、幾次郎、弥七は下手人ではないと解釈致さねばならぬ。従って名ざしされなかった者、即ち三人を除いた二人、鬼造と神田作之介がお玉の住まいに出入りしたぞと、老婆は教えてくれておるわけじゃよ」

「恐れ入りやした」

「しかし、鬼造と作之介の二人が、下手人であるはずはない。老婆はこの二人がお玉の住まいに出入り致したのは見たが、いずれがお玉を殺したかまではわからなかったのであろう。それでまずは、鬼造の召捕りを下知したのじゃ」

「もう一点、あっしが忘れていたってのは……」

「お玉がなぜ、生れたままの姿で夜具もないところにおったのか、ということだ」

「確かに、忘れておりやした」

「それはいうまでもなく、お玉の意志で致したことではない。不意に侵入して来た男が、刃物を突きつけて身につけているものを残らず脱ぎ捨てよと、お玉を脅したのに相違ないと余は思った」

「同じ刃物でも匕首なんぞじゃあ、そこまで効き目はねえでござんしょう。女が言われるままに素っ裸になるってのは、心の底から震え上がったからでござんすよ。その刃物ってのは、武士が手にしている大刀だったんでしょうね」

「その武士はお玉を裸にすると、隣の部屋へ追いやった。武士は寝間にいて、お玉にさまざまな姿をさせ、それを眺めて楽しんでおった。そこへ鬼造が飛び込んで参り、いきなりお玉に襲いかかった」

「武士は咄嗟に襖の蔭に隠れて、今度はお玉が鬼造に手籠めにされるのを見て楽しんだ。鬼造が思いを遂げて立ち去ったあと、武士はたまらなくなってお玉を改めて手籠めにした。狂乱したお玉に罵られ、このまま黙ってはいないと言われて、武士は口封じのためにその場でお玉を殺した」

「鬼造が白状に及んだことは、真実と受け取ってよかろう。そうなると、お玉殺しの下手人は神田作之介だ。旗本の三男とあっては、当奉行所の力の及ぶところではない。残念ではあろうが、この件に関しては手を引くより致し方あるまい」

忠相は、伝兵衛に言った。

「しかし、ここまで来て手を引けば、お玉殺しの下手人はいなかったも同然のことになります」

伝兵衛は口惜しそうに、白くなるほど唇を噛みしめた。

「もっとも、神田作之介は直心影流の剣の心得が、多少あると聞いておる。生兵法は大怪我の因と申すように、剣の達人と渡り合い、敗れて死ぬということになれば、それも天罰であろう」

と、忠相は冷やかに笑った。

新八郎と伝兵衛は、思わず顔を見合せていた。

「ところで町方の者が、上野の山では存分に花見を楽しむことができないと、不平不満を洩らしておるそうな。一つ機会があったならば上さまに申し上げて、町方の者がのんびりできる花見の場所を設けるよう、お願い致してみようかの」

忠相は急に話題を変えると、とぼけた顔でそんなことを言った。

その日の夕刻、堀留町の杉の森稲荷の裏で、武士同士の決闘が行われた。決闘の原因は、肩が触れ合ったとかいう些細なことであった。水木新八郎が刀によって決着をつけようと申し出ると、神田作之介は自信たっぷりに応じた。

「直心影流、神田作之介」

「心形刀流、水木新八郎」

と、それぞれ抜刀した直後に、勝負は決っていた。いきなり諸手突きに出た作之介の刀は、巻き取られるように弾き返されて、五、六メートルも離れたところへ飛んでしまったのだ。

次の瞬間、新八郎の振りおろした刀が、作之介の右腕を肩の付け根から切り落していた。

作之介の身体が大きく傾いたとき、新八郎の刀は右から水平に円を描いていた。作之介は、地上に転倒した。作之介の首が、皮一枚を残して切断されていた。

神田作之介の死に関しては、まったく問題にならなかった。武士同士の決闘であり、相手の正体もわからないのであった。内心ほっとしたのは無事にすんだ旗本の神田家と、厄介払いができた長崎屋と、それに大事件に発展しないことを歓迎する目付だったのに違いない。

なお、お玉殺しの下手人はわからずじまい、鬼造は遠島となり、お留は間もなく死亡した。

大岡忠相が進言したものかどうかはともかく、将軍吉宗が飛鳥山に桜を植えたのは事実である。また吉宗は、中野に桃園を作っている。いずれも江戸の町人たちを、郊外において楽しませるためのものであった。

特に飛鳥山は元文三年に吉宗が御用地とした上で、桜の木を植えるとすぐに金輪寺に付与した。それがやがて花見の名所として、上野よりも江戸市民の人気を集めることになったのである。

石地蔵御用

1

梅雨にはいってから、田圃の蛙の声が異様なほどうるさいという評判が、江戸市中のあちこちで聞かれた。

その後、今度は蚊の異常発生が伝えられた。いつもより倍は多いだろうと蚊遣りが飛ぶように売れ、昼間から蚊帳を吊る家も見られた。何やら異変が起こりそうだと、老人たちはしきりと気にしていた。

案の定、異変が起こった。とは言っても、天変地異というほどのことではなかった。享保六年の夏の江戸は、例年にない猛暑に見舞われたのである。朝だろうと日が射したとたんに、地熱が立ちのぼるように暑くなるのだった。

日中は灼かれるような酷暑で、直射日光が容赦なく地上を責め立てる。夜になっても灼熱地獄の余熱が、眠っている人々を汗まみれにさせた。眠れない者は闇の中で、ひたすら団扇を使っていた。

人心地がつくのは、午後の三十分間に限り江戸の町を滝の中へ運んでくれる夕立の訪れで、

そのときだけ汗が引っ込む。子どもばかりか大人まで、裸になって雨の中に立つ。庭があれば人妻も娘も、腰巻一つで飛び出して行水の代わりに雨を浴びた。

とにかく、人間も植物もぐったり、うんざりするような暑さ続きだった。同じ夏の商売でも、昼間の木蔭の冷やした水や麦茶売りは大繁盛、夜の白玉汁粉やスイトン売りは相手にもされなかった。

この猛暑は、南町奉行の大岡越前守忠相にも、大きな影響をもたらした。気絶するほどの激しい頭痛という持病が、三日に一度の間隔で大岡忠相を襲うようになったのだ。更に悪いことに、北町奉行の中山出雲守時春が暑気あたりで高熱を発し、寝込んでしまったのである。

そのために特令をもって南町と北町の月番交替制を、この夏に限り変更するということになった。つまり三カ月間続けて南町奉行が月番を勤めよ、という命令を受けたのである。

訴状が山積みになって多忙を極める町奉行が、三カ月間も非番になれないとなると、まさに殺人的なスケジュールであった。大岡忠相の持病は絶対の秘密にされていて、知っている者はこの世に当人と妻女、そして水木新八郎の三人しかいないのである。

幕閣は大岡忠相の健康を信じていたし、頼りにもしていたのであった。だからこそ、北町奉行の代行を押しつけもしたのである。大岡忠相のほうも、健康であることを立証するために、命令には服さなければならなかったのだ。

そうしたときに、一つの殺人事件が迷宮入りになった。事件が発生して四十日もすぎたのに、下手人の見当がつかない。こうなるともう、完全に迷宮入りであった。捜査は、打ち切

られてしまう。

当時の殺人事件は、発生してから十日のうちに下手人が明らかにならなければ、まずは解決不可能になる。別の事件の下手人が余罪として白状する、という好運がない限り迷宮入りであった。

何しろ、町奉行所というのは忙しい。刑事と民事の両方を受け持っているし、町奉行所の管轄は江戸市中の九百三十三町に及んでいるのだった。一つの事件にいつまでも、人員を割いておくことができないのである。

その事件はもともと、他殺説と自殺説に分かれていたのであった。しかも、自殺説を主張する者のほうが圧倒的に多く、他殺説に固執していたのはほんの四、五人にすぎなかったのだ。

しかし、その四、五人の中には水木新八郎と、定回り同心の浅香伝兵衛がいた。二人とも大岡忠相のお気に入りであり、大いにその腕を買われている。そのために大岡忠相も、少数意見を尊重する結果となった。

殺害されたものとして調べを続行せよと、大岡忠相が命じたのであった。だが、一カ月がすぎても、捜査に何の進展も見られなかった。そうなっては忠相も、方針を改めずにはいられない。

事件発生四十日目に、大岡忠相は捜査の打ち切りを下知した。他殺説を主張する者にしてみれば迷宮入りであり、自殺と見ていた者に言わせれば自説の勝利だった。いずれにせよ、薪炭問屋『加賀屋』の番頭の変死事件は過去のこととなったのである。

加賀屋の番頭の死は自害によるものと江戸市中にも流布され、世間もそれで納得したのであった。

「面白くもねえ」

「まったくだ」

「下手人がわからずじまいってことなら、まだ諦めもつくってもんだが……」

「自害ってことにして片付けられたのが、何とも情けねえやな」

「南町の与力や同心を、悪くは言いたくねえが、連中の目はフシアナだぜ」

「頭が固すぎるのよ」

「何とも腹の虫が、おさまらねえ」

「その上、この暑さと来てやがる」

歩きながら憤慨しているのは、やくざな町人でも血の気の多い職人でもなかった。それらしい言葉遣いだが、二人ともちゃんと大小の刀を腰に差している。そうしたゲスっぽい口のきき方をするのが、町奉行所の回り方同心の特徴の一つであった。

「まったく、腹が立ってならねえぜ」

と、これは南町奉行所の定回り同心、浅香伝兵衛であった。紹の三ツ紋付きの短い黒羽織、着流しに雪駄ばき、背中に朱房の十手を差している。

暑いときは菅の一文字笠をかぶることになっていたが、定回り同心はそれを無用としてい

た。オシャレのためである。一文字笠をかぶったりすると、小銀杏という粋な髷がくずれてしまうからなのだ。

御用箱を背負った小者と、木刀を差した中間がひとりずつ、浅香伝兵衛の背後に従っている。

「あっしはまだ、諦めちゃあいねえ」

そう言ったのは、水木新八郎であった。この町人侍の言葉遣いも、また独特なものだった。見た目には、衣食住に不自由のない浪人である。月代が伸びているし、町中を着流しで歩いているのだ。

しかも素足に雪駄ばきなのだから、どう見ても浪人であった。紫色の紗の着物、という派手な身装である。鉄扇の代わりのつもりか、帯の前に大きな毛抜きを差し込んでいる。

南町奉行所の居候も、面白くなくてじっとしてはいられない。加賀屋の番頭は自害したのだと主張を通した連中ばかりの奉行所内に、留まっている気にはなれなかった。強硬な他殺説を論じて共同戦線を張った浅香伝兵衛に付き合って、炎天下の戸外を歩いているほうがまだマシだったのだ。

「水木さん、あそこに寄るかい」

浅香伝兵衛が、居酒屋の暖簾を指さした。

「お役目中に、いいのかねえ」

水木新八郎は、ニヤリとした。

「暑気払いの一杯だ。大目に見てもらおうじゃあねえかい」

「あっしのほうは、一向に構わねえ。御用やお役目には、かかわりがねえしね」

「面白くねえときには、酒に限る」

「まるで、ヤケ酒だ」

「この暑さに、騒ぎを起こすなんて酔狂な野郎はいねえだろう。どこの自身番だって、昼寝の最中よ」

「定回り同心も、御用ずみかい」

「見てみねえな、水木さん。真っ昼間に、人っ子ひとりいねえんだぜ」

浅香伝兵衛は、鉄砲町の通りを顎でしゃくって見せた。なるほど、視界に人影はなかった。世界一の大都市、江戸としてはまことに珍しい現象であった。通りは東へ鉄砲町、小伝馬町、馬喰町と、浅草御門まで続いているのである。その通りが、無人の白い帯となって伸びている。

ギラギラとした陽光が、目に痛いほどであった。地上にくっきりと黒を描いているのは、日射しを遮っている何かの影である。江戸中の人間が、家の中で横になっているのに違いない。

四人は、居酒屋へはいった。水木新八郎と浅香伝兵衛は奥へ向かい、小者と中間は離れて端近の席についた。ほかに客は、ひとりもいなかった。四人はまず、紅潮した顔の汗を拭き取った。

「いらっしゃいまし」
ぼんやりした顔で、亭主が出て来た。それでも亭主は定回り同心の姿を見て、慌ててシャンとしたつもりなのである。
「一合升だ」
浅香伝兵衛が言った。
亭主が四人分の冷や酒を、皿の上に置いた一合升についで運んだ。升には盛り塩が、添えてあった。四人は一斉に、塩を舐めた。汗を流し続けたあとには、塩と冷や酒が何よりだった。
「水木さん、本気かい」
浅香伝兵衛が、唐突に訊いた。
「何が……？」
升酒に口をつけながら、水木新八郎は無表情であった。
「あの一件について、まだ諦めちゃあいねえってことさ」
伝兵衛が言った。
「本気でござんすよ」
新八郎は、そう頷いた。
「おれも、諦めたくはねえな」
伝兵衛は、口惜しそうに舌を鳴らした。

「加賀屋の番頭に、自害しなくちゃあならねえような悩みのタネは、何一つねえと来ている」
「そいつなんだよな、水木さん」
「吉兵衛は加賀屋の二番番頭、来年には間違いなく一番番頭になるところだった」
「大番頭が暖簾分けってことで、来年の春には加賀屋を出ると決まっていた。そのあとを継いで、二番番頭の吉兵衛が大番頭になるわけだったんだ」
「いちばん、嬉しいときだろうよ」
「当たりめえだな。四十そこそこで、加賀屋という大店の大番頭になれるんだぜ。滅多には、めぐり合えねえ幸運だ」
「世帯を持っての通いを許されていた吉兵衛には、女房と子どもがひとりいる」
「夫婦仲が悪いどころか、吉兵衛の女房孝行は大変な評判だった。その上、子煩悩よ。だから悪い女に引っかかったり、女から恨みを買ったりすることは金輪際なかった」
「加賀屋の主人にも大層、商売の腕を見込まれていた」
「吉兵衛の売り込みで、加賀屋の商売が二割も増えたってからな」
「借金もなかった」
「身体も殺したって死なねえって冷やかされるほど、丈夫で達者だった」
「身辺に悩むようなゴタゴタは、何一つとしてなかったことになる」
「むしろ、いいことずくめよ」

「生きているってことが、楽しくてならなかったはずだ」

「その吉兵衛がどうして、自害しなけりゃあならねえんだい！」

大きな声で言って伝兵衛は、酒がなくなった升の角をチュウチュウと音を立てて吸った。

四十日前に番頭の吉兵衛が変死した加賀屋は、湯島一丁目にある薪炭問屋であった。薪炭問屋としては、江戸で五指のうちに数えられる大店である。世間の信用も評判も、上々の商家だった。

町家ばかりではなく、多くの寺院に薪や炭を納入していた。加賀屋という屋号でもわかるように、先祖は加賀国の出であった。そうした縁故もあって、加賀屋は前田家へのお出入りを許されていた。

加賀百二万五千石の大大名、前田家の上屋敷は、湯島一丁目からさほど遠くない本郷にある。この前田家の上屋敷と下屋敷で使われる薪や炭を、加賀屋が一手に引き受けていたのだった。

加賀屋の主人徳右衛門には、妻と五人の子どもがいた。奉公人は大番頭の金蔵、二番番頭の吉兵衛以下二十五人、出入りの人足が五十人からいた。商売繁盛、家内安全が続いている商家であった。

二番番頭の吉兵衛は三十九歳、頭の切れるやり手という評判の男であった。徳右衛門の信頼を一身に受けて、吉兵衛は加賀屋の商売の先頭に立っていた。それを裏付ける実力も実績も十分すぎるほどであった。

大番頭の金蔵が来年は暖簾分けをしてもらって、芝高輪に自分の店を出すことになっている。その大番頭のあとを継ぐということもあって、吉兵衛は大いに張り切っていたのである。

その吉兵衛が、突然の死を迎えたのであった。その日、暮れ六ツすぎに姿を消したまま、吉兵衛はすぐ近くにある自分の住まいへも帰らなかった。

翌朝、心配して加賀屋を覗きに来た吉兵衛の女房の話から、大騒ぎになった。その騒ぎがたまたま通りかかった岡っ引の耳にはいり、それがまた湯島一丁目の自身番にいた定回り同心浅香伝兵衛に伝えられたというわけである。

そのとき水木新八郎も、浅香伝兵衛と一緒に、湯島一丁目の自身番にいたのだった。

2

届け出はなかったが、浅香伝兵衛と水木新八郎は加賀屋へ足を運んだ。

その頃はもう、吉兵衛の居所について見当がついていたのである。徳右衛門をはじめ奉公人の大半が、加賀屋の裏庭に集まっていた。並んでいる土蔵のうち、いちばん左端の一棟を、奉公人たちは取り囲んでいた。

その土蔵の中に、間違いなく吉兵衛がいるというのだ。吉兵衛は暮れ六ツすぎになって暇ができると、よくその土蔵の中で横になっているということであった。休息のためではなかった。

明日以降の商売の策を練るために、土蔵の中で思案するのである。吉兵衛は横になって、

最近の得意先の注文書に丹念に目を通したり、ほかの薪炭問屋の得意先の名簿を調べたりする。

そのあと目を閉じて、沈思黙考を続ける。そして一時間後には、蔵から出て来るのであった。夏は涼しい蔵の中だし、内側から扉に閂をかけてしまえば別世界になり、考える場所としては絶好だったのだ。

それは、徳右衛門が公認していた。つまり徳右衛門は、吉兵衛が無断で蔵の中へはいることを許していたのである。加賀屋の商売のために策を練っているのだから、公認してもいいことであった。

もっとも、その蔵は薪炭を貯蔵するための予備の倉庫であって、加賀屋の私物も貴重品もはいっていなかったのだ。まだ一度も使っていない蔵なので、板敷きの床もまったく汚れていなかった。

「番頭さん！」

「返事をして下さい！」

「番頭さん、閂をはずして！」

「吉兵衛さん！」

口々に呼びかけたが、土蔵の中から応答はなかった。扉を叩いても、内側から閂がかけてあっては、どうにもならない。昨夜から蔵の中にいて返事をしないとなれば、生きてはいないのかもしれない。

浅香伝兵衛の指示により、土蔵の扉が打ち破られた。内側の閂を折るためには、十人がかりで何回となく扉に長くて太い丸太棒を打ちつけなければならなかった。ようやく閂が折れて、扉が左右に開いた。

伝兵衛と新八郎、それに岡っ引が蔵の中へはいった。蔵の中はガランとしていて、天井が高く感じられた。全体に床板が、敷きつめられていた。土間に薪や炭を積むと、湿って火付きが悪くなるからである。

その床板の中央部に、人間が大の字になっていた。二つ折りにして枕代りに使ったらしい座蒲団が一枚、目を通していたものと思われる書類が数十枚、床に立てたローソクが一本と、それだけのものが周囲に認められた。

吉兵衛は、死んでいた。

心臓の近くに、弾けたような傷口があった。死骸の左側へ、かなりの量の血が流れ落ちている。その乾いた血の海の真中に、長さ一尺の短刀が落ちていた。鞘は死骸の足許に、転がっている。

「深い傷だ」

肉が弾けたようになっている傷口を覗いて、伝兵衛が言った。

「この短刀で深々と胸を突いて、ぐるぐるっと抉ってから引き抜いたのかねえ」

新八郎が、首をひねった。

「殺しだな」

「違いねえ」
「ただ、下手人がどうやって、この土蔵の中へはいり込んだかだ」
「内側から、閂がかけてあった。とすると、扉からの出入りはできねえ」
「ほかに、出入口はねえんだな」
「どうやったって、土蔵の中へははいれねえよ」
「あそこは、どうだい」
伝兵衛が、真上を指さした。天井のすぐ近くに、明かりとりの窓があった。だが、人間の頭が抜けるだけの幅がないし、そこから出入りすることは不可能である。それに、梯子を使わなければ、その高さまでは行けなかった。
「蔵の外に、大きな松の木があった。あの松の木にのぼれば、外から明かりとりを通して、蔵の中を覗くことはできる」
新八郎が言った。
「だが、明かりとりから蔵の中へ、はいり込むことはできねえ」
「はいれたとしても、あの明かりとりから外へ出る手立てがねえだろう。忍びの術の心得があっても、あの高さまでは飛び上がれねえぜ」
「どっちにしろ、あの明かりとりからの出入りも無理だ」
「明かりとりから手裏剣を使う要領で、短刀を投げ込むってのはどうだい」
「的は射ても、こうまで深くは突き刺さらねえだろう。弓で射たんなら、別かもしれねえが……」

「短刀を矢にして、弓で放つなんてことは、できねえ相談だな」
「手裏剣の要領で投げ込んだにしろ、弓を使ったにしろ、飛んで来た短刀が突き刺さったんなら、そのままになっているはずだぜ。ところが短刀はこうして、血の海の中へ投げ出してある」
「咄嗟に短刀を抜き取って、投げ捨てたってことにはならねえかい」
「吉兵衛が苦しまぎれに短刀を引き抜くんだったら、もっと素直に抜き取ったはずだ。こんな傷口になるほど、抉ったり引っかき回したりして、短刀を抜くなんてことはやらねえよ」
「もう一つ、こいつがどうも腑に落ちねえんだ」
新八郎が、死骸の肩の近くに立ててあるローソクに、目を落とした。それは床に溶けた蠟を垂らして、その上に立てたローソクであった。しっかり固定されていて、ローソクは倒れかかってもいない。
それなのに、三分の一ほど短くなったところで、ローソクの火が消えているのである。夜のことでもあり、蔵の中は真っ暗になっている。当然このローソクの火を明かりに、吉兵衛は書類に目を通したのだ。
そのあと沈思黙考するにしても、ローソクの火を消したりはしないだろう。最後までローソクの火をつけたままにしておかなければ、蔵から出て行くときにも足許が無用心である。
そうなると、ローソクの火は吉兵衛が消したものではない。では、自然に消えたのだろう

か。だが、そよとも風の吹かない蔵の中で、ローソクの火が自然に消えるはずはないのだ。

本来ならば火はついたままになっていて、ローソクが燃え尽きたときに消えなければならない。ところが、ローソクはまだ十分に残っていて、火だけが消えているのだった。それも、吉兵衛自身が、消したわけではなかった。

「どうして、ローソクの火が消えたか」

新八郎は、腕を組んだ。

「火が消えたら、この蔵の中は真の闇だ。あの明かりとりからだって、吉兵衛に狙いをつけることはできねえ」

再び明かりとりを見上げて、伝兵衛が口笛を吹き鳴らした。

「ローソクの火は、吉兵衛を殺すと同時に消えたんだろう」

「自然にかい」

「下手人か吉兵衛の動きで、風が起こったのに違いない」

「吉兵衛は、刺されたほうだ。死骸の様子にしたって、苦しみもがいたというふうには見えねえ。吉兵衛は風を起こすほど、激しく身動きはしていねえだろう」

「だったら、下手人の動きで火が消えたんだ」

「下手人はローソクの火の近くまで来て、吉兵衛を刺し殺したのかい」

「近くまで来なくちゃあ、吉兵衛を刺すことだってできねえ」

「待ってくんねえ。その下手人はいってえどこから、この蔵の中への出入りを果したってこ

とになるんだ」

浅香伝兵衛は、新八郎の顔を見守った。

「わからねえ」

水木新八郎は、溜め息まじりに答えた。

結局は、堂々めぐりであった。帰するところは、下手人の侵入口と退路はどこかである。それについての結論どころか、見当のつけようもなかった。人間が出入りできるような隙間は、まったくないと言っていい。

そのことが、南町奉行所の与力・同心の意見を真二つに割るポイントとなったのであった。意見が割れなかったのは、吉兵衛が死んだと推定される時刻だけだった。吉兵衛は蔵の中にはいって一時間後の五ツ、午後八時頃に死亡したという判断である。これに、異論を唱える者はいなかった。

しかし、調べが難航するに従って、殺しではないと主張する者が多くなったのだ。その根拠は、吉兵衛のほかに誰も出入りできない蔵の中だから、ということである。単純にして明快、そして確実な根拠であった。

それは、厚い壁であった。

新八郎と伝兵衛は、次のような諸点を挙げて他殺であることを強調した。

一つ、吉兵衛に自害する理由がない。

一つ、関係者全員が吉兵衛自害について、納得がいかないと言っている。

一つ、なぜ蔵の中へ書類を調べにはいった者が、いきなり自害したりするのか。
一つ、吉兵衛は短刀など持っていなかったし、周囲の人間もその短刀に見覚えはないと証言した。
一つ、自害するのに、なぜローソクの火を消したのか。
一つ、自害するならば、喉を突くのが町人の習慣である。
一つ、自害した吉兵衛が、なぜ短刀を抜き取って脇へ投げ捨てたのか。
一つ、左利きではない吉兵衛だから、右手に短刀を握って左胸を刺したことになる。それなのに短刀が、死骸の左側に投げ捨ててあったのはなぜか。
一つ、書き置きもない。
一つ、加賀屋の裏庭へは夜間、人目に触れずに侵入することが容易である。
一つ、傷口が異様で、ただ短刀でひと突きにしただけの傷とは思えない。
一つ、商売上のやり手であった吉兵衛だけに、命を狙われる可能性はある。
こうした新八郎と伝兵衛の反論も、蔵の中へは誰もはいれなかったという厚い壁を、打ち破ることはできなかったのである。下手人に関しては見当もついていないということが、更に新八郎たちの足を引っ張った。
「では、下手人がどうやって蔵の中へはいったのかを、説明してもらいたい」
この一言で、新八郎も伝兵衛も沈黙を余儀なくされる。
二、三の回り方同心が、他殺説を支持したのにすぎなかった。あとはすべて、自殺説に回った。新八郎と伝兵衛は必死の努力を続けたが、四十日間の徒労に終わった。抗しきれずであった。

事件発生後の四十日目に、大岡忠相が調べを打ち切ることを命じた。大岡忠相は、自殺という判断は下さなかった。これ以上は無駄だから打ち切るというだけで、形の上では迷宮入りであった。

ところが、新八郎と伝兵衛が不満の余りヤケ酒など呷っている頃、奇妙な訴えが南町奉行所へ持ち込まれたのである。その訴えは些細な私事であり、町役人の段階で解決し、町奉行所まで持ち込むようなことではなかったのだ。

女房が不義を働いて妊娠したのに、どうしても相手の男の名前を教えないと、亭主が訴えて出たのであった。

確かに、この時代の姦通罪は厳しかった。密通した人妻も間男もともに死罪、密通した妻と間男を亭主が殺しても免責すると、定められているくらいである。だが、これは武士の世界では通用しても、町人になると表向きの法律にすぎなかった。

町奉行所としては、姦通の告訴にまったく消極的であった。町奉行所では、双方の名主、家主など町役人が立ち会って示談にするようにと、それですませてしまうのが普通だった。

そのことから姦通は慰謝料によって始末するという慣行が、町人の世界では一般化したのだった。間男が姦通した人妻の亭主に、慰謝料を支払うことで手を打つのである。慰謝料の相場は江戸で七両二分と決まっていて、それを『間男の首代』と称した。

立派な姦通罪でもこんなふうに解決されているというのに、その男の訴えは更に些細なことだったのだ。まず訴えるべき相手、間男が誰だかわからないという。それでは、不義密通の訴えにもならなかった。

亭主が自分の女房を、訴えたということになる。つまりは奉行所の威光で女房の口を割らせて、間男の名前を訊き出してくれ、という実に情けのない訴えなのである。本来ならば当然、町役人に相談しろということで、奉行所では取り上げないはずだった。

だが、その訴えを取り上げようと、大岡越前守忠相が言い出したのである。それは、訴え出た男が湯島一丁目の太物商だと、わかったからだったのだ。

3

湯島一丁目の太物商、丸屋利助、三十七歳である。

女房のおよねは三十歳、夫婦になって十二年がすぎている。夫婦のあいだに子どもはなく、近々のうちに養子を迎えようという話になっていた。

太物商には違いないが、奉公人を使っているような商家ではない。丸屋という店は、夫婦二人きりでやっている。長屋住まいという貧しさではないが、まあ細々と成り立っている店であった。

太物というのは、木綿のことである。絹を扱うのは呉服商、木綿を売るのは太物商と分けられていたのだ。丸屋では木綿ものの小売りもしているが、その利益だけでは生活も決して

楽ではない。

そこで利助は顔が売れている木綿の産地へ出向き、少しでも安い値段で江戸の問屋へ出荷するように話をまとめて、そのサヤを稼いでいたのだった。利助はそうした商売のために、一年に三度は旅に出る。

利助とおよねの夫婦仲は、決して悪くなかった。子どもがいないせいか、新世帯の夫婦みたいに甘い仲だという評判である。利助が旅に出て留守のあいだ、およねは大変な寂しがりようだと、近所のおかみさんたちが苦笑する。

ところが、その夫婦のあいだに、とんでもない事件が持ち上がったのだ。突然およねが気分が悪いと言って、食べたものを吐いたりするようになったのである。そのうちに、酸っぱいものを食べたがるようになった。

利助もおよねも初めての経験なのでよくわからなかったが、隣家の主婦がオメデタではないかと言い出した。夫婦はびっくり仰天して、医者のところへ飛んで行った。その結果、妊娠しているということが、明らかになったのである。

「それがつまり、そのほうの子ではないと申すのだな」

吟味与力が、利助にそう念を押した。その訴えを取り上げると大岡忠相のお声がかりがあったので、吟味与力が下調べを行い、綿密な調書を作成することになったのだ。

「さようでございます」

利助は、必死の面持であった。

「なぜ、そのほうの子ではないと、わかるのだ」
「わたくしには、子ができません。その証拠に夫婦になって十二年のあいだ、およねはただの一度も身籠りませんでした」
「世の中には十年目、十五年目に初めて子ができたという夫婦も、決して珍しくないのだぞ」
「いいえ、わたくしは駄目なのでございます」
「医者が、そう申したのか」
「はい、三人の先生からはっきりと、お前には子種というものがないから生涯、実の子には恵まれないだろうと、引導を渡されたのでございます」
「医者の言葉だろうと、絶対ということはない」
「三人の先生でございます」
「たとえ百人の医者が同じように見立てても、子ができるかできないかは断言できぬものだ」
「その、わたくしに子種がないということだけではないのでございます。先生の話によりますと、この三月に交わったことから、およねに子ができたのだそうでございます。ところが、わたくしには交わった覚えがございません」
「その話、確かなのか」
「はい。この三月に夫婦の交わりをしていないということにつきましては、およねもその通りだと申しております」

「ほう」
「この三月はまるまる旅に出ておりまして、わたくしは江戸におりませんでした」
「なるほど、それなら話は確かだ」
「およねはこの三月に間男して、そのために身籠ったとしか考えられません」
「亭主の長旅の留守に、女房が不義密通をする。よくある話だな」
「密通した上に、その間男の子を孕んだのでは、わたくしも黙ってはおられません。それで、間男の名を教えろと責め立てたのですが、およねは知らぬ存ぜぬの一点張りなのでございます」
利助はいかにも、口惜しそうであった。利助としては間男が誰であるかを知り、それなりの償いをさせれば、もう女房を責めるつもりはないのである。
吟味与力は次に、およねの下調べにとりかかった。
「そのほう、まことに密通した覚えがないのか！」
吟味与力は、まず一喝した。真実を語らせるには、何よりも効果的なのである。
「はい。間男したというような覚えは、まったくございません」
およねは内気で、おとなしそうな女であった。見た目には亭主の留守中に、淫楽を貪るという女のタイプではなかった。
「しかし、男と交わらずに、女が身籠るかな」
「そんなことは、ございません」

「では、この三月にそのほう、利助と交わったのか」
「いいえ、利助は旅に出ていて、留守をしておりました」
「妙ではないか。それでどうして、そのほうに子ができたのだ」
「よく、わかりません」
「利助以外の男と交わったのであれば、正直に申せよ。いまのうちならお咎めもなく、相手の男さえ判明すれば利助も夫婦別れをするつもりはないと申しておる」
「間男とか、相手の名とか、そうしたことには一向に覚えがございません。ですが、ただ……」
「申せ」
「はい。間男した覚えはございませんが、あるいはあのときと、思い当たるふしがございます」
と、およねはそのときは気にとめなかったという記憶の埋没について、告白を始めたのである。
利助が旅立って半月がすぎたその日、およねは何となく疲れを覚えていた。店をひとりで守る気疲れと、毎夜の浅い眠りのために身体も疲れていたのである。日暮れを迎えて、およねは裏口のところにしゃがみ込み、ぼんやりと夕景を眺めやっていた。
聖堂の裏手のお茶の水の流れに面して何本かの杉の大木が並び、その下に石地蔵が置かれてあった。あまり古くない石地蔵で、背の高い男の等身大だった。この付近では、『美男地

蔵』と呼ばれていた。
眉目秀麗の青年僧を石地蔵にしたという感じで、一般の石地蔵より顔立ちが個性的であった。利助はいま頃、どこでどのような石地蔵を見かけているだろうかと思いながら、夕闇が濃くなったのでおよねは立ち上がった。
とたんに、目の前が真っ白になった。立ちくらみといった生易しいものではなく、およねは気が遠くなるのを感じた。心身の疲労が、貧血を起こさせたのだった。およねはそのまま、仰向けに土間へ倒れ込んだ。
頭を打ったせいもあるのか、およねは完全に気を失ってしまった。気を失っているあいだのことは、まったく記憶になかった。夜風の冷たさに意識を取り戻したとき、およねはやはり土間に仰向けに倒れていた。
すっかり夜になっているのに驚いて、およねは荒てて裏口の板戸をしめた。一時間ほど、気を失っていたようである。ふと股間に妙な感触を覚えたが、およねは調べてみる気にもなれなかった。
意識を失って倒れたときに、尿を少し洩らしたのかもしれない。それに、下り物に慣れている女は、それほど神経質ではなかった。それよりも気分が悪いので、一刻も早く横になりたかったのである。
「もしも、そのとき……」
およねは吟味与力の目を避けて、顔をそむけるようにして伏せていた。

「通りすがりの男が、あいている裏口から覗いて、土間に倒れているそのほうを見た。男は驚いて土間へはいり、そのほうを抱き起こした。だが、そのほうは気を失っているだけだったし、身体に触れているうちに男は妙な気分になった」

吟味与力は、およねの打ち明け話に嘘はないようだと、判断を下していた。

「はい。そういうことだったとしか、思えません」

「気を失っていたそのほうは、もちろん相手がどこの何者か、顔も名もわからんわけだな」

「はい」

「そんなことが因で身籠ったとは不運というか、ものの弾みの恐ろしさとでもいうか……」

吟味与力も、思わず長嘆息せずにはいられなかった。

その吟味与力からの調書を受け取った大岡忠相は、すっかり考え込んでしまった。およねの告白を利助に伝えただけでは、大岡越前守が乗り出してのお裁きにはほど遠いものとなる。何としてでも、意識を失っているあいだにおよねを犯した男を捕えて、利助の前に引き据えてやりたいところであった。だが、それはとても、不可能なことだった。昨日や今日の出来事なら、何とかその男を割り出すこともできるだろう。

しかし、およねが凌辱されたのは、この三月のことなのである。通りすがりの者であれば、いまはもうどこにいるかわからない。湯島一丁目界隈に住んでいる男だったとしても、すでに当人が忘れているようなことなのだ。

人殺しや盗賊とは違う。あとに何の証拠も残らないし、その場限りの犯罪なのである。赤ン坊というとてつもなく大きい証拠があるようでも、それがまた証拠としては役に立たないのであった。

忠相は考えた。

およねを犯した男を探索することは、断念しよう。

利助とおよねの夫婦仲が、壊れないように取り計らわなければならない。

生まれて来る赤ン坊を、夫婦の子として育てさせよう。

以上のような方針を立てて、忠相は策を練ったのである。

三日後、大岡忠相は定回り同心の浅香伝兵衛を呼んだ。

「伝兵衛、捕物じゃ」

忠相は言った。

「はあ……？」

浅香伝兵衛は、面喰らっていた。

忠相から直接、捕物を命じられるのも異例なことだったし、それに縄をかけるような悪党が出現したという情報をまったく耳にしていなかったのである。

「湯島一丁目、聖堂の裏手にある石地蔵を召捕って参れ」

忠相は真面目な顔で、そのように命令を下した。

「石地蔵を、召捕るのでございますか」

伝兵衛は、目を丸くした。

「手の者を十名ほど、連れて行くのじゃ。その美男地蔵とやらに縄を打ち、車に積み、当奉行所まで引っ立てて参れよ」

「はあ」

「不満そうな顔じゃな」

「いや……」

「江戸の町方にあれば、たとえ地蔵であろうと、この越前の支配のうちだ」

「はあ」

「召捕るときに、急ぐ必要はないぞ。見物人が集まっても、追い払ったりは致すな。また縄を打った地蔵を運ぶのに、多くの見物人や野次馬があとを追って来るに違いない。だが、それも追い散らさずに、最後まで好きにさせよ」

「承知致しました」

「更に、いかなるお咎めあって石地蔵を召捕るのかと問う者がおれば、太物をあきなう商人に多大の迷惑をかけた罪によって縄を打つと答えよ」

「心得ました」

浅香伝兵衛にもようやく、忠相に何やら考えがあってのことだろうと察しがついた。そこで、すぐさま行動に移ったのだが、普通の捕物のような颯爽としたところがまるでない。石地蔵を縛りに行くなど、まったく締まらない話であった。

それでも、命令とあらば仕方がない。捕物の準備を整えると、十人の捕吏を引き連れてというもののものしさで、浅香伝兵衛は数寄屋橋御門内の南町奉行所から湯島一丁目へと向かった。

五ツ半、午前九時には湯島一丁目に到着した。そこで初めて伝兵衛は、例の加賀屋のすぐ近くだと気がついたのである。しかし、加賀屋の一件と石地蔵の召捕りに、関係があろうはずはなかった。

午前九時というのは、一日のうちに何回か繰り返される人出の最初のピーク時であった。これから捕物が始まるというのは、何よりも野次馬根性を刺激する。そして、物見高いことでは人後に落ちない江戸の下町っ子であった。

それとばかりに、見物人が押し寄せて来た。

4

定回り同心の指揮のもとに、十人の捕吏が石地蔵に縄を打っているのだから、何とも珍妙な光景である。見物人は唖然となったり呆気にとられたりだが、その世にも珍しい捕物がまた話の種で、野次馬は増える一方であった。

当然、何のお咎めで美男地蔵を召捕るのかと、質問する者が出て来る。その点については忠相から指示を受けているので、浅香伝兵衛も心得たものだった。伝兵衛は真面目な顔で、忠相に言われた通りに答える。

「この美男地蔵は、太物をあきなう江戸の町人に、えらい迷惑をかけてくれてな。それでお

召捕りの上、南町奉行所まで引っ立てるのよ」

伝兵衛が答えるのは、たったひとりの相手で十分であった。その男の囁きが八方に散って、あっという間に何百人もの野次馬に伝わるからである。もちろん、その言葉の狙いがわかる者など、ひとりもいないのだ。

十人の捕吏が美男地蔵を、ぐるぐる巻きに縛り上げた。その石地蔵を、荷車の上に横たえる。更に石地蔵に縄をかけて、荷車にしっかりと固定させた。それで、引き揚げということになる。

奉行所へ運ばれた石地蔵は、どうなってしまうのか。大岡越前守は本気で、地蔵を罰するつもりなのか。どのようなお裁きになるのだろうか。そうした好奇心も働くし、人々はまさに興味津々であった。

そうなると、あとについて行きたくなるのが人情というものである。二百人ほどの野次馬が、荷車のあとを追って来た。途中から縛られた地蔵を見たり、話を聞いたりで、続々と野次馬が参加する。

荷車が南町奉行所についたときには、そのあとに従う者五百十余人になっていた。追い払われないし、制止されることもないので、その五百十余人の野次馬は奉行所内まではいり込んでしまった。

奉行所の表門がしまった。

表門から玄関までが、中央を石畳が走っている広場になっていた。その前庭に、五百十余人が閉じ込められた恰好になった。これは大変なことになりそうだと、気がついたときはもう遅かった。

「そのほうたち、ここをいずこと考えるか！　天下のお裁きが行われる御奉行所内に、無断で立ち入ったるは不届き至極！」

「美男地蔵のあとを慕ってここまで参ったのは、そのほうどもが美男地蔵の縁故の者という証拠だ！」

「ひとり残らず、召捕るぞ！」

与力たちが、五百十余人に向かって、大声を張り上げた。もちろん、大岡忠相の指示通りに下知したのである。誰もが青くなったが、なるほど言われる通りであった。まさか重罪に問われることはないだろうと、観念するほかはなかった。

男女五百十二人が残らず、町名と職業、年齢と名前を記録された。その上で、全員に罰が申し渡された。罰は軽くて、過料であった。それも罰金ではなくて、不思議な過料の内容だった。

「美男地蔵はそのほうたちが承知している通り、さる太物商人に多大の迷惑をかけた罪により召捕ったものである。然るに、そのほうたちは縁故の者として美男地蔵のあとを慕い、当奉行所へ無断で立ち入った。よって太物商人に迷惑を及ぼした科人の縁故者として、そのほうたちひとりにつき白木綿一反の過料を申し付ける。三日のうちに、当奉行所まで持参せよ」

そのように申し渡しがあったあと、全員が放免ということになった。ひとりにつき白木綿一反の過料なら、どうにでもなる。三日のうちに白木綿一反を奉行所へ届ければ、それでもう完全な無罪になれるのであった。

あっさり放免となったことに安堵しながら、五百十余人の男女が次々に南町奉行所の門外へと出て行った。このままで終われば、すべてが大岡忠相の思惑通りに運んだということになるのだった。

夕刻になって、忠相は内詮議所へ筆頭与力を招いた。石地蔵御用の首尾を訊くためであった。この筆頭与力は、吟味方の最高責任者のことである。吟味方には本役四人、助役六人の計十人の与力と、その下役を勤める同心が二十五人ほど属している。

「放免とした五百十二人、残らず奉行所を立ち退いたであろうな」

忠相は一応、そのように念を押した。わかりきったことを、忠相は訊いたのである。少なくとも、忠相自身はそう思っていた。だが、吟味方の筆頭与力は、すぐに返事をしようとしなかった。

「どうしたのだ」

忠相は返事を促しながら、おやっと思った。

「それが……」

筆頭与力は、困惑の表情でいた。

「いかが致した」

「五百十二人のうち五百十一人は、申し渡しをお受けして、直ちに当奉行所を立ち退きました」

「もうひとりは……」

「はい。その者一人だけが、未だに当奉行所内に留まっております」

「何故じゃ」

「わかりませぬ」

「その者の言い分を、聞いたのか」

「はい。その者の申すには、白木綿一反を差し出す力もないので、御放免になっても致し方がないとのことでございます」

「つまり過料に応じられないので、放免になる資格もないと申すのだな」

「はい。それにもう一つ、自分は美男地蔵を慕っている縁故の者であり、美男地蔵が消えたところへは戻りたくないし、美男地蔵のそばを離れたくないと申しております」

「美男地蔵は、どこに置いてある」

「お白洲の一隅に、置いてございます」

「その者はいまも、白洲の美男地蔵のそばにおるのか」

「はい。美男地蔵に縋って、一歩も離れようと致しませぬ」

「そうまで美男地蔵を、信心しておる者なのか」

「わかりませぬ」

「それにしても、変わっているな。奉行所を恐れずに、美男地蔵のそばを離れぬとは……」
「はい」
「その者の住まい、年、名を聞かせてくれぬか」
「湯島一丁目の加賀屋に奉公しております下女で、年は十七、名はさきでございます」
「加賀屋の奉公人とな」
忠相は、眉根を寄せていた。
「とりあえず、仮牢に入れておくことに致しましょうか」
筆頭与力が言った。
「いや、待て。いまのままに、捨ておくのだ」
忠相は、首を振った。
異変である。忠相は利助夫婦が加賀屋と同じ湯島一丁目の住人であることに気づき、ふと興味をそそられて女房の密通に関する訴えを受理したのであった。そのために石地蔵御用、という珍事にもなったのである。
ところが今度は、美男地蔵に心中立てをする者として、加賀屋の奉公人が登場したのだった。妙な一線で思いがけなく、加賀屋と結びついたのであった。そうなると、またまた異変である。
忠相は水木新八郎と浅香伝兵衛を呼び、事情を説明したあと、三人揃ってお白洲へ向かった。内詮議所を出て溜之間を抜け、廊下伝いに裁許所まで行き、次の間を通ってお白洲に面している板縁に立った。

夕闇が訪れたお白洲の一隅に、縄をかけたままの美男地蔵が置かれている。その足許にすわって、石地蔵の顔をうっとりと見上げている娘の姿があった。下女らしい身装だが、いかにも初心な娘という可憐な顔つきである。
その近くを所在なさそうに歩き回っていた同心が、忠相の姿に気づいてお白洲に片膝を突いた。忠相がその同心に、見張り役は無用の合図を送った。同心は一礼して、お白洲から姿を消した。
「娘のあの顔を見るがよい」
忠相が微笑を浮かべて、新八郎と伝兵衛のどちらへともなく小声で言った。
「何か変わった顔でございますか」
伝兵衛が、小首をかしげた。
「あの顔を見れば、娘の胸のうちが読み取れる。のう、町人侍」
忠相は、新八郎の反応を窺った。
「へい」
新八郎は、表情を動かさなかった。
「どう読み取った」
「あの娘が地蔵のそばを離れたがらねえのは、信心のせいじゃあござんせんね」
「うむ」

「あの娘、美男地蔵に惚れておりやす。好きな男と変わらねえから、ああしてそばを離れねえんでござんすよ」

「しかし、最初から生きている男でもない石の地蔵に、娘が思いを寄せるだろうか」

「そいつはちょっと、考えられねえことでござんすね。あの娘は最初から、地蔵に惚れたわけじゃあねえでしょう」

「では、娘が最初に思いを寄せたのは……」

「やっぱり、生身の男だったんでござんしょうね。娘が惚れた生身の男ってのは、あの美男地蔵の顔とそっくり生き写しだった」

「ところが、あるとき好きな男がこの世を去るか、遠くへ旅立つかしてしまった」

「それ以来、娘は惚れた男の代わりに、あの石地蔵に思いを寄せるようになったんでござんしょう」

「いまでは娘の胸のうちで、その男と美男地蔵とが一つになってしまっているのに相違ない」

忠相は、憐れむような目つきになっていた。

「一つ、確かめてみましょう」

と、浅香伝兵衛が大きな声で、娘の名前を呼んだ。おさきが、振り返った。伝兵衛が、手招きをした。おさきは立ち上がって、おずおずと近づいて来た。おさきは板縁の下に正座すると、恐る恐る両手を突いた。

「御奉行さまだぞ」

伝兵衛が、おさきを見おろして言った。おさきは、慌てて平伏した。

「おもてを上げよ」

忠相が、声をかけた。

「湯島一丁目の加賀屋徳右衛門方の下女で、さきと申します」

半分ほど顔を上げて、おさきが言った。

「おさき、おめえ美男地蔵が運び去られるのに驚いて、誰にも断わらずに無我夢中であとを追って来たんじゃあねえのかい」

伝兵衛が訊いた。

「はい」

おさきは、深く項垂れた。

「そのまま、こんな時刻になっても戻らねえで、お店じゃあ大騒ぎをしているだろうぜ」

「はい」

「奉公人がそんな勝手気ままなことをして、すむはずがねえじゃあねえかい」

「でも、あのお地蔵さまが湯島一丁目から、遠く離れたところへ行ってしまわれたら……」

「おめえ、そんなに惚れているのかい」

「え……？」

「わかっているんだよ。おめえがあの美男地蔵に生き写しの男に、惚れているってことは

な」

「惚れているなんて、そんな……」

「そんなじゃあねえって言いながら、おめえ真っ赤になっているじゃあねえかい」

「いいえ、わたし……。身分が違いすぎるのに、そんな厚かましいことはできません」

「身分が違う……？」

「はい。わたしなんぞは町方の者、それも下女として奉公しているんですから……」

「町方の者ってことにこだわるのは、相手が侍だからじゃあねえのかい」

「もう、お許し下さい。笑いものに、されたくはありません」

「笑っちゃあいねえよ。確かに町方の下女が侍に惚れたって話は聞いたこともねえが、それだけに気になるじゃあねえかい。その侍ってのは、いってえどこの何者なんだい。おめえが何度も見かけているんだから、加賀屋にちょいちょい立ち寄る侍なんだろう。加賀屋のお出入り先は前田家、その前田家の家中ってことになるな」

「はい。岩井兵三郎さまと申されます。前田さまの御上屋敷で、勝手方をお役目になさっておいでです」

「その岩井兵三郎さんは何の用があって、ちょいちょい加賀屋へ立ち寄るんだい」

「亡くなった番頭さんと、心安い仲だったようでございます」

「吉兵衛とかい」

「岩井さまは商売のことで、番頭さんの力になっておいでだったし、番頭さんはそのお礼として岩井さまに金子を差し上げていました」

「おめえ、その現場を見たのかい」

「はい、一度だけ裏庭の土蔵の脇で……」

「そのとき岩井さんは吉兵衛に、どんな商売の話を持ちかけていたんだ」

「前田さまは殿中で、尾張、紀州、水戸の御三家、それに越前の松平さまと同室されるので、家臣同士にも心安い者が多い。拙者が御三家と越前の松平さまの上、中、下の御屋敷で加賀屋の薪炭を使うよう話をつけてやると、岩井兵三郎さまは申しておられました」

「それで、吉兵衛のほうは……？」

「何分よろしくと岩井さまに、袱紗の包みを渡していました」

「袱紗の包みとなると、五十両ってところだろうな。だが、おめえはまた何だって、岩井兵三郎さんの代わりに、生き写しの美男地蔵に惚れたりしたんだ。岩井さんが死んじまったわけじゃあねえだろうし、まだ加賀屋へ顔を出すことだってあるんだろう」

「いいえ……。もう五十日も前から、岩井さまは一度もお見えになっておりません。代わりに、別の勝手方のお武家さまが、おいでになります」

「五十日も前からとなると、吉兵衛が死んだ頃じゃあねえかい」

「はい」

「それ以来、岩井さんとの縁が切れているってわけだな」

「もう岩井さまのお顔を、二度と見ることはできないだろうと思っております」

「それで、美男地蔵を岩井さんに見立てて、毎日お目にかかっては思いを寄せていたってことかい」

伝兵衛は、忠相と新八郎の顔へ、目を走らせた。新八郎は無表情だが、忠相の顔はかなり厳しくなっていた。伝兵衛自身の目つきも、尋常ではない熱っぽさを帯びている。三人は改めて、顔を見合わせた。

縁とはまさに、不思議なものであった。まるで異質なものと思われていた二本の枝が見事に交差して、そこから予期し得なかった真実の果汁が滴り落ちたのである。奇怪なる因果の典型を、大岡忠相は見せつけられたのだった。

5

翌日の午前中には、前田家の臣、岩井兵三郎に関する情報が、南町奉行所にもたらされた。岩井兵三郎は二十八歳で、前田家御上屋敷の勝手方であった。勝手方とは、会計係である。剣の心得は特にないが、半弓の名手だという。半弓は大弓に対する呼称で、すわったまま矢を射ることができる小型の弓であった。やはり、土蔵の中の吉兵衛を殺すのに弓矢が使われたのである。

大岡越前守忠相は八ツ、午後二時に下城して南町奉行所に帰りつくと、すぐに水木新八郎と浅香伝兵衛を裏居間へ呼んだ。例によって忠相は、役宅と番所の境にあって公用にも私用にも使える裏居間を、密談の場としたのである。

「そのほうたちの主張通り、やはり吉兵衛は殺害されたのだ。下手人は前田家の臣、岩井兵三郎なる者に相違ない。岩井は御三家と越前松平家の上、中、下の各屋敷にて加賀屋の薪炭を使用するよう渡りをつけてやるという甘言により、吉兵衛から多額の礼金を得た。しかし、もとより作り話であり一向に実現を見ないことから吉兵衛の催促を受け、進退極まった岩井は口を封ずるために吉兵衛を殺害に及んだ」

忠相は一気に、断定的な意見を口にした。新八郎と伝兵衛には、その意見に対して異論があろうはずはなかった。

「岩井兵三郎は、弓矢を用いたのでございますか」

伝兵衛が訊いた。

「岩井は闇にまぎれて加賀屋の裏庭へ侵入し、扱いに便利な半弓を手にして松の木にのぼった」

「蔵の明かりとりからでも、矢を射込むだけならば容易にできることでございます」

「蔵の中にはローソクの火があって、横になっている吉兵衛の姿がはっきり見えたはず。岩井はその心の臓のあたりに狙いを定めて、半弓の矢を放った。半弓の名手と言われるほどの腕前だから、矢は間違いなく左の胸に突き刺さった」

「その矢の始末は、どのようにつけたのでございましょう」

「あらかじめ、矢には弦のように丈夫な糸が結びつけてあった。その糸を引っ張って矢を抜き取り、明かりとりの外へと手繰り寄せたのだ」

「矢を強引に抜き取ったために、あのような傷口になったのでございますな」
「矢は一瞬だが、激しい風を巻き起こして飛ぶ。そのために、ローソクの火も消えたのよ」
「なるほど」
「しかし、それだけでほかに何の細工も施さずにおけば、明かりとりから矢を射込んで殺害したものと容易に発覚してしまう。そうなっては、半弓の名手ということで岩井に疑いの目が向けられるかもしれぬ。そこで、吉兵衛が自害したものと見せかけるために、岩井は小細工を施した」
「短刀でございますか」
「その短刀もただ単に、死骸のそばに落としただけでは何にもならぬ。短刀は、血にまみれていなければならないはず。それで岩井は明かりとりから中へ短刀を投げ込んだ。吉兵衛の傷は左胸にあり、そこから流れ出た血は自然に、左側に溜まることになる。その血溜まりをねらって岩井は投げ込んだから、短刀が死骸の左側に投げ捨てられていたということになったわけでな」
「ご明察、恐れ入りました」
「さて、岩井兵三郎の処置を、いかように致すかだ」
「岩井兵三郎を屋敷内より追放するよう、前田家に掛け合ってみてはいかがでございましょう」
「難しいな。大名には大名の面目があろうし、殊に前田家ともなるとほかの大名よりも更に威光と格式を重んじよう」
「掛け合っても、当方の求めには応じませぬか」
「恐らく岩井兵三郎を庇って、拒むであろうな。拒まれたら相手が前田家だけに、遠慮せねばなるまい」
忠相は、新八郎へ視線を転じた。
武家地は、町奉行所の管轄外である。大名屋敷となると治外法権で、町奉行所としては手も足も出ない。だが、江戸町人を殺害した大名の家臣が一歩でも屋敷の外へ出れば、それを逮捕することは可能である。
それで人殺しを屋敷の外へ追放するようにと交渉して、相手がそれに応じてくれれば事は簡単なのだ。大名屋敷の外へ出たら、武士だろうと町人並みに捕えることができる。しかし、大名には町奉行所風情の手に家臣を渡したくない、という意地があるのだ。
特に相手が前田家では一旦拒否されたら、老中、大目付という大名を監察する幕閣であろうと、強腰には出られない。何しろ金沢百二万五千石の大大名で、殿中席次も御三家に次ぐ筆頭、武家格式も御三家の大納言・中納言に次ぐ宰相、という前田家なのである。
「このまま何事もなかったように、知らん顔でいたほうがようございましょうね。そうすりゃあ岩井兵三郎のほうから、屋敷の外へ出て参りやすよ」
意味ありげな忠相の視線に、新八郎はそのように答えたのであった。忠相はもう二度と、そのことには触れようとしなかった。

二日後に、利助の訴えに対する裁断があった。呼び出しを受けたのは利助、およね、おさき、それに三人の差添人たちである。お白洲にはいった利助とおよねが中央に並んですわり、少し離れたところにおさきが正座した。

その背後に名主、大家、五人組といった三人の差添人たちがずらりと控えている。奉行手限り裁判と言い、町奉行だけで裁断できる最も手軽な裁判であった。しかも今日の場合は民事だから、恐怖に戦く顔も見当たらなかった。

「そのほうの訴えに基き、奉行じきじきに吟味したところ、およねと密通したるはこの者と判明致した」

忠相は利助にそう言ってから、縄付きのまま置いてある美男地蔵を指さした。

「はあ」

「はい」

利助とおよねは驚いたものの、何となく滑稽な雰囲気に思わず苦笑した。

「そこで奉行はこれなる美男地蔵を厳しく糾明し、次のような示談を取り付けた。一つ、美男地蔵は間男の首代として利助に白木綿五百十一反を差し出すこと。一つ、利助はおよねが出産した子を夫婦の実子として養育すること。いかがじゃ、利助。奉行が仲介のこの示談に、不服があるか」

忠相は、利助を見据えた。

「不服などとは、とんでもございません。御奉行さまの御裁断、ありがたくお受け致します

でございます」

利助が言った。

「ありがとうございます」

およねも、喜色満面の顔を隠そうと、平身低頭するばかりであった。

利助とおよねには、忠相の真意が通じたのである。間男は石地蔵だったとして、夫婦の陰湿な気持を解きほぐした上で、五百十一反の白木綿を利助に贈ったのであった。夫婦に、文句があろうはずはなかった。

五百十一反の白木綿は、七両二分という間男の首代の比ではなかった。それだけの白木綿を丸屋の店に置けばまる儲けで、商売の規模を広げる資金にもなる。もうサヤ稼ぎのために、旅に出たりする必要もない。

およねの腹の子にしても、それを夫婦の実の子として育てることに、異存があるはずはなかった。もともと自分の子は得られない利助であり、養子を迎えるつもりでいたのである。養子よりもおよねが生んだ子のほうに、情を感ずるというのが当然であった。

利助夫婦は五百十一反の白木綿とわが子を、一度に手に入れたのだった。その場で利助夫婦に、五百十一人が過料として奉行所へ納めた五百十一反の白木綿が、そっくり引き渡された。

利助夫婦とその差添人がお白洲から引き揚げると、忠相は直ちに美男地蔵の縄を解き、荷車に積み込むことを命じた。そして今度は、お白洲の中央へおさきが呼ばれたのであった。

「おさき……」

忠相は同情の眼差しで、おさきを見やった。

「はい」

おさきは、やや緊張した面持ちであった。美男地蔵の今後を、気にしているのに違いない。

「これなる美男地蔵はこの度、人殺しの下手人を捕えるというお手柄を立てた」

「さようでございますか」

「よって、無罪放免と致す」

「では、お地蔵さまを湯島一丁目へ、返して頂けるのでございますね」

「うむ。但し、湯島一丁目の聖堂の裏手には戻さずに、加賀屋の脇の路地の奥に置くことと致す」

「え……！」

「加賀屋徳右衛門がそこに、地蔵堂を作り美男地蔵を納めるとのことじゃ。今後はそのほう日に何度となく、美男地蔵に会えるわけだぞ」

「ありがとうございます」

「おさき、そのほうが思いを寄せる相手は、この美男地蔵だけに致せよ」

「はあ……？」

「岩井兵三郎のことは、綺麗さっぱり忘れろと申しておるのじゃ」

「は、はい」

「岩井兵三郎は帰国を命ぜられて、加賀国の金沢へと旅立ったそうだ。そして二度と、江戸には戻るまいとのことであるぞ」

「さようでございますか」

「しかし、おさきにはこの美男地蔵がおって、いつでも好きなときに会えるのじゃ」

「はい」

「寂しくはなかろう」

「はい」

「手の届かぬ男よりも、身近にいる石地蔵に思いを寄せていたほうが、毎日を楽しめるというものじゃ」

「はい」

おさきの顔が、明るく綻んだ。もともと違う世界に住む男への慕情は、乙女にとって夢か憧憬にすぎなかったのである。現実に男と接するよりも、その面影だけを抱いていることに満足を覚えるのであった。面影は、美男地蔵に見出すことができる。

五日後――。

浅草御門の近くの路上で、ひとりの武士が斬殺された。蒸し暑い宵の口のことで、涼みに出ていた数人の男が「心形刀流」という言葉を耳にしたほかは、何もわかっていない事件であった。

岩井兵三郎の死骸は前田家の上屋敷に引き取られたが、その死についてはまったく世間に

知らされなかった。

「暑い、暑いぞ」

その夜、大岡越前守忠相はそう呟いたあと、激しい頭痛に襲われて、またしても七転八倒の苦しみを味わうことになったのだった。

湯島一丁目の美男地蔵はその後、『縛られ地蔵』あるいは『おさき地蔵』とも呼ばれて人気を集め、信心する者が日に日に増えたと言われている。

お裁き剣法

1

享保六年の晩秋、南町奉行所の白洲において、異例の奉行白洲吟味が行われた。南町奉行大岡越前守忠相が直接、犯罪者を取調べたのであった。この奉行の白洲吟味というのは、異例なこととされていた。

裁判での奉行の仕事は、最初の顔合わせに判決の申し渡しだけと、決まっていたからである。最初の顔合わせとは、いわゆる人定尋問であった。あとは判決のときまで、町奉行と被告が顔を合わせることはない。

あとは吟味与力が、取調べに当たる。この段階で、何としてでも白状させるのであった。白状しなければ、牢屋敷において拷問にかける。このあたりが、現代とは逆になっている。

現代では、容疑者の自供だけでは、とても裁判に持ち込めない。ところが当時は、いかに証拠が揃っていても容疑者が白状しなければ、起訴することができないのである。あくまで、当人の自白が中心となっていた。

そのために、拷問にかける。

容疑者が白状すると、その記録をまとめて口書を作成し、捺印を押させる。この調書ができあがったところで吟味与力の任務は終わり、町奉行が容疑者を白洲に呼び出して判決を下すのであった。

従って、取調べの途中で奉行が直接、白洲での吟味を行うのは、極めて異例ということになるのだった。吟味与力の仕事を奉行がみずからやるのであり、それだけでも取調べを受けるのが容易ならざる人物だと明らかになる。

容疑者は小伝馬町の牢屋敷から、数寄屋橋御門内の南町奉行所へ縄付きで送られて来た。南町奉行所の囚人溜に収容されて、その浪人者は呼び出しを待つ。申の刻、午後四時に浪人者は白洲へ呼び出された。

白洲の中央のムシロの上に、浪人は腰縄を打たれたままで正座する。それ以外の縄は、すべて解かれる。腰縄を握った同心のほかに、警固の捕吏が五人ほど背後に控えている。その代わり、差添人の姿はまったくない。

縁先の両側に、同心が着席している。縁の上には吟味与力、書役が着座する。次の間には当番与力、定回り同心の浅香伝兵衛、それに水木新八郎などが控えている。やがて大岡越前守忠相が出座して、正面の席につく。

平伏していた浪人が、顔を上げて姿勢を正しくする。

囚人衣を着て、腰縄を打たれた姿は、尾羽打ち枯らした浪人に相応しい。月代が伸びている。奉行の前に出るということで、無精髭は剃り落としているが、青白い顔の憔悴の色は隠

せない。

しかし、顔立ちに知性が感じられ、もの怖じしない眼光には武術の心得の裏付けが見られた。堂々と胸を張り、かつては文武両道に秀でた武士であったことを容易に想像させる。

大沢格之進、三十歳。

三年前まで、武蔵国は川越六万石、秋元家の家臣であった。三年前に主君の勘気を被り、永の暇ということになった。つまり大沢家は断絶となり、格之進は復帰を許されない永久追放になったのである。

以来、諸国浪々の身として二年十一カ月を過し、一カ月ほど前に江戸に流れついた。そして数日後に、浅草御門の近くの神田川の川岸で町人一名を斬り殺した。夜間のことだったが、目撃者があった。

その目撃者の通報により翌朝、大沢格之進は止宿先の神田馬喰町の木賃宿で、お召捕りとなった。浪人は町人とともに、町奉行の支配である。それで、南町奉行所の手の者に、逮捕されたのであった。

殺されたのも一応、町人ということであった。神田の通油町の油問屋『三河屋』の小番頭、又七という者が被害者だった。三河屋は豪商として知られ、老中水野和泉守の屋敷に出入りを許されている大きな油問屋であった。

又七は商家の奉公人なので、もちろん町人ということになる。だが、又七もまた武家の出という話なので、一応は町人といった言い方がされたのである。二年前から三河屋に奉公し

たのだが、そこは武士という前身がものを言う。

読み書き、一般的な知識、礼儀作法、経済観、将来の展望など、町人とは格段の差がある。技術的な意味で算盤は不得手だったが、練習すれば上達が早い。計算はできるのだから、算盤をこなすことなど容易だったのだろう。

とにかく主人に信頼され、特別扱いということもあって、わずか二年で大番頭、中番頭に次ぐ小番頭の待遇を受けることになった。殺害されたときの又七は、まだ三十二歳であった。いずれにしても、殺されたときの又七は町人だったのである。町人地において、浪人が町人を斬り殺した。文句なく、町奉行所の管轄となる。浪人の大沢格之進は町人扱いで、南町奉行所の支配を受けた。

目撃者がいるだけで、証拠らしいものはない。その目撃者の証言にしても、馬喰町の木賃宿で見かけた浪人のようであるというのであって、絶対的なものではなかった。しかし、その程度の証言があれば、たちまち召捕ってしまうというのが当時のやり方である。

あとは、拷問にかけても白状させればいいのであった。すぐに大沢格之進の大刀を調べてみたが、人を斬った形跡は認められなかった。もっとも、刀の手入れをすませてしまえば、血や脂を消すことは簡単である。

吟味与力の調べに対して、大沢格之進は知らぬ存ぜぬで通した。どうしても口を割らないのならと、吟味与力は大沢格之進を牢屋敷内の拷問蔵へ送り込んだ。拷問にかけて、白状させることにしたのだ。

ここにもまた、町人に準じた扱いを受ける浪人の悲劇があった。

武士は原則として、拷問にかけられないことになっている。武士は嘘をつかない。それに武士が罪を犯した場合、縄を打たれる前に自害するのが普通であった。

また無実の罪に問われたときは、拷問など無用と身の潔白を証明するために切腹するというのが、武士の誇りであった。そうしたプライドが拷問にかけてはならない、という武士に対する法の精神に活かされているのである。

だが、町人や百姓になると、何とか逃れようとして嘘をつくし、縄を打たれようと生き長らえることが第一で、自害に及んだりはしない。そこで、拷問にかけることが、当然とされていたのだった。

大沢格之進も町人の扱いとして縄を打たれ、町奉行所の吟味与力の取調べを受け、牢屋敷にぶち込まれたが、それに耐えて自害するようなことはなかった。そのくせ白状しないのだから、三年前までは武士だった大沢格之進も、浪人イコール町人として拷問にかけられたのである。

一口に拷問というが、正確には責問と拷問の二種類に分かれている。

責問は、笞打ちと石抱であった。

青竹で撲りつける、正座した膝の上に大きな石を重ねる、という苦痛を強いて白状させるのである。

拷問はより残酷で、海老責めと釣責めである。しかし、この拷問となると、勝手にやるこ

とは許されない。町奉行でさえも、拷問は許可できなかった。町奉行から老中にお伺いがあり、許可があって初めて実行できるのであった。

町奉行の権限でやれるのは、責問だけだった。この責問にしても、吟味する者が勝手にできることではなかった。拷問蔵を使用するためには、町奉行と牢奉行の許可を得なければならないのである。

それはともかく、大沢格之進は責問を受けて石を抱かされ、白状に及んだのであった。吟味与力は口書を作り、大沢格之進はそれに拇印を押した。

又七を殺したのは、自分に相違ない。

又七を殺して、財布を奪おうとしたのである。

だが、そのとき通行人に騒ぎ立てられたので、目的を果たさずに逃走した。

大沢格之進は、このように白状したのであった。

その口書は吟味与力から、大岡越前守忠相の手許へ提出された。そうした口書は大岡忠相の眼前に山積みにされているし、民事訴訟のほうでも多忙を極めている。

しかも、審理や裁判は午後二時に下城して来て、それから夜にかけてと時間が限られている。大沢格之進の口書に目を通すことなど、いつになるかわからなかったのである。

ところが意外に早く、大岡忠相はその口書を手にしなければならなくなったのだ。それは思わぬ人物の口から、大沢格之進なる者の死刑を急ぐようにと、催促を受けたためであった。その人物は最高権力者の老中、水野和泉守忠之だったのである。老中の水野和泉守も、いささか感情的になっていたらしい。自分の屋敷に出入りしている三河屋の小番頭を斬り殺した憎いやつ、というわけであった。

殺人罪だから、法に照らせば死刑である。しかし、町奉行が独断で判決を下すことができるのは、追放刑までであった。それより重い流罪と死刑については、町奉行の一存で判決を下すことができないのだ。

テレビ・ドラマの町奉行のほうが、はるかに権力者であって、自由気ままに振る舞えるわけである。テレビ・ドラマの町奉行だと、声高らかに死刑の判決を申し渡したりする。だが、実際はこれも許されていない。

町奉行から老中を経て、将軍の認可を求める。将軍も死刑の認可など敬遠して、なかなか事務的に処理をすまそうとしない。しかし、死刑が確定すると牢屋敷内で検使与力が罪人に宣告し、すぐに処刑が行われることになっていた。

いずれにせよ、死刑は町奉行の手に負えないものである。そこへ雑談の中にではあったが、大沢格之進なる者について死刑の話が持ち込まれたのであった。老中水野和泉守は感情的になって、大沢格之進が死刑になるものと決め込んでいる。

ここで、大岡忠相は大沢格之進という浪人とその罪状に、興味を持ったのだった。大岡忠相は、大沢格之進の口書を読んでみた。老中が関心を向けている容疑者のことでもあり、口書だけの審理では不足のような気がした。

こうして大岡忠相は、奉行の白洲吟味という異例の措置を、思い立ったのであった。

2

これはなかなかの人物だと、大岡忠相は思った。見た目にそう感ずるだけではなく、口のきき方からして違っている。二十日ほど前に人定尋問で顔を合わせたときの印象とは、かなりの違いがあるように思えた。

牢屋敷に収容されているうちに、あれこれと考えて、やる気になったのだろうか。つまり、奉行と対面できるときを捉えて、渡り合うつもりだったのではないか。そのために策を思案し、今日というチャンスに大岡忠相と対決する気でいるのだ。

形式的なやりとりが終わったとき、忠相はそのように感じ取ったのである。いよいよ本題にはいり、白洲吟味が始まると、大沢格之進の眼光が一変し、相手を圧倒するような意欲を示した。

「口書にある通り、三河屋奉公人を殺害に及んだ件、相違あるまいな」

忠相は訊いた。そのように念を押すのも形式的なことだったので、大岡忠相はまったく不用意に言葉を口にしたのである。

「一切が偽りの申し立てにございます」

大沢格之進は、胸を張って答えた。

それはまさに、青天の霹靂ともいうべき返答であった。

さすがの大岡忠相も、ギクリとなった。吟味与力などは、腰を浮かせて泳ぐような恰好になっていた。白洲での声が聞こえる範囲内にいた関係者一同は、茫然とさせられたのであった。

白状したことはすべて嘘だと、奉行の前で自供を覆すというのは、前例のない珍事だった。関係者が狼狽するのは、当然のことである。平然としている大沢格之進の豪胆さにも、舌を巻いたのであった。

「不埒者め！」

忠相は、一喝した。

「不埒とは、何故に……？」

大沢格之進は、涼しい顔をしている。

「上役人の吟味に対し、偽りを申し述べるとは何事だ！」

「お奉行さまに、申し上げます。吟味与力どのは、白状するまで責問を続けると申されました」

「当たり前なことではないか」

「お奉行さまはこれまでに、責問を受けられたことがございますか」

「あろうはずがない」

「では、拙者がお教え致しましょう。責問は人間の心に問うものではなく、五体に苦痛を与えるものでございます」

「わかっておる」

「その苦痛はひどく、この世のものとは思えませぬ。まさに地獄の責め苦、血の気を失い脂汗を流し、大の男が泣き叫ぶほどでございます」
「だからこそ、効き目があるのではないか」
「苦痛の余り気を失えば、水を浴びせて蘇生させ、なおも五体を痛めつけ、肉を潰し骨を砕くのでございます。しかも、何かを申し上げなければ、毎日でも責問を続けると脅されます」
「それで、いかなる悪人であろうと、白状に及ぶのだ」
「それは、白状すべきことがある者でございましょう。白状すべきことを持たない者は、いかが致したらよろしいのでございますか。何かを申し上げなければ、いつまでも地獄の責め苦が続くのでございます。その責め苦から逃れたい一心で、苦しまぎれにあることないことを申し上げる。人として、当たり前なことと存じます」
「そのほうには白状したくとも、白状すべきことがなかったと言いたいのだな」
「いかにも」
「しかし、黙っておれば地獄の責め苦が続くので、やむなく偽りを申し述べた」
「五体の苦痛から逃れられるならと……。人とはそういうものでございます」
「つまり、そのほうは無実の罪に問われたと、申し立てておるのだな」
「さようでございます」
「ならば、無実の証しを立てよ」
「残念ながら、証しの立てようがございません」

「三河屋奉公人、又七が殺害された時刻に、そのほうはいずこにおったのだ」
「大川端で、月を眺めておりました」
「風流か」
「さようでございます」
「そのほう、一人だったのか」
「いかにも」
「口書に、又七の懐中物を奪わんと手にかけたとあるが、それもまた偽りか」
「苦しまぎれの作り話でございます。拙者も武士の端くれ、人を手にかけての追剝を働こうとは思いませぬ。それに八両もの金子を所持していた拙者が、他人の懐中物を狙う必要がありましょうや」
「そのほう金八両を、所持しておったと申すのか」
「召捕られた際、拙者が八両を懐中にしていたことは、吟味与力どのも承知しておられるはずでございます。享保小判が八枚でございました」
「その八両、いかなる方法によって入手したのか」
「江戸へ参る途中、武蔵国府中にて門弟を集めております道場に立ち寄り、師範代二名を打ち負かしたところ、十両ばかり差し出したのでございます」
「ほう」
「そのうち二両を使い、残り八両を所持しておりました。もし、お疑いあるなら府中の一刀

流道場へ人を遣わし、お確め下さるようお願い致します」
「そのほう、剣の心得があるようだな」
「示現流を、いささか……」
「示現流か」
「はい」
「川越六万石秋元家にあった頃の、そのほうの役目は何か」
「作事奉行の配下にあり、文武道場の営繕を役目としておりました」
「なるほどな」
「お奉行さまに申し上げます。何卒、無実の証しが立ちますように、御吟味をお願い致します」
「金八両を所持する者が、又七の懐中物を狙って殺害に及んだりするはずはないというそのほうの言い分、奉行ももっともな申し開きだと思う」
「ありがとうございます」
「そこで、そのほうに尋ねるが、三河屋という油商を知っておるか」
「存じませぬ」
「油商としては江戸いちばんの問屋、豪商としても名高い三河屋だぞ」
「そのような評判にしても、耳にしたことはございません」
「御老中水野和泉守さまの御上屋敷、御下屋敷のお出入りを許され、一切の油の調達を任されておる」
「江戸へ参ってまだ日が浅ければ、そのようなことを知る由もございません」
「では、又七なる者を存じておるか」
「存じませぬ」
「存じおらぬ者を、斬って捨てるは狂人のみだな」
「いかにも」
「あとは、辻斬りの所業じゃ」
「江戸へ参ったばかりの流浪の者が、辻斬りなど致すものでございましょうか」
「致さないとは、言いきれぬぞ」
「これは、異なことを伺いました」
「異なこと……？」
「はい」
「奉行が何か、異なことを申したというのか」
「いかにも」
「異なこととは何か、申してみよ」
「申し上げます。いまを去ること七十三年前、慶安元年に将軍家が御上洛あそばしました」
「慶安元年となると、三代目の将軍家であらせられるな」
「はい。その将軍家の御上洛の間に、江戸では辻斬りが横行したとのことでございます。特

に江戸は番町小川町のあたりでは毎夜の如く、お旗本の面々が町人どもを辻斬りによって殺害し、その数も知れずという有様でございました」

「その話、奉行も知っておるような気がするぞ」

「京においでの将軍家もその噂をお耳にされて、ひどく御心をお痛めになられ……」

「うむ。お供の酒井忠勝どのに、策をお命じになられたのだったな」

「はい」

「酒井忠勝どのは板倉内膳正どのを通し、江戸の旗本に下知された」

「その下知は、世が治まって日も浅いのに御城の近辺において辻斬りが横行するのは、江戸を守る旗本の手落ちであり、また旗本の武道が甘く見られておることの証しである。今後は旗本が夜警に精出して、辻斬りどもを鎮圧せよ、というものでございました」

「辻斬りに精出す旗本に、辻斬りを鎮めよと命じたのは、まことに名案だな」

「はい。それ以来、辻斬りはぴたりとやまったとのことでございます」

「そのほう、博学ではないか」

「恐れ入ります」

「いまの話を存じおる者は、この南町奉行所内にひとりもおらぬわ」

「その後、江戸においては辻斬りは起こらずと、聞いております」

「いや、まったくなかったわけではあるまい」

「はい。たった一例だけございます。いまより三十三年前の貞享五年に、辻斬りがございました」

「貞享五年は即ち、元禄元年だな」

「いかにも」

「罪が軽すぎるということで、記録を読んだとき頭に残ったものだった」

「御徒の町野十郎兵衛なる者が、浅草旅籠町において、丸腰の中間ふうの男を斬り殺し、辻斬りとして江戸追払の罰に処せられております」

「ずいぶんとまた、詳しいではないか」

「何とはなしに、覚えているだけでございます」

「それで、奉行に何を申したいのか」

「そのように辻斬りの例が少なくなった江戸において、浪々の身が好んで騒ぎを引き起こそうとするものでございましょうか。毎夜の如くに辻斬りが横行するご時世であれば、あるいはわれもそれを真似てという気を起こすやもしれませぬ。しかし、辻斬りなるものが忘れられている江戸へ、他の地から参った者がどうして辻斬りを思いつきましょうか。浪々の身であればなおさら、波風もない水面に一石を投ずるようなことは、避けたがるものでございます」

大沢格之進は、澱みなく一気に言葉を続けた。弁舌爽やかであり、その主張も理論的であった。説得力があるのは、正論だからである。

大岡忠相は沈黙し、白洲にも声はなかった。

果たして人物であり、一筋縄ではいかない男だと内心、大岡忠相は驚いていた。吟味与力などの手に負えるはずもないし、今後も大岡忠相がじきじきに吟味することを決めて、この日の白洲調べを終えたのであった。

3

大沢格之進が召捕られたときに、享保小判を八枚ほど所持していたことは事実であった。府中の一刀流の道場へは、浅香伝兵衛が走った。その結果、大沢格之進の申し立てに間違いのないことが、確認された。こうなると又七の財布を狙って、という動機が成り立たなくなる。

大沢格之進が江戸に来て日が浅いことも、また事実なのである。辻斬りということも、確かにあり得ない。見知らぬ相手を、いきなり斬り殺すような狂人とも思えなかった。すると、動機がなくなる。

そこで、大岡忠相は過去における大沢格之進と又七の結びつきを、調べてみるほかはないと思った。三河屋ほどの大店では、何の縁故もない人間を奉公人として雇うことはなかった。まして又七は、わずか二年で小番頭に抜擢された男だった。当然、三河屋とは深い縁があったはずである。三河屋の主人に訊けば、又七の過去が明らかになるだろう。そう判断して忠相は、三河屋へ定回りの同心を派遣した。

しかし、三河屋には又七の過去について、詳しく知っている者がいなかった。武士だったのが事情あって町人になった、ということしかわからないと三河屋の主人は首を振った。

三河屋では、親しくしている同業者から頼まれて、又七を奉公人にしたのだという。もちろん実力もあったのだが、二年の奉公で小番頭にとり立てたのは、その同業者への手前もあってのことだったのだ。

その同業者とは加奈川（現在の神奈川）の油問屋で、三沢屋という豪商であった。三河屋と三沢屋の主人は、親戚の次に親しい間柄だという。互いに頼み事を、引き受けずにはいられない仲だということである。

忠相は府中から戻ったばかりの浅香伝兵衛と、水木新八郎を加奈川へ向かわせた。日本橋から品川、川崎、加奈川と往復十三里、約五十二キロの旅であった。一泊で十分な距離ということになる。

浅香伝兵衛と水木新八郎は、三沢屋の奥座敷で主人の安左衛門に会った。水木新八郎は黙っているだけで、浅香伝兵衛と三沢屋安左衛門のやりとりが続けられた。ところが、その三沢屋安左衛門の口から、意外なことが語られたのである。

「又七とは町人らしく名を変えたのでして、あのお方のご姓名は小林又七郎さまなのでございます」

「小林又七郎ねえ」

「ご兄弟が三人、長男が又七郎さま、次男が与之助さま、三男が小平太さまでございました」

「小林三兄弟と三沢屋さんとは、どんな繋がりがあるんです」

「お三方のお父上さまに、三沢屋の先代がお世話を頂き、大恩人ということになるのでございます」
「それで小林三兄弟は、どこの家中だったんですね」
「川越六万石、秋元さまのご家中だったのでございます」
「川越の秋元家……！」
「さようでございます」
「長男の又七郎はどうして、浪々の身になったんですか」
「いまから三年と少し前のことになりますが、川越で騒ぎがございました」
「どんな騒ぎなんで……？」
「同じご家中に大沢某というお方がおいでございました」
「大沢……！」
「次男の与之助さまが、この大沢某との折合いが悪く、そこへ持って来てご家中の剣術の試合の際に、与之助さまが大沢某にひどく打ち据えられるということがございました。それを根に持ってご兄弟三人が、大沢某についてあることないこと悪口を並べ立てたのでございます」
「あまり性質のよくねえ三兄弟じゃあないですか」
「はい。お父上さまと違って三人のご兄弟は武道を好まず、どことなく女子のようなところがございました」

「兄弟たちは、どんなお役についていたんです」
「お三方とも、勘定奉行配下の勘定方、蔵奉行配下の蔵方といったお役目が多かったようでございます」
「だったら、もともと商人に向いていたんだ」
「さようでございますな」
「それで悪口を並べ立てて、どうなったんです」
「はい。そのことが大沢某を支配する作事奉行の耳に届き、大沢某はお咎めを頂いたのでございます」
「そのために、大沢某は三兄弟へ怒りを向けることになったんですね」
「さようでございます」
「そいつは、無理もねえことだ」
「それから数日後に次男の与之助さまが、ご城下で何者かの手にかかり、斬り殺されたのでございます」
「当然、大沢某の仕業だってことにされちまう」
「はい」
「大沢某は、お取調べを受けたんでしょうね」
「はい。横目役さまの厳しいお取調べを、受けたとのことでございます。横目役さまは大沢某に、それとなく切腹をすすめられたそうでございます」

「ところが大沢某は、切腹することを承知しなかった」
「はい。その上、小林与之助を手にかけたなど覚えのないこと、知らぬ存ぜぬで押し通したという話でございました」
「横目役のほうも白状させようと、意地になったんじゃあないんですか」
「その通りで、意地になって責めたそうでございますが、ついに口を割らせることはできなかったとか……」
「始末は、どうつけたんです」
「お殿さまがその大沢某の態度にご立腹なされて、お暇を申し付けられたとのことでございます」
「それで、小林兄弟のほうは、どうなったんです」
「やはり、永のお暇を頂くことになりました」
「喧嘩両成敗ってわけだ」
「さようでございますな」
「長男の又七郎は、三沢屋を頼って来たんですね」
「はい。そして一年後に、又七郎さまは町人となって江戸で働きたいとおっしゃいますので、三河屋さんにお世話をお願いした次第でございます」
「どうして、江戸がよかったんでしょうね」
「江戸は広くて人が多いからと、又七郎さまは申されました」

「広くて、人が多いから……」
「はい。つまり、そのほうが目立たずにすむ、捜し出されにくい、というわけなのでございましょう」
「すると又七郎は、大沢某を恐れていたってことになりますね」
「はい。大沢某の仕返しを恐れて、ここにおいでの一年間も、又七郎さまは脅えておられました」
「三男の小平太は、どうなっているんですか」
「又七郎さまからお聞きしたお話では、小平太さまは下野の宇都宮の縁者のところに身を寄せておいでとか……」
「そうですか」
二人のやりとりを聞いていると、武士と町人の違いがわからなくなる。言葉遣いの気品というものが、まったく逆だからだろう。もっとも、町奉行所の同心には、武士とか武家とかいう自覚がない。
特に定回り同心は、職人よりもきたない言葉遣いを特徴としている。ところが、ここは加奈川であって、江戸町奉行所の威光は通用しない。いつもの調子で、伝法な口のきき方をするわけにはいかなかった。
それに相手は協力者であって、こっちの頼みを聞いてくれているほうなのだ。少しは丁寧な言葉遣いをと、心がけなければならなかった。だが、伝法な口のきき方が身についている

ので、何とも中途半端な言葉遣いになっているのだった。

それはともかく、重大な聞き込みを得たのである。浅香伝兵衛と水木新八郎は加奈川に泊まらずに、その日のうちに江戸へ向かったのであった。翌朝早々に両名の報告を聞いた大岡忠相は、思わずニンマリとしていた。

これで大沢格之進に、又七殺しの動機があったことが、はっきりしたのである。

更に裏付けをとるために大岡忠相は、老中を通じて秋元家の江戸の用人に面談を申し入れた。秋元家では外交官を用人と称して江戸にひとり、川越に三人を置いていた。もちろん老中のお声がかりとあっては拒めないので、秋元家の江戸詰めの用人と大岡忠相の会談は実現した。

大岡忠相の二度目の白洲吟味は、一度目より一カ月ほどたってからのことであった。すでに冬になっていて、吐く息が白かった。手焙りなどをはじめ、火の気を置かない白洲では、吟味するほうもされるほうも楽ではなかった。

今度は誤魔化されないぞという意気込みもあったし、忠相はなぜか大沢格之進との対決が楽しみだった。ある意味で骨のある相手と、白洲吟味でやり合うのも悪くはないと、忠相にはそんな気持があったのだ。

油断はならない。

博学である。

特に、辻斬りの歴史については忠相よりも、大沢格之進のほうがはるかに豊富な知識を持

っていた。

因に、辻斬りの罪が重くなったのはこの享保六年より遅れること二十年、寛保元年の御定書によってである。そこで初めて、辻斬りをした者は引回しの上で死罪と、成文化されたのであった。

また、死罪というのが難しい。一口に死罪と言って、片付けられないのである。まず三種類に分けないと、はっきりしないのであった。死罪、下手人、斬罪の三種類になる。これは次のように、区分されなければならない。

死罪――牢屋敷内の刑場で斬首、死体を様ものとして試し斬りに使うことがある。

下手人――処刑の方法は死罪と同じだが、様ものには使わず、死体は取り捨てになるので遺族が葬ることもできた。

斬罪――武士の処刑なので町奉行所には関係なく、小塚原か鈴ケ森で斬首される。武士なので目隠しをせず、様ものにされることもない。

町奉行所支配の浪人大沢格之進だから、有罪が決定しても、斬罪ということにはならない。恐らく、下手人という形の死刑になることだろう。だが、形式はともかく、首を斬り落とされることに変わりはない。

大沢格之進は斬首の刑に、一歩も二歩も近づいたことになる。もう無実だという主張は通らないと、大岡忠相は白洲吟味の場に臨みながら思ったのであった。

4

この日も申の刻、午後四時から白洲吟味が始まった。一カ月前の大沢格之進と、まったく変わっていなかった。自信と余裕を示して、落着き払っている。大岡忠相を見上げるにも、もの怖じしない目つきだった。

はて――。

忠相のほうが、むしろ戸惑ったくらいであった。

大沢格之進ほどの人物がこの一カ月間、改めて調査が行われたということを、見抜けないはずはなかった。当然、忠相が格之進や又七の過去を調べたということも、察しているのに違いない。

それでいて、悠然と構えていられるのは、なぜか。

どうして、自信と余裕を持てるのか。虚勢か、それとも自信と余裕を裏付ける根拠があるのだろうか。忠相のほうが、むしろ動揺している。しかし、好材料はこっちにあると、忠相は気をとり直していた。

「そのほう、又七なる者を知らぬと申したな」

「いかにも」

「しかと、さようか」

「はい」

「偽りを申すな」

「正直に申し上げたつもりでございます」

「三年前まで同じ家中にあって、日々顔を合わせておったその相手を、そのほうは知らぬと申すのか」

「又七なる者は、町人と聞いておりましたが……」

「又七とは世を忍ぶ仮の名、正しき姓名は小林又七郎じゃ。かつては川越六万石秋元家の臣であり、勘定奉行配下の勘定方のお役についておった小林又七郎を、よもや知らぬとは申せまい！　どうじゃ、恐れ入ったか！」

機先を制する意味もあって、忠相は居丈高な態度に出た。

だが、大沢格之進は、まったく動じなかった。無表情であり、肩を落とすこともなかったのである。忠相のほうが、肩すかしを食ったような感じだった。

「小林又七郎なら、よく存じております」

大沢格之進は、不気味なほど冷静であった。

「では、前回の白洲吟味において何故に、知らぬなどと偽りを申したのか」

「小林又七郎なる者を知っておるかと、尋ねられた覚えが拙者にはございません。もし、小林又七郎を存じおるかとお尋ねを頂いておりましたならば、拙者も存じておりますとご返答申し上げたでございましょう。しかし、拙者は又七なる者を存じおるかとお尋ねを頂きましたので、存じませぬと正直に申し上げたのでございます」

「又七と尋ねられても、小林又七郎には結びつかなかったと申すのか」
「小林又七郎という武士の姓名を捨て、町人又七と名乗っておりますとは、どうして思いつきましょうや」
「しかし、又七なる者の顔を見れば、小林又七郎だと気づいたはずじゃ」
「いかにも、顔を合わせれば小林又七郎だと、知れたことでございましょう。しかし、拙者は又七なる者と、顔を合わせておりませぬ」
「うむ」
忠相は、唇をへの字に結んだ。ここまでのやりとりでは、忠相のほうが完敗であった。大沢格之進の主張は、まったくその通りだということになる。では切り札をと、忠相は焦り気味であった。
「ならば問う」
「何なりと……」
「そのほう、責問の苦痛から逃れたい一心で、偽りの白状に及んだと申したな」
「いかにも」
「石を何枚重ねられたときに、その苦痛に耐えきれなくなったのじゃ」
「五枚でございました」
「五枚の石で、偽りの白状に及んだのだな」
「はい」

「ここに、三年ほど前の記録がある。秋元家の横目役筆頭の土屋どのが、小林与之助殺害の疑いでそのほうを取調べた際の記録じゃ。この記録によると、知らぬ存ぜぬで押し通そうとする大沢格之進の口を割らせようと、拷問にかけたとある」
「はい」
「更にこの記録によると、大沢格之進は剛の者にて石を抱かせること十枚に及んでも口を割らず、気を失うこと五度、膝と臑の骨も砕けんばかりにて血まみれとなる。それにてもなお知らぬ存ぜぬの申し立てを変えず、意味なきことと推察し拷問を中止せり。と、このようにある」
「はい」
「横目役筆頭の土屋どのは、鬼の横目役と評判なほど厳しかったそうじゃな」
「はい」
「その土屋どのが、そのほうのことを剛の者と称して驚嘆されておる。そのほうは、切腹のすすめにも頑として応じなかったそうだな」
「小林与之助どの殺害とあらぬ疑いをかけられ、無実の罪によって自害するのは無念でございました。また、知らぬことはいかなる責め苦を強いられようと、白状のしようがございません」
「それよ。いかなる責め苦を強いられようと知らぬことは白状できぬと、五度も気を失い骨も砕けんばかりに血まみれになりながら、十枚の石を抱かされてもなお口を割らなかったと

いう剛の者じゃ。その剛の者と同一人のそのほうが、この度は五枚の石を重ねられただけで、苦痛から逃れたい一心にて偽りの白状に及んだとはどういうわけか」

「お奉行さまに、申し上げます。武士は武士の道、武士の心、武士の魂によって支えられておるものにございます。だからこそ、手足をもぎ取られれば刃を口にくわえて戦うということも、叶うわけでございましょう」

「うむ」

「三年前までの拙者は、その武士でございました」

「武士であったが故に、いかなる責め苦にも耐えることができたと申すのか」

「はい」

「いまは、武士ではないのだな」

「その証拠にこうして、町人と同様の扱いを受けておるのではございませんか」

「皮肉を申すな。浪人は町人同様、町奉行所支配というのは、天下の御法によって定められておることじゃ」

「天下の御法も世間も武士として認めておりませぬものが、どうして武士の道や心を弁えることができましょう。剛の者とされた武士であろうと、町人同様の扱いを受ければ意気地なしにもなるのでございます。それで、この度の責問においては、五枚の石にも耐えられなかったのでございます」

「見事な申し開きようだな。なるほどと、頷きたくもなる。しかし、そのほうはいまでも、武士の心を忘れずにおるぞ」

「そのようなことは……」

「何とか無実の罪の証しを立て、放免になり生きのびようと心がけ、巧みな申し開きに努めておるのが、その証拠ではないか」

「それは、逆と申すものでございましょう。もし拙者が未だに武士の心を忘れずにおりますれば、縄目の恥辱を受ける前に腹かき切って果てるか、あるいは潔く罪を認めて早々に首を差しのべるか、そのいずれかを選ぶはずでございます」

「いや、死に急ぐは猪武者の望むところよ。武士であれば受けた恥辱を返すために、手段を選ばず生きのびようと努めるのが当然じゃ。そのほう、小林三兄弟から受けた恥辱を、武士の面目にかけて返さんがために、今日まで生きて参った」

「決して、そのようなつもりは……」

「三人から受けた恥辱は、三人に返さねばならぬ。小林与之助を斬って捨てただけでは事たりぬので、そのほうは頑として口を割らず、主家を失ってまで生きのびようと心がけた。切腹に応じなかったのも、死んではならなかったからじゃ」

「小林与之助を斬った覚えなど、拙者にはございませぬ」

「この度の小林又七郎殺害についても同じこと、そのほうは不運にも町奉行所に召捕られたが、何としてでも窮地を脱し生きのびようと努めておる。それは命が惜しいのでも、死を恐れてでもない。あとひとり残った小林小平太を斬り捨てるために、そのほうは生きのびなけ

ればならないからじゃ」

「身に覚えなきことばかり……」

「だが大沢格之進、ここにそのほうにとって気の毒な知らせがある。奉行は生き証人として小林小平太を求め、手の者に命じて探索に当たらせたところ、下野の宇都宮におることがわかった」

「下野の宇都宮……」

「目の色が、変わったの。しかし、奉行にとっても残念、そのほうにとっても気の毒だが、小林小平太は半年前に病死との知らせがあった」

これが忠相の、最後の切り札だったのである。

「小平太が病死……！」

大沢格之進は愕然となり、そのあと全身の力を抜いた。みるみるうちに十も老けたような顔になり、大沢格之進は白洲の砂利の上にがっくりと両手を突いた。自信も余裕も意欲も情熱も失って、そこにいるのはただの罪人であった。

忠相の最後の切り札が、効を奏したのである。

5

大沢格之進は、又七こと小林又七郎を殺したことを改めて白状した。又七郎と小平太を捜して三年間、流浪の旅を続けて江戸にはいり、数日後に偶然ではあったが大沢格之進は又七

郎の所在を知ったのである。

それで又七郎をつけ回し、ついに神田川の岸辺で捕捉して、一刀のもとに斬って捨てたのであった。

残るひとりの小平太が、すでにこの世にないとすれば、もはや生きのびる意味も甲斐もない。一日も早く首を刎ねて欲しいと、大沢格之進は強く希望した。

大沢格之進の死罪に老中水野和泉守は満足し、将軍家の許可も半月後にはおりた。大岡忠相の判決文によると、下手人という形で斬首することになっていた。牢屋敷内で斬首するが、死体は試し斬りに使われることなく取り捨てられる、という死刑であった。

引き回しにもならないし、判決文の中にも「不届に付き」とあるので、死刑としては軽いほうであった。同じ判決文の用語でも軽い罪だと「不埒に付き」とあり、死刑だろうと極刑でなければ「不届に付き」となる。

引き回しの上で獄門、火刑、磔といった極刑だと、「不届至極に付き」であった。

大岡忠相は三度、大沢格之進を白洲に呼び出すことにした。死刑だから、町奉行が判決を申し渡すことはできない。明日には検使の与力が牢屋敷へ赴き、大沢格之進に刑を申し渡すことになっている。その直後に、大沢格之進は処刑されるのであった。

忠相は、大沢格之進に同情的だったのである。武士として受けた恥辱の無念を晴らそうとした大沢格之進を、ただの人殺しと同じように処刑する。それでは法の精神が活かされていないと、忠相は思ったのだ。

それに小林小平太は病死したなどと嘘をつき、大沢格之進をペテンにかけたことで、忠相の胸に痛みが残ったのである。それで処刑の前日に、大沢格之進を白洲へ呼び出すことを思い立ったのだった。

忠相は、大沢格之進に切腹のチャンスを与えてやりたかった。もし大沢格之進にその気があるようだったら、奉行所内で切腹させてもよい。明日、死骸を牢屋敷に運んで、判決文をその前で読ませることにしよう。

そんなつもりもあったのだ。

だが、白洲にすわった大沢格之進を見て、忠相はおやっと思った。大沢格之進は再び、胸を張って挑戦的に構える男に戻っていたのである。その双眸が怒りに燃えて、爛々と光っていた。

「お奉行！　小林小平太が病死したなど、真っ赤な偽り！」

大沢格之進は、怒声を発した。言葉遣いも一変して、場所柄を弁えずも何もあったものではなかった。明日は死ぬ身の強みであり、大沢格之進にはもう恐ろしいものがなかったのだ。

「牢内で、生きている小平太を知る者から、話を聞きましたぞ！　お奉行も武士ならば、偽ってよいことかどうか、分別があって然るべきではないか！」

大沢格之進は、血相を変えていた。

忠相には、返す言葉がなかった。

「お奉行が卑怯ならば、拙者のほうも卑怯に徹しますぞ」

大沢格之進はそう言って、いきなり囚人衣の前を開き両肌ぬいだ。

あと半月で、年が暮れようとしている。すでに夜になっていて、寒気が厳しかった。白洲の後方二カ所で篝火が光を放ち、室内の四カ所に燭台が出されていた。それらの赤い火に照らされて、大沢格之進の半裸の姿が浮かび上がった。

「お奉行に欺かれたことを知って以来、牢内の心得のある者に頼み込み、十日のあいだに彫り上げてもらったものでござる」

大沢格之進はゆっくりと一回転して、胸や腹、背中、身体の側面などを見せつけた。

その場に居合わせた者はすべて、唖然となって目を見はった。

大沢格之進の首筋から背中にかけて、胸から右の側面にかけて、腹の中央部から左の脇腹にかけてと、大きな短冊の形の入墨がほどこされていたのである。三本の太い帯を、上半身に巻きつけているように見えた。

短冊の中には、いっぱいに字が彫ってある。文字はいずれも、『天照皇大神宮』と読めた。天照皇大神宮、つまり伊勢の五十鈴川のほとりにある皇大神宮であり、国家の大事には勅使が派遣されることで知られている。

江戸幕府としても、大いに尊重している皇大神宮であった。『天照皇大神宮』の文字に、刃を当てるわけにはいかなかった。入墨だから、消すこともできない。その入墨が襟首から背中まで続いていては、斬首も不可能である。

大岡忠相は、胸のうちで唸っていた。凄いことを、考えつく男であった。豪胆にして、知

恵者である。上半身を『天照皇大神宮』の文字で固めるとは前例もなく、誰ひとりとして思いつかなかったことなのだ。

斬首は、不可能である。

切腹も、すすめられない。

上半身には、まったく刃を当てられないのである。

下半身を斬るという処刑の方法はなく、そうした特例が許されるはずはなかった。

「お奉行、いかがされますかな」

大沢格之進は、不敵な笑みを浮かべていた。

「考えおったな」

ようやく、忠相は口を開いた。

「卑怯と言われるなら、その言葉をそっくりお奉行へ返上致しますぞ」

「卑怯とは申すまい」

「では、この天照皇大神宮の文字に、刃をお当てになりますかな」

「それも、できまい」

「さよう。もし天照皇大神宮の文字を両断するようなことがあれば、国の神を尊ぶ心も持ち合わせぬ逆賊となります」

「承知しておるわ」

「しかし、それだからと拙者の首を刎ねずにおけば、お奉行の立場というものがなくなりま

しょう」

「実は、そのほうのお仕置は、明日と決まっておるのじゃ」

「これはまた、話が楽しくなって参りましたな」

「ご老中からのご裁可も頂いておるので、いかなることがあろうと明日のうちには、そのほうのお仕置をすまさねばならぬ」

「遠慮は無用、どうぞこの首をお刎ね下され」

「しかし……」

「叶いませんか」

「やむを得まい。斬首は断念するより、致し方あるまいな」

「して、その後の策は……」

「いや、明日中にお仕置は、すまさねばならぬ。天照皇大神宮の文字を刃で傷つけることはできぬが、焼くのであれば許されるはずじゃ」

「焼くとは……？」

「斬首をやめて、そのほうを火焙りの刑に処することと致そう」

忠相は苦しまぎれに、そう思いついたのであった。

当たり前な悪人なら、そこで顔色を変えたことだろう。つまらない小細工をしたために、斬首よりはるかに残酷な火刑に処せられることになってしまったと、後悔するに違いない。

だが、大沢格之進は、身体を揺すって笑ったのだった。

「笑止……」
大沢格之進は言った。
「何故にじゃ」
忠相もさすがに、むっとした顔になっていた。
「町奉行どのが、天下の御法の仕来たりというものを、曲げてよいものか。拙者がいつどこで、放火炎上の罪を犯したのか明らかにして頂きたい」
「何と……」
「火焙りの刑に処せられるは、放火炎上の罪を犯した者のみに限られておることは、天下万民の知るところですぞ」
「いかにも、その通りだが……」
「拙者の罪は、又七郎殺害の一件でござろう。それを放火炎上の罪にすり替えて、火焙りの刑とする。そのときどきの都合により、お仕置の手段を濫りに変えれば、天下の御法もあってなきが如し」
大沢格之進は、一段と挑戦的になっていた。だが、その主張には筋道が通っていて、正論のみを吐いている。
忠相には、一言もなかった。
確かに放火炎上の罪を犯した者だけが、火刑に処せられている。しかも、引き回しの付加刑がある。殺人罪によって斬首と決まっている者を、引き回しの上で火刑というのに変更するのは、無茶苦茶なやり方と言われても仕方がない。
万事休したとは、このことであった。
忠相は早々に、大沢格之進を牢屋敷へ戻した。こうしたときに頼りになるのは、水木新八郎であった。忠相は水木新八郎を呼んで、何か妙案はないものかと相談を持ちかけたのだった。

「明日、御牢屋敷内で立ち会うことを、許してやっておくんなさい」
水木新八郎は、表情のない顔で言った。
「大沢格之進と町人侍が、立ち会うということか」
忠相は、小膝を叩いていた。
「大沢格之進は示現流の使い手、あっしの心形刀流と競い合うことに、不服はござんせんでしょう」
「うむ、名案じゃな」
「こうなったら、あっしの剣法でお裁きをつけるほかはござんせん」
「あれほどの人物が、武士の面目にかけて恥辱をそそいだというのに、首を刎ねるとは哀れなものと心を痛めておったのじゃ。それが町人侍と堂々と刃を交えるのであれば、武士として心残りはないであろう」
「では、お願い致しやす」
「膳立ては、引き受ける。だが、町人侍……」

「へい」

「天照皇大神宮の六文字に触れずに、相手を斃すことができるだろうか」

「何とか、やってみやしょう」

相変わらず、自信があるのかないのかわからないような、水木新八郎の顔つきであった。

翌朝――。

牢屋敷内での真剣勝負、という前代未聞の珍事が実現した。

時刻は卯の刻、午前六時であった。地上は一面の霜柱で、凍てつくような朝の風が吹き抜ける。牢屋敷内だが、無人の静寂の中にあって、聞こえるのは風の音のみだった。

人影は、三つだけ。

水木新八郎は着流しではなく袴をはき、鉢巻をしめてタスキがけである。

大沢格之進は囚人衣の裾をはしょり、同じく鉢巻にタスキがけであった。

もうひとりは検使の与力で、立会人の役目を命じられている。

牢屋敷内の切場と呼ばれている刑場で、森閑とした雰囲気には凄味が感じられる。斬首される囚人がいなければ、近づく者もいない場所であった。台のように土を盛ったところがあるが、それは斬首したあとの囚人の死骸を置き、試し斬りをする設備だった。

「心形刀流……」

水木新八郎は抜刀して、斜め下段の構えにはいった。

「示現流！」

大沢格之進は、上段に振りかぶった。示現流は戦場向きで、戦闘的な剣法として知られている。

両者はそのまま、微動だにしなくなった。十分、十五分と経過するうちに、両者とも汗で顔を光らせるようになっていた。検使の与力だけが、緊張感と寒風のために震えている。

腕前は、水木新八郎のほうが、はるかに上であった。だから大沢格之進のほうから、攻め込むことは難しい。水木新八郎としては斬りつけることは容易だが、天照皇大神宮の文字が邪魔になる。

そのための睨み合いであった。

突如、苦しくなった大沢格之進が、攻撃に転じた。

「やおう！」

気合が静寂を裂き、大沢格之進が踏み込んだ。刀を頭上から、振りおろした。

水木新八郎は左へ逃げて、待ち受けていた一瞬を迎えた。下から上へと刀が走り、伸びきっている大沢格之進の右腕を切断した。刀を握ったままの右腕が飛び、大沢格之進は後ろへよろけた。

そのとき、水木新八郎は二メートルほど跳躍した。真向から刀を、大沢格之進の脳天に叩きつけた。ガッと骨を断つ音が響き、血が噴き出して飛散した。

水木新八郎が地上におり立ったとき、大沢格之進は倒れ込んで、霜柱を潰しながら転がった。

水木新八郎は、刀を鞘に納めた。

「お見事ですな」

検使の与力が、死骸を調べながら言った。

天照皇大神宮の文字には、まったく刀が触れてなかったのである。水木新八郎の刀は大沢格之進の脳天を割り、そのまま顔面を真二つに切断していた。天照皇大神宮の文字が及んでいない部分は、上半身のうち頭と顔しかないという水木新八郎の計算だったのである。

大沢格之進は、即死した。形式的には処刑されたことになっているが、大沢格之進は真剣による試合に敗れたのであった。

江戸幕府の基本法典『御定書百箇条』は、八代将軍吉宗が老中松平乗邑、大岡忠相などに命じて、これまでの下知状や法令をまとめて編したものだが、大沢格之進が触れたことも極く一部に組み込まれている。

寛保二年に完成した御定書百箇条に、大岡忠相が体験から得た教訓を取り入れていることは、まず間違いないだろう。

お白洲の貴公子

1

町人侍こと水木新八郎が重傷を負ったのは、享保七年一月半ばの夜であった。

水木新八郎は医師の手当てを受けたあと、南町奉行所の役宅へ運ばれた。意識ははっきりしているが全身打撲、左足、右腕、肋骨六本の骨折という重傷だった。もちろん、身動き一つできなかった。

日本橋新材木町の路上で、暴走して来た馬を取り押さえようとして、失敗したのである。そのときすでに、馬は五人の老若男女を蹴散らしていて、狂ったような興奮状態にあったのだ。

こうした狂気の暴れ馬は、人間の手に負えないものであった。走るだけ走らせておいて、自然に鎮静させるほかはない。それを水木新八郎は咄嗟のことでもあり、取り押さえようとして馬の前に仁王立ちになったのだった。

馬術の名手ならともかく、剣術の達人というだけでは赤子も同然であった。さすがの水木新八郎も蹴飛ばされ、引きずられ、踏みつけられて、気を失ったのである。

それでも、馬の暴走だけは一応、食いとめられたのだった。水木新八郎が何発か馬面に鉄拳を見舞ったし、方向に対する判断を誤ったらしく、栗毛の馬は天水桶に激突してとまったのである。

ほかに女ひとり、幼児ひとりが死亡した。重傷が老人二名、軽傷は男ひとりで、計五人の死傷者を出した。いずれも、町方の者である。町人五名と、南町奉行所に身を寄せている水木新八郎が殺傷されたのだから、これは大事件であった。

暴れ馬を捕えただけで、片付くようなことではない。重大なのは、その馬に乗っていた人間が、誰であったかである。馬に乗っていた人間を、殺傷事件の犯人として追及しなければならなかった。

だが、馬を走らせていた人間が何者であるかは、明確な証言もなかったし、断定しようがないのである。はっきりしているのは、次の五点のみであった。

その一、栗毛の馬は駄馬でないこと。騎乗用の駿馬であり、毛並、色つや、時価などから推して、武家屋敷に飼われていたものと思われる。

その二、鞍、鐙、手綱などの馬具はつけていない。安物の轡をつけて、手綱の代わりに荒縄を用いていた。

その三、馬上の人間は馬が暴れ始めると、すぐに馬を乗り捨てて逃げ出し、姿をくらました。その直後に馬は暴走を始めて五人の町人を殺傷し、水木新八郎に重傷を負わせてから天水桶に激突、ようやくおとなしくなったのである。

その四、馬上の人間は二本差しの武士であり、羽織に袴をつけていた。ただし、乗馬用の身装ではなく、羽織と袴の日常的な武士の姿であった。

だが、黒覆面をしていたので、人相、年齢については見当もつかない。

その五、馬を乗り捨てた武士が姿をくらましたと思われる路上で、金色の家紋入りの蒔絵の印籠が発見された。印籠にある家紋は、笹龍胆であった。

これだけの証言と手がかりから、犯人を割り出すことは不可能である。しかし、手がかりの特徴から、あの連中のひとりに違いないという判断は下せたのだった。

あの連中――。

それは前年の夏の終わりから、江戸市中に出現した武士の一群のことである。十日に一度ぐらい、六、七人が勢揃いして、江戸市中を馬で駆け抜ける。それがもう半年近くも、続けられている。

最初のうち、江戸の町人たちはただもう驚いて、あっけにとられるばかりであった。夕暮れから宵の口にかけて、江戸の目抜き通りを馬で突っ走る。それも六、七頭が、次から次へと疾走してくるのだ。

公務上の出動や急使、人命にかかわる事柄のための使者でない限り、江戸市中を馬で駆け抜けることは禁じられている。それくらいに、馬の疾走というものが危険だったからである。

それでも、人間の手に負えなくなった暴れ馬によって、多くの死傷者を出しているのだっ

た。馬の疾走や暴走が、この時代の交通事故の大半を占めていた。従って、目抜き通りを意識的に馬で駆け抜けて楽しむといった人間が、いるはずはなかったのだ。

武士は馬術を習ったり、身体を鍛えるために馬を走らせて一汗かいたりする。しかし、そのための場所として、馬場というものが江戸市中の各所にあった。あるいは、郊外へ遠乗りに出かける。

町人地の人通りの多い公道で、馬を走らせて遊ぶというのは、前例のないことである。非常識というより、まるで狂人の仕業だった。連中の目的は、第一にスリルを楽しむことにある。

人命にかかわる危険な遊戯には、スリルが付きものであった。そのスリルを楽しみながら同時に、馬術のテクニックを競い合うことができる。それが連中の第二の目的だったのだ。

更に、逃げ惑う群集の中を猛スピードで走り抜けるときの痛快さ、優越感を味わうことが、第三の目的なのである。こうした無謀な遊戯は、退屈しきっている若い者にしかできないことであった。

「まったく、どうかしているぜ」

「人を蹴殺すようなことになったら、どうするつもりなんだろう」

「町人の二人や三人、殺したところで何とかなると、甘く考えているのさ」

「あんなことをして、何がおもしろいんだろうねえ」

「道を歩くにもうっかりしちゃあいられねえとは、恐ろしい世の中になったもんだよなあ」

「人を蹴殺したりはしない、それほど未熟ではないと、あの連中はうぬぼれているんだろうが、いつまでも無事にすむとは限らないぜ」

「何とか、ならないもんかね」

一般の町人たちのあいだでは、寄ると触るとこの話で持ちきりであった。誰もが腹立たしさと不安を、覚えているのである。

町内の有力者や町役人たちも、黙視できなくなっていた。騎馬隊はいつどこに出現して、どの目抜き通りを突っ走るかわからない。江戸市中の町に住む限り、他人事や対岸の火事ではすまされないのであった。

「このままにしておけば、いまに必ず死者が出ることになります」

「乗る者の腕は確かでも、走っている馬は畜生ですからな」

「死者が出てからでは、手遅れということになります」

「手立てを、考えなければなりません」

「しかし、何分にも相手がどこの何者なのかわからないので、訴え出ることが難しいのですよ」

「それに、町方の者ではないので……」

「これは、噂でございますがね。お旗本の次男や三男で、仲のいい六、七人が集まってやっていることだと、耳に致しました」

「そういう噂は、わたくしも聞いております。三千石、四千石といった裕福なお旗本のご子

息ばかりだとか……」

「ご身分のあるお旗本のご子息が相手となると、町方の者には手も足も出せませんでしょう」

「それにしても、何とかしなければなりません。よい手立てがないものか、とっくりと思案することに致しましょう」

各町内で、このような話し合いが行われた。

江戸の町人たちは騎馬隊のことを、「あの連中」と呼ぶようになった。いやしくも武士であり、旗本の子息たちと噂される一群を、町人たちが「あの連中」と蔑称する。それだけ騎馬隊が、世の中の顰蹙を買っていたという証拠である。

しかし、「あの連中」にしても法を犯して危険な遊戯に興じているのだから、シッポをつかまれまいとする点はちゃんと心得ている。そのために揃って、黒覆面で顔を隠しているのだった。

馬にも鞍をおかず、手綱もつけていない。一つには裸馬を乗りこなすことで技量を誇り、いっそう危険度の増す遊びを楽しんでいるのである。だが、それだけのことのためではなかった。

万が一の場合、馬から手がかりを与えないようにと、そのことを考慮しているのであった。馬は口をきかないし、そのまま見捨ててしまえばいい。当家の馬ではないかと問われても、徹底的に否定することができる。

むしろ、鞍などの馬具のほうが、動かぬ証拠になるだろう。それで、どこにでもあるような轡をつけさせ、荒縄を手綱の代わりに用いている。当たり前な轡と荒縄からでは、手がかりを得られるはずがない。

しかし、世論は高まり、町人の代表が対策を講じた。将軍吉宗が設置したばかりの目安箱にも、騎馬隊を取締まって欲しいという嘆願書が、次々に投げ込まれた。

南北の町奉行所にも、続々と苦情が持ち込まれた。正式な訴えこそなされなかったが、民情の吸い上げを重大任務としている町奉行には無視できなかった。だが、町奉行所が実際に取締まることは、ほとんど不可能だったのである。

町人地で危険なことをするのだから、町奉行所の管轄となる。ところが、騎馬隊そのものは武士であって、それも浪人ではないらしいから、町奉行の支配下にない。旗本の子息となると、完全に権限外であった。

そのうえ、身分も面体もわからない。いつどこに出現するかも不明であり、待ち受けていて捕えるということもできない。馬に乗って疾走するのだから、通報を受けたところで間に合わない。

大岡越前守忠相は何度も、評定所でこのことを議題にした。旗本を取締まる目付、その上役の若年寄にも直接会って、早いうちに対策をと申し入れた。幕府もこのことについては、大いに苦慮していたのである。

目付が、内偵を始めた。旗本の子息たちらしいという噂は広まる一方で、このままにはし

ておけなかったのだ。享保六年が暮れ、新年を迎えて早々、内偵の一応の結果が出たのであった。

三橋市十郎　二十二歳。
河野周助　二十歳。
内田兵四郎　十八歳。
大久保数馬　十七歳。
白垣又三郎　十七歳。
戸川伊織　十七歳。
水野小太郎　十七歳。

以上七名が、怪しいということになったのだ。いずれも旗本の次男か三男で、無役である。兄が健在である限り、出仕することもない部屋住みで、飼い殺しにされるか養子にいくかの次男、三男であった。

だが、それぞれの家が裕福であることから、将来など考えずにいまは気ままに過ごしていられる若者たちだった。父あるいは兄が要職についていて、三、四千石の旗本の子弟ばかりである。

特にリーダー格の三橋市十郎の父親は、普請奉行のポストについている。三河以来の名家だし、普請奉行である父親の評判もよかった。その普請奉行の次男が、暴走騎馬隊のリーダーだったとなると、話は穏やかでなくなる。

七人の若者は、同じ師について馬術を習得した。多くの門人の中で、この七人は天才的に馬術が巧みだった。そうしたことから七人は意気投合して、親しい仲になった。日頃から、馬場でよく顔を合わせているという。

七人の屋敷には、二頭から三頭の駿馬がいる。どの屋敷の奉公人も口が固くて、明言することを避けているが、七人とも馬一頭を与えられていて、自由に乗り回すことができるようである。

このような情報を評定所で目付が報告した五日後に、日本橋新材木町での事件が起こったのであった。ついに、危惧していたことが、現実の出来事となったのだ。それも、六人死傷という大事件であった。

二日後に、評定所で異例の決定がなされた。この評定には、大目付、若年寄が臨席した。そして、大目付の強い要請によって、南町奉行の大岡忠相に一切の決着を任せることに決まったのだった。

第一に町人地で発生し、町人が犠牲になった事件であること。

第二に、以前から世論と非難の声が高まっていて、町人代表が強く取締まりを要求していた一件であること。

第三に、町奉行所に一任しなければ江戸中の町人が納得しないだろうこと。

この大目付の提案に、若年寄、寺社奉行、勘定奉行が賛成した。反対に回ったのは、目付だけであった。大岡忠相は、将軍吉宗の許可があればと条件をつけた。

事情はどうあれ、現役の普請奉行である旗本の次男を町奉行がお白洲で調べるというのは、異例中の異例ということになるのであった。

2

三日後に将軍吉宗から、旗本の子息を町奉行所のお白洲に引き出すという特例を、今回に限り認めるとの沙汰が下った。ただし、罪人として吟味してはならない、刑事罰の判決は許さない、という吉宗からの指示があった。

罪人として町奉行が、白洲吟味をしてはならないというのである。お白洲に引き出すことは構わないが、あくまで相手を尊重して事情聴取の形式をとれ、という意味であった。

刑事罰を避けろとは、殺人罪や傷害罪を適用してはならないということなのだ。将軍家としては直参旗本の権威や、三河以来の家柄というものを、最低限度で守りたかったのに違いない。

一方、七人の旗本の子息に対して、評定所から南町奉行所へ出頭せよと命令が下った。その日、大岡忠相は一切の公務を放棄して、正午前から三橋市十郎が出頭するのを待ち受けた。

午の刻——。

正午に、三橋市十郎が出頭した。

白洲の中央に、床几が一脚だけ据えてある。その床几に、三橋市十郎は腰をおろした。三ツ紋付きの羽織に袴、真新しい草履に白足袋、腰に小刀を帯びている。羽織の紋は、笹籠胆であった。

もちろん、縄付きではない。警固も捕吏も差添人も、縁先の同心もいなかった。白洲に床几を置いて、取調べを受ける人間をすわらせたり、何から何まで町奉行所では見られない光景となった。

大岡忠相が着座しても、三橋市十郎は会釈を送っただけだった。忠相の近くには書役が控えているだけで、吟味与力の姿もなかった。次の間に形式として当番与力がいるだけで、あとは定回り同心の浅香伝兵衛が傍聴者という顔つきで同席していた。

取調べではなくて、あくまで事情聴取である。

「三橋市十郎どのか」

忠相が、おもむろに口を開いた。

「いかにも」

三橋市十郎は胸を張り、大岡忠相の顔をじっと見据えている。色白く、顔の彫りが深く、なかなかの美青年であった。名家の生まれであることを裏付けるように、気品に満ちている。

神経質にも見えるが、誇り高き旗本の子弟を絵に描いたようである。頭のよさを涼しげな目もとが、武術への自信を眼光の鋭さが、胆力を引きしまった口もとが、傲慢さを高い鼻が、それぞれ物語っていた。

まさに、貴公子――。

「御普請奉行、三橋能登守どのの次男と聞くが……」

忠相は、厳しい顔つきで言った。

「いかにも」

三橋市十郎は、表情を動かさなかった。

「何故にそこもとが、当奉行所のお白洲へ召し出されたのか、その謂れについて存じておろうな」

「存じませぬ」

「ほう」

「いかなる謂れがあって、このような恥辱を受けねばならぬのか、お奉行どのにお伺いしたいと思います」

「恥辱とは……？」

「町奉行所のお白洲など、不浄な場所へ召し出されたことでございます」

「上さまのお許しを得て、そこもとはここへ召し出された。上さまのご命令に従うことが、そこもとは恥辱だと申すのか」

「たとえ、上さまのご命令でも、武士にとっての恥辱は恥辱となりましょう」

「怖いもの知らずの若さのせいにしろ、ずいぶんと大胆なことを申すのう」

「お奉行どの、何故に拙者がここに召し出されたのか、その事由についてお聞かせ下さい」

「過日、日本橋新材木町の町中において馬を疾駆致させ、通行中の者六名を殺傷に至らしめて、そのまま逃走したる一件につき、そこもとから事情を尋ねるためじゃ」

「その逃走したる者が拙者だと、仰せでございますか」

「違うとでも申すのか」

「笑止でございます」

「そこもとは、南町奉行大岡越前守忠相に向かってものを申しておる。無礼は、許されぬぞ」

「取るにたらぬ世間の噂であれば、笑止などとも申しませぬ。お奉行どのが申されるのであればこそ、承服できないことなのでございます」

「身に覚えがないことだと、言い張るつもりか」

「言い張るのではございませぬ。身に覚えのないことなのでございます」

「御目付どのの調べもすみ、評定所においてそこもとが犯したる罪に相違なしと、断が下されたことである。それでも、身に覚えがないと申すのか」

「いかにも」

「ならばこの場で、奉行にも得心がいくように、申し開きをするがよい」

「そうさせて頂きます。まず第一に、江戸市中に出没して馬を疾駆させる者ども、数人の徒党を組みおるとか聞き及んでおりますが、その数をお教え頂きたい」

「六名あるいは七名、ということじゃ」

「あるいはでは、お答えになりませぬ。六名か七名かを、正しくお教え頂きたいのでございます」
「六名、いや七名だとは、断言できぬ」
「では、六名というのが、正しい答えかもしれませぬな」
「ただし、七名の疑わしき者の姓名が、明らかにされておるぞ」
「それは、あくまで疑わしきことであって、真実と決まったわけではないはずでございます」
「だから、どうだと申すのじゃ」
「日本橋新材木町において六名の者を殺傷せしめたるとき、何騎が駆け抜けたのでございましょうや。第二にこの点について、お伺い致します」
「当夜は、ただ一騎と聞いておる」
「お奉行どのはただいま、徒党を組み、その数は六名あるいは七名と仰せになりました。ところが当夜に限り、ただ一騎というのはいかなることでございましょう」
「それは、たまたま一騎にて町中の疾駆に、打ち興じておったのだろう」
「これまでは必ず六騎あるいは七騎と列をなして町中を駆け抜けていた一党が、そのときだけ一騎だったとは、どうしたことなのでございましょうか。お奉行どのはたまたま一騎だけで駆け抜けをしたと仰せでございますが、あるいは六、七騎と徒党を組む者どもとは何らかかわりなく、別個に一名だけそのような不心得者が出現したのかもしれませぬ。つまり、世間を騒がせることのおもしろさに、猿真似を致した者がいたというふうにも考えられます」
「そのような当て推量が、申し開きになると思うのか」
「徒党も組まずにただ一騎、新材木町を駆け抜けた者が拙者に相違ないということこそ、当て推量でございましょう。いや、その徒党を組む者の中に、拙者も数えられているということからして、得心が参りませぬ」
「ならば、証人を呼ぶことに致そう」
大岡忠相は、白洲の入口にいる同心に、目で合図を送った。早々に証人たちを呼び入れたほうが、手っ取り早いだろうと判断したのである。この時点ではまだ、忠相も三橋市十郎に関して軽く考えていたのだった。
口の減らない青二才、小賢しい若輩者と、侮っていたということになる。証人を登場させて、グーの音も言わせずにとっちめてやろうと、それだけの自信が四十六歳の忠相にあって当然だったのかもしれない。
六人の証人がぞろぞろと白洲へはいって来て、三橋市十郎の背後に一列に並んだ。いずれも目付にマークされた旗本の子弟たちで、すでに昨日のうちに評定所で取調べを受けていたのだった。
評定所では六人に対して、暴走騎馬隊のメンバーであることを正直に認め、その狂気の沙汰とも言える行動を打ち切るようであれば、今日までの不行跡については不問にすると申し

渡した。

連中は父や兄にさんざん油を絞られているし、幕府や世間を敵に回したことに恐怖さえ覚えていた。そこはまだ若者であるから、自分の甘さにさえ気づけば、改めようと素直になる。

六人が六人、騎馬隊のメンバーであることを認め、二度と愚行を繰り返さないと誓約した。そのうえで六人は本日、証人として南町奉行所に出頭したのであった。

「この六名の者が、証人である」

忠相はそう言って、三橋市十郎が示すはずの反応を窺った。

だが、三橋市十郎は反応らしきものを、まったく示さなかった。平然としているばかりか、市十郎は背後の友人たちを振り返ってニッコリとしたのである。それは、虚勢ではなかった。

ここで初めて、忠相はおやっと思ったのである。この貴公子は只者ではないと、忠相は緊張していた。よほど剛胆なのか、あるいは自分はシロだという絶対的な自信を持っているのか、そのどちらかであった。

そうでなければ、屈託なく笑ったりできるはずがない。

「三橋市十郎がそこもとたちとともに、江戸市中を馬にまたがり疾駆したことについて尋ねる。三橋市十郎は身に覚えがないことと申し立てておるが、しかとさようか。そこもとたちは、奉行の前で真実を語る証人である。心して、返答せよ」

忠相は眼光鋭く、六人の若者たちに呼びかけた。

忠相の貫禄もあり、腹に響くような声に、若者たちは圧倒された。全員が忠相の視線を避けたし、何となく落着きを失っていた。しかし、その若者たちの全員が意外にも、市十郎にとって有利な証言をしたのである。

「河野周助……」

「恐れながら、申し上げます。三橋市十郎どのはこれまでただの一度も、われらの不心得な所業に加わってはおりませぬ」

「内田兵四郎……」

「市十郎どのは、われらの不行跡には何ら関わり合いもございませぬ」

「大久保数馬……」

「同じことしか、申し上げようがございませぬ」

「白垣又三郎……」

「三橋市十郎どのは、一度も加担されませんでした」

「戸川伊織……」

「かの不行跡は、われら六名だけによるものでございます」

「水野小太郎……」

「七名と申すのは、世間の目の誤りにございましょう」

「河野周助、正直に申せ」

「正直に、申しております」

「内田兵四郎、若年であろうと武士は武士じゃ」

「その武士に、二言はございませぬ」
「大久保数馬、そこもとは三橋市十郎を恐れておるのではないか」
「恐れる理由がございませぬ。剣術、槍術、柔術ではまだ、市十郎どのに敗れたことのない拙者にございます」
「白垣又三郎、父上の面前においても同様に返答できるのか」
「事実を述べておるのに、どうして父の責めを受けねばならないのでしょうか」
「戸川伊織、偽りを申しておるのではないだろうな」
「決して……」
「水野小太郎、まことのところを聞かせてもらおう」
「それで証しが立つのであれば、腹を切ってお目にかけましょう」
こういった具合であり、これ以上は詰問できなかったのだ。
旗本の子弟が、武士に二言はない、切腹してもいいと、言いきっているのである。そうなると、追及するほうにも言葉がなかった。罪人ではなく証人なのだから、拷問によって白状させることもできない。
「これで騎馬の一隊に、拙者はまったく関わり合いのないことが、明らかになりました」
三橋市十郎は、薄ら笑いを浮かべていた。会心の笑みというやつだろう。
忠相のほうで用意した証人だから、何とも言いようがないのであった。六名の証人は逆に、市十郎の無実を立証した。とんだ逆転劇であり、証人調べは忠相の大失敗に終わったのである。

「その代わりに、そこもとが一人にて馬を飛ばしておったのではないか、という疑いが深まった。当夜、六名を殺傷したる者は徒党を組まず、ただ一騎だったのだからな」
忠相は言った。
「さて、いかがなものでしょうか」
市十郎は、まだ笑っている。
忠相はこの貴公子然とした若者を甘く見ていたことを悔いていたし、焦燥感に似たものを味わってもいた。

3

六人の証人は、嘘をついている。七人のあいだで事前に、そうした打ち合わせをすませていたのである。同罪という仲間意識、若者同士の友情、それに三橋市十郎を見捨てるのは恥だという連帯感が、結束を固くしているのだろう。
市十郎が町奉行所に呼ばれたことへの反発も、旗本の子弟たちを硬化させている。自分たちと同じように市十郎の不行跡についても不問とさせるために、六人の若者は意地になっているのに違いない。
忠相にとってはいずれにしても、役立たずの証人たちであった。六人の証人はあっさりと引っ込めて、次の段階へ移るほかはなかった。油断はできない相手と認識を改めて、短期決

戦を望まないことであった。

六名の証人に立ち去るよう命じて、忠相はすぐに事情聴取を続けることにした。白洲は日溜まりになっていた。だが、冬の日射しは弱々しくて、風の冷たさを感じさせる。火の気のない白洲は、夕方にかけてますます寒くなる。

「そこもとの屋敷には、駿馬が四頭おるそうだな」

気をとり直して忠相は、三橋市十郎に笑いかけた。

「いかにも」

市十郎も、白い歯をのぞかせている。

「いまも、四頭おるであろうな」

「いや、いまは三頭でございます」

「ほう」

「一頭だけ減ったというわけでございます」

「いつ、減ったのだ」

「昨年の暮れでございます」

「その馬、いかが致したのだ」

「年老いて、死にました」

「死んだ……」

「それで、ただいまのところは三頭だけ、という勘定になります」

「死んだのは、そこもとの持ち馬か」

「さようでございます」

「あとの三頭は、どなたの持ち馬かな」

「二頭は父上の馬、もう一頭の馬は兄上のものにございます」

「父や兄の馬となると、そこもとが勝手に乗り回すわけには参るまい」

「馬に手を触れることすら、許されておりません」

「では、そこもとは昨年の暮れから、馬なしでおるのか」

「いかにも。そのために昨年の暮れ以来、拙者は馬場にも顔を出しておらず、遠乗りもまた致しておりませぬ」

「この先、いかがするつもりじゃ」

「春になったら父上の持ち馬の一方を、譲り受けることになっております」

「昨年の暮れに死んだというそこもとの馬は、栗毛だったそうだな」

「はい」

「牡馬か」

「はい、太郎丸と呼んでおりました」

「ところで、新材木町で六名の者を殺傷した暴れ馬も、栗毛の牡馬であった。例によって当たり前な轡をつけ、荒縄をもって手綱代わりとした裸馬である」

「そのように、聞いております」

「当夜、河野周助たち六名の者はいずれも、日暮れ前から屋敷外へ一歩も出ておらぬことが判明致した」
「その話も、耳に致しました」
「だが、そこもとは日暮れ前より屋敷から姿を消し、夜更けて戻ったことが明らかになっておる」
「それ故に、拙者が疑わしいと仰せでございますか」
「屋敷の奉公人どもは、主人の身を案じてか、容易に口を開かぬものだ。三橋家の屋敷の奉公人にしても、変わりはない。そこもとが馬に乗って出かけたかという問いに対して、奉公人どもは気づかなかったと、知らぬ存ぜぬ一点張りだそうじゃ」
「気づかなければ、知らぬ存ぜぬは当然のことでございましょう」
「門番までが、気づかなかったとはな」
「門番であれば、何事にも気づくとは限りませぬ」
「ところが、妙なことに奉公人どもは、そこもとが屋敷へ戻ったときの様子については、はっきりと答えておるのだ。馬を召されずに、歩いて戻られたとな」
「その通りなので、そう返答したのでございましょう」
「出かけるときは馬、戻ったときは徒歩、と奉公人どもは事実を知っているのであろう。しかし、そこもとが馬にまたがっていたことは、一命を賭しても口外できぬ。そこで、出かけるときのことは知らぬ存ぜぬで通し、戻ったときのことは徒歩であったと声を大にして申し立てておる。それを奉公人としての苦心と、奉行は見ておるのだが……」
「またしても、当て推量でございますか」
「さようか。そこまで申すのであれば、致し方あるまい。そこもとに、あれを見てもらおう」

忠相は再び、白洲の入口に控えている同心に、うなずいて見せた。
それを待っていたように、同心がもう一度、六人の旗本の子弟を招じ入れた。若者たちは、忠相から向かって右側の白洲の端に、並んで立つようにと指示を受けた。若者たちも今度は、いささか不安そうな面持ちであった。
白洲から姿を消していた同心が、間もなく戻って来た。同心は、馬を引いていた。栗毛の裸馬であった。同心は馬とともに、若者たちとは反対側の白洲の端に立った。
「いまはおとなしゅうしておるが、これが六名の者を殺傷した先夜の暴れ馬だ」
忠相が、市十郎に言った。
「ほう」
市十郎は、馬を眺めやった。市十郎は依然として、落着き払っているし、余裕たっぷりであった。
「見覚えがあるか」
「ございませぬ」
「太郎丸ではないのだな」

「はい」
「太郎丸ではないかと試みに、太郎丸と呼んでみたが知らぬ顔でおる」
「太郎丸でない馬に、太郎丸と呼びかけても通用せぬのが道理でございます」
「ところが、馬も犬と同様に主人の声だけは、間違いなく聞き分けるそうじゃ。そこでいま、この場で試してみようと思う」
「試す……？」
初めて貴公子の顔に、翳りが生ずるという反応があった。
「そこもともあちらへ行き、河野周助と戸川伊織とのあいだに立つのだ」
忠相は、命令口調で言った。
市十郎のほうも、それを拒むことはできなかった。拒否すれば、みずから疑惑を認めることになる。逃げ出すわけにもいかないし、忠相の命令に従うほかはないのだ。市十郎は、立ち上がった。
だが、そのときの市十郎の顔には、もう狼狽や困惑の色はなかった。一瞬にして、反応らしきものは消えたのである。市十郎は悠然と、仲間たちのほうへ足を運んだ。覚悟を決めたというのではなく、なおも勝算ありといった顔つきだった。
市十郎は、河野周助と戸川伊織のあいだにはいった。全員が一頭の馬と、対峙する恰好になった。馬は若者たちのほうを見ようともしないで、草の一本も生えていない白洲の砂利に鼻先を寄せていた。

「水野小太郎、太郎丸と呼びかけてみるのだ」
忠相は、左端の水野小太郎を指さした。
「太郎丸！」
躊躇しながらも水野小太郎は、その声を張り上げていた。
同心が、馬の尻を叩いた。しかし、馬は顔を上げただけで、動こうとはしなかった。
「次に、大久保数馬だ」
忠相が言った。
「太郎丸！」
大久保数馬は観念してか、素直に声を飛ばした。
同心が促すように、馬の尻を叩く。だが、馬は首を動かしはしたが、やはり歩き出すこともなかった。
「戸川伊織……」
忠相が、命令を下す。
「太郎丸！」
戸川伊織が叫ぶように、大きな声で呼びかけた。
結果は、同じであった。
「よかろう。では、このあたりでどうだろうな」
忠相は市十郎に、視線を投げかけた。

「太郎丸！」

市十郎の声が、白洲を横切った。

同心が、馬の尻を叩く。

馬は走り出して、一直線に反対側へ向かった。馬は市十郎の前でとまると、前足で白洲を引っかくようにした。砂利を散乱させながら、馬は市十郎の肩や腕に鼻先をすり寄せていた。

白洲は、重苦しい静寂に支配されていた。誰もが、沈黙を守っている。市十郎を除いた若者たちは、絶望感に捉われたように頭を垂れている。主人を忘れない動物という美しい光景が、まるで悲劇的に感じられるような十数秒間であった。

あまりにも鮮やかな反応が、示されてしまったのである。これで結論は出たと、思わない者はいなかった。若者たちも、馬によって立証させるという忠相の奇襲作戦には、考えが及ばなかったのだ。

「その馬は、太郎丸と決まった」

やがて忠相が、沈黙を破った。

市十郎はゆっくりと白洲の中央へ戻ると、床几に腰をおろした。口はきかなかったが、なぜか敗北者の感じはしなかった。取り乱すふうもなく、貴公子は冷静そのものだったのである。

「この暴れ馬が太郎丸となれば、馬上におったのは何者だったのか、おのずと明らかになろう」

忠相は白洲の同心に、目を走らせていた。同心は六名の若者たちを白洲の外へ導いたあと、馬を連れて引き下がった。白洲に残ったのは、市十郎ひとりだけであった。

「太郎丸は昨年の暮れ、死んだのではなかったのか」

忠相は市十郎に視線を戻して、皮肉っぽく言った。

「死にましたと、申し上げたはずでございます」

市十郎は答えた。太郎丸と対面する以前の顔と、まったく変わりなかった。

忠相もさすがに、腹立たしさを覚えていた。どこまで強情を張るつもりなのかと、若僧の端正な顔が憎らしくなった。普請奉行の息子として、あるいは名家出身の貴公子ということで、町奉行所を馬鹿にしきっているのだろうか。

それとも、あくまで勝算があってのことなのか。いや、勝算などあろうはずはない。馬が示した決定的な反応によって、市十郎はすでに敗れている。凶悪な犯罪者だろうと、恐れ入りましたと頭を下げるはずであった。

「では、いまの馬は太郎丸ではないと申すのか」

「馬が太郎丸だと、名乗りましたでしょうか。拙者が主人だと、いまの馬が申しましたか。まさか口のきけない馬を証人に、事の黒白をお決めになるおつもりではありますまいな」

「口はきかぬとも、馬は動作によって真実を語った」

「馬が拙者の呼びかけに応じたのは、畜生の気紛れというものでございましょう。日頃、馬に接していて馴れきってもおりますし、特に愛着を持つ拙者に、馬が親しみを覚えたという

ふうにも考えられます」

「奉行は三橋家のためを思い、家紋のことまでは持ち出したくなかった。だが、こうなってはやむを得まい。この動かぬ証拠については、何と申し開きをするつもりじゃ」

忠相は、蒔絵の印籠を差し出した。笹龍胆の紋がはいった印籠は、市十郎の持ち物だと確認されている。これが、最後の物的証拠ということになるのであった。

「それなる印籠はこの正月に、ある者に与えたものにございます」

印籠という証拠など、最初から恐れてもいなかったのか、市十郎は動ずることなくそう言った。

「ある者とは……？」

「日本橋新材木町で材木商を営む越前屋の総領で、清太郎と申す者にございます」

「しかとさようか」

「はい。それにもう一つ、申し上げたき儀がございます」

「申してみよ」

「麹町三丁目の仏具商、秋田屋仁兵衛の娘にてお弓と申す者を、お調べ下さい。新材木町で暴れ馬が六人の者を殺傷した時刻に、拙者がいずこにおったかを、そのお弓が証人として明らかにするはずでございます」

そう言いながら、市十郎は口もとを綻ばせていた。今度は市十郎のほうから、証人を申請したのである。それは、いかにも切り札らしく、アリバイの主張も含まれていたのだった。

4

大岡忠相は、頭をかかえたい気持であった。油断できない若者だと警戒はしていたのだが、三橋市十郎が最後まで決定的な切り札を隠し持っているとは、予想していなかったのである。

市十郎が申し立てたことは、その場限りの言い逃れでもないし、苦しまぎれの作り話でもなかった。ちゃんと切り札を用意しておいて、いざというときを計算のうえで持ち出して来たのだ。

唯一の物的証拠である印籠は、新材木町の材木商越前屋の長男清太郎にくれてやったものだという。越前屋は新材木町で筆頭の大店で、富豪であることでも知られていた。清太郎はそこの跡取り息子、つまり若旦那であった。

越前屋は、三橋家にお出入りを許されている。材木商としてではなく、個人的な付き合いだった。普請奉行と材木商が立場上の知り合いとなり、次第に親しさを増したという関係である。

それで越前屋の若旦那清太郎も、市十郎との面識を得たということになる。富豪の息子として欲しいものは何でも手に入れられる清太郎だが、旗本の家紋がはいった印籠となるとそうはいかない。

清太郎は市十郎が腰にしている蒔絵の印籠に目をつけて、それに妙に執着していたようである。そのことに気づいた市十郎は、清太郎に印籠をくれてやった。この正月、酒がはいっ

たうえでのことだった。

新材木町の事故現場に落ちていたのは、その印籠だというわけである。つまり、印籠を落としたのは市十郎ではなく、清太郎だったということになる。新材木町に住む清太郎が、新材木町で落とし物をしたのだから、それはむしろ当然のことであった。

次に、市十郎のアリバイである。

アリバイを立証するのは、麹町三丁目の仏具商秋田屋仁兵衛の娘で、十八になったばかりのお弓だという。この秋田屋も仏具商としては、江戸で五本の指に数えられる大店であった。もちろん、金持ちである。

その秋田屋の長女お弓は、十六のときから一年半ほど、三橋家に奉公に上がっていた。奉公には違いないが、雇い人ではなかった。行儀作法の見習いのための武家奉公であって、誰にでも許されることではないのである。

豪商、有力者など町人の上流階級では、娘に行儀見習いの武家奉公をさせようと躍起になる。それが一種の花嫁修業であり、娘に箔をつけさせることにもなる。親の見栄でもあった。

秋田屋でも長女のお弓に、武家奉公をさせることにした。奉公先はツテを求めて頼み込むということもなく、三橋家と決まったのだった。同じ麹町の裏三番町に屋敷がある三橋家に、秋田屋では何度か仏具を納入したことがあったからである。

お弓は一年半の奉公を終えて、去年の夏に秋田屋へ戻った。縁談がまとまったためだった。お弓はこの春に、江戸でいちばんの太物問屋井筒屋の長男と、祝言を挙げることになってい

た。

新材木町で暴れ馬が大事故を引き起こしたのは、午後七時という宵の口であった。

市十郎が麹町裏三番町の屋敷を出たのは暮れ六ツ（午後六時）前で、溜池あたりまで散策したあと麹町へ引き返して来た。そのときふと市十郎は、秋田屋に寄ってみようと思いついた。市十郎はこれまでに二度ほど、秋田屋を訪れたことがある。

このときも同じように秋田屋の裏へ回り、塀のくぐり戸から裏庭へはいった。琴の音が、聞こえていた。庭の離れで、お弓がひとり琴を弾いている。市十郎は、離れに近づいていった。

市十郎に気づいたお弓は、琴を弾く手を休めて丁寧に挨拶をした。市十郎は、濡れ縁に腰をおろした。冬の月を眺めながら琴の音を聞くのも風流だと、市十郎は思ったのである。

「久しぶりに、お弓どのの琴を聞く。心ゆくまで、弾じてはくれぬか。拙者も心ゆくまで、耳を傾けたい」

市十郎は、そう言った。

お弓は再び、琴を弾き始めた。市十郎の注文もあり、お弓も興に乗ったらしく、休むことなく琴を弾き続けた。一時間以上も、聞きほれただろうか。市十郎は立ち上がって、何も言わずに歩き出した。

そのまま市十郎は琴の音に送られて、くぐり戸から外へ出た。風流な一時を過ごしたと、市十郎はその余韻を噛みしめながら、屋敷へ向かった。裏三番町の屋敷に戻ったのは、午後八時頃であった。

暴れ馬が日本橋で六人を殺傷したのは午後七時、その時間に市十郎は麹町にいた。馬を乗り捨てて日本橋から麹町まで、人間の足でひたすら走り続けても、十分や十五分でつけるものではない。

以上が、市十郎の主張するところであった。

事情聴取を一旦、打ち切るほかはなかった。大岡忠相は後日改めて呼び出すということで、三橋市十郎の帰宅を許した。市十郎は意気揚々と、南町奉行所を立ち去ったのであった。

「かつてのわが名と同じ市十郎、憎みとうないのが情というものだが、何とも腹立たしゅうてならぬ」

大岡忠相は市十郎を帰したあと、口惜しそうにそう洩らしたという。

大岡越前守は幼名を求馬、のちに改めて市十郎としたのである。忠右衛門という呼び名もあり、諱は初めが忠義で、それも忠相と改めている。

翌日、忠相の命を受けて、お気に入りの定回り同心浅香伝兵衛は、日本橋新材木町の越前屋を訪れた。長男の清太郎は二十六歳で、いかにも大店の若旦那という感じの二枚目であった。

定回り同心を恐れるふうもなく、店のお得意に対するような態度であった。万事におっとりしていて丁寧であり、笑顔というものを忘れない。浅香伝兵衛は断わりようもなく、客間らしい小座敷へ招じ入れられていた。

浅香伝兵衛が三橋市十郎の一件を持ち出すと、清太郎はようやく真剣な顔つきになった。

だが、それでも思い出したように、笑いを浮かべることがある。長生きするぜ、と伝兵衛は言いたくなった。

「市十郎さまが嘘を申されているなどと、そんなはずはございません」

清太郎は、ぶつような仕草をして見せながら言った。まるで、女である。

「すると三橋市十郎から蒔絵の印籠をもらったって話は、まったくもってほんとうだってのかい」

浅香伝兵衛の口のきき方のほうが、はるかにやくざっぽい。もっとも、それが定回り同心の特徴の一つなのだから、やむを得ないことである。

「間違いございません」

「もらったのは、いつのことだい」

「正月でございます。父と一緒に麹町のお屋敷へ、新年のご挨拶に参上致しました。そのときに市十郎さまから、お年玉だとちょうだいしたのでございます」

「そんなにあっさり、くれるもんなのかねえ」

「あとになって悔まれたかもしれませんが、そのときの市十郎さまは正月のお酒にお酔いになっておられたようで、気が大きくおなりだったのでございましょう」

「それで若旦那はその後、もらった印籠をずっと持ち歩いていたのかい」

「とんでもございません。粗末にしてはならないと、大事にしまっておいたのでございます。ただ、相手によっては見せびらかしたいもの、自慢したくなるお品でございます。それで出

かけるときには、懐中に入れて持ち歩きました」
「印籠を失くしたのは、いつのことだったんだい」
「あの騒ぎのあった日でございました。日暮れ前に出先から戻りまして、間もなく懐中にないことに気づいたのでございます」
「大騒ぎをして、捜そうとはしなかったのかい」
「むしろ、騒ぎにはしたくございませんでした。市十郎さまから頂いたご印籠を、粗末に扱ったから紛失したのだろうなどと、思われたくはございませんものでね」
「それで、ひとりで捜しに出たのかい」
「はい。ところが表へ出たとたんに、あの暴れ馬の騒ぎとなりまして……」
「印籠を町奉行所の者に、拾われちまったってわけだ」
「つい目と鼻の先に、ご印籠は落ちていたようでございますね」
「ところで若旦那、どうしてそのことを奉行所へ届け出なかったんだい」
「ご印籠を落としたことが、何とも申し訳なくて、市十郎さまのお耳には入れたくなかったのでございます。奉行所にお届けすれば、話が公けになってしまいますからね」
「それだけかい」
「もう一つ、関わり合いになりたくないという気持もございました」
そう言いながら清太郎は、愛想笑いを浮かべている。この調子で死ぬまでのんびり暮らせるのだと思うと、浅香伝兵衛は清太郎が憎らしいやら羨ましいやらであった。

「まあ、いいだろうよ」
音を立てて冷たくなった茶をすすると、浅香伝兵衛はさっさと立ち上がった。
そのあと越前屋の奉公人や近所の連中から聞き込みをして、浅香伝兵衛は麹町三丁目の秋田屋へ向かった。
秋田屋ではまず仁兵衛夫婦と二、三の奉公人に会い、当夜のお弓の行動について調べた。その結果、お弓が離れで琴を弾いていたこと、かなり長い時間にわたって琴の音が聞こえていたという点を確認した。
ただし、三橋市十郎の姿を見かけたという者は、ただのひとりもいなかった。
浅香伝兵衛は、お弓と二人だけで話し合った。お弓もまた、大店のお嬢さんタイプで、娘らしさが匂うようであった。さすがに武家奉公で花嫁修業を積んだだけあって、立ち振舞いの淑やかさからして違っている。
目を見はるほどの美人ではないが、雪のように白い肌が乙女らしい清純さを象徴していた。楚々として、上品であった。嫁入りを目前にした娘の色気が、恥じらいのうちに感じられた。
浅香伝兵衛の質問に対して、お弓は要領よく答えた。しかし、口数は少ないし、ゆっくりとした喋り方をする。伏し目がちで、伝兵衛の顔を見ようとはしなかった。心にやましさがあるせいではなく、生娘としてそれが当然なのである。
「市十郎若さまは確かに、あちらの離れへお運びでございました」
お弓は未だに、市十郎を若さまと呼んでいた。

「いきなり、裏庭から回って来たのかい」
伝兵衛は、お弓が正真正銘の処女であるかどうかの観察を、続けていた。
「はい」
「それで、おめえさんの琴を聞きてえと……？」
「はい」
「長いあいだ、琴を弾かされたそうじゃあねえかい」
「半時よりも、長かったと思います」
「三橋市十郎に聞かせたくって、おめえさんは琴を鳴らし続けたのかね」
「それだけではございません。いつになく指の動きがよくて、音色も美しかったのです。それで、わたしも夢中になって、弾き続けたのでございます」
「風流だったわけだ」
「はい。寒さも忘れて、一心不乱でございました」
「琴を弾くのは、いつものことなんだな」
「はい。特に井筒屋さんの若旦那が琴を好むということで、このところお稽古に励んでおります」
「井筒屋の若旦那ってのは、間もなくおめえさんの旦那になるお人かい」
「はい」
「三橋市十郎とはそのとき、まとまった話ってのをしなかったのかね」

「はい。わたしはご挨拶を申し上げただけ、市十郎若さまは琴の音に耳を傾けたいと申されただけでございます」
お弓の顔に、羞恥の色はなかった。お弓が恥じらいの風情を示したのは、井筒屋の若旦那のことを口にしたときだけであった。どうやら、お弓は市十郎に対して、特別な感情を抱いていないようである。
お弓にとって市十郎は、いまもなお若さまなのであった。お弓が三橋家に奉公に上がっているうちに、市十郎と深い仲になったのではないかという推定は、下種のカングリのようである。
もともと、武家奉公に上がっている商家の娘が、お屋敷の若さまと男女関係を結ぶという例は少ないのだ。旗本でも男女関係に厳格な家が多いし、簡単に身を許すような淫乱娘は武家奉公など最初から許されなかった。
市十郎とお弓は、恋心も抱いたことがない仲である。もし、そうだとするとお弓には、市十郎のために嘘をつくだけの義理もないということになる。

5

浅香伝兵衛から詳しい報告を聞いて、大岡忠相にはいっそう話がわからなくなった。
清太郎もお弓も、嘘をついている。つまり、偽証に間違いないのだ。しかし、偽証をするからにはそれなりの覚悟が必要であり、頼まれて口裏を合わせるにはそれなりの理由がなけ

ればならなかった。

六人の旗本の子息たち、それに三橋家の奉公人が市十郎を庇い立てするのは、当然であった。それぞれの都合、立場、意地などを守らなければならないという理由があるからだった。その代わり、それはそれですぐに偽証だとわかってしまう。六人の仲間と三橋家の奉公人の証言など、忠相は最初から問題にしていなかった。市十郎を庇い立てしなければならない、だから偽証すると、わかりきっているからである。

だが、清太郎とお弓の場合は、まったく違っていた。清太郎とお弓には、市十郎を庇ってやらなければならないような理由がないのだ。そうした立場にもないし、友情とか意地とかいったものもない。

ほかに、偽証を引き受けざるを得ない理由として、次の五つが考えられる。第一に大きな意味での利益になる場合、第二に報酬や交換条件に目がくらんだ場合、第三に弱みを握られている場合、第四に義理を果たし恩返しとなる場合、第五に暴力的な言動によって脅迫された場合である。

清太郎とお弓には、そのどれが当てはまるだろうか。清太郎もお弓も金持ちの息子や娘で、恵まれすぎているような環境と何一つ不自由のない生活の中にいる。利益など求める必要は、まったくなかった。

従って、第一と第二の場合は否定されることになる。

第三の弱みを握られている場合というのも、あり得ないことと断定できる。浅香伝兵衛の調べによると、清太郎及びお弓は市十郎と個人的に特別親しくしていたわけではないという。むしろ三橋家と越前屋、三橋家と秋田屋というふうに家同士、あるいは当主同士の付き合いであって、個々の家族の私生活にも触れるようなことはなかったのである。弱みを握られるほど親しくはないし、住む世界も違っていたというわけだった。

第四の義理を果たし恩返しになる場合だが、これもまた考えられないことであった。家同士、当主同士の付き合いは対等であって、主従関係にもないし、また利害も絡んではいなかった。

個人的には親しくないとなれば、なおさらである。町奉行所を相手に偽証するという危険を冒してまで、果たさなければならないような義理があろうはずはない。犠牲的精神を発揮するほどの恩も、受けてはいないのである。

お弓には三橋家に対して、奉公に上がった時代もあったという恩義があるだろう。しかし、それは決して、借りにはなっていないのだ。逆に三橋家では、秋田屋から金五百両を借用して、そのままになっているという。

最後の暴力的言動によって脅迫された場合というのは、もう話にも何もならなかった。清太郎もお弓も、どこかに監禁されているというわけではない。脅迫など通用しないし、そんなことをするほど市十郎も愚かではないだろう。

市十郎を庇い立てする理由も、偽証する必要もまったくない。かえって清太郎やお弓のほうが、不利になるだけであった。市十郎から印籠をもらったことにすれば、清太郎は無関係

な事件にみずから首を突っ込む結果となる。

お弓は市十郎と二人だけで、一時間以上も離れにいたことにしなければならない。男女が席を同じゅうするのは、忌むべきこととされていた時代である。ましてお弓は、嫁入り前の大事な身体だった。下手をすると、目前に控えた祝言にも影響しかねないのだ。

それなのになぜ、清太郎とお弓は市十郎に頼まれて、口裏を合わせることを引き受けなければならなかったのか。

清太郎とお弓は、真実をのべているのかもしれない。

そうだとしたら、市十郎はシロである。忠相はもとより、市十郎の取調べを命じた評定所の構成員は、何らかのかたちで責任をとらなければならない。

いや、市十郎はクロに間違いない。

そうなると、清太郎とお弓が嘘をついているということになる。

清太郎とお弓は、なぜ市十郎のために偽証しなければならないのか。

五日後の午の刻（正午）に、大岡忠相は南町奉行所へ三橋市十郎、清太郎、お弓を呼んだ。初回と同じように白洲の中央に床几を据えて、市十郎がそこにすわることを許した。清太郎とお弓は白洲の向かって右側に、ムシロを敷いてすわらせた。

大金持ちの息子と娘であっても、身分は町人であった。白洲に床几を置いて腰かけさせるという特例を、町人に対して認めるわけにはいかないのである。やはり、土下座をさせなければならない。

ただ、白洲の正面には、すわらせなかった。罪人ではなく、証人だからである。清太郎とお弓の差添人を出頭させなかったのも、事情聴取のための証人という特別な場合だからであった。

人定尋問を終えたあと、忠相は清太郎とお弓に偽証することは許されないと念を押した。

清太郎とお弓は平伏することによって、偽証などするはずはないという気持を表わした。

「清太郎並びにお弓には、三橋市十郎を窮地より救ってやろうと努めるだけの謂れがない」

忠相は再会した貴公子の顔を、突き刺すような目で凝視した。

小憎らしい若輩者は更に自信を得たように、傲然と胸を張り薄ら笑いを浮かべていた。

「その通りにございます」

平伏したままで、清太郎が言った。

「だが、それは目に見えてはっきりとした謂れがないというだけであって、そのほうたちの心の中に何があるかは、また別だと申しておこう」

忠相は膝の前に、一文銭をいくつも並べていた。

「恐れながら、申し上げます」

清太郎が遠慮がちに、上体を起こしかけた。

「申してみよ」

「お奉行さまはわたくしどもが、嘘いつわりを申し上げていると仰せでございましょうか」

「その通りじゃ」

「なぜ、わたくしどもが、そのような……」
「三橋市十郎から口裏を合わせよと頼まれて、そうほうたちはそれを断わりきれなかった。それは、そのほうたちに断わりきれない弱みがあったからだ」
「弱みなど、決してございません」
「いや、あるのだ。そのことに清太郎もお弓も、気づいておらぬのではないか。だから奉行も、目には見えぬものだと申したのだ。つまり、心の弱みじゃ」
「心の弱み……」
「清太郎もお弓も、江戸で知られる裕福な商家の子として生まれ、今日まで何一つ不自由なく育った。今後も、恵まれた日々を過ごすことであろう。結構ずくめの身の上、満ちたりた暮らしをしておるわけだが、それでもなお何かが欠けているのではないか」
「よく、わかりませんが……」
「人とはそういうものでな、満足することを知らぬのじゃ。富を求め、富を得れば名声を望み、富と名声が手にはいれば権勢を欲しがるというようにな」
「はい」
「そのほうたちにもただ一つ、得ることができぬものがある。そのほうたちがいかに恵まれていようと、町人という身分に変わりはない。旗本と対等に接することができても、町人が身分ある武家になることは望めない。そのほうたちも、ないものねだりの気持からいつの間にか、武家の権勢や格式に心をとめるようになった」

「それが、心の弱みなのでございましょうか」
「そうじゃ。そのほうたちがいかように望もうと、手に入れることができぬとわかれば、そのほうたちは武家の権勢に対して心の弱みを持つようになる」
「さようでございますか」
「得心が参らぬか」
「はい」
「では清太郎、使いを頼まれてくれぬか」
「お使いでございますか」
「いま奉行所の門前に、ミカン売りを呼んである。そのほう門前に参り、ミカンを五十粒買い求めてくるのだ」
忠相は同心を呼んで、並べてある銭を集めて手渡した。
「承知致しました」
キツネに摘まれたような顔で、清太郎は立ち上がった。妙な注文だが、従うほかはない。同心から銭を受け取って、清太郎は白洲を出て行った。奉行所の門前にミカン屋を呼んであるので、買物は早かった。
間もなくザルをかかえて、清太郎は白洲へ戻って来た。ミカンを山積みにしたザルを同心に渡すと、清太郎は自分の席にすわった。同心が忠相の前へ、ミカンを運んだ。忠相は一つずつ手にして、ミカンを数え始めた。

「清太郎、ミカンは五十粒と頼んだが、四十八粒しかないぞ。そのほう途中で、二粒のミカンを食したな」

忠相は言った。

「滅相もございません。そのようなことが、どうしてできましょう」

清太郎は首を振りながら、抗議する目つきになっていた。

「誤魔化すことはない。渇きを覚えたのでミカンを二粒頂きましたと、正直に申せばそれですむことだ」

「誤魔化してなどおりません。間違いなく五十粒のミカンを買い求めて参りましたと、正直に申し上げておるのでございます」

「では念のために、そのほうが数えてみよ」

忠相は同心に命じて、ミカンをザルごと清太郎のところへ運ばせた。清太郎とお弓が二人がかりで数えたが、ミカンは確かに四十八個しかなかった。

「これは、ミカン屋の間違いでございます！」

狼狽して清太郎は、叫ぶような声を出した。

「誤魔化さずともよいと、申しておるのに……」

忠相は言った。

「いいえ、わたくしではございません。神仏に誓って、申し上げます」

「神仏に誓ってか」

「はい」

「清太郎、余は江戸町奉行の大岡越前守忠相じゃ」

忠相は、清太郎に笑いかけた。

清太郎は沈黙し、深くうなだれて、やがて平伏した。そのまま清太郎は、白状させられた罪人のように動かなくなった。

「そのほう、二粒のミカンを食したのだな」

忠相が訊いた。

「恐れ入りましてございます。悪いことを、致しました」

震える声で、清太郎が答えた。

「神仏に誓って知らぬことと申したのに、そのほう一瞬にして心を変えたようだな。それも、みずからの無実を偽って、進んで罪をかぶったではないか」

忠相は、両手を差し出した。忠相の左右の手には、ミカンが一つずつ握られていた。

「それは、何ゆえにだろうか。余は江戸町奉行大岡越前守忠相だと、その言葉を聞いてそのほうは正直を嘘に変えた。武家の権勢への心の弱みとは、このことをいうのだ。そのほうたちが同じような心の弱みから、三橋市十郎の頼みを断わりきれなかったのは、三橋市十郎からこのように言われたためであろう。四千石の旗本で、御老中支配、役料二千石の御普請奉行、三橋能登守の子である拙者を救ってはくれぬかと……」

忠相は言葉を口にしながら、貴公子の顔から血の気が引いていくのを認めた。

三橋市十郎は、がっくりと肩を落とした。無言であった。これ以上の抗弁は、見苦しいと感じたのだろう。それは、白洲における貴公子の敗北の姿であった。

清太郎とお弓も、偽証であったことを白状した。

一切が落着したのは丁度、水木新八郎が床のうえに起き上がることを許された日であった。将軍吉宗からの指示通り、罪人はひとりも出さなかった。その代わりに三橋家から百両、越前屋と秋田屋からそれぞれ五十両ずつが、太郎丸の暴走によって死亡した者の遺族と怪我人たちに贈られた。

人呼んで『ミカン裁き』というこの大岡越前守忠相扱いの事件は、将軍吉宗にも影響を及ぼしたのである。将軍吉宗は剣、槍、弓、馬、砲術と武術の奨励に熱心であったが、この享保七年以降、馬術に限りさして熱を入れなくなったということである。

二人の天一坊

1

天一坊さまの御行列が、江戸へ向かっておいでなさる——。

この評判は徐々に、江戸市中に広がりつつあった。決して華やかな話題ではないし、庶民的なビッグ・ニュースでもないから、あっという間に知れ渡ることはなかった。それに江戸市民はまだ、実際に天一坊の行列というものを目にしていないのである。

東海道を江戸へ下ってくる旅人、東海道の旅から帰って来た江戸の人間たちが、みやげ話として聞かせることだった。何しろ難しい話題だし、町人の生活には無関係だから、あまり騒ぎ立てる者はいなかった。

「天一坊さまってのは、御落胤だそうな」

「御落胤……」

「つまり、高貴なお方のおとしだねってことよ」

「おとしだねって、手近な女を可愛がって生ませた子ってわけだろう」

「品のねえ言い方をするねえ」

「その高貴なお方ってのは、いってえ誰なんだい」
「それが、将軍さまだってんだから、驚くじゃあねえかい」
「公方さまの御落胤……！」
「天一坊さまってのは、将軍さまのおとしだねなのかい」
「それで、何のために天一坊さまは、江戸へおいでになるんだい」
「決まっているじゃあねえかい。親子御対面のためよ」
「何だか知らねえけど、まあ雲のうえの話だってことには違いねえだろう」
「ああ、おいらたちには、何のかかわりもねえことよ」
こういった連中の話は、ただだらしなく広がっていくだけで、罪のない噂に終わってしまう。しかし、これよりもやや程度の高いのが、江戸の町民の中枢をなしているのであった。
そうした江戸市民たちは、天一坊の噂をかなり深刻な問題として受けとめていた。将軍家の御落胤なるものが、幕府の治世に大きな影響を与えて、世の中の変化に結びつくかもしれないことに、不安を覚えるからなのである。
「また、えらいことになりましたな」
「まったくでございます。将軍さまの御落胤とは……」
「もう、お世嗣さまも決まっておいでですしね」
「去年でしたでしょう、元服なされて大納言さまにおなりになったのは……」
「そうでした」

「天一坊さまは、お世嗣さまの兄上さまということになるのでございましょう」
「天一坊さまのほうが六年ほど、お生まれがお早いそうでございます」
「御落胤は、お家騒動の因と申しますから……」
「それも将軍さまのお世嗣の争いとなると、ただのお家騒動ですまされることではございません」
「このままだと、世の中が引っくり返るような騒ぎにも、なりかねません」
「こうした話は、あまり大きな声を出さないほうが、よろしゅうございますよ」
「そうそう、お上からお咎めを受けるかもしれません」
互いに注意し合いながら、噂を広めていくことになる。派手に喧伝はされないが、深く滲透していく話題であった。町人でもこのくらいの関心を払っているのだから、武士の世界では更に深刻だった。
特に幕閣をはじめ、政治に直接かかわっている幕臣たちは、重大な事件として苦悩の色を強めていた。相手は将軍家の御落胤と称しているのだから、力で押さえ込むわけにはいかなかった。
そうかと言って、将軍家の御落胤であると、あっさり認めることは絶対にできない。御落胤であることを認めて、将軍家との対面まで事を運んでしまったら、もう取り消しも何もできない厳然たる結果となるのであった。
享保八年三月下旬——。

南町奉行大岡越前守忠相は、裏居間へ水木新八郎を呼んだ。水木新八郎は着流しで、裏居間に姿を現わした。長身で色浅黒く、見るからに気の強そうな顔をしている。顔立ちは、悪くない。男前と言ってもいいだろう。

だが、どことなく武士らしくない感じがする。四角張るところがないし、大岡忠相の前だからと態度を改めることもなかった。投げやりな目つきだし、不貞腐れているようにも受け取れる。

大岡越前守忠相に、仕える者には見えなかった。町奉行所は、番所と役宅から成り立っている。つまり、役所と官舎がひとつになっているのだ。たとえば、いま大岡忠相がいる裏居間は、番所と役宅の境に位置している座敷であった。

番所は奉行人支配組頭をはじめ二十五人の与力、百二十人の同心、その他の下役たちが勤務するところである。役宅では、大岡忠相の家族と奉公人、近習や側近の生活が営まれていた。

水木新八郎は、番所に無関係な存在だった。役宅の住人である。番所に勤務する者でもないし、大岡忠相の家来でもないということになる。もちろん、家族の一員でもなかった。単純に言えば大岡家の食客、居候であった。大岡忠相の命令によって、事件の捜査に付き合うこともある。忠相の手足となって働くことも、厭わなかった。食客の義務として、忠相の個人的な使用人にもなるわけであった。

居候となって七年目の水木新八郎も、すでに三十一歳——。

この奇妙な浪人水木新八郎のことを、大岡忠相は「町人侍」と呼んでいた。武士としての形式や体裁を無視したがるうえに、新八郎が荒っぽくて下品な町人の言葉遣いをするからであった。

「新さん……」

大岡忠相は、そんなふうに声をかける。

「何か、ご用でござんすかい」

水木新八郎は、大岡忠相の前に正座した。

午後の日射しに、春の匂いがする。もちろん桜は庭木にしていないが、どこからともなく花びらが運ばれてくる。庭の日射しの中を、桜の花びらしきものがチラチラと風に舞っていた。

「天一坊さまのことだが、新さんも耳にいたしておろうな」

大岡忠相は、庭先へ向けた目を細めていた。浮かない顔である。

「へい」

水木新八郎は、無表情であった。

「町人侍としては、どのように思うておる」

忠相の声も、暗く弱々しかった。

「別に……」

新八郎は、首を振った。

「考えたところで致し方ないこと、というわけじゃな」
「へい」
「町人侍には天下の一大事も、かかわりないことと、顔に書いてあるぞ」
「お奉行にとっては、天下の一大事ってことになるんでござんすかい」
「いかにも、そのとおりじゃ。町奉行のお役目について六年になるが、これほどの難問にぶつかったのは初めてだ」
「しかし、御落胤ならそれらしくお迎えするってことで、すむんじゃあねえんですかい。何も難しく考えることは、ねえと思いやすがねえ」
「本物の御落胤であれば、いささかでも気が楽なのだが……」
「天一坊さまは、本物の御落胤じゃあねえとおっしゃるんですかい」
「おそらく、偽者に相違ない」
「偽者……？」
「上さまの御落胤を騙るとは、不届き至極……」
「待っておくんなさい。天一坊さまには、御落胤なるお墨付きと証拠の品が揃っていると、聞いておりやすよ」
「証拠の品とは、葵の御紋を散らしたる志津三郎兼光が御短刀……」
「その御短刀も、本物じゃあねえんでござんすか」
「いや、御短刀は本物じゃ」

「お墨付きのほうは、どうなんでござんしょう」
「お墨付きも本物に相違なしと、大坂御城代の酒井修理大夫どのも京都所司代の松平伊賀守さまも、太鼓判を押されておいでだ」
「でしたら、文句のつけようもねえでしょう。お墨付きと証拠の御短刀をお持ちの天一坊さまは、紛れもなく将軍家の御落胤ということになりやす」
「大方の者はそのように、信じて疑わぬであろうな」
「お墨付きも御短刀も、そのための証拠の品じゃあござんせんか。そいつを疑ってかかるんじゃあ、お墨付きも御短刀も最初から不要ってことになりやす」
「それが、道理というものだが……」
「お奉行はどうして、偽者だという見方をなされたんでござんしょう」
「時期じゃ」
「と、申されやすと……」
「名乗り出た時期が、遅すぎたということに、余は疑いの目を向けずにはおられないのだ。天一坊さまは、御年十九歳と聞く。お墨付きも御短刀も、御出生の以前よりあったはず。天一坊さまが一歳、二歳のうちに家人から届け出がなければならぬ。しかし、今日まで二十年の歳月を見送り、何ゆえにいまとなって名乗り出られたのか」
「なるほど……」
「更に、天一坊さまを守り立てておるは、素姓も知れぬ浪人どもということじゃ。みずから

天一坊さまの後見役を任じておる山内伊賀亮なる浪人も、また胡散臭いとの報告もはいっておる」

「そうでござんすかい」

新八郎は、腕を組んだ。

「御老中、若年寄ご一同は、天一坊さまが上さまの御落胤であろうと、また御落胤を騙る天下の大罪人であろうと、いずれにせよご対面にまで事を運びたくないとのご意見でな。この越前に骨を折ってくれと、申されるのだが……」

大岡忠相は、苦悩の色を隠そうとはしなかった。

「上さまは、天一坊さまのことをご存じなんでござんしょうか」

「いや、まだお耳にお入れしていないとのことだ。ただ御老中の水野和泉守さまが、御落胤について御身に覚えがおありか否かを、上さまにそれとなくお伺いいたしただけということじゃ」

「それで、上さまのお言葉は、どうだったんでござんす」

「御身に覚えが、おありとのことであった。いまより十九年前に懐妊いたせし沢ノ井なる女に、お墨付きと志津三郎兼光の御短刀を遣わした覚えがあると、上さまはお認めになられたのだ」

「いまから、十九年前……」

「宝永元年十月のことであったと、上さまはご記憶だったそうな」

「天一坊さまがお生まれになったのは、宝永二年の三月十五日と聞いておりやす。懐妊と出生の時期も、ぴったりと合っているようでござんすね」

「うむ」

「たとえ天一坊さまが、まことの御落胤であったとしても、ご対面にまで事を運びたくないというのは、どうしたことなんでござんしょう」

「上さまお世嗣に関し、面倒を起こしとうないというのが、御老中ご一同の本音であろうな」

「そうなると天一坊さまは、御門前払いということで……」

「大名家へご養子ご縁組みか、数万石を賜り別家をお与えするかして、お世嗣から切り離したうえでご対面ならばと、御老中ご一同はお考えのようじゃ」

「そのほうが、確かに無難でござんしょうね」

「それよりも更に無難なのは、天一坊さまが偽者であってくれることだ」

「天下の大罪人として斬って捨てるのが、いちばん容易な解決の手段でござんすからね」

皮肉っぽい笑いを、新八郎はチラッと浮かべた。

「これこれ……」

忠相は露骨に、いやな顔をして見せた。忠相としては珍しく、気持の余裕を失っているのである。

老中と若年寄、いわゆる幕閣が何よりも不安を覚えたのは、天一坊の出現による将軍家の後継者問題であった。すでに、八代将軍徳川吉宗の後継者となる九代将軍の候補は、明確に

決定されていた。

吉宗の長男、家重であった。

家重は昨年、十二歳にして元服した。元服とともに、大納言に叙せられた。大納言さまと呼ばれるようになった家重は、西ノ丸に住まうことになる。つまり、正式に世嗣と決まったわけである。

家重は英邁な父に似ず、虚弱にして暗愚、言語も不明瞭であった。そのような家重を次代の将軍家にしていいものかどうか、という不安を抱いている者も少なくなかった。その辺のところに、先行き不安定なものが秘められていた。

そこへ、吉宗の御落胤が登場する。家重より六つ年上であり、天一坊こそ現将軍家の長男ということになる。もし天一坊が聡明な青年ということであれば当然、暗愚な家重を排撃する声が強まるだろう。

だが、いまさら大納言家重を、引っ込めるわけにはいかない。そこで賛否の声が錯綜し、次期将軍のポストをめぐって大変な騒ぎに発展するかもしれない。将軍家のお家騒動となると、天下の混乱を招く。

幕閣は、それを心配したのだった。いまのままでいきたい。家重が暗愚だろうと阿呆だろうと、幕閣や側近に一流の人物を揃えておけば問題はないのだ。天一坊なる投じられた石によって、大きな波紋を広げられることこそ、迷惑な話だったのである。

吉宗は御三家を制御し、将軍家により密着した親戚関係を構成しようという考えを持っていた。いわゆる三卿の誕生が、その結果である。後年、吉宗は次男の宗武によって田安家を、四男の宗尹によって一橋家を興させることになる。

それで幕閣も、もし天一坊が本物の御落胤であれば大名に養子として押しつけるか、分家を設けてそこの祖にしようという考えを持ったのであった。要するに、吉宗の長男としての扱いは、何としてでも避けたかったのである。

しかし、天一坊とその一行は、将軍家の長男であることを強調し、それらしく振る舞っている。まず彼らは大坂へ乗り込み、『徳川天一坊様御宿』という看板を掲げて旅館に滞在し、すでに四万両からの献金を受けているという。

大坂城代はお墨付きと証拠の短刀が本物であることから、天一坊が将軍家の御落胤だと正式に認めて、みずから挨拶に出向いている。同時に大坂城代は、御落胤徳川天一坊の一件につき、江戸へ報告の使者を走らせた。

天一坊とその一行は、次に京都へ移った。大坂城代から連絡を受けていた京都所司代、松平伊賀守忠周はさっそく天一坊に歓迎の挨拶を行った。お墨付きと短刀を拝見して、松平伊賀守もまた将軍家御落胤であることを公式に認めた。

天一坊は京都でも、二万両の献金を受けたのであった。

大坂城代と京都所司代が御落胤であることを公式に認めたのだから、世間はもう信じて疑わなかった。それで、六万両という大金を、人々は献じたのである。大坂城代と京都所司代から報告を受けた幕閣にしても、天一坊を無視することはできなくなっていた。

そして天一坊とその一行は、いよいよ江戸へ向かっての旅を始めたのであった。将軍家と対面のうえ、長男であることの確認を受けるつもりである。その行列の規模は、大名行列と変わらない仰々しさだという。

天一坊は明らかに、次期将軍のポストを目ざしている。そうだとすれば、何としてでも吉宗との対面を阻止しなければならない。可能なことなら、天一坊を本物の御落胤として認めたくなかった。

そのような結論を出した幕閣は、天一坊の存在を吉宗の耳に入れないようにするとともに、本物の御落胤であるかどうかを徹底的に調査せよと、大岡越前守に命じたのであった。

大岡越前守は十日ほど前に、与力二名と同心六名を調査のために、紀州へ旅立たせた。だが、天一坊問題をいかに裁くべきかは、忠相をただ苦悩の泥沼へ追いやるばかりだったのである。

2

夕暮れに山吹の花を眺めながら、水木新八郎は散策から戻って来た。

月代を伸ばしているのは浪人の証拠だが、水木新八郎の身装は粋で小綺麗だった。淡い水色の着物は、三ツ紋付きである。着流しであった。大小の刀を腰にして、素足に雪駄ばきというイナセな姿だった。

南町奉行所は、数寄屋橋御門内にある。

その南町奉行所の門の近くまで来たとき、水木新八郎は気になる女の姿を認めていた。武家の女と、ひと目でわかる。御高祖頭巾で、顔を包んでいる。奉行所の門内を窺うようにして、女はたたずんでいた。

その後ろ姿に、どことなく見覚えがあった。

綾どの――。

新八郎は、そう直感した。思わず、足をとめていた。複雑な気持であった。新八郎が手にかけた向山右近の妻であり、一時は夫の敵として新八郎の命を狙ってもいた綾なのである。

二十歳で未亡人になった綾も、すでに二十七という年増であった。敵討ちは許されないと冷静に判断したのか、あるいは無意味なことだと諦めたのか、この数年間は新八郎に近づこうともしなかった綾である。

その綾がいま、南町奉行所の門前にいる。用があるとすれば、その相手は新八郎のほかにいない。まさか敵討ちを思いついて、奉行所へ出向いて来たわけではないだろう。いったい、どのような用があってのことか。

「綾どのか」

背後に立って、新八郎は声をかけた。

女は全身を硬直させてから、おもむろに向き直った。御高祖頭巾は、目だけをのぞかせている。しかし、それでも綾の顔であることが、はっきりとわかった。新八郎は綾に、懐かしさを覚えていた。

「お久しゅうございます」
綾は頭巾の下半分を、顎のところまで引きおろした。伏せた目に、羞恥の色が認められた。
「その後、お変わりがねえようで……」
新八郎は、年をとらない綾の美貌を確かめていた。
「おかげを持ちまして……」
綾は、一礼した。
「綾どのにまたお目にかかれたなんて、こんな嬉しいことはござんせんよ」
新八郎は、真面目な顔で言った。
「まあ……」
綾の頬が、赤く染まった。
「いや、まことの話がですよ」
「年をとってしまって、水木さまにお目にかかるのが、恥ずかしゅうございました」
「とんでもねえ。相変わらず、綾どのは美しい」
「穴があったら、はいりとうございます」
「ところで、いまはどこでどうしていなさるんですかい」
「阿部さまの御下屋敷に、御奉公の身でございます」
「阿部豊後守さまに御奉公が、叶ったんでござんすかい」
「はい。江戸の御下屋敷の奥向き支配を、仰せつかっております」

「それは、よかった」
「もう、むかしのことは忘れました」
「嬉しいことで……。しかし、その綾どのが南町奉行所へ足を運ばれるとは、いってえどうしたことなんでござんしょう」
「実は、水木さまのお耳に、お入れしたいことがございまして、お目にかかりに参りました」
「だったら、さっそくにもお伺いいたしやしょう」
「はい」
「まさか綾どのを番所内へ案内するわけにはいきやせんし、この場での立ち話でもようござんすかい」
「結構でございます。お話というのは、近頃の世間の噂になっております将軍家の御落胤についてでございます」
「天一坊さまのことでございやすね」
「はい」
「天一坊さまが、どうしたというんです」
「天一坊さまが将軍家の御落胤だというのは、真っ赤な偽りだと申しておる者がいるのでございます」
綾は意外なことを、口にした。

「何ですって……」

新八郎は、あたりに目を走らせた。綾の話は、人の耳に入れたくなかった。場合によっては、大変なことになりかねない話だったのである。

この時刻に、奉行所に出入りする者はいなかった。夕闇が広がりつつある数寄屋橋御門内は、無人の世界になっていた。南町奉行所の門前に、門番の姿があるだけだった。

「聞き捨てならないことですし、是非とも大岡越前守さまにお聞かせしたい話だと思いました。そのとき頭に浮かんだのが、水木さまのことだったのでございます」

綾は、真剣な顔でいる。ほかに魂胆があって、嘘をついているとは思えない。また冗談として、口にできる話ではなかった。

「それは、かたじけない」

新八郎は、目礼を送った。ただ重大な情報というだけではなく、大岡忠相に聞かせてやりたい話であった。もし手応えのある情報だとしたら、忠相にとって大きな救いになるはずだった。

「日本橋に、高砂屋という太物問屋がございます」

キラキラと輝く目で、綾は新八郎を見上げた。

「高砂屋なら江戸いちばんの太物問屋、あっしもよく存じておりやす」

新八郎は、うなずいて見せた。

「実は高砂屋は、阿部さまの御下屋敷にお出入りを許されております。それで、わたくしも高砂屋の主人や奉公人たちを、よく知っているのでございます」

「なるほど」

「その中でも、高砂屋の主人に必ず付き添って参ります若者とは、特に心安い仲にございます。わたくしの話は、その若者から聞かされたことなのです」

「その若者の名は……？」

「ただいまのところは、仮の名でお許し下さい。菊太郎ということにでも、させて頂きましょう」

「菊太郎というのは、高砂屋の奉公人でござんすね」

「いいえ、奉公人ではございません。高砂屋の主人がわが子同様に育て上げて、いまでも高砂屋で下へも置かぬ扱いを受けている者にございます」

「それでいて、高砂屋の養子ってわけでもねえんですかい」

「はい。このうえなく大切な客分とでも、申したらよろしいでしょうか」

「大切な客分ねえ」

「高砂屋の主人が、大恩ある縁者からよろしく頼むといっさいを託されて、引き取ったのが菊太郎だということでございます。そのとき菊太郎は、十歳だったと聞かされております」

「いまの菊太郎は、いくつになっているんでしょう」

「十九歳でございます」

「十九歳……」

「天一坊さまと、同じということになりましょう」
「さようでござんすね」
「その菊太郎が、天一坊さまが御落胤とは真っ赤な偽りと、顔色を変えて申すのでございます」
「いかなる裏付けがあって、菊太郎は天一坊さまを偽者と決めつけているんでござんしょう」
「菊太郎が出生の日は、宝永二年の三月十五日だったそうでございます」
「宝永二年三月十五日……？」
新八郎は、眉をひそめた。天一坊の生年月日と、まったく同じだったからである。
「はい」
何かを訴えるような目で、綾は新八郎をじっと見つめた。
「出生の地は、いずこでござんしょう」
新八郎の表情は、硬ばっていた。
「紀州は和歌山の在、平沢村だそうでございます」
待っていたように、綾は答えた。
「母の名は、沢ノ井でござんすかい」
新八郎は、顔を紅潮させていた。さすがに、興奮しないではいられなかったのだ。
「はい」

綾は深々と、うなずいた。
「だったら菊太郎こそ、本物の将軍家御落胤というわけでござんすね」
大変なことになったと、新八郎は思った。
もうひとり、御落胤が出現したのである。天一坊が、二人になったようなものだった。いや、どちらかが偽者なのである。
あるいは二人とも、偽者かもしれなかった。
「そういうことでございます」
綾は菊太郎が本物であることを、信じているようだった。
「綾どのは、菊太郎の話を真に受けておいでござんすね」
「まことの話だと、わたくしは思っております」
「どうして、そうお思いなんでござんしょう」
「当の菊太郎が、御落胤であることを、隠したがっていたからでございます。天一坊さまが現われなければ、死ぬときまで口外しなかっただろうと、菊太郎は申しておりました。いまもなお菊太郎は、御落胤という話を嫌っております」
「今日まで名乗り出なかったのも、御落胤であると知られるのを嫌ってのことでござんすかい」
「さようでございます。おのれの不幸な生きざまを、呪ってやりたいくらいだと、申しております」

「菊太郎が綾どのに秘めたる身の上を明かしたのは、天一坊さまを許せなくなってのことですね」

「はい。将軍家の御落胤を騙るような大悪人を、このまま見過ごすわけにいかないということでございました」

「その菊太郎の話を、高砂屋の主人も認めているんでござんしょうか」

「はい。まことの話ではございますが、どうぞお忘れ下さいと、高砂屋の主人からは手を合わせて頼まれました」

「今後も御落胤であることは秘めておきたいというのが、菊太郎や高砂屋の主人の気持だってことなんですね」

「はい」

「そのあたりに、何か事情があるようでござんすね」

「いずれにいたしましても、御落胤であることを隠そうとする者と、御落胤であることを世間に広めて江戸へ乗り込んでくる者と、どちらが本物であろうかは、おのずとわかるものではございませんか」

綾は説得するように、熱のこもった口調で言った。

「へい」

新八郎は、綾の顔を見守った。必死になっている女の顔は美しいものだと、新八郎は思った。

徳川天一坊の存在を天下に喧伝し、六万両からの献金を受け、次期将軍のポストに目をつけている。それと比べたら、御落胤の悲劇性を嘆き、今日までそうした身分を秘密にして来た菊太郎のほうが、はるかに真実味を感じさせる。

野心の有無に関しては、まさしく対照的である。ただ、御落胤の偽者だけは許せないという菊太郎なのだ。そういう菊太郎こそ本物と断ずべきだ、という綾の主張は道理であった。

それに綾は、過去のいっさいを水に流して、わざわざ水木新八郎に重大な情報を持ち込んで来た。正義感に燃え、これぞ真実なりという信念がなければ、できることではなかった。

更に、高砂屋幸吉という証人がいる。高砂屋は豪商であり、多くの大名家に出入りを許されている。主人の幸吉は、世間の信用を得ている人物なのだ。その高砂屋幸吉が、いいかげんなことを言うはずはない。

菊太郎、高砂屋幸吉、及び綾の話はすべて事実――。

新八郎も、そのように判断していた。だが、そうだとすると、これは天下の一大事である。ただ話を聞いただけで、軽率な行動はとれなかった。まずは菊太郎という若者と、高砂屋幸吉に会ってみるべきだった。

「綾どの、これから高砂屋へ出向きたいんでござんすがねえ」

新八郎は、綾に笑いかけた。

「ただいま、すぐにでございますか」

綾も、微笑を浮かべた。

「このまま、足を運びてえんで……」
「よろしゅうございます」
「差し支えはありやせんね」
「はい」
「菊太郎さんと高砂屋の主人に、会ってみてえんですよ」
「ごもっともなことでございます」
「よろしく、お願いいたしやす」
「参りましょう」
二人は、歩き出した。
もう、夜になりかけている。しかし、数寄屋橋御門から日本橋までなら、提燈がなくても歩ける。人家が軒を並べているし、宵の口は明かりが少なくない。この時代の都心、ということになるのであった。
「こうして綾どのと、肩を並べて歩けるのが、嘘みてえに思えやす」
一歩遅れてくる綾を、新八郎は振り返って言った。
綾は無言で、恥じらうように顔を伏せた。
「もっと早いうちに、仲直りがしたかったですよ」
新八郎は、屈託のない笑顔になっていた。
「わたくしも、そのように思っておりました。けれども、そうする機会がございませんでし

た」
綾の声に、甘えが感じられた。
「今回のことが、さいわいしたってことになりやすね」
「はい」
「綾どのに敵呼ばわりをされなくてもすむと思うと、世の中が明るく感じられやすよ。肩の荷がおりたとは、このことを申すんでござんしょう」
「そのようにおっしゃられますと、わたくしも嬉しゅうございます」
「一日だって、綾どののことを忘れられる日はなかったんでござんすからね」
「わたくしも水木さまのことを、思い出さない日はございませんでした」
「ほんとうですかい」
新八郎は、立ちどまった。
「はしたないことを、申しました」
綾は両手で、顔を隠していた。恥ずかしさに消え入りたい風情というのを、絵に描いたような綾の姿であった。
この夜、新八郎は高砂屋で更に意外な事実を、知らされたのである。

3

八代将軍吉宗は、紀伊大納言光貞の三男として生まれた。御三家のうちの紀州徳川の出で

あった。

紀伊大納言光貞が、四十一歳のときの子である。父親が四十二歳になれば、その子どもは二歳になる。これを四十二の二つ子と言って、無事に育たないものとされていた。

四十二の二つ子は、捨て子するというのが当時の慣習だった。もちろん形式的に捨て子して、誰かに拾わせるのである。四十二歳ではない男が拾って養父になれば、その子は無事に育つという理屈なのだ。

吉宗も捨てられた。拾って育てたのは、紀州家の重臣である加納将監だった。源六郎と名付けられて、加納家で成長したのである。二十一歳になって頼方と称し、越前丹生三万石の城主になることが決まった。

このとき、源六郎は身のまわりの世話をする沢ノ井という腰元と、肉体関係を結んでいた。寵愛する、お手が付く、という肉体関係である。沢ノ井は、美貌の娘ということで評判だったのだ。

父は、平左衛門。

母は、お三。

信州から親子三人で流れて来て、和歌山から六キロほど離れている平沢村に住みついた。娘の沢ノ井はその美貌を買われて、加納将監の屋敷に奉公した。腰元としての沢ノ井の役目は、源六郎の身のまわりを世話することだったのである。

源六郎が越前丹生の城主になることが決まった宝永元年十月、沢ノ井は妊娠していると初

めて打ち明けた。翌年の三月には、出産の予定だということも、沢ノ井は付け加えた。大名になるような人間だから、別に驚くこともなかった。

「さようか」

そう言って、あとは自分の子どもだという証明書をしたためるだけだった。御落胤だという書付け、すなわちお墨付きと証拠の品物を、源六郎は沢ノ井に渡した。

「近々のうちに、越前丹生の城主となるために、江戸へ下ることとなる。雑事が片付き、丹生に落ち着き次第、そなたと出生いたした子を迎えることになろう」

源六郎は、そのように口約束もした。

「はい」

沢ノ井のほうは、ただ頭を下げるばかりであった。

「懐妊いたした身には、奉公も大儀であろう。病にかかったと称して宿に下がり、そなたの母のもとにて出産するがよい」

源六郎はそこで、沢ノ井に百両の金を贈った。

「仰せに従います」

沢ノ井は、神妙に答えた。

数日後に沢ノ井は、お墨付きと短刀、それに金百両を持って、加納将監の屋敷を去ったのであった。平沢村の実家に父の平左衛門はすでになく、母のお三ひとりだけが住んでいた。お三は産婆、助産婦として生計を立てていた。産婆であることから、平沢村の村人たちは

お三婆と呼んでいた。この母親のもとへ沢ノ井は帰っていったと、そこまでは容易に判断できるのである。

越前丹生三万石の城主になった源六郎頼方は、いつの間にか沢ノ井のことを忘れてしまっていた。大名になれば初めての経験でもあり、あれやこれやと目が回るほど忙しい。沢ノ井のことを、思い出すほどの余裕もなかったのだ。

半年がすぎた。

宝永二年四月になって、和歌山城主の徳川光貞が死んだ。

そのあとを継いだ長男の綱教は、生来病弱であったが、同じ年の九月に急死してしまった。次男は早世していたので、後継者は三男の源六郎頼方しかいなかった。源六郎頼方は、丹生から和歌山へ呼び戻された。

三万石の城主から、五十五万五千石の大大名になったわけである。

源六郎頼方の好運は、このあとも続くことになる。和歌山城主の徳川吉宗になってから十一年後に、八代将軍に迎えられることになったのだ。

五歳にして七代将軍になった家継が、享保元年に病死したのであった。八歳で死んだのだから、もちろん世嗣はいない。それで御三家のうちの紀州から、頼方を八代将軍に迎えることになったのである。

家継の遺言というかたちで、吉宗が選ばれたのであった。

吉宗は、八代将軍に就任した。このとき、将軍吉宗は三十三歳になっていた。

部屋住みの身だった源六郎が、三万石、五十五万余石の大名を経て、天下の将軍になったのであった。

和歌山城主だった十年間にも、沢ノ井のことは思い出さなかった。将軍となれば、なおさらだった。

沢ノ井のほうから名乗り出てくれば当然、思い出すことになる。吉宗も沢ノ井を、歓迎したことだろう。しかし、沢ノ井という名前も聞かされなければ、過去を振り返ることなどもなかったのである。

そして、吉宗が将軍になって八年目に、突如として沢ノ井が生んだという御落胤（ごらくいん）の登場となったのだ。

そっと名乗り出る、という殊勝なところはまったくなかった。

徳川天一坊と称し、その行列は華やかに江戸へ向かって来ているのであった。

すでに大坂城代も京都所司代も、徳川天一坊が正真正銘の御落胤であることを、公式に認めている。あとは江戸城において対面さえすませれば、天一坊は将軍の長男と決定するのであった。

幕閣はそれを何とか阻止しようと、大岡越前守にそのための防波堤となることを命じたのである。

四月にはいった。

天一坊の行列は、四月十日に品川の八ツ山に到着した。鶴岡屋という旅籠（はたご）屋を借り切って

『徳川天一坊様御宿』という表札を立てた。

翌日、老中から使者が鶴岡屋へ遣わされて、竜の口にある評定所にお招きすることを伝達した。幕閣が打ち揃って挨拶をするとともに、形式的な質問をさせてもらうという名目であった。

四月十二日に、天一坊の行列は評定所へ向かった。

『天一坊実記』によると、行列の人数は総勢二百六十余人だったということになっている。

葵の御紋入りの長持。

黒羽織の警固八人。

金葵の紋付きの栗色の先箱。

麻カミシモの侍一人。

絹羽織の徒士二十人。

麻カミシモの侍二十人。

天一坊の乗物は、飴色網代の蹴出付黒棒の駕籠。

駕籠脇に、警固十四人。

沓台持ちが一人。

こういった行列が延々と続き、その中には天一坊の後見役という山内伊賀亮、天一坊の育ての親と称する常楽院天忠、天一坊の側近である藤井左京や赤川大膳も加わっていたのだった。

その行列の到着を、評定所で待ち受けていた幕閣は――。

老中、戸田山城守忠真。

同じく水野和泉守忠之。

同じく安藤対馬守重行。

同じく松平左近将監乗邑。

若年寄、大久保山城守常春。

同じく松平能登守乗賢。

同じく石川近江守総茂。

ほかに御側用人。

寺社奉行。

勘定奉行。

大目付。

そして南町奉行、大岡越前守忠相などが綺羅星の如くに並んでいた。

評定所に到着すると天一坊はひとり、上段の間に案内される。

山内伊賀亮、常楽院天忠、藤井左京、赤川大膳の四人は大広間にはいり、幕閣と向かい合って着座する。

戸田山城守が、正面の襖に向かって頭を下げた。

「このたび天一坊どのには関東下向につき、まずはわれらとのご対面を願いまする」

戸田山城守は言った。
すると襖が左右に開かれて、そこに天一坊の姿が現われた。
タマゴに目鼻という美男子で、気品のある顔だった。
頭は、総髪にしている。
法眼袴をはき、白絹の着物のうえに葵の御紋付きの羽織を重ねていた。
「天一坊じゃ」
澄んだ声が、広間を走った。
一同、平伏する。
「さっそくにも、御証拠の御品を拝見つかまつりたい」
戸田山城守が、山内伊賀亮のほうへ膝を進めた。
山内伊賀亮は、天一坊に向かって両手をついた。
「山城守どのが、御証拠の御品拝見を相願われますが、いかが計らいましょうや」
山内伊賀亮はわざわざ、天一坊に伺いを立てた。
「許す」
天一坊が、浅くうなずいた。
赤川大膳が証拠の品を、三方にのせて戸田山城守の前まで運ぶ。
戸田山城守から始まって、全員が順次拝見ということになる。
短刀は、紛れもなく本物だった。

お墨付きのほうも、確かなものである。こういう場合のお墨付きの内容は決まり文句があって、どれも同じであるが、筆跡がものを言う。そのお墨付きは、間違いなく吉宗の筆跡だった。

其方懐妊の由、我等の血筋に相違これなし。もし男子出生においては、時節をもって呼び出すべし。女子ならば、其方の勝手に致すべし。後日証拠のために大切に致し候短刀を相添え遣わしおくものなり。依って件の如し。

宝永元年十月　　源六郎頼方
　　沢ノ井女へ

お墨付きには、そう書いてあった。
全員が、証拠としてまったく問題がないことを、認めなければならなかった。
「天一坊さまのご出生の地、並びにご成長の地はいずれか、お伺いをいたしたい」
戸田山城守が、山内伊賀亮を見据えて言った。
「ご出生の地は、紀伊和歌山在の平沢村にてござる」
山内伊賀亮はそう答えてから、澱みなく説明を始めた。
宝永二年三月十五日に、沢ノ井は無事に男児を生んだ。ところが、平沢村の人々はそれを白眼視した。父親は誰かという質問に、沢ノ井もお三婆も口を噤んでいたからであった。

紀伊徳川家の若君の子であることを、打ち明けるわけにはいかなかった。源六郎頼方からも、口外するなと言われたのだ。沢ノ井もお三婆も、相手が誰だろうと沈黙を守るほかはなかったのである。

村人たちは当然、沢ノ井が父親のわからない子を生んだものと判断する。小さな村の住人にとっては、驚くべきことであった。単なる私生児というのではなく、父親がわからない子どもと受け取ったからである。

「ふしだらな娘だ」

「同じ時期に何人もの男と情を通じたりするから、父親がわからない子ができるんじゃあないか」

「淫乱女だよ」

「汚らわしい」

「やっぱり流れ者の娘なんて、そんなものなんだろう」

村人たちは悪口しか言わないし、お三婆の住まいに近づかなくなった。

沢ノ井もお三婆も、平沢村には居辛くなった。やむなく、お三婆の故郷である信濃国の善光寺へ、旅立とうということになった。沢ノ井は赤ン坊を抱いて、お三婆とともに平沢村をあとにした。

だが、旅の途中でお三婆が、病死してしまった。

沢ノ井は何とか、善光寺にたどりついたが、やはり健康を害していた。そのうえ、善光寺には頼れる人もいなかった。病気は重くなるばかりで、この先長くはないと沢ノ井も覚悟を決めた。

何とか赤ン坊だけは、無事に育ってもらいたい。若君にお返ししなければならない子であり、お墨付きを添えて捨て子すれば誰かがそうしてくれるだろう。そのように考えて、沢ノ井はお墨付きと短刀を添え、赤ン坊を浄覚院という寺の門前に捨てた。

その赤ン坊を拾って育てたのが、浄覚院の住職だった天忠である。間もなく天忠は、美濃国の谷汲郷にある常楽院の住職になった。天忠は天一と名付けた捨て子を連れて、美濃国の常楽院に移った。

そこで、天一は少年に成長した。天一は当然、常楽院の小坊主ということになる。天忠はもちろん、お墨付きと証拠の短刀を見ていた。したがって天忠は、天一の身分を百も承知であった。

天忠は、迷った。

このまま天一を生涯、僧として過ごさせるべきか。

それとも、御落胤であることを届け出たほうがいいのか。

去年の春のこと、判断に困って、知人である山内伊賀亮にいっさいを打ち明け、天忠は結論を求めた。

山内伊賀亮は健康に自信がなくて、暇をもらい浪人の身でいるが、かつては九条家の家来であった。教養、知識も十分であり、知恵者と評判の人物だった。それで天忠は、山内伊賀

亮に相談したのである。

山内伊賀亮は即座に、御落胤であることを公表すべきだと主張した。

天一の父は、ただの大名ではないのだ。現在の将軍家の御落胤であり、それを知りつつ出家の身としてしまうのは、もったいなく恐れ多いことでもある。

それに天一も十八歳、一人前に成長しているではないか。

そうした山内伊賀亮の意見に、天忠もようやく決断した。

「こうした次第でござる。天一坊さまご出生からご成長、更に御落胤と名乗り出るまでの経緯を、お聞かせいたした」

山内伊賀亮は、胸を張って言った。

弁舌さわやかであり、頭の回転も早い。なかなかの人物であり、山内伊賀亮は手強い相手だと、居並ぶ幕府の重役たちは気が重くなっていた。

「残るお尋ねは、南町奉行の大岡越前守にいたさせまする」

戸田山城守は、天一坊に向かって平伏してから、自分の席へと後退した。

4

代わって末席にいた大岡忠相が、山内伊賀亮の近くまで進み出た。

視線が、大岡忠相に集中した。大岡忠相なら何とかしてくれるのではないかと、幕閣たちは期待を寄せていたのである。知恵者と知恵者の対決であり、いずれが勝つかという興味もあった。

山内伊賀亮は、大岡忠相をにらみつけていた。忠相が一礼しても、山内伊賀亮は会釈を返すことさえなかった。伊賀亮は、厳しい表情であった。

忠相に対する警戒心から、伊賀亮は緊張しているのだ。

同時に、町奉行如きが出しゃばりおって、という怒りも伊賀亮にはあるのだろう。

ここで有名な両者の問答が始まるわけだが、知恵と言葉だけではなく丁々発止と胸のうちで火花を散らすような心の戦いでもあった。問答には難解な用語が多いので、現代風に改めて書いてみる。

「では、質問を始めます」

大岡忠相は、口もとに笑みを浮かべていた。

「好きなように、質問するがいい」

山内伊賀亮は、傲然たる態度であった。

「天一坊さまとその一行は、どうして江戸へ直行されなかったのですか」

「それが、疑問なのか」

「常識として御落胤と名乗り出るならば、父上さまがおられる江戸へ、直行すべきでしょう」

「そうとは、言いきれない」

「美濃から、まず大坂へ向かった。大坂に武家は少なく、町人が多いところです。町人の耳

目を集めれば騒ぎは派手になり、天下に響き渡ります。それでまず打ち揚げ花火を大坂であげて、大坂城代に御落胤の存在を認めさせる。そういう魂胆によって、やったことではありませんか」

「おもしろい見方もあるものだ」

「そのあと今度は京都に場所を移して、打ち揚げ花火をあげ、京都所司代をも陥落させた。大坂と京都を制圧することで、天一坊さま御落胤を絶対的な事実にしてしまい、それから江戸へ乗り込む、という筋書きだったのではありませんか」

「とんでもない誤解だ」

「では、理由を答えて下さい」

「答えよう。江戸へ直行したい気持は山々であったが、天一坊さまは俗界を離れていたために、世間一般の知識に疎い。それでは将軍家との対面も、満足にいかないのではないかと不安がある。やはり将軍家の長男として、少しは諸礼諸式や世事に通じていなければならない。そのために、大坂と京都にしばらく滞在したのだ」

「そうですか」

「これでちゃんと、答えになっているはずだ」

「はい、よくわかりました」

第一ラウンドは、大岡忠相の負けとなった。

「次の質問は、どういうことだ」

山内伊賀亮の表情は、やや穏やかになっていた。自信と心の余裕を、得たのに違いない。

「天一坊さまは、日蓮宗の僧ということですね」

「そのとおりだ」

「天一坊さまの行列には、弓槍鉄砲などが多く加わっていましたが、日蓮宗の出家になぜそうした武器が必要なのですか」

「そんなことか」

「お答え下さい」

「弓、槍、鉄砲の中に、天一坊さまの持ちものはひとつもない」

「では、誰の持ちものですか」

「われわれの所持品だ。御落胤だということで、天一坊さまの命を狙う者が出現するかもしれない。天一坊さまを殺して偽者が身代わりとなり、江戸へ乗り込むようなことになったら、それこそ大変ではないか」

「確かに」

「だから、われわれが天一坊さまを、警固して来た。厳重に警固する者が、弓槍鉄砲を所持するのは当然すぎることではないか」

「よく、わかりました」

「つまらない質問は、最初からしないほうがいい」

「次の質問ですが、あなたの名前は山内伊賀亮ですか」

「そうだ」
「ちゃんと考えたうえで、伊賀亮と称しているのですね」
「当たり前だ」
「亮という字は、すなわち守だということを知っていますか」
「そのぐらいの知識はある」
「すると、あなたは山内伊賀守と名乗っていることになる。それだけの身分にない者が守名乗りをすれば、処罰しなければなりません」
「越前守どの、よく聞いてもらいたい。この伊賀亮は、さきに九条家に仕えた身だ。浪人しようと、正四位上中将の身分は消えていない」
「そんな理屈が、どこにありますか。九条家に仕えていれば、官職も身分も認められます。しかし、退身して浪人になってからも、官位が許されるはずはありません」
「越前守どのは何も知らないから、そんなふうに言うのだ。拙者は九条家の家来だったが、公家というものは官位が高くても、台所のほうはかなり苦しい」
「はい」
「そのために、役に立つ人物をよそから借りてくるといったことも、しなければならない。拙者も九条家に仕えていながら、北御門の代筆役として借りられたことがあった」
「北御門……」
「有栖川宮、桂宮、閑院宮、伏見宮の四親王のうち、伏見宮のことを北御門と申し上げる」

「伏見宮の代筆の役目を、命じられていたのですか」
「そうだ。北御門の代筆ができる者は、正四位上中将の官についていなければならない。それで拙者も、正四位上中将の官を贈られたのだ」
「なるほど……」
「拙者は健康を害したので九条家を退身したが、そのとき北御門にもご挨拶を申し上げた。すると、北御門がおっしゃった」
「どのようにです」
「そちは余の代筆を勤めた者なれば、たとえ退身していずくの果てに参るとも、存命中は正四位上中将の官を下がることなし」
「伏見宮がそのように、おっしゃったんですか」
「そうだ。拙者はそのお言葉どおり、いまでもなお正四位上中将の官にあり、それに相応しい身分にもある。それでも伊賀亮と名乗ってはならぬ、処罰すると越前守どのは責めるつもりか」
「いや、それは……」
「北御門のお言葉に、越前守どのは文句をつけるのか」
「そんなつもりは、毛頭ありません」
大岡忠相は思わず、両手をついてしまった。
「山内伊賀亮であって、差し支えないんだな！」

居丈高になって、山内伊賀亮は声を張り上げた。
「はい」
忠相には、それ以上の言葉がなかった。
伊賀亮が、声を上げて笑った。
第二ラウンドも勝てなかったが、第三ラウンドはまさに忠相の完敗であった。やりこめられて、恥をかかされた。あたりは、妙に静まり返っている。
伊賀亮のほうが、一枚役者がうえだと、老中や若年寄の顔が暗くなっている。
こうなったら、引っかけ戦術を用いてやろうと、大岡忠相は思いついた。
「不思議なことがあります」
気をとり直して忠相は、おもむろに口を開いた。
「どんなことだ」
伊賀亮は、落ち着き払っている。
「将軍家に当然、ご記憶がなければなりません」
「御落胤についてのご記憶か」
「そうです」
「当たり前ではないか」
「ところが将軍家にお伺いしたところ、御落胤については少しも覚えがないというご返事でした」

「そんな馬鹿な……」
「そういうご上意であれば、御落胤を認めるわけには参りません」
「では、この証拠の品々は、どういうことになるのだ」
「だから不思議だと、申しているのですが……」
「越前守どの、そんな作り話はやめたほうがいい。子どもではあるまいし、そんなことに引っかかりはしない」
伊賀亮は、まったく慌てなかった。
引っかけは通用しないと、忠相も諦めるほかはなかった。
「もう一度、将軍家にお伺いしてみますけど……」
と、忠相は逃げた。
「証拠の品々があるだけではなく、天一坊さまのお顔を見て、お声を聞けば、もう将軍家にそっくりそのままではないか」
伊賀亮が言った。
しめた、と忠相は思った。伊賀亮はつい、余計なことを口にしてしまった。揚げ足とりと言われるかもしれないが、それを突破口にしようと忠相は意気込んでいた。
「伊賀亮どの、いま奇妙なことを口にされましたな」
忠相は視線を、伊賀亮の顔に突き刺した。
「さて、どんなことかな」

伊賀亮に、狼狽するようすはなかった。
「天一坊さまのお顔とお声が、将軍家にそっくりだと申された」
「いかにも、そう言った」
「おかしいではありませんか」
「何が、おかしいのだ」
「伊賀亮どのがどうして、将軍家のお顔やお声を知っているのですか」
「知っている」
「そんなはずはない」
「ところが拙者は、将軍家にお目にかかったことがある」
「まさか……」
「説明してやろう。紀伊大納言光貞さまは、将軍家の父上である」
「はい」
「では、将軍家の母上は、どなたであるか。九条家の姫君で、お高の方と申し上げる。拙者は、九条家に仕えていた。その縁によって将軍家がまだ源六郎頼方さまの時代に、拙者は虎伏山の竹垣城へ参り、手習と和学のご教導をしたことがある。将軍家のお顔やお声を拙者が知っているのは、当たり前なことではないか」
伊賀亮は笑った目で、忠相を見やっていた。
駄目だった。突破口になるどころか、相手に動揺を与えることにもならなかった。忠相の意気込みも空しく、あっさり寄り倒されたのである。忠相は言葉に詰まり、目を伏せていた。
沈黙が続く。
「次の質問は……？」
伊賀亮は、勝ち誇った顔でいた。
「では、最後にひとつ……」
忠相は、目を閉じた。祈りたい気持だったのである。
「何を聞きたい」
「天一坊さまの官位は、どういうことになりますか」
「最初の官位だから、宰相が適当と思われる」
「東叡山寛永寺の宮様と、宰相とではどちらが高位となりますか」
「宮様のほうが、高位に決まっているではないか」
「飴色の網代、蹴出し、黒棒の乗り物は、東叡山御門主さまだけに限られている御駕籠です」
「だから、どうだというのだ」
「宰相である天一坊さまが、それと同じ乗り物を使うということは、やはり罪になります」
「越前守どの、よく聞くがいい。徳川初代の将軍家康公は、徳川家のために鬼門除けをしたいと考えた。京都の鬼門除けは比叡山、それを関東へ移すから東叡山、すなわち上野寛永寺。家康公のこの計画は、二代将軍のときに実行に移された」

「二代将軍の姫君を、京都へご縁組して、その末の皇子を東叡山御門主として迎えられました」

「ところが、この宮様が定めなき御身の上だった。ご生涯を御門主さまで過ごされるのか、あるいは京都へお帰りになるときがくるのか、まったくはっきりしなかった。そのことから御門主さまは、飴色網代の乗り物を用いられるようになった。それは、どうしてか。定めなき御身の上を表わし、日輪の光に雲がかかったという意味から、飴色網代ということになった」

「天一坊さまも、それに倣ってとおっしゃりたいのですか」

「いかにも、そのとおりだ。天一坊さまにおいても、まったく同じではないか。天一坊さまはこれから将軍家とご対面のうえ、西ノ丸に迎えられるのか。あるいは、御三家の家格を与えられるのか。または、松平の姓を頂ける大名になられるのか。そのいずれに決まるか、見当のつけようもない。そのように天一坊さまも定めなき御身の上であることから、朱塗りのうえに黒漆をかけて、飴色としたのだ」

「蹴出しについては、いかがお答えになります」

「長い御道中であれば、おみ足を投げ出しても差し支えのないように、蹴出しをしつらえた」

「黒の塗り棒については、どう説明されますか」

「天一坊さま御出家の身であれば、黒の塗り棒にするのは当然のこと。こうした道理があって拙者が取り計らった天一坊さまのお乗り物が、どうして悪いと申されるのか、何ゆえに罪と言われるのか」

伊賀亮は、まくし立てた。

詭弁とは、受け取れない。理路整然としているし、思いつきを口にするのとは、いささか違っている。信念と根拠があって、それに基いているからこそ、滔々と述べることもできるのだと、ただただ感嘆させられるのである。

博学でもあった。忠相が初めて、教えられたこともある。そのうえ立て板に水のリズムがある喋り方には、不思議な説得力があった。聞いている者は圧倒されて、納得せずにはいられない。

またしても、忠相には一言もなかった。

ついに大岡忠相は、一矢をも報いることができなかったのだ。最後のラウンドまで、完敗を続けたのである。山内伊賀亮の申し開きは、すべて通った。これで吉宗と天一坊の対面を、禁ずる理由がなくなった。

万事休す——。

老中、若年寄たちも意気消沈していた。目を伏せて、吐息ばかりしている。特に四人の老中は、沈痛な面持ちであった。何とかならないものかと、老中たちは忠相に目で語りかけている。

思いきって、最後の手段に訴えようかと、忠相は考えていた。最後の手段とは、水木新八

郎から聞かされた菊太郎なる者の存在を、この場で披露することだった。御落胤が二人いるとなれば、いずれが本物かを決めるために、両者の対決ということにも持ち込めるのであった。

だが、それは非常に危険な手段であり、天一坊は本物の御落胤ということを、決定的にしてしまう恐れもあるのだった。

5

大岡忠相は話に聞いているだけで、まだ菊太郎という若者に会っていなかった。ひとつには、話半分に聞いているからであった。水木新八郎はもう何度も、菊太郎に会っているようである。

新八郎は菊太郎こそ本物の御落胤だと、大岡忠相に繰り返し進言している。しかし、忠相はどうも、積極的になれないのだ。江戸の豪商のところに、御落胤が食客として厄介になっている。

あり得ない話ではないか。

今日まで、御落胤であることを、申し出なかった。

今後もそのことを、公表するつもりはない。

御落胤であることの悲劇性を訴え、そういう星の下に生まれたことを呪って、死ぬまで身分を隠し通すのだという。

話ができすぎている。

高砂屋という豪商が証人になっているのだから、詐欺ではなかろうと思いたくなる。高砂屋の主人は、自分の子どものように情を感じているので、菊太郎を手放したがらないそうである。

あるいは、真実なのかもしれない。

だが、そうなるとまた、ひと騒動である。大岡忠相が本物の御落胤と認めたからには、菊太郎をそのままにはしておけない。吉宗と対面させて、それなりの扱いと地位を与えなければならない。

天一坊の化けの皮を引んむくことができても、その代わりに菊太郎を御落胤として認めることになるのだった。幕府の方針としては、本物だろうと御落胤というものを、認めたくないのである。

しかし、いまは菊太郎の一件を持ち出すほかに、吉宗と天一坊の対面を阻止することはできないのであった。イチかバチかの賭けを、やってみるしかない。大岡忠相は、清水の舞台から飛び降りる思いだった。

「伊賀亮どのに、申し上げておきたい儀がござる」

威儀を正して、忠相は高圧的な言い方をした。下っ腹に力をこめて、忠相は声が震えるのを防いだ。

「何事かな」

伊賀亮はジロリと、忠相のほうを見た。笑ってはいなかったし、目つきが鋭くなっていた。

「明日、南町奉行所番所において大岡越前が、改めて天一坊どのを吟味いたす」

忠相は血の気を失っていたし、必死の形相であった。重大なことを口にしているという自覚だけではなく、持病の頭痛が始まっていたのである。極度の緊張感が、持病の発作を招いたのだろう。

「何を申される！」

一瞬にして、伊賀亮の顔が硬ばった。

「よろしいな」

忠相はもう、度胸を決めていた。

「越前守どの、いいかげんになされてはどうじゃ。町奉行所は不浄なるところ、また吟味とは罪人を取調べることでござろう。天一坊さまをそのように扱い申し上げて、将軍家に言い訳が立つとお思いか！」

伊賀亮は、明らかにとり乱していた。

「何ゆえに吟味が必要かを、申し上げておく。実は南町奉行所に、われこそまことの御落胤なり、天一坊どのは真っ赤な偽者と、訴えて出た若者がある。父は源六郎頼方さま、母は沢ノ井、出生いたしたのは宝永二年三月十五日にて、当年十九歳の菊太郎と申す者にござる」

忠相は「天一坊さま」を、「天一坊どの」という呼び方に変えていた。

「たわけたことを……」

伊賀亮も、顔が青くなっていた。伊賀亮が初めて示した動揺の色、反応らしき反応であった。

藤井左京と赤川大膳は、呆然となっていた。常楽院天忠は目をつぶっているが、顔のあちこちに痙攣が走っている。天一坊は忙しく、目を動かしていた。落ち着きを、失っているのだった。

愕然となったのは、彼らばかりではなかった。老中、若年寄たちも、驚きの目を見はっていた。突如として忠相が、とんでもないことを言い出したからである。ただ忠相の策だろうと思うから、口出しをしないでいるだけだった。

「天一坊どのと同様の御落胤がおいでになられるのであれば、いずれが本物か決着をつけねばなりますまい」

忠相は言った。

「菊太郎とか申す者のほうこそ、真っ赤な偽者であろう。その偽者には、証拠の品々があろうはずはない」

さすがに伊賀亮は、冷静さを取り戻していた。

「菊太郎どのも明日は、南町奉行所に見えられる。そこで天一坊どのと対決いたせば、おのずと真偽の別が明らかになるはずでござる」

「愚かなり、越前守どの」

「対決を恐れる者は、奉行所へ参ることも恐れる」

「恐れてなどおらぬ」

「では明日、南町奉行所へ参られよ」

忠相は歯を食いしばって、激しい頭痛に耐えていた。

「承知いたした。その代わり越前守どのは、切腹を覚悟のうえでおられよ」

意を決したように、伊賀亮はそう言い放った。

大岡忠相は評定所から、南町奉行所の役宅へ駕籠を急がせた。忠相の持病を知る者は、妻の千代と水木新八郎のほかにはいなかった。誰にも知られてはならない秘密として、今日まで隠して来た頭痛なのである。

役宅の裏居間へ転がり込んだとき、忠相はすでに錯乱状態にあった。七転八倒の苦しみようで、これが町奉行の大岡越前守なのかと疑いたくなるほど狂乱する。だからこそ医者も呼ばずに、この病気を秘密にしているのだった。

妻の千代が忠相の口の中に手拭を押し込み、薄荷の草の匂いを嗅がせる。水木新八郎が水を運び、忠相の頭を冷やした。やがて激痛の頂点に達して、忠相は気を失った。そのまま一時間は、昏睡状態が続くのだった。

死んだようになっている忠相を見守りながら、新八郎は毎度、自責の念に捉われる。このような忠相にしてしまったのは、自分だという気持があるからであった。新八郎の不注意が原因で、忠相は異常な体験をした。それ以来、忠相はこうした病気を持つようになったのである。

そのことが、新八郎にとって大きな借りになっている。だからこそ、新八郎は南町奉行所の役宅の食客でいて、忠相のために役立とうと努めているのだ。それがなければ新八郎はとっくに、大嫌いな武士の世界から逃げ出しているだろう。

昏睡状態から脱した忠相は明日、高砂屋の菊太郎と天一坊を対決させることになったと、新八郎に打ち明けた。新八郎はすぐに、日本橋の高砂屋へ向かった。事情を説明すると菊太郎は、天一坊との対決に応ずることを承知した。

翌日――。

忠相は登城を控えて、午前十時にお白洲に出座した。奉行手限り裁判ということになるが、これは正式な裁判ではなかった。天一坊と菊太郎を対決させて、真実を知ろうとする奉行吟味であった。

白洲砂利のうえに床几を置いて、それに天一坊が腰をおろしている。天一坊は葵紋を織り出した白綾の小袖を着て、その下に柿色綾の小袖五つを重ね、古金襴の法眼袴に顕紋織の十徳を着用していた。

葵の御紋をつけた者を、お白洲にすわらせるわけにはいかなかった。それで特別に、床几を用意したのである。天一坊の脇に、山内伊賀亮が控えている。後見役の伊賀亮だけに、付き添うことを許したのであった。

天一坊と向かい合って、若者がムシロのうえに着座していた。商家の若旦那という外見で、町方の青年には違いない。だが、それがハッとするような美男で、役者も色褪せるという感

じだった。

身体つきも小柄だし、女にしたらさぞかし美人だろうと、誰も思うに違いない。色が雪のように白く、肌も美しい。上品な美女に、変身することもできそうである。菊太郎であった。

天一坊は、顔色が悪かった。険しい目つきで、菊太郎を見ている。敵意を露骨に、示しているのだった。菊太郎のほうは、無表情であった。天一坊に対しては、その存在を無視するように冷やかである。

「母沢ノ井について、両人に尋ねる」

忠相が、口を開いた。

天一坊と菊太郎が、同時にうなずいた。

「まず天一坊から、返答せい。平沢村にて出生してより、何年後に信濃の善光寺へ向かったのか」

忠相が、最初の質問を投げかけた。

「善光寺の浄覚院の門前に捨てられていたのは、宝永二年の十一月だったと、天忠どのから聞かされておるぞ。したがって出生後半年ほどで、善光寺へ旅立ったと考えてよかろうの」

天一坊が答えた。

「菊太郎の返答は、いかがなものであろうか」

忠相は視線を、菊太郎へ移した。

「はい。出生してから六年のあいだは、平沢村におりましてございます」

ややかすれ気味ではあったが、菊太郎の声もまた女のように甲高かった。

「ほう、六年も平沢村におったと申すか」

忠相の目が、キラッと光った。

「はい」

菊太郎は、忠相の視線を恐れていなかった。

「平沢村の住民に、父親のわからぬ子として迫害を受けるようなことは、まったくなかったのか」

「ございません。平沢村の村人たちは、そのように薄情ではございません」

「では、何ゆえに六年後には、平沢村を去ることになったのか」

「母は平沢村で、父なるお方からのお迎えを、待ち続けておりました。けれども一向に、父なるお方からのお呼び出しはございませんでした。父なるお方は越前国から和歌山へお戻りになり、紀州家をお継ぎになられたのに、目と鼻の先の平沢村にいる母のことを、思い出されなかったのでございましょう。それで母も耐えきれなくなり、祖母とわたくしを連れ、平沢村をあとにしたのでございます。母が向かった先は、和歌山の御城下でございました」

「和歌山の御城下で、いかがいたしたのじゃ」

「加納将監さまのお屋敷に伺ったところ、加納さまは会っても下さらず、門前払いということになりました」

「そのとき、沢ノ井はお墨付きと証拠の品を持参いたしたのか」

「はい」
「それでも加納どのは、会うことを拒んだのだな」
「わけのわからぬ戯言を持ち込む乱心者などに、会う必要はないという加納さまのお言葉でございました」
「最初からお墨付きを、確かめようともされなかったのか」
「加納さまは何もかもご存じのうえで、ご承知だからこそ、母やわたくしを追い払ったのでございましょう。その年に父なるお方には、ご長男がお生まれだったことを、あとになって知りました。余計者が現われて騒ぎの因になっては困ると、お家大事のお心から加納さまは、母やわたくしに惨い仕打ちをなさったのでございます」
「それで沢ノ井は、更に名乗り出ることを断念いたしたのか」
「はい。けれどももう、平沢村へ戻るわけには参りません。それで初めて祖母が生まれた信濃の善光寺へ、知り合いを頼っていこうということになり、和歌山の御城下をあとにしたのでございます」
「善光寺には、無事にたどりつくことができたのだな」
「いいえ……」
「善光寺までは、参らなかったということなのか」
「はい」
「途中で、何事かあったのか」

「はい」
「何があったのだ」
「美濃国は加納宿で、祖母が熱病にかかりました」
「うむ」
「そのうえ、看病に追われていた母が、路銀や着換えなど荷物を一切合切、盗まれてしまったのでございます」
「その持ち物の中に、お墨付きや証拠の品も、はいっておったのだな」
「はい」
「では、お墨付きと証拠の品は、盗まれたと申すのか」
「はい。母はそれを、惜しむこともございませんでした。持っていても仕方がないものだし、盗まれたことで未練も消えたと、母は申しておりました」
「そのほう、加納宿で持ち物をすべて盗まれたとき、旅籠屋に逗留しておったのか」
「はい。祖母が熱病で、身動きもできませんでしたので……」
「その旅籠の屋号を、忘れずにおるか」
「多田屋という旅籠でございました」
「多田屋に、相違ないな」
「多田屋のあるじ作右衛門どのが、親身になってお世話下さったので、間違えたりするはずはございません」

「多田屋のあるじは何ゆえに、親身になっての世話をしてくれたのだ」
「まだ荷物を盗まれる前に、母が取り出したままにしておいたお墨付きと御短刀に、作右衛門どのが目をとめたことから、母はやむなく内密にと頼んだうえで、いっさいを作右衛門どのに打ち明けたのでございます。そのときから作右衛門どのは、他人とは思えないほどあれこれとお世話して下さるようになりました」
「そのほうの祖母は、多田屋で息を引き取ったのか」
「はい。そのときには母も同じ熱病にかかり、祖母のあとを追うようにしてこの世を去りました。わたくしは父なるお方を、お恨み申し上げました。御落胤というわが身を、呪いもいたしました」
「祖母と母の墓もないとは、哀れじゃのう」
「いいえ、祖母と母の墓は、多田屋作右衛門どのが建てて下さいました」
「墓があるのか」
「どうか、お調べ下さい。加納宿にある通念寺でございます。祖母のは忘れましたが、母の墓石にこう刻んであったのを、わたくしはいまでもはっきり覚えております。正徳元年十月十八日寂、釈妙幸信女と……」
「相わかった。それで、そのほうはその後、いかがなったのじゃ」
「作右衛門どのが、養って下さいました。その作右衛門どのに返しきれない恩があるという江戸の商人が、多田屋に泊まったとき作右衛門どのからわたくしの話を聞き、わたくしの今後を自分に任せてはくれまいかと言い出しました。江戸で何ひとつ不自由のない暮らしをしたほうがよかろうと、作右衛門どのもその気になり、やがてわたくしのことを江戸の商人に託したのでございます。それでわたくしは、加納から江戸へ移り住むことになりました」
「その江戸の商人が、高砂屋のあるじというわけか」
「はい」
菊太郎は、頭を下げた。
「さて、天一坊や山内伊賀亮から聞いた話と、菊太郎の申し立てることには、天と地ほどの違いがあるのう」
忠相は、天一坊を見やった。山内伊賀亮は、作り笑いを浮かべている。しかし、肝心な天一坊のほうが、顔も上げられずにいるのであった。

6

菊太郎は沢ノ井が、美濃の加納でお墨付きや短刀を含めて荷物をそっくり盗まれたと、主張している。
天忠と天一坊がいた常楽院も、美濃国にある。
その美濃国という接点が、偶然の符合とは思えなかった。菊太郎は天一坊の過去については、まったく知らないのである。したがって、作り話の中に美濃国を組み込むことは、菊太郎にできるはずもない。

それに菊太郎が、嘘をついているとは思えなかった。そんな意味のない嘘をついても、仕方がないのである。だが、大岡忠相のカンも、絶対的なものではない。作り話ではないという証拠がなければ、菊太郎に軍配をあげるわけにはいかなかった。

「菊太郎……」

忠相は、決め手が欲しかった。

「はい」

菊太郎は、澄んだ目をしていた。

「高砂屋のあるじも、存命ならば多田屋作右衛門も証人となる。また加納の通念寺にある墓石、並びに過去帳も証拠となるであろう。ただし、それはそのほうの申し立てが、まことであることを物語る証人や証拠にすぎない」

「はい」

「そのほうが沢ノ井の腹を痛めた子、すなわち御落胤であることの証拠にはならないのじゃ」

「わたくしは御落胤であることを、お認め頂こうとは望んでおりません」

「しかし、そのほうに御落胤なる証拠がない限り、天一坊を偽者と決めつけることもできないのだぞ」

「さようでございますか」

「何かそのほうに、思い当たることはないか」

これが残された最後の期待かと、忠相は心細さを覚えていた。

「さあ……」

菊太郎は、首をかしげた。

「作り話は、それまでにしてもらいたい」

突然、山内伊賀亮が発言した。伊賀亮は忠相に対してではなく、菊太郎に抗議しているのであった。

「作り話ではございません」

伊賀亮に向かって、菊太郎がやり返した。

忠相は、黙っていた。伊賀亮と菊太郎に、言い合いをさせてやろうと思ったのである。

「作り話でなくて、何とする」

伊賀亮は、鼻の先で笑った。

「わたくしが何を目当てに、そのような作り話をすると申されるのですか」

菊太郎のほうが、ムキになっている。

「目当ては、御落胤に納まることであろう。偽者の御落胤にな」

「残念ながら、そちらさまのような野心は持ち合わせておりません。御落胤なるわが身を嘆いている者が、どうして御落胤に納まりたがりましょうか」

「口と腹のうちは、違うものよ。そのほう、いいかげんにして退散するがよかろう。こちらには、お墨付きと証拠の御短刀がある。天一坊さまが正真正銘の御落胤であることは、すで

に明々白々……」

「では、これからわたくしが天一坊というお方は偽者であることを、明らかにしてごらんに入れます」

「おもしろい。叶うことなら、やってみるがよい」

「まずお尋ねいたしますが、母の沢ノ井の身体に、目じるしになるようなものがあれば、どうぞお答え下さい」

「天一坊さまはお生まれのその年の内に、捨て子された御身の上だ。母の身体に何があったか、知る由もない」

伊賀亮は笑っていて、とり合おうともしなかった。

「お奉行さまに、申し上げます」

菊太郎は、両手をついた。

「うむ」

忠相は、身を乗り出していた。

「大事なことを、思い出しました。このことについては、確かな証人がおいでございます。どうか将軍さまに、お確かめ下さいまし」

「将軍家が証人だと、申すのか」

「はい。将軍さまも、きっと覚えておいでだと思います。まだ、わたくしが沢ノ井の胎内に、なかった頃のことでございます。わたくしの父なるお方は、手焙りの炭火を火箸の先で飛ばされました。その炭火は沢ノ井の膝のうえへ飛び、そこに火傷の跡を作ったのでございます。母の左の膝近くに火傷の跡があったのを、わたくしはよく覚えております」

「よくぞ、思い出した。将軍家がそのことをお忘れでなければ、立派な証拠になるであろう」

「それに、平沢村の老人たちにお尋ねになれば、沢ノ井が子を生んでから何年ほど村に居残っていたかが、明らかになるはずでございます」

「なるほど、そのほうが申すとおりじゃ」

「更にもうひとつ、天一坊を偽者とする決め手がございます。それは平沢村の老人たちに、沢ノ井が生んだ子は男か女かを、お確かめになることでございます」

「そのほう、何と申した」

「平沢村の老人たちは、沢ノ井が生んだのは女子だったと、答えることでございましょう」

「何と……！」

「天一坊は、男子でございます。それだけでも、天一坊は御落胤であろうはずはなく、偽者であることが明らかとなりましょう」

「それは、まことか」

「御落胤は、女子だったのでございます。わたくしが男子であったなら、母も容易には諦めなかったことでしょう。あっさりと諦めて和歌山の御城下を立ち去ったのも、わたくしが女子だったからでございます」

「では、そのほうは……」
「女でございます。名は菊と申します」
「何ゆえに、男を装ったのだ」
「初めからわたくしが女であれば、天一坊とその一味の者は御落胤が女子であると察しをつけて、言い逃れの手立てを考えるに違いない。恐れ入ったと天一坊に頭を下げさせる最後の決め手とするために、姿かたちを男に変えてくるようにと、水木新八郎どのの策でございました」
「そのために、そのほうは髪を断ったのか」
「天一坊の企みを、打ち砕きたいがための一心からでございます」
「うむ、感じ入ったぞ」
「その代わりに、ただいまよりわたくしのことは、お忘れになって頂きたいのでございます。わたくしの身の上が世間に知れますと、嫁のもらい手も婿の来手もなくなりましょう。わたくしは町方の女として、生涯を過ごしたいのでございます」
菊太郎いや菊の顔が、上気したように赤くなっていた。女としての羞恥を、自覚したのだろう。髪かたちだけが、男になっていた。急に菊の表情や身体の曲線、ちょっとした仕種にも女らしさが感じられるようになっていた。
「相わかったぞ」
忠相は、未だに戸惑っていた。菊の意外な告白に、忠相は意表をつかれたのであった。水

木新八郎からも、菊太郎が女だとは聞かされていなかったのだ。何ということだと、忠相の驚きはまだ消えそうになかった。
吉宗の御落胤として、沢ノ井が生んだのは女の子であった——。
このことは、天一坊と伊賀亮にとっても、衝撃的だったようである。さすがの山内伊賀亮も言葉を失い、観念したように目を閉じていた。天一坊は両手で顔を被い、肩を震わせている。どうやら、泣き出したらしい。
これで、天一坊事件は解決したようなものだった。
天一坊と山内伊賀亮はその場で逮捕、午後になって八ツ山の宿に残っていた常楽院天忠、藤井左京、赤川大膳をはじめ全員が縄を受けた。
忠相は、証拠固めを急いだ。
高砂屋と多田屋の主人の証言を得て、加納の通念寺の墓石と過去帳も証拠となった。
紀州の平沢村の住民多数が、沢ノ井が生んだのは菊という娘だった。沢ノ井母娘とお三婆は正徳元年に平沢村を去った、と証言した。ただ加納将監は故人になっていて、証言を取ることができなかった。
しかも、将軍吉宗は沢ノ井に炭火で火傷させたことを記憶していて、菊の言葉を裏付ける証人となった。四月二十二日に評定所一座の裁判で、天一坊とその一味に判決が下された。
天一坊、山内伊賀亮、藤井左京、赤川大膳は、死罪のうえ獄門。
常楽院天忠とほか六名が、遠島を申しつけられた。

十二人の浪人が、江戸払いであった。

天一坊たち四人は伝馬町の牢屋敷で即日処刑され、その首は八ツ山に晒された。

三日後のこと――。

夕暮れどきの南町奉行所の門前に、水木新八郎は立っていた。奉行所を訪れた菊を、送って出たのである。

だが、すぐ奉行所の門の中に、戻る気にはなれなかった。虫の知らせというものか、何かが起こりそうな感じだったのだ。

その新八郎の悪い予感は、的中したのであった。小さな人影が、飛ぶようにして走って来たのである。それは、菊の供をして来た高砂屋の丁稚小僧だった。真っ青な顔をしていた。

「大変でございます、お嬢さまが……！」

新八郎にぶつかるようにして、丁稚は叫んだ。

新八郎は、無言で走り出していた。菊が何者かに襲われたとしたら、その場所は近くのはずであった。数寄屋橋御門外に、黒い影を認めた。夕暮れの武家地は寂しく、ほかに人影は見当たらなかった。

地上に血まみれになった菊の姿があり、ひと目で死んでいるとわかった。まだ、男の姿のままの菊であった。引き揚げるところだった黒い影が、向き直って一斉に抜刀した。五人の武士であり、黒覆面で顔を隠している。

浪人ではない。紋付きの羽織だし、袴をはいている。それを見て新八郎は、五人の武士が

菊を暗殺した理由を察していた。新八郎の怒りが爆発し、全身が燃えるように熱くなった。

「許せねえ！」

新八郎は、刀を鞘走らせた。心形刀流の達人の腕前に、怒りが加わっていた。新八郎の豪剣が、唸りを生じて円を描いた。ひとりが頭から顔面を断ち割られ、もうひとりは腹を真一文字に裂かれていた。

まさに、狂乱の舞いであった。新八郎は舞うようにして、力いっぱい白刃を振り回した。二つの首が、路上に転がった。新八郎が一刀のもとに、斬首したのであった。首のない死体が、あとからゆっくりと倒れた。

「老中の家来か、それとも若年寄かい！」

最後のひとりの右腕を、新八郎は切断しながら怒鳴った。覆面の武士は、声も洩らさなかった。新八郎は水平に、刀を振るった。皮一枚を残して、武士の首ががくんと傾いた。その重みで、武士は横転した。

奉行所へ戻ると、新八郎はその足で裏居間を訪れた。大岡忠相は裏居間で、書類調べを行っていた。血相を変えている新八郎を見て、忠相はハッとなった。忠相は反射的に、目をそらせていた。

「お奉行、これでお別れでござんすよ。お奉行には大きな借りがあるが、もうそんなものにも縛られねえ。将軍家のためを思う老中、若年寄、それに多くの奉行たちってのが我慢ならねえんでさあ。お奉行の顔も、二度と見たくねえ」

新八郎の目に、光るものがあった。

忠相は、黙っていた。菊を暗殺することを、忠相が命令したわけではない。しかし、老中や若年寄に菊こそ正真正銘の御落胤だと、報告したのは忠相だったのである。菊の身の上については、いっさいを忘れるという約束を、忠相は守らなかったのだ。

「菊さんは町方の女として、生涯を終えたいと言っていたじゃあねえですかい。菊さんは御落胤であることを、隠し通したかったんでござんすよ。天一坊の正体を暴くために、菊さんは髪まで切って、やむなく身の上も明かしたんじゃあねえですかい。その菊さんを正真正銘の御落胤だとわかったからって、今度は殺しちまうなんて、あまりにもひどすぎるんじゃあねえですか。菊さんが、哀れでならねえ。じゃあ、あっしは消えますよ」

新八郎は、忠相に背を向けた。

そのとおりだと、忠相は思った。だが、何事もやむを得ない。すべては徳川家のため、天下を乱さないためなのだ。町奉行という役職も大岡越前守の存在も、そのためにあるようなものだった。

夜道を歩きながら、水木新八郎は旅にでも出ようかという気持になっていた。アテのない旅だが、綾どのを誘ってみようかとふと思う。今夜は、寂しくてならない。だから、綾のことを頭に浮かべたりするのだろうと自嘲的に笑ったあと、水木新八郎は闇の中に吸い込まれるように姿を消した。

解説

藤田昌司

銀座四丁目の和光から日比谷へ向かって歩き、数寄屋橋のスクランブル交差点を渡ると、おとぎの国の建て物のような交番がある。その先は高速道路が走り、道路の下はショッピングセンターだ。交番の横では毎日、右翼の巨魁・赤尾敏がクルマの上からのどを喝らして弁舌を振るっている。今では東京名所の一つであろう。

高速道路をくぐると、つい先ごろまで朝日新聞東京本社があった。今は新しいデパートに変わって、ショッピング街である。朝日新聞社の裏手に回ると（つまり有楽町の駅の方へ行くと）、そこは同社の印刷工場で、日夜輪転機がうなり声を上げていた。その印刷工場の外壁に銅のプレートがはめ込まれていて、

江戸南町奉行所跡——

としるされていた。

すなわちこの一角が、大岡政談で人口に膾炙され、この小説の舞台ともなっている、数寄屋橋御門内の南町奉行所があった場所である。

江戸幕府が江戸に北町奉行所と南町奉行所を置くようになったのは、寛永八年（一六三一

年）からだといわれる。北町――、南町――というと、江戸を二つに区分けして管轄したように思われるかもしれないが、この作品にもしばしば〝月番〟という言葉が出てくるように、北町――と南町――はひと月交替で職務を遂行したのである。当番の月は朝から門を開けて訴訟を受付け、非番の月は門を閉ざして、前月受付けた訴訟を審理した。膨大な訴訟をさばくためには、このようなローテイションが必要だったのだろうが、それ以上に、町人と奉行所との〝癒着〟を避けるための方策ではなかったかと思われる。

　このシリーズのなかの「消えた生き証人」でも説明されているように、町奉行の支配は町人と浪人、管轄は町人地に限られていた。それに関する行政、司法、警察の業務を担っていたのである。神社や寺院の領地は寺社奉行の所管であり、武士に関するさばきには目付が乗り出す。町奉行の出る幕ではなかった。

　大岡政談以来、町奉行所というと司法や警察の権能だけがクローズアップされがちだが、実際は〈行政すなわち江戸民政の安定がその主要業務で、事実大岡越前が力を入れたのは物価の安定であった〉（『大岡越前忠相日記』解題＝大石慎三郎）。

　世に伝えられる大岡政談は、ほとんどがフィクションであるが、大岡忠相その人は、理非明確にしていささかの私心もなく、令聞四方にきこえた人格者であったようだ。ために「板倉政要」「栄陰比事」などの江戸時代の裁判説話や中国の小説などをもとに、潤色されて、その徳を讃える大岡政談が語り伝えられるようになったのだろう。

　それにしても、大岡忠相に、この小説で描かれているような痼疾があったとは、筆者は寡聞にして知らなかった。そこで笹沢氏にそのことを、はばかりながら電話で尋ねると、

「アハハ……」

　もちろん虚構だというのである。大岡忠相は宝暦元年（一七五一年）十二月、七十五歳を一期として病没しているが、テンカンではなかったようだ。

　しかし、天下の名町奉行、大岡越前守忠相に、このような秘密の痼疾があった――という設定が、この小説を、よりスリリングなものとしていることは否めない。作者の着想の卓抜さに脱帽しなければなるまい。

　事実をいえば、大岡忠相の家は二千石の旗本で、忠相は御書院番、御使番、御目付を経て、江戸幕府の遠国奉行の一つである山田（伊勢山田）町奉行となった。通説によればこの時、長い間タナ上げされていた松坂（紀州藩領）の農民と山田の農民との土地争いに厳正な裁定を下したことが評価されて、江戸町奉行に抜擢されたということになっている。すなわち歴代の山田町奉行が徳川御三家の一つである紀州藩に気がねしてさばけなかった係争に厳正な、しかも紀州側に不利な断を下したことが、かえって紀州徳川家の出身である吉宗の好感を買い、吉宗が八代将軍に就任するや、江戸町奉行に抜擢されたというのである。

　以来、大岡忠相は足かけ二十年にわたり町奉行を務め、さらに幕府三奉行の筆頭である寺社奉行にも出世するとともに、幕府評定所の構成メンバーとして、いわば最高裁判事の職と、政治・経済を含む民政全般の政策立案者の職を兼務し、吉宗治世の全時期を通じてその政治の中枢にあった。元禄時代の後の財政の立て直しと物価の安定にとくに力を注いでいるとい

う点では、昭和元禄後、臨時行政改革推進審議会会長としていま、行革に大ナタを振るっている土光敏夫氏の存在に似ているかもしれない。大岡忠相の最大の業績は、大岡裁きではなく、じつは享保の改革だったのである。

いささか話が理屈っぽくなった。とにかく大岡忠相は、江戸庶民に人気があった。だから大岡政談が生まれた、ということだけは、言っておいてよいだろう。

さて、この小説では、この大岡忠相のわき役として、水木新八郎なる〝町人侍〟が登場している。これがなかなか魅力的な人物だ。町奉行は、与力、同心といった下侍を従えているが、水木新八郎は与力でもなければ同心でもない。町奉行所役宅の、つまり大岡忠相家お預けの食客だ。剣をとれば心形刀流の遣い手。十六歳で免許皆伝、二十歳で達人という剣豪でありながら、出自は江戸・浅草の常磐津師匠の家柄という根ッからの町人だけに、言葉遣いが伝法ならば、町人の生き方、気質、心情にもよく通じていて、忠相のよき相談相手である。大岡忠相と水木新八郎の絶妙のコンビによって、難事件は次々に解決されてゆく。

もちろん、水木新八郎なる町人侍は、作者の創作である。下情に通じ、曲がったことが嫌いで、人情に厚い。そして最後には、敬愛してやまない大岡忠相のもとをも、その正義感のゆえに去ってゆく——。

〈夜道を歩きながら、水木新八郎は旅にでも出ようかという気持になっていた。アテのない旅だが、綾どのを誘ってみようかとふと思う。今夜は、寂しくてならない。だから、綾のことを頭に浮かべたりするのだろうと自嘲的に笑ったあと、水木新八郎は闇の中に吸い込まれるように姿を消した。〉

と、この作品は終わる。この〝消えかた〟に作者の〝美学〟が投影されており、もう少し立ち入って言えば、ある時期の——それは作家・笹沢左保の骨格を作り上げた——青春体験がにじんでいる、といえるようである。

筆者は、笹沢左保という作家を、〝男の中の男〟と思っている。それは、この作品に登場している水木新八郎とダブルイメージで迫ってくる。笹沢氏にも、水木新八郎のような〝俠気〟が濃密にある。それらのことは、氏の自伝的小説『詩人の家』を一読すればうなずけよう。未読の読者には一読をすすめたい作品だ。

横道にそれたが、『新大岡政談』は「小説新潮」の昭和五十一年二月号から五十四年八月号まで断続的に発表されたものであるが、江戸幕府の行政組織や権能など、歴史的事実としての江戸学をキチッと踏まえた上で、虚構の人物を虚構の物語に奔放に躍らせている点に興趣がある。別な言葉でいえば、読者は、この小説を面白く読みすすみながら、江戸学をまなぶことができる。

筆者がとりわけ興味深かったのは、「お裁き剣法」で述べられている町奉行所での吟味である。

〈現代では、容疑者の自供だけでは、とても裁判に持ち込めない。ところが当時は、いかに証拠が揃っていても容疑者が白状しなければ、起訴することができないのである。あくまで、当人の自白が中心となっていた〉。このため白状するまで町奉行所内の牢屋敷にぶち込んで

おく。白状しなければ拷問にかける。〈一口に拷問というが、正確には責問と拷問の二種類に分かれている。責問は笞打ちと石抱であった。……（略）……拷問はより残酷で、海老責めと釣責めである……〉。

町奉行の権限でやれるのは、責問だけであったという。

こうした自白中心主義は戦後の刑法改正で証拠中心主義に改められたわけだが、町奉行所内の牢屋敷と同様に、いぜんとして存在しているのが警察署の留置場――俗に豚箱と呼ばれる――である。留置場は明治時代に制定された「監獄法」によって〝代用監獄〟と定められており、制定当時からその弊害が国会で論議されていたものだ。容疑者として逮捕され、この代用監獄にぶち込まれた者は、一切の自由を奪われて、拘禁される。生殺与奪の権は、まさに〝お上〟に握られてしまうのだ。かつてのような責問、拷問は行われなくても、容疑者は精神的に耐えられなくなり、〝お上〟の言う通り嘘の自供をしてしまう。これが最近しばしば社会問題になる冤罪事件の原因である。いわば留置場こそ、冤罪発生の温床といえよう。刑法改正により自白中心主義から証拠中心主義に変わったものの、自白中心主義時代の牢屋敷をそのまま警察庁舎の中に持ち込んでいる点に問題がある――とこの小説を読みながら、ふと考えたのだが、いかがなものであろうか。

もちろん、そんなことを考えなくても、この小説は十分楽しい。大岡政談が作り話であったように、『新大岡政談』も、作者が作った話である。町人侍・水木新八郎が登場し、白刃が舞い、血しぶきが飛び、退屈になりやすい裁判劇が、ドラマチックに展開されている。さばきのシーンでは、大岡忠相の持病が出てきてハラハラさせられる。しかも知らず知らずのうちに、読者は江戸学を学ぶことになる。まさに時代小説の醍醐味を堪能することができる作品といえよう。

（昭和五十九年八月、時事通信社文化部長）

この作品は昭和五十四年十月新潮社より刊行された。

文字づかいについて

新潮文庫の文字表記については、なるべく原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは現代仮名づかいに改める。
二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。
三、一般には常用漢字表以外の漢字も音訓も使用する。
四、難読と思われる漢字には振仮名をつける。
五、送り仮名はなるべく原文を重んじて、みだりに送らない。
六、極端な宛て字と思われるもの及び代名詞、副詞、接続詞等のうち、仮名にしても原文を損うおそれが少ないと思われるものを仮名に改める。

笹沢左保著　剣士燃え尽きて死す —人間・沖田総司—

必殺の剣が宙を舞い、閃光となって落下する。幕末の青春とは？　死とは？　天涯孤独の青年剣士、沖田総司の数奇な一生を描く長編。

池波正太郎著　剣の天地

戦国乱世に、剣禅一如の境地をひらいて新陰流の創始者となり、剣聖とあおがれた上州の武将・上泉伊勢守の生涯を描く長編時代小説。

五味康祐著　柳生武芸帳（全三冊）

ひとたび世に出れば、柳生一門はおろか幕府、禁中をも危くする柳生武芸帳の謎とは？　剣と忍法の壮絶な死闘が展開する一大時代絵巻。

柴田錬三郎著　眠狂四郎無頼控（全六冊）

封建の世に、転びばてれんと武士の娘との間に生れ、不幸な運命を背負う混血児眠狂四郎。時代小説に新しいヒーローを生み出した傑作。

司馬遼太郎著　燃えよ剣（全二冊）

組織作りの異才によって、新選組を最強の集団へ作りあげてゆく〝バラガキのトシ〟——剣に生き剣に死んだ新選組副長土方歳三の生涯。

藤沢周平著　竹光始末

糊口をしのぐために刀を売り、竹光を腰に仕官の条件である上意討へと向う豪気な男。表題作の他、武士の宿命を描いた傑作小説5編。

新刊最新文庫潮文庫

司馬遼太郎著　項羽と劉邦（全三冊）

秦の始皇帝没後の動乱中国で覇を争う項羽と劉邦。天下を制する〝人望〟とは何かを、史上最高の典型によってきわめつくした歴史大作。

400
定価360円
360

池波正太郎著　真田騒動 —恩田木工—

信州松代藩の財政改革に尽力した恩田木工の生き方を描く表題作など、大河小説『真田太平記』の先駆を成す〝真田もの〟5編。

定価440円

藤沢周平著　孤剣 用心棒日月抄

お家の大事と密命を帯び、再び藩を出奔——用心棒稼業で身を養い、江戸の町を駆ける青江又八郎を次々襲う怪事件。シリーズ第二弾。

定価400円

柴田錬三郎著　御家人斬九郎

表沙汰にできない罪人の介錯をかたてわざとする御家人松平残九郎。今日も彼のもとには奇妙な依頼が舞い込む。著者晩年の痛快連作。

定価360円

新田次郎著　六合目の仇討

十年前に武士をすてた男への復讐のドラマが富士山中腹に展開される表題作など、歴史に生きた人々のあり方を見つめる12編を収録。

定価360円

永井路子著　悪霊列伝（正・続）

菅原道真、楠木正成、平将門、伴大納言……熾烈な権力闘争に敗れ、悪霊となった人間たち。彼らの怨念とその背景を探る人物評伝集。

定価各280円

新潮文庫最新刊

笹沢左保著
新大岡政談
悪のはびこる現代さながらの江戸社会、頻発する難事件に挑戦する越前の知恵と、その片腕〝町人侍〟こと水木新八郎のニヒルな剣。
定価440円

山田風太郎著
明治波濤歌（全二冊）
波濤（なみ）は運び来たり　波濤は運び去る　明治の歌……。激動の時代を激しく生きた実在の人物たちを自在に操って展開する伝奇ロマン。
定価360/400円

井上ひさし著
私家版日本語文法
一家に一冊話題は無限、あの退屈だった文法いまいずこ。日本語の豊かな魅力を爆笑と驚愕のうちに体得できる空前絶後の言葉の教室。
定価320円

三浦哲郎著
ユタとふしぎな仲間たち
都会育ちの少年が郷里で出会ったふしぎな座敷わらし達——。みちのくの風土と歴史への思いが詩的名文に実った心温まるメルヘン。
定価220円

T&T情報センター編
全国味の宿100選
東・西日本編
いい宿に泊り、おいしい料理を味わうのは、旅の大きな楽しみのひとつ。料理に定評のある宿を東西50軒ずつ紹介するカラー文庫。
定価各440円

中川志郎監修
君島幸裕著
コアラ・コアラ
〝生きた縫いぐるみ〟コアラを追ってオーストラリアへ——世界中の人々から愛されるコアラの魅力のすべてを紹介するカラー文庫。
定価480円

新潮文庫最新刊

下条由紀子著
ベストジョギング
—走る楽しさ　生きる歓び—
初心者もベテランも、ランニングが10倍楽しくなること受け合い。ジョギング歴12年、ランナーズ編集長が明かす快適ランのすべて。
定価480円

佐野山寛太編
世紀末ビョーキ文明
—ガジェット図鑑—
ガジェットは僕らの時代のキーワードだ。世に蔓延する面白ガジェット・グッズを消しゴムから風俗まで満載した、世紀末カタログ！
定価480円

ソポクレス
福田恆存訳
オイディプス王・アンティゴネ
知らずに父を殺し、母を妻とし、ついには自ら両眼をえぐり放浪する——ギリシア悲劇の最高傑作「オイディプス王」とその姉妹編。
定価220円

ジョージ・ガイプ
浅倉久志訳
グレムリン
光はダメ。水もダメ。真夜中すぎたら食物もダメ。宇宙から来た愛らしい生物の正体は？そして、その分身グレムリンの引起す大騒動。
定価520円

渡辺淳一著
七つの恋の物語
赤坂のスナック〝水曜日の朝〟でかわされる聞き上手のママとお客たちとのしゃれた会話のなかに、愛の美学をすくいとった連作小説。
定価320円

立原正秋著
埋火
夫を亡くした中年女の、性のくすぶりと倦怠を描く表題作など7編。現世に煩悶する男女を、簡潔な文体で彫琢した純文学短編集。
定価240円

新大岡政談

新潮文庫　草329＝2

昭和五十九年九月十五日　印刷
昭和五十九年九月二十五日　発行

著者　笹沢左保
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六―五一一一
　　編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替　東京四―八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊞　印刷・凸版印刷株式会社　製本・株式会社大進堂
© Saho Sasazawa 1984　Printed in Japan

ISBN4-10-132902-8 C0193